Freud

Zur Psycho-pathologie des Alltagslebens

Freud

日常生活の異常心理

丸井清泰訳

フロイド
精神分析大系
4

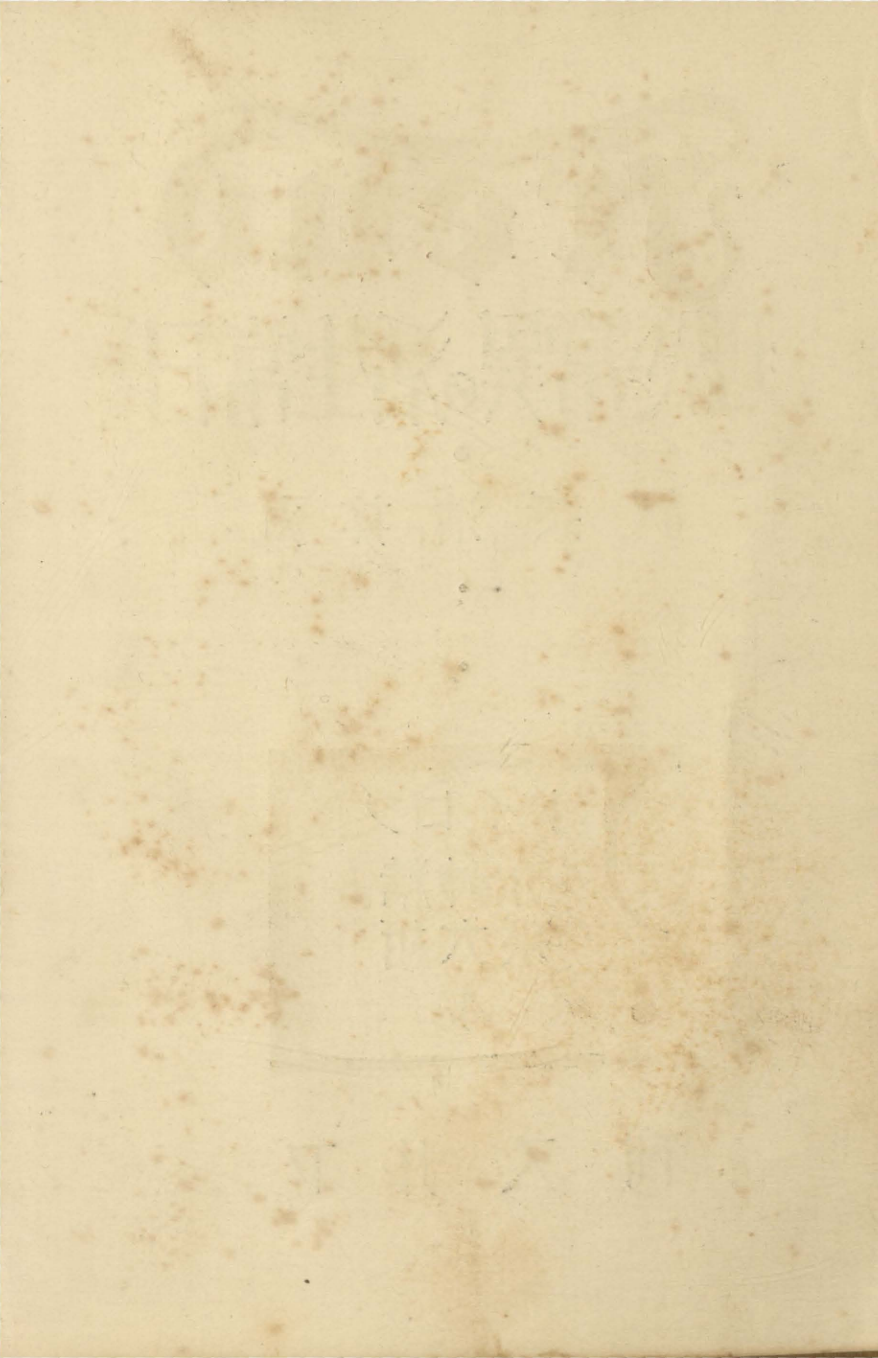
アルス刊

Freud

日常生活の異常心理

丸井清泰訳

フロイド
精神分析大系
4

アルス刊

譯者序

フロイド教授の『日常生活の異常心理』(Zur Psychopathologie des Alltagslebens)は最初一九〇四年に公にされてから一九二四年に至る迄の二十年間に版を重ねる事十回に及び、ついで全集第四卷に收められたものであり、同教授の著書中最も弘布せたものと考へられて居る。尙ほ文明國を以て自ら任じ人も許す國々に於て、本書の飜譯書を見ざるところは稀である。卽ち本書は今迄露語、波蘭語、英語、和蘭語、西班牙語、佛語、匈牙利語等に飜譯されてゐたのである。獨り我國に於ては最近迄その飜譯書を見なかつた事は甚だ異とすべきであつたので、此度アルス社の精神分析大系刊行と共に本書の邦譯が企畫せらるるに到つた事は、學界讀書界の爲に誠に幸な事と云はねばならぬ。然しながら今にして思へば、これは寧ろ遲かつたと云はねばならぬのである。

フロイド教授は本著において日常生活におこる種々の精神病理學的現象、すなはち種々の失錯作業(Fehlleistungen)を精神分析學的研究の對象とし、一般に何等の意味もなく單に偶然に起るものとされてゐたこれら現象が、一定の明かなる動機殊に無意識的動機によつて限定されるものなる事を明か

にし、心理學的定命論を益〻確固たる根柢の上においたのである。同教授は尙ほ本著に於て私共の失錯作業に際して作用する心的機制は、夢の形成、神經官能症、精神神經症の病狀形成の際に働く機制と密接なる關係があり、精神神經症や精神病に見らるる精神病理學的機制は、輕度には正常人の生活にも證明せらるる事を明かにし、以て神經精神病の領域との間に存する『ギャップ』は、一般に考へらるるよりも遙かに狹いものである事を明かにしたのである。

讀者は本書に蒐集されて居る多數の分析例を讀まれ自分竝びに人々が無意味、偶然の事と考へる一定の現象、何の氣なしに行ふ行爲行動に、思はぬ動機――殊に場合によつては非常に內密なる、不快なる又恐しい原因動機が潛んで居る事がある事を知り、戰慄を禁じ得ないものがあるであらう。然しながら又一面に於て讀者は本書を繙く事によつて、自己及び他人を一層よく知るに至り人間性について今迄よりも遙かに廣く深い理解に達する機會を與へられるであらう。若し夫れ人の現す失錯作業の意味、特に極めて微妙なる症候行爲の意味を、よく分析理解し得るに至つたならば、フロイド教授が本著に於て述べて居る樣に、東洋の傳說に動物の言葉さへも聞く事が出來たと云はれて居るソモロン王の樣になつた氣が、自らして來るであらう。特に精神分析を習得實施せんとする人には、本著は『夢

判斷』と共に一讀再讀せねばならぬ寶典であると云はねばならぬのであつて、彼は本著を讀む間に、不知不識精神分析の技術の一端を領得し、精神分析の要領の一部を會得し得る事は必然である。尤も斯く云へばとて、譯者は本著に揭げられたる分析例の凡てが、全然非難の餘地なき安全なるものとは考へてゐないのであつて、中には一足飛びの結論に到達して居る事を思はせる例もないではない樣に思はれるのである。

本著の飜譯に際してはフロイド全集第四卷に收められた論文を臺本とした。本著は引用文獻の範圍極めて廣く詩文の引用せられたる箇所も甚だ多い、從つて文學上の素養に乏しく又飜譯には無經驗だつた譯者はこの飜譯に際して意外な苦勞をした事を自白せねばならない。尙ほ本著に馴染の淺くなかつた譯者が『ペスト』を盡したに不拘、尙ほ且つ完全に理解し得なかつた處が數箇所はあつた事を遺憾とせねばならない。

譯者は元來文辭に拙く、從つて譯文のぎこちない處、廻りくどい處が多々あるであらう事を恐れるのである。尤も本書が科學書であり、譯者はなるべく原文に卽した忠實なる飜譯であり、且つ理解しやすいものを讀者に捧げる事を目標として、この譯を終つた譯であるから、讀者も亦この點を諒とせ

られん事を切望して止まない。

本著原文の佛文より成れる箇所の飜譯は譯者の教室醫學士早坂長一郎氏に依囑した。又原文中難解の字句の飜譯に際しては、畏敬する同僚小宮豐隆教授の有益なる御助言と御教示を得た。此處に兩氏に對して深厚なる謝意を表する次第である。

昭和五年十月

東北帝大醫學部
精神病學教室に於て

譯　者　識

目次

日常生活の異常心理

外氣は幽靈に滿ち滿ちて
何人もこれを避くるに由なし

（ファウスト）

第一章　固有名の忘却

西紀一八九八年度の精神病學神經病學月刊雜誌上に私は「忘却の心的機制」なる題下に一小論文を公にしたが私は此處にその內容を今一度述べてこれからの論述の出發點にしよう。該論文に於て私は私の自己觀察から得た意義ある一例に就て固有名の一時的忘却の屢〻起る場合を精神分析にかけこの日常起る事であり實際上餘り重要でない心的官能――記憶――の罷業の箇々の出來事はこの現象の一般の評價を遙かに超越する說明を許すものであると云ふ結果に到達したのであつた。

心理學者に對して私共が確に知つて居る筈であると信ずる名が思ひ泛ばない事があるのは、一體どうなるのか、とたづねるならば、彼は確に固有名と云ふものは他の記憶の內容よりも忘却され易いものであると答へるだけに滿足して居るに違ひない。彼はこの固有名の忘れられ易い事に就てのまことしやかな理由を色々とあげるであらうが、しかもこの過程の他の條件を假定しないであらう。

私がこの一時的の固有名忘却の現象を詳細に研究しようとするに至つた發端は或る箇々の觀察であつてこれは凡ての場合に見らるるものではないが、箇々の場合には十分明らかに認識し得るものであ

る。かくの如き場合には單に忘却されるのみではなくあやまり追想せられるのである。忘れられた名を思ひ出さうと努力しつつある人に他の名――補充名――が意識にあらはれ、これは本當の名でない事が直ちに認められるけれども、それでも頑強に繰返してあらはれて來るものである。求めらるる名の再生の過程は謂はば移動され他の本當でない補充に向つて進んだ事になる譯である。其處で私の假定はこの移動が心的隨意に放任されるものではなくして規則的なる勘定し得べき道程を保つて起るものであると云ふ事にあるのである。言ひ換ふれば私は補充名と求めらるる名との間には探し出す事の出來る關係がある事を假定するものであつて、この關係を實際に證明する事が成功するならば私は「名の忘却」の成行に就ても明らかにし得るものと信ずるのである。

西紀一八九八年に私が分析のために選んだ實例は Orvieto（オルヴイエトー）の大寺院に於て『窮極の物』（„letzte Dinge"）（譯者註―四窮極物、死、世界の審判、天國、地獄）と云ふ大壁畫を創作した名畫家の名であつて、私はこれを思ひ出さうとしてどうしても思ひ出す事が出來なかつたのであつた。求められたる名卽ち Signorelli（シグノレリ）の代りに他の二人の畫家の名―― Botticelli（ボツテイセリ）及び Boltraffio（ボルトラフイオ）――が私の腦裏に泛び而かも私の判斷は直ぐに又たしかに本當の名でないとしてこれを斥けたのであつた。如何なる影響により又如何なる聯想の徑路を經て再生が斯くシグノレリよりボッテイセリ及びボルトラフィオに移

動したかと云ふ研究は次の結果に到達した。

(a) シグノレリなる名が忘れられた理由は、この名共のものの特徴にも又この名が嵌め込まれてゐた關係の心理學的特徴にも求むる事が出來なかつた。忘れられた名は私にとつては補充名の一つなる、ボッテイセリと同じ程度に親しいものであり、他の一つの補充名なるボルトラフィオとは比較にならぬ程親しいものであつたのであつてボルトラフィオに就ては私は彼が Mailand（マイランド） 學派（ミラン派）に屬して居ると云ふ事以外に何も云ふ事は出來なかつたのである。名の忘却の起つた關係は然しながら私にとつては無害なものとしてあらはれ、次に述ぶる事以上の說明に導かないものあつた。私は或る外國人と一緒に Dalmatien（ダルマチエン） の Ragusa（ラグザ） と云ふ處から Herzegowina（ヘルツエゴウイナ） の或る停車場に向つて車に乘つて行きつつあつた、そして私共は伊太利旅行の事を話し合つて居り、私は道伴れに向つて彼れがすでにオルヴィエトーに行つた事があつたかと云ふ事、それから其處で×××の有名な壁畫を見たかどうかとたづねたのであつた。

(b) この名の忘却は私がこの對話の直ぐ前の話題を思ひ出した時に初めて理解され、新らしく起つた話の題目がその直前の話題によつて障礙された爲めに起つた事が認識されたのである。私が道伴れに對してオルヴィエトーに行つた事があつたかと尋ねた少し前に私共は Bosnien（ボスニエン） 及びヘルツエゴヴィ

ナに住んで居る土耳共人の風俗について話し合つてゐた。私はこれらの土耳共人にまじつて醫術を開業して居る同僚から聞いた事を物語つた。それはこれら土耳共人が醫師に對して絕對の信用をおき運命に對する完全なる服從を示すのを例とすると云ふ事であつた。醫師が彼等に向つて、患者は最早だめであると告げねばならぬ樣になつた場合に彼等は『先生、何とも申上げ樣ありません(Herr, was ist da zu sagen? 私は患者が助かるものならばあなたが彼を助けて下すつたにちがひない事を知つてゐます』と答へると云ふ事であつた。——これらの文章の中に初めてシグノレリとボッテイセリ及びボルトラフィオの間の聯想の一つの列の中に挿入され得る言葉や名卽ち Bosnien, Herzegowina, Herr 等が存在して居るのである。

(c) 私はボスニエンに住んで居る土耳共人の風俗に關する觀念列に次に起つて來る一つの觀念を障礙する能力が與へられたのは、私がその觀念列が未だ終らない前に私の注意をこの觀念列から撤回した結果であると假定する卽ち私は自分の記憶に於て第一の珍聞の近くにあつた、第二の珍聞について物語らうと欲したイを記憶して居る。これらの土耳古人は、性慾の滿足を他の凡てのもの以上に價値づけ性慾障礙のある場合には一種の絕望に陷り、この絕望は奇妙にも死の危險ある場合のあきらめに對比して目に着くのである。私の同僚の一患者は嘗て彼に向つて『先生それ(性慾の滿足)がためになれ

ば人生は價値がないでせう』と云つたのである。私はこの特異なる事を話す事を抑壓したのである。何故なれば私は見知らぬ人との對談に於てこの題目に觸れたくなかつたからである。それぱかりではなく私は注意を『死と性慾』の問題に關聯する考慮の續行よりして他に外らせたのであつた。當時私は數週間前 Trafoi（トラフオイ）と云ふ處の短い滯在の間に得た一つの報知の餘効の下に立つてゐたのであつた、それは私が非常に骨折つて治療をした或る患者が不治の性的障礙の結果自殺を敢てしたとの報知である。私はヘルツエゴヴィナへの今回の旅行には、この悲しむべき出來事及びこれに關聯して居る凡ての事が意識的には追想されなかつた事を知つて居る。然しながら Trafoi と Boltraffio との一致點はその頃この追想が、私の注意の故意の轉向に抗して私に於て有効になつた事を假定するやうに私を强ふるのである。

(d) 私はシグノレリなる名の忘却を、最早偶然の出來事と解する事が出來ないのである。私はこの過程に於て一つの動機の影響を認めざるを得ないのである。それは（土耳古人の風俗云々に關する）私の話を中斷させ、これに關聯して居る考へであつてトラフォイに於ける報知に迄進む筈であつた考を意識されない樣にした動機であつたのである。卽ち私は或事を忘却せんと欲し、或事を壓迫したのであつた。勿論私はオルヴィエトーの名畫家の名とは別の何かを忘れようと欲した譯であつたが、こ

の別のものは名畫家の名との間に自ら聯想的結合を作り、そのために私の意志行爲はその目標をとりちがへ、私がこの別のものを故意に忘れようと欲したに不拘、一方の方を意志に反して忘れる樣な結果を生じたのである。追想に對する忌避は、一方の內容に向つてゐたにかかはらず、追想不能は他の一つの事に於てあらはれたのである。追想する事に對する忌避と追想の不能とが、同じ內容に關する場合は、これよりも簡單な場合であらうと思はれる。かく解釋して見ると、補充名は私にとつて最早以前ほど不當、不合理なものには見えて來ないのである。これらの補充名は(妥協形成の形式に從つて)私が忘れようと欲したもの、及び思ひ出さうと欲したものとを思ひ出させ或る何かを忘れようとする私の企圖が完全に成就されたのではなく、さりとて又全然失敗に終つたのでもない事を私に示すものである。

(e) 求められたる名と壓迫されたる題目(死と性慾云々の題目であつてその中に Bosnien, Herzegowina, Trafoi 等の名があらはれる)との間に聯絡のつくられる有樣は非常に奇異である、ここに挿入した圖形は一八九八年の論說にあげたものを今一度出したものであるがこの聯絡を一目瞭然に示さうとしたものである。

Signorelli なる名は、この場合二片に分解され一方の綴は(elli)補充名の一つ—— Botticelli ——にそのままの形であらはれて居る。他の一方の綴なる Signor は、Herr と云ふ語への翻譯(譯者註

Signor|elli　Bo|tticelli　Bo|ltraffio
Herr　Her|zegowina u. Bo|snien
Herr was ist da zu sagen etc.
Tod und Sexualität
Trafoi
(Verdrängte Gedanken)

—Signor なる伊太利語の獨譯は Herr である)によつて壓迫されたる題目中に含まるる名との間に多數の種々の有樣に於ける關係を得たのである、がその爲にこれは再生されない事になつたのである。これの補充は移動が意味や綴の音の上の句切りを無視し『Herzegowina u. Bosnien』なる名の結合に沿うて行なはれたかの如き有樣に於て起つたのである。だからして名はこの過程に於ては判じ繪に變化さるべき一つの文章の中の書かれたる繪と類似の取扱を受けた事になるのである。シグノレリなる名の代りにかくの如き徑路を經て補充名を作つた全機轉の進行に就ては意識には何等の通知も與へられなかつたのであつた、シグノレリなる名の出て來た題目と、時間的に之に先立つてゐた壓迫されたる題目との間の關係及び同じ綴——と云ふよりも寧ろ同じ文字の連續と云ふべきものかも知れぬ——が補充名の中にあらはれて居ると云ふ事實以上に出づる關係は、差當り見出す事が出來ないやうに見えるのである。

再生及び忘却の條件は心理學者によつて、一定の關係及び素質に求められて居るやうであるが、これらの條件は上記の說明と矛盾するものでないと云ふ事を述べる事は餘計な事ではないであらう。私共は唯だ「名の忘却」を惹起する要素としてすでに以前から認められてゐたものに、さらに一つの動機を一定の場合に向つて附け加へ尙ほ記憶錯誤の機制を明らかにしたに過ぎないのである。かの素質なるものは、私共の場合に於ても壓迫されたる要素が求めらるる名を聯想によつて支配し、この名を壓迫に拉し去る事が出來る樣になるために缺くべからざるものである。好都合なる再生條件を具備して居る他の名では、この事は恐らく起らなかつたであらう。兎も角も、壓迫されて居る要素は、絕えず何處かで別の有樣に現はれようと努力して居り、好都合なる條件がこれを迎へる場合にのみこの結果が達せられる事はありさうな事である。他の場合には壓迫が官能障礙を起さずして成就せられ、或は何等の症候なしに成就されると云つて差支ないのである。

記憶錯誤を伴ふ名の忘却に對する條件は次の如く總括する事が出來るのである。

(1) 名が持つて居る忘却への素質。

(2) 直前に起つた抑壓の過程。

(3) その名と以前に抑壓された要素との間に外聯合のつくられる可能性。

そしてこの最終の條件には、多分あまり高い價値をつけなくてよいであらう。何故なれば聯想に對する要求が小さい場合にはこの條件は大多數の場合に滿たされさうに思はれるからである。處で他の一つのもつと深い問題は斯くの如き外的の聯想が實際に被壓迫的要素をして求むる名の再生を妨げさせるに十分な條件となり得るかどうか、それとももつと深い關係が兩方の題目の間に存する事が必要なのではないかと云ふ事である。皮相な觀察をする人はこの後の方の要求を斥け、全然異種の內容のものであつても、時間的接觸さへあれば十分であると考へるであらう。然しながら深く立入つて研究して見ると外的聯想によつて結ばれたる二つの要素——壓迫されたる要素と新らしい要素——が尙ほ內容上の關係を持つて居る事を見出す事が益〻多くなつて來るのであつて、シグノレリの實例に於てもこの關係は發見されるのである。

私共がシグノレリの例の分析に於て得たる認識の價値は、勿論私共がこの場合を定型的の出來事として說明しようとするか或は箇々の出來事として說明しようとするかによつて、ちがつて來る譯である。さて、私は記憶錯誤を伴ふ「名の忘却」が非常に屢〻シグノレリの場合に明らかにされたと同じ有樣に於て起る事を主張しようと思ふ、私はこの現象を私の觀察し得た殆んど凡ての場合に於て、前述の樣に壓迫作用に原因するものと說明する事が出來たのである。尙ほ私共の分析が定型的のもので

ある事を示すために、他の一つの觀點を主張しなければならない。私は記憶錯誤を伴ふ固有名忘却の場合と補充名の出て來なかつた場合とは、原則的には區別の出來ないものであると信ずるのである。この補充名は一定數の場合には自發的に出て來るものであり他の場合には注意の緊張によつてその現出を强ひる事が出來るのである。そして斯くして泛び出た補充名は、被壓迫的要素並びに求めらるる名に對して自發的に出現したる補充名と、同じ關係を示すのである。補充名が意識される事に向つては、二つの要素が決定的の意義を持つやうである、その一つは注意の努力であり、他は心的材料に固着せる內的條件である。私は兩方の要素の間に必要とせられる外的聯合の作らるる事の難易は、後者に求むべきものであると考へる。斯くして記憶錯誤のない名の忘却の場合の可なり多數が、補充名形成を伴ふ場合に加はるのである。而して補充名形成の起る場合には、シグノレリの例に見られたる機制が適用されるのである。然しながら、私は固有名忘却の凡ての場合が、皆同じ群に屬せしめ得るものであると云ふやうな主張を大膽にもしようとは企てないであらう。確にもつと簡單な有様に起る名の忘却の場合もあるのである。私共は實狀を十分注意して現示し次の如く云はうと思ふ。即ち「固有名の單純なる忘却の外に壓迫作用に原因する忘却も起る」と。

第二章　外國語の言葉の忘却

私共の自國語中日常用ひらるる語彙は正常的官能の範圍內に於ては、忘却から保護されて居るやうに思はれる。外國語の語彙に於てはこれと異なる事は私共の知つて居る事である。この忘却への素質は凡ての品詞に對して存し、輕度の官能障礙は私共の健康狀態、及び私共の疲勞の程度によつて外國語の語彙を使ひこなす事が平等に行かない事にあらはれるものである。この忘却は一定數の場合に於ては『Signorelli』の例が私共に示したと同じ機制に從つて起るものである。私はその證據として唯だ一つ、だが然しながら價値ある特徵を備へて居る分析例を述べようと思ふ。この分析は羅典語の句の中の名詞でない語の忘却の場合のそれであつて、私はこの小さな出來事の分析を手廣く且つ一目瞭然的に述べようと思ふ。

昨夏の事、矢張り休暇旅行の途中、私は大學教育を受けた事のある一靑年と、相識を新たにしたがこの靑年が私の心理學上の著述の二、三を知つて居る事が間もなく判つたのであつた。私共は――どう云ふ風に話が其處へ進んで行つたものかは判らぬが――私共兩人が屬して居る民族の社會的立場に就

て話し合つてゐた。そして名譽慾に燃えて居るこの青年は殘念がつて彼の世代の人々は、彼の云ふ處では萎縮に迄運命づけられて居り、彼等の才能を發揮する事が出來ず、彼等の必要な事を滿足する事が出來ないと云ふ事を、ながながと述べ立てたのであつた。彼はその感傷的に進んだ話を有名なるVergil（譯者註羅馬の詩人）の詩句を以て結んだのであつた。この詩句に於て、不幸なる Dido は彼女の復讐を後裔なる Aeneas に轉移したのであつた。否な彼はこの詩句を以て話を結んだと云ふよりも、結ばうと欲したと云ふ方がよいであらう。何故なら彼は Exoriare…… と云つたがこの引用文を實際にあらはす事が出來なかつたからである。そして追想の明らかなる缺陷を、言葉を置き換へる事によつて覆はんとつとめたのであつた。即ち彼れは Exoriar(e) ex nostris ossibus ultor! と云つたが終に彼れは苛立つて『どうかそんな馬鹿にした樣なお顏をして私の困惑を慰みものにせず私をお助け下さい、この詩句には何かが缺けてゐます、どう云へば完全になるのでせうか』と云つたのであつた。

私は『諾』と答へ、この詩句が正しくひびく樣に次の如く引用した。Exoriar(e) aliquis nostris ex ossibus ultor!（我々の後裔から誰か仇をとつて吳れる人が出るだらう）

『斯んな言葉を忘れると云ふのはあまりにも馬鹿らしい事です、處で私共は理由なしには何物をも忘

れるものでないと云ふ事をあなたから聞いて居る、私がこの不定代名詞なる aliquis（アリクイス）を忘れる事になつた譯を知りたいものです』と彼れは云つた。

私はこの挑戰を心から進んで買つて出た。何故ならば私は私の蒐集材料に一つの追加を望んだからであつた。其處で私は云ひました『それは直ぐに判るでせう、あなたが特別の企圖なしにあなたの注意を忘れられた言葉に*向けた後に、あなたに思ひ泛ぶ事を凡て正直に、又批評を加へないで話して下さい。』

＊これは隱れたる觀念要素を意識に導入する爲めの一般の方法である。私の「夢判斷」（第七版第七一頁）と比較せよ。

『はい今私はこの言葉を次の様に a と liquis に分けると云ふ滑稽な思ひ付きに達しました』

『それは何ういふ譯ですか？』『私にわかりません』『それから何う云ふ事が思ひ泛びますか？』『斯う云ふ風に續きます、Reliquien（遺骸）——Liquidation（清算）——Flüssigkeit（液）——Fluid.（液狀の）——もう何かお判りになりましたか？』。

『いや、とてもとても、どうぞ續けて下さい』

『彼は嘲けるやうに笑ひながら語り續けた『私はの Trient（トリエント）の Simon（シモン）の事を考へます。私は彼の遺骸を

二年前にトリエントの教會で見ました、私は今再び猶太人に對して絕叫されて居る「血の罪」の事及び Kleinpaul の書き物の事を考へますクラインパウルはこれら凡ての所謂犧牲をキリストの化身の謂はば再版と見做して居るのです』

『この「思ひ付き」はあなたに羅典語の言葉が思ひ出せなくなる前に、私共が話し合つてゐた題目と無關係ではないやうですね』

『さうです、つぎに私は此の頃讀んだ伊太利語の雜誌に出てゐた或る記事の事を考へます。私はその記事の標題が「D.hl. Augustinus が婦人について云へる事」となつてゐたやうに信じます、どうでせうか？』

『私は待つて居るのですよ』

『今私共の題目とは確に全然無關係な事が出て來ました』

『どうぞ批評はしないやうにして下さい』

『はい判つて居ります、私は先週旅行中に出逢つた立派な老人を思ひ出します、實際の本人です、彼は大きい肉食鳥のやうに見えます、彼はあなたが名を御存知になりたければ云ひますが Benedikt と云ふ人です』

『然しながら少なくとも聖人及び布教師の竝列ですね、卽ち聖シモン、聖アウグスチヌス、聖ベネディクッス等ですね、そしてある布教師は Origines（オリギネス）と云ふ名の人であつた樣に私は信じます、處でこの三つの名はクラインパウルの Paul（パウル）同樣に、名（姓氏の前の）（Vorname）ですね』

『今私に聖 Januarius（ジャヌアリウス）及び彼の「血の奇蹟」が思ひ泛びました、私は機械的にから云ふ風に進んで行くやうに思ひます』

『そのままにしてお置きなさい、聖ジヤヌアリウス及び聖アウグスチヌスは兩方共に曆に關係があります。あなたは「血の奇蹟」に就て私に話して呉れませんか？』

『話しませう、Neapel（ネアーペル）のある寺院には長頸の壜に聖ジヤヌアリウスの血液が貯藏されてゐます。この血は一定の祭日には奇蹟によつて再び液體になります、人民はこの奇蹟を信じ切つて居り、一度佛蘭西軍の占領の際に起つた樣に、この奇蹟の起り方が遲くなると非常に亢奮します、その時指揮をしてゐた將軍――私は間違つて居るか知らん？ それは Garibaldi（ガリバルヂー）だつたか知らん――が寺院の長をわきの方に拉して行き、外に居る兵士に非常によくわかる樣な手眞似で、奇蹟が早く起る事を希望すると云ふ事を彼れに暗示した處が、奇蹟は實際に起りました。』

『さあその先きを云つて下さい。何故あなたは云ひ淀むのですか？』

『今勿論私に或る事が思ひ泛びました……然しながらそれは話すのにあまり內密な事だし……又何の關係も認められませんし、それを云ふ必要もないやうです』

『關係をつけて行くのは私の役ですよ、私は勿論あなたが不快を感ずる事を話すやうに强制は致しません。その代りあなたにはどう云ふわけであなたが aliquis なる言葉を忘れたかと云ふ事を知りたいと私に要求する事は出來ません』

『「ほんたうですか?」「あなたは信ずるのですか?」「私は急に一人の婦人の事を考へました、その婦人からは我々兩人に非常に不快な報告が來さうなのです』

『月經が來潮しなかつたと云ふ報知でせう?』

『どうしてあなたにそれがおわかりになるのでせう?』

『それは何も難かしい事ではないのです、あなたそれを知るための準備を十分に私にさせて呉れました、あなたは曆の聖者の事を考へ、一定の日に於ける血液の液化の事を考へ、その事が起らない場合に起る混亂の狀態を考へ、その奇蹟が起らねばならぬと云ふ威嚇その他を考へられました、……あなたは聖ジヤヌアリウスの奇蹟を婦人の月經への見事なる諷示に用ひたのです』

『ちつとも識らずにですね、そしてあなたはこの不安なる期待のために私が aliquis なる言葉を再生

し得なかつたものとお考へですか？』

『それは疑ひの餘地のない事のやうに思はれます、然しながらあなたが a —— liquis と云ふ風にこの語を分解した事及びあなたの Reliquien, Liquidation, Flüssigkeit, 等の聯想について思ひ出して見て下さい、私はあなたが Reliquien（遺骸）と云ふ語から出發して話し出した——子供として犧牲にされた——聖シモンをも關係の中に織り込みませうか？』

『どうかさうしないで下さい、私がたとひ斯んな考へを持つたとしてもこんな事はあまり眞面目にお取り上げにならないで下さい、その代り私はその婦人が伊太利婦人であつてそれと一緒に Neapel（ネアーペル）にも行つた事を白狀致します、然し凡ては偶然の事ではないのでせうか？』

『これら凡ての關係をあなたが偶然の事と假定する事によつて說明し得るか何うかと云ふ事は私はあなたの御判斷に委す外ありません、然しながらあなたが分析しようと欲せられる凡ての類似の場合は同じやうに珍奇なる偶然にあなたを導く*であらうと云ふ事をあなたに申上げておきます。』

* この小さい分析は文獻の上に於て、大なる注意を喚起し活潑なる論議を惹起した、E.（エー） Bleuler（ブロイレル） はこの分析に於て精神分析的解釋の信憑するに足る事を數學的に會得しようと試み、これが數千の論難されざる醫學的認識よりも高い蓋然性價値を有する事、及びこの分析が特種の位置を獲得した譯は、人々が科學上未だ心理學的蓋

然性を考慮に入れる事に慣れてゐないからであるとの結論に到達した。(Das autistisch-undisziplinierte Denken in der Medizin und seine überwindung. Berlin, 1919)。

私はこの小分析例——この分析を自分にさせて呉れたその時の道連れに對してお禮を云はなくてはならない——が價値あるものと見るべき二三の理由を持つて居る。先づこの場合は外では得難い一つの源泉から得られたのである。私は此處に擧げる心的官能障礙の實例を大多數の場合、私の自己觀察から持つて來る外はないのである。私の神經官能症患者が提供して呉れる遙かに豐富なる材料は私は、此處では用ふる事を避けようと努めて居る。それは私が當該現象が神經官能症の結果であり、そのあらはれであると云ふ抗議を持ち出される事を恐れねばならぬからである。從つて精神健康なる未知の人が斯くの如き研究の對象になつて呉れる事は私の目的に向つて特別の價値ある譯である。今一つ別の關係に於て、この分析が私に意義深いと云ふのは、これが補充追想を伴はざる言葉の忘却の一つの場合を明らかにし、私が初めから立ててゐた立論卽ち誤まれる補充追想が起つて來ると否とは、本原的の區別*を生ぜしむるものでないと云ふ事を確證するものであるからである。

* 一層精密に觀察して見ると代理追想の點に關してシグノレリの分析とアリクイス のそれとの間に存する「コントラスト」は顯著なものでなくなるやうに見える、卽ち後者の場合にも、忘却は代理形成を伴つて居る樣に

見えるのである。私が後に私の道伴れに向ひ忘れた言葉を思ひ出さうと努力した時に、何かがその代りに思ひ泛ばなかつたかと問うた處、彼は最初 ab と云ふ字を詩句の中に入れ mostris ab ossibus (多分 a—liquis 聯絡なき部分であらう)にしようか知らと考へた事、及びその次に exoriare と云ふ言葉が、特に明瞭に又頑强に思ひ泛んで來た事を告げた。疑ひ深い彼は更らにこれが詩句の最初の言葉であるためであらうと附加へた。私はついで exoriare と云ふ字からの聯想に注意をして吳れと乞うた處、彼は Exorzismus (厄祓) と云ふ語を私に告げた。これによつて私は、exoriare なる語が追想に於て强調された事は、元來代理形成の價値を持つてゐたからであると云ふ事を、非常によく考へる事が出來たのである。この代理形成は「聖者の名よりの厄祓」なる聯想を經て出來たものであらう。何れにしても、これは大きい價値をおく必要のない微細點である。これに反しP. Wilson (The imperceptible. Obrions, Riris'ta de Psiquitria, Lima Januar 1922.) は exoriare なる語の强調は非常に高い說明的價値を持つて居る。それは Exorzismus は流産によつていやな子供を片附けてしまふと云ふ、被壓迫的觀念の最良の象徴的代理であるからだ、と切言して居る私は分析の結合力を傷つけないこの修正を感謝を以て受け入れようと思ふ、——さて或る種の代理追想の出現は、壓迫作用が動機になつて居る故意の忘却の際に常に起るものであり、又吾人を欺く一つの特有なる徵候であるやうに思はれるのである。この代理形成は本物でない代理名が思ひ泛ばない場合でも、忘却されたものに近い關係にあるものの强調によつて、成立つであらう。例へばシグノレリの場合に於ては、畫家の名が私に判らないで居た間は、壁畫の列の視的追想及び或る畫の一隅につけられて居る彼の自畫像の視的追想が、非常に明瞭であつたのである。兎も角も平生私にあらは

れる視的追想に比して遙かに强いものであつたのである。矢張り一八九八年の論文に述べた他の一つの場合に於ては或る外國の都市に於けるいやな訪問をしようと云ふ場合に、その宛名の內の町の名が何うしても忘れられて思ひ出す事が出來ず、而かも家の番號は皮肉にも非常にあきらかに思ひ出されたのであつた。——私には平生は數字の記憶が非常に困難であつたのに。

「アリクィス」の例の主なる價値は、シグノレリの場合とは異なる他の點にあるのである。シグノレリの例では名の再生は直前に始められ、而かも中止された考慮の餘効によつて障礙されたのである。然しながらこの考慮の內容は、シグノレリなる名を含んで居る新らしい題目との間に明らかなる關係を有せず壓迫されたる題目と忘却されたる名を含む題目との間には單に時間的の接觸關係があるだけであり、この關係は兩者を外的聯想によつて結合させるに十分であつたのである。*

* 私はシグノレリの場合に於ける兩方の觀念界の間に內的關係がないと云ふ事を十分なる確信を以て固守しようとは思はないのである。「死と性的生活」についての被壓迫的觀念を注意深く追究して行くと吾人はオルヴイエトーの壁畫の題目と近く接觸する觀念にぶつかるのである。

「アリクィス」の例ではこれに反して直前に意識的考慮を占有すべき筈であつたに拘らず意識されないで而かも今障礙として反響したかの樣に思はれる無關係なる被壓迫的題目は、何も認められないので

ある。再生の障礙はこの場合にはぶつかつた題目の內部より起つたのである。卽ち引用句の中に現はされたる願望觀念に對する一つの抗議が無意識的に起つたのである。私共は事の經過を次の樣に組み立てなければならないのである。話し手は彼れの民族が權利をせばめられて居る事を悲しみ、デイドーと同じ樣に次の三十代の人々は壓迫者に對する復讐を引き受けるであらうと云ふ事を豫言したのである。だから彼は子孫を得たいと云ふ願望を述べた事になるのである。この瞬間に於て彼に反對の考へが侵入して來たのである。『お前は、實際にそれほど熱心に子孫の出來る事を希望するのか?、それはほんたうではあるまい、お前が子女を期待せねばならぬやうな報知をお前の知つて居る方面から、今受取るならば、お前はどんな困惑の狀態に陷るであらう?、否な否な!復讐のためには子孫はほしくても差當り子女があつてはならない。』とそしてこの抗議はここにその効力を發揮したのである。卽ち話し手は、シグノレリの例に於けると同樣に、彼の觀念要素の內の一つと抗議を申込まれたる願望の一つの要素との間に外的聯想を作り、これによつてこの抗議が効力を生ずるに至つたのである。而かもこの場合には非常に强制的なる有樣に於て、人工的な不自然なる聯想の徑路を經て外聯合が作られたのである。それからシグノレリの例との間の第二の主なる一致點は抗議が被壓迫的源泉から來て居り、注意の轉向を惹起する處の考から出發すると云ふ事にあるのである。名の忘却の以上二例に於ける異同及

び內的類似に就て述ぶべき事は、これだけである。私共は忘却の第二の機制即ち考慮の障礙が壓迫されて居るものより來る內的抗議から起ると云ふ事を知つた譯である。私共は容易に理解し得るこの過程には、これからの說明の經過中に於て何度も出くはすであらう。

第三章　名及び「言葉の配置」の忘却

上述外國語の言葉の配置の一部の忘却の成行に就ての經驗からして、國語に於ける言葉の配置の忘却は、本原的に異なる說明を必要とするや否やと云ふ好奇心が活潑に起つて來るのである。私共が諳記して居る公式或は詩を不正確に――或は多少これを變化し、或は脫漏のある狀態に於て――再生し得る場合私共は別にこれを不思議に思はないのが常である。然しながら私共が續きの儘でおぼえた事を一樣に忘れないで、その內の箇々の部分を引きちぎつて忘れるやうであるから、斯の樣な有樣に起つた再生の障礙の箇々の實例を分析的に硏究する事は、骨折り甲斐のある事の樣に思はれる。

私よりも年下の或る同僚が私と對話をしてゐて、國語の詩の忘却は外國語の「言葉の配置」の中の箇々の要素の忘却と、類似の動機によつて起るものであらうと云つたが、この同僚は私の賴みによつて同時に硏究對象になつて吳れる事になつた。

私は如何なる詩で實驗しようと彼に尋ね、彼は „Die Braut von Korinth“ (「コリントの花嫁」) 選び出した。この詩は彼が非常に好きであり、少なくとも詩の段每に諳誦し得るものと信じてゐた。再生の初めに際し、彼に顯著なる不確實さがあらはれた。彼は„Von Korinthus nach Athen gezogen‘

（コリンツスからアテンに進んで行つた）と云ふのか、それとも,Nach Korinthus von Athen gezogen'（コリンツスの方へアテンから進んで行つた）と云ふのであつたかと私に訊ね、私も一瞬の間ためらつたが、詩の標題が„Die Braut von Korinth"であるから、若者が何の道を進んで行つたかは疑ひの餘地がないと云つた。ついで第一段の再生は、滑かに、少なくとも著い誤りなしに進行した。第二段の第一行を終つた後同僚は暫時さがして居るやうであつたが、間もなく續けて次の樣に朗吟した。

Aber wird er auch willkommen scheinen,
Jetzt, wo jeder Tag was Neues bringt?
Denn er ist noch Heide mit den Seinen
Und sie sind Christen und――getauft.

（さりながら日々に新奇な事の起つて來る今も、彼は歡迎せられるであらう？ 何故なら彼は彼の家族と共々に異教徒であり、彼女等はキリスト教徒であり……洗禮を受けて居るのだから。）

私は已に前から變だと思ひながら傾聽してゐたが、最後の行が終つてから、私共はここに歪みが起つたと云ふ事に意見が一致した。然しながらこれを訂正する事が出來なかつたので、私共は圖書室に行きゲーテの詩を取つて見て、この段の第二行目が全然別な文句になつて居り、これが同僚の記憶か

ら謂はば投げ出されてしまひ、外見上全然別のものによつて補はれてゐた事が判つた。そして本當の文句は次のものであつた。

„Aber wird er auch willkommen scheinen,

Wenn er teuer nicht die Gunst erkauft.“

（さりながら彼れは歡迎せらるるであらう。彼が好意をかち得る事に苦心はしなくとも。）

„erkauft“に對して„getauft“が韻を踏まれてゐた。そして私にとつてはHeide, Christen及びgetauft等の字配りが原文の修復に際して、彼をあまりにも助成しかたが少なかつた事が不思議であつた。私は同僚に對して『あなたは非常によく知つて居ると云はれた詩に於て、行を斯くも完全に抹消した事を自ら說明し得ますか、又あなたは如何なる關係からしてこの補充を持つて來たかと云ふ事について、何かお考へがありますか』と訊ねた。

彼は說明をする事を明かに好まなかつたが、それでも說明を與ふる事が出來た。

『„Jetzt, wo jeder Tag was Neues bringt“なる行は私は知つて居ります、私はこの言葉を近頃私の營業に關して用ひたに相違ありません。私の營業の發展に就ては、私はあなたの御存知の通り現在非常に滿足してゐます。然しこの文章がどうして此處に出來て來たでせう。私は關係を知つてゐた筈

です。„wenn er teuer nicht die Gunst erkauft" なる行は明かに私にとつて愉快ではありませんでした。それは一度失敗した求婚で、今私のよくなつた物質上の境遇に於てもう一度播き直しをしようと目論んで居るものと關係があります。私はあなたにこれ以上云ふ事は出來ません。然しながら一種の打算が、以前も今回と同樣に求婚問題を決定したと云ふ事を、私に思ひ出させるものと假定される事は、たしかに好ましい事ではありません』と彼は說明した。

私はそれ以上詳しい事情を知らなくてもその事は判つた。然しながら私は更に問うた。『あなたは一體あなた及びあなたの私的境遇を „Braut von Korinth" の本文の中に混入する事になつたのですね？ 多分あなたの場合にもこの詩の中にあらはれて居る樣な信仰の差別があるのでせうね？』

(Keimt ein Glaube neu,
wird oft Lieb' und Treu
wie ein böses Unkraut ausgerauft.)

(新しき信仰の萠ゆる時
愛と操は屢〻惡るき雜草の
如く毟り取られる。)

私は正しくは云ひ當てなかつた。然しながらこの狙ひをうまくつけた問ひは、この男を急に慧眼にした事は注意すべき事であつた。從つて、彼は今迄氣附かなかつた事も答ふる事が出來るやうになつた。彼は困つた樣な、そして又不服な樣な眼つきを以て私を見つめた。そして詩のあとの方の箇所を呟き誦した。

„Sieh sie an genau *!
Morgen ist sie grau."

* 同僚は但しこの詩のよい箇所をその文句に於ても又その用ひ方から云つても、多少變化させたのであつた。
幽靈少女は彼女の婚約の夫に對して云つた。

Meine Kette hab' ich dir gegeben
Deine Locke nehm' ich mit fort.
Sieh sie an genau.
Morgen bist du grau!
Und nur braun erscheinst du wieder dort.

（妾の鎖を妾は汝に與へた

汝の攣毛を妾は持つて行く
それをよくよく見られよ
明日は汝は灰色となり
褐色となつてあの世に現れるだらう。」

そして彼は彼女（彼が求婚せんとする）が自分よりも少しく年上である事を附け加へ語つたのであつた。彼をこれを以上苦しめない樣に私は訊問を中止した。これだけ判れば十分であつた。然しながら記憶に關する無害なる失錯作業の原因を突き止めようとしたこの努力が、斯くも緣の遠い、而も極祕の、そして苦しい感情を帶びて居る被分析者の事件を搔き混ぜる事になつたのは、たしかに意外であつたのである。

有名なる詩の言葉の配置の忘却の他の例を私は C. G. Jung（ツエー ゲー ユング）の言と一緒に此處に引用しよう。『或る人が有名なる詩 ,Ein Fichtenbaum steht einsam usw;'（一本の檜がさびしく立つて居る云々）を諳誦しようとした。,Ihn schläfert'（「彼は眠い……」）の行に於て、彼はつかへてどうしても先へ進む事が出來ず，mit weitzer Decke' を彼は全然忘れてしまつたのであつた。斯くの如き有名なる詩の句の忘却は、不思議な事だと思はれたので、私は彼をして，mit weitzer Decke'（「白い覆ひを以て」）に

就き、彼に思ひ泛ぶ事を再生せしめた處が、次のやうな長い連續が出て來た。『白い覆ひに就ては Totentuch ――卽ち――屍體を覆ふ亞麻布――を考へます――(間)――今私は一人の近しい友人を想ひ出します――彼の兄弟は最近急死しました――その人は心臟痲痺で死んだと云ふ事です――その人も亦非常に肥滿してゐました――私の友人も肥滿してゐます、そして私は彼も同じ樣な事になるのではないかと考へました――彼は多分運動不足なんです――私は彼の兄弟の人の死んだ事を聞きました時私共の家族も同樣に肥胖症の傾向を持つて居り、私の祖父が心臟卒中で死んだものですから、私もさうなるのではないかと急に不安になりました。私は餘りに肥滿してゐまして此頃脫脂療法をはじめました」と彼は云つた。この男は卽ち自分と白い亞麻布に覆はれた棆とを同一視したのである』とユングは云つて居るのである。

* C. G. Jung, über die Psychologie der Dementia Praecox. 1907, Seite 64.

ブダペストに居る私の友人 S. Ferenczi のお蔭で、次にあげる言葉の配置の忘却の例は今迄の例とは異なり、詩人の作つた文章に闘するものではなく、自分の作つた話に闘するものである。この實例は全然通常でない場合を私共に提供するものかも知れない。それは忘却が私共の理性に奉仕し、瞬間的に起る慾情に理性が屈服し敗れようとする危險が起つて來る時、理性のお役に立つと云ふ場合を示

すものの様に思はれるのである。即ち失錯作業が有用なる官能をする事になるのである。後に私共は迷ひから醒めて生眞面目になつた時に、私共は前に罷業――即ち忘却心的無力として現れる外なかつたかの內的奔流……心の動きを正當なるもの――無理のない事と考へるのである。

『ある會合に於て,Tout comprendre c'est tout pardonner'(凡てを理解する事は凡てを赦す事である)と云ふ言葉がひよこり出て來た。私はそれに就てはこの文章の最初の部分だけで十分である。das,Pardonnieren'(赦す)と云ふ事は不遜である神や宗教家に委しておけと云つた。その場に居合はせた一人の男がその通りだと云つた。この事は私を向う見ずにした、そして――多分この自分に好感を持つてくれる批評者の善意を確かめるために――私は近頃自分にもつとよい事が思ひついたと云つた。然しながら私がそれを話さうとした時、それが私に思ひ泛ばなかつた。私は直ちに退き、自分の思ひつきを書きつけた。先づ第一に、かの求むる思ひ付きが出來た時の證人であつた友人の名とブダペストの街の名とが出て來た。次に他の友人 Max(マックス) の名があらはれた。Max を私共は Maxi(マキシ) と呼んでゐた。これが私を Maxime なる言葉に導き、これが冒頭に說明した場合と同樣に――當時或る有名なる Maxime(格言)の變化したものであつたと云ふ追想に導いた。不思議にもその次には私に格言ではなく次の事が思ひ泛んだ。即ち,Gott schuf den Menschen nach seinem Bilde'(神は自分に

像どつて人間を創造した)及びその變化したる文體,der Mensch schuf Gott nach dem seinigen'(人間は自分の像に從つて神を造つた）ついで直ちに求めてゐたものへの追想が泛んで來た。私の友はその時 Andrassy（アンドラッシイ）街に於て、私に、Nichts Menschliches ist mir fremd（私には人間らしい事は、凡て未知ではない）と云ひ、それに對し私は——精神分析學上の經驗を諷示して——あなたは一歩進んで、あなたに動物性の事は何一つとして未知でない(…dass dir nichts Tierisches fremd ist.) と云ふ事は白狀せねばならぬだらうと云つたのであつた』

『然しながら、私は到頭求むるものを追想し得た後も、これをその時に居合はせた人々の中でこれを物語る事が出來なかつた。友人の若い夫人であつて、私が無意識界の動物性について說明した事のあつたその婦人も、列席者の中にゐたのであつた。そして私は、彼女が斯くの如き好ましからぬ認識を知り得る迄の素養がまだ出來てゐなかつた事を知らねばならなかつた。卽ち忘却によつて彼女に起る一聯の不快なる問題及び無駄なる論議が節約されたのであつて、かくする事が、正にこの一時的忘却の動機であつたに違ひないのである。』

『求むる文章に於ては人間の動物性が指示されて居り、一方隱蔽想起（Deckeinfall）に於ては、神性が人間のつくつたものに墮される樣な文章があらはれて居る事は興味ある事である。卽ち權利の減少

は兩方に共通である。全體の事は明かに對話によつて呼びさまされた理解と容赦に關する考への繼續であつたのである。』

『この場合に於て求めらるるものが、斯くも速かにあらはれた事は、私が檢閲を受けてゐた交友仲間から誰もゐない室に退いた事によるのであらうと思はれる。』

私は、それ以來「言葉の配置」の忘却或は再生の誤りの場合に於て多數の分析を行ひ、これら研究の一致せる結果からして „aliquis" 及び „Braut von Korinth" の例に於て證明されたる心的機制が殆ど普遍的の通用を有するものである、と云ふ假定に傾くやうになつたのである。これらの場合の分析は前述のものと同樣に常に極く內密のものであつて、被分析者に對し苦痛を感ぜしむる事柄に關係して居るから、これらの分析例を發表する事は、大多數の場合あまり心持のよい事ではないのである。從つて私は斯くの如き實例の數をこれ以上增加させようとは思はない。材料は變つてゐても忘却された事及び歪められたる事は、無意識的なる考慮內容と或る聯想の道に於て關係づけられて居り、この考慮內容よりして忘却なる結果があらはれる事は、これら凡ての場合に共通である。

私は再び「名の忘却」に向つて論述を進めようと思ふ。この「名の忘却」に就ては、私共は今迄は未だ一々の場合に於ても、また動機についても遺漏なく觀察を盡す事はしなかつたのである。私はこの

種の失錯作業を私自身に於て折々觀察し得るから、この種の實例には不自由を感じないのである。今でも不相變私が惱む輕い偏頭痛は「名の忘却」によつて數時間前に豫告されるのが例になつて居る。そして私が仕事を止めなければならぬ程この偏頭痛極點に達する時、屢々私には凡ての固有名が出て來なくなるのである。其處で私の場合の如き例は、私共の分析的努力に對する原則的抗議の發端となる恐れがあるのである。斯くの如き觀察からして、健忘特に「名の忘却」の原因が大腦の血行障礙及び全般的官能障礙にあり、從つて斯くの如き現象に對しては、心理學的の說明を努力する事が不必要であると結論すべきであらうか？　私は決してさうは思はないのである。さう云ふ風に考へる事は、凡ての場合に同樣に起る一過程の機制が不定であり、且つ必然的に必要でない補助的の事と取違へる事にならう。詳細に論ずる代りに私はこの抗議を除去するための一つの譬喩を擧げようと思ふ。

私が非常に思慮淺く夜中大都會の人通りなき邊りを散步し、泥坊に襲はれて時計と財布を掠奪されたと假定し、最寄りの巡査駐在所に行き「私がこれこれの街路に行つてゐて、其處で寂寞と暗黑が私から時計と財布を奪ひ去つた」と訴へたと假定せよ。私はこの言葉で正しくない事は云つてゐないにしても、私はこの訴への文句からして私の頭腦が本當でないと考へられる危險があるのである。狀態を正しく述べるためには「場所の寂寞なる事をよい事にして、又暗黑の保證の下に、何人だか判らぬ

犯人が、私から貴重品を奪つた」と云はなければならないのである。さて「名の忘却」の際の狀態はこれと同樣である。疲勞血行障礙及び中毒に促がされ、不明なる心的の力が私の記憶に屬して居る固有名を意の儘に用ふる能力を奪つたのである。この同じ力は、他の場合に於ては完全なる健康狀態及び作業能力を有する狀態に於ても記憶の同じ障礙を生ぜしめ得るのである。

私が自身に觀察した「名の忘却」の場合を分析して見ると、出て來ない名は殆ど常に私に近い關係を持つて居り、强力にして、時には苦惱の感を私に惹起する題目に關係を持つて居る事を見出すのである。Zürich（チユーリツヒ）學派（ブロイレル・ユング・Riklin（リクリン））の便利にして推稱するに足る習慣に從つて、私はこれを次の樣な形式に現す事が出來る。即ち「忘却されたる名は私の個人的凝結觀念（Persönlichen Komplex）に觸れた」と。人名と私との關係は意外であつて豫期し得ず、且つ多くは表面的なる聯想（言葉の兩義的なる事及び類音同音なる事）に依つて媒介さるるものである。これは一般的に側關係（Seitenbeziehung）と稱する事が出來る。二三の簡單なる例は、その本態を最もよく明かにするであらう。

(1) 或る患者が Riviera（リヴイエラ）にある療養所に紹介して呉れと願つた私は Genua（ゲヌア）に近く一つの場所を知つて居り、且つ其處に開業して居る獨逸人の醫者の名も記憶してゐた。然しながら場所そのものの名

に、矢張り確かに知つて居ると信じて居るに拘らず、それを云ふ事が出來なかつた。私は仕方なく患者を待たせておき、私の家庭の女供の處に行きゲヌアの近くでN・醫師が小さい病院を持つて居り、某々婦人が永い間治療を受けた場所は何と云ふかと訊ねた。「勿論貴方にはこの名をお忘れになる譯ですよ、それは Nervi（ネルヴイ）と云ふんです。」と云ふ返辭であつた。勿論 Nerven（神經）と私とは大關係がある。

(2) 或人が近所にある避暑地の事を語り、そこに二つの有名な旅館があり、この旅館には彼にとつて或る思ひ出が結びついて居ると云ひ、且つその旅館の名は直ぐにも云ふ事が出來ると云つた。私はそんな旅館はないと云ひ、私は七夏通してその場所に住んでゐた事があり、その場所に就ては彼よりもよく知つて居る筈だと主張した。私の抗議に刺戟されて、この男はその名を云つてしまつた。この旅館は Hochwartner（ホツホワルトネル）と云ふのであつた。其處で私は勿論屈服せねばならなかつたし又私が七夏の永い間私が否認したこの旅館の直ぐ近くに住んでゐた事を白狀せねばならなかつた。この場合、私は何故名と事實とを忘れたのであらうか、私はこの名が餘りに明かに私と同じ專門のウイーンの同僚の名に似た音を持つて居り、矢張り私の「大學教授凝結觀念」（Professionel'en Komplex）に觸るであらうと思ふ。

(3) 別の或時に Reichenhall（ライヘンハル）停車場で乘車劵を買はうとした時、私が度々通過した事があり、平生

私が非常によく知つて居る次の大停車場の名がどうしても思ひ付かなかつた。私は時間表を熱心に探さねばならなかつた。その名は Rosenheim（ローゼンハイム） と云ふのであつた。其處で如何なる聯想によつてこの名が出て來なかつたかと云ふ事が直ぐに私に判つた。その一時間前に私は妹をライヘンハルの直ぐ近くにある彼女の住居に訪ねた。彼女の名は Rosa（ローザ） と云ふのであつた。即ち矢張り Rosenheim（ローゼンハイム）（Rosaの家(Heim)）である。私の家族凝結觀念（Familienkomplex）がこの名を自分から奪つたのであつた。

(4) 家族凝結觀念が掠奪性の作用を有する事は、多數の實例に於て追究する事が出來る。

或日私の某婦人患者の弟なる一青年が私の診察を受けに來た。私は彼には何度も逢つた事があり、常に彼を名（姓氏の前の）で呼んでゐた。處で私が彼の訪問に就て話さうとした時、私は別に珍しくもない彼の名を忘れ、どうしても想ひ出す事が出來なかつた。私はついで街に出て商店名を讀み、その名が最初にぶつかつた時に、その名を認識したのであつた。分析の結果は、私がこの訪問者と自分の弟とを「自分の弟は同じやうな場合にこの訪問者と同じやうな態度行動を取つたであらうか、それとも反對の行動を取りはしなかつたらうか？」と云ふ壓迫されたる問題を中心にして對比させた事が明かになつた。よその家庭と自分の家庭に關する考への間に出來たこの外的結合は、雙方の家庭に於て母が同じ Amalia と云ふ名を持つてゐたと云ふ偶然の事によつて可能にされたのであつた。つい

で私は私に理由が判らずに出て來た二箇の補充名 Daniel（ダニエル） 及び Franz（フランツ） をも理解するに至つた。この二つの名は Amalia（アマリア） と同様にシルレルの「盗賊」の中にある名であり、これは凡てウイーンの徒歩旅行家 Daniel（ダニエル） Spitzer（スピチエル） の洒落と關聯して居るのであつた。

(5) 又或時私は私の幼時の生活に一定の關係ある一患者の名を見出す事が出來なかつた。この求むる名が發見される迄には分析は長い迂路を通過するを要した。この患者は彼が失明しはしないかと云ふ不安を發表した。これが銃丸によつて盲目となつた或る青年についての記憶を呼び起したのであつた。そしてこれが又ピストル自殺をした他の青年の像に導いた。この青年は私がはじめに述べた患者と親類ではなかつたけれども、同じ名を持つてゐた。然しながら私はこの二人の青年の場合から不安の期待が私自身の家庭のある人へ轉移した事を意識し得るに至つて、はじめてこの名を見出す事が出來たのであつた。

かくして「自己關係」の不斷の流れが私の考慮を通して流れて居り、この流れは平生は私に判らずに居るのであるが、上記の如き「名の忘却」に依て私に判るのである。恰も私が他人のどんな事でもを聞く時には、これを自分の事と比較する事を強ひられる樣な觀があり、私の個人的凝結觀念が他人の事を知る際に、いつも活潑になるかの觀があるのである。これは決して私の個性的特性ではあり得ず

却つて私共が一般に外部の事を如何にして理解するかと云ふ事の「ヒント」を含むものに相違ないのである。私は他の人々に於ても私と同様であらう事を假定する根據、理由を有するのである。

この種の實例の最も優秀なるものを Lederer（レーデレル）と云ふ人が自分の經驗として、私に告げた。彼は、Venedig（ヴエネーデヒ）に於て彼の一面識ある紳士と出會ひ、この人を自分の若い妻に紹介せねばならない事になつた。然しながら彼はこの人の名を忘れた爲、先づわけの判らぬつぶやきを以て間に合はせる外なかつた。その後彼がこの人に二度目に出逢つた――それはヴエネーデヒでは避け得ない事である――時彼はこの人をわきの方へ連れて行き、名を忘れて困つたから云つて呉れと云うた。この人の答は人間性についての優秀なる知識を示したのであつた。彼は答へた。「あなたが私の名を心に留めなかつたのは無理のない事です、私はあなたと同じく Lederer（レーデレル）と云ふものです」と。――一體に人と云ふものは他人に自分自身と同じ名を見出した場合に、淡い不快感を禁じ得ないものである。私は近頃私の診察時間に S. Freud（エス・フロイド）と云ふ一人の紳士が私に自己紹介をした時に、この感じを非常に明かに感じた。（但し私は私の批評者の一人が、この點に關して私とは正反對の態度を取ると確言した事を此處に書き添へておかう。）

(6) ユングの*報告して居る次の實例に於ても、私共は自己關係の有効なる事を認めるのである。

『Yなる男が或る婦人を愛してゐたが、求愛に成功せず、この婦人はXなる男と結婚した。さてY君はX君を既に永い間知つて居り、二人の間には職業上の關係があつたに拘らずX君の名を忘れ、彼と通信しようと欲する時、度々他人から彼の名を聞かなければならなかつた。』この例に於ける忘却の動機は、自己關係の限定の下に立つて居る前の諸例よりも明かである。この場合には忘却はY君が自分の幸福なる戀敵に對する嫌厭の感の直接の結果であるやうに見えるのである。彼はX君の事は何事も知りたくなつたのである。ユングの言葉を借りて云へば『彼の事は考へらるべきではなかつた』のである。

* Dementia Praecox, S. 52

(7)「名の忘却」の動機は、より微妙なものであり、その名の所有者に對する「美化されたる」憎惡心に存する事があるのである。ブダペストのI. v. K. なる處女は私に次の様な手紙を寄越した。

『私は小さな學説を立てました、即ち私は繪畫の才能ある人は音樂に對して何等の嗜好、傾向を有せず、又その逆が奇である事を觀察し得ました。近頃私は或人とこの事に關して話し、次の様に云ひました「私の觀察は今迄はいつも的中しました、唯一例だけ除外例がありました」とさて、私がこの人の名を思ひ出さうとした時に、私はどうしても思ひ出す事が出來ず、而もこの名の持主が私の最も親し

い知人の一人である事を知つてゐました。數日後に偶然人がその名を呼んで居るのを聞きました時、私は勿論直ぐにその話が私の學說の破壞者に關係して居る事を知りました。私が無意識的に彼に對して抱いた憎惡心が平生非常によく知つて居る、彼の名を忘却する事によつてあらはれたのでありました』と。

(8) フェレンチーの報告した次の例に於ては、自己關係が少しちがつた道程を經て「名の忘却」に導いたのであつた。この分析例はボッティセリ――ボルトラフィオからシグノレリに達したのと同樣に、補充の思ひ付きの說明によつて特に興味深いものとなるのである。

『精神分析の事を多少聞いてゐた或る婦人に、精神病醫ユングの名がどうしても思ひ泛ばなかつた。』

『その代りに次の思ひ付きが起つた。Kl.(一つの名)――Wilde(ウイルデ)――Nietzche(ニーチエ)――Hauptmann(ヘウプトマン)』

『私は彼女に名を告げず、一々の思ひ付きに就て自由聯想をするやうにと要求した』

『Kl. に就て彼女は直ちに Kl. 夫人の事、それから彼女が氣取り屋の虛飾的な人であるが、年齢にしては大層美しく見える事を考へ「彼女は老けない」と云つた。ウイルデ及びニーチェの共通なる上位概念として彼女は「精神病」と云つた。ついで彼女は嘲笑する樣に「彼等フロイド派の連中は、彼等自身が狂氣になる迄精神病の原因を探すんだ」と云ひ、ついで「私はウイルデやニーチェは厭だ、

私は彼等を理解する事が出來ない、私は彼等は兩人共同性愛的の人であつたと聞いて居る。ウイルデは若い人達（Jungen Leuten）と交際した」と云つた。（彼女はこの文章に於て既に正しい名——勿論匈牙利語ではあつたが——を話したのであつたが、不相變求むる名を思ひ出すことが出來なかつた。）

ハウプトマンに就ては彼女に Halbe（半分）ついで Jugend（靑年）が思ひ付き、ついで私が彼女の注意を Jugend と云ふ語に導いた時、彼女は Jung なる名を探し求めてゐた事を知るに至つた。』

『三十九歳にて夫を失ひ、再び結婚し得る望みを持たないこの婦人は、勿論 Jugend（靑年）とか年齢とかを想ひ起させる事の凡ての記憶、追想から逃避すべき十分なる理由を有するのである。この例に於て、求むる名に對する隱蔽想起が純然たる内容上の聯想によるものである。類音聯想の缺如して居る事が注意に値する』

(9) 尙此處に非常にデリケートな動機に出發して居る「名の忘却」の他の一例がある。これは本人自らが分析したものである。

『私が哲學の試驗を副科目として受けた時、試驗官から Epikurs（エピクルス）の學說に就て訊ねられ、尙ほ幾世紀か後にエピクルスの學說を取り入れた學者は誰かときかれた。私は Pierr（ピエル） Gassendi（ガッサンディ）だと答へた。こ

の名は私が丁度二日前に「カフェー」でエピクルスの後繼者として呼ばれて居るのを聞いたものであつた。どうして私がそれを知つて居るかと云ふ試驗官の驚いての質問に對し、私は以前からガツサンデイに興味を感じてゐたと云ふ大膽なる答へをした。これが爲に、證書には「大なる稱讃」(Magna cum-laude)が一つ附けられる事になつた。然しながら殘念にもその後、このガツサンデイなる名を忘却する頑固なる傾向が私に出來た。私があらゆる努力を拂つても、この名を記憶し得ないのは私の惡るかつたと云ふ良心に原因するものと信ぜられるのである。私は勿論この名をその當時も知つて居る筈ではなかつたのであつた。』

この人が試驗のこの挿話の追想に對して持つ、この強い嫌厭の感を正しく評價するためには、彼が博士の學位を如何に高く評價して居るかと云ふ事、及びこの代價(學位)が如何に多數の他の事柄の代りになるものであるかと云ふ事を知らねばならない。

(10) 私は此處に或る都市名忘却の一例を挿入しよう。これは今迄擧げた例ほど單純ではないが、此種の研究に親しむ人々には信憑するに足り、又價値あるものと思はれるものである。この例では伊太利の或る都市の名が多分十分詳しく發表されてゐない多數の感情的追想に關聯して居る、或る女の名に非常に近い音を持つて居る關係上記憶されなかつたのであつた。ブダペストのフエレンチーはこの忘

却の例を自ら觀察し、この場合を夢或は神經官能症的觀念を分析すると同じやうに取扱つたのであるが、これは確かに正當なる事である。

『今日私は親しくして居る或る家庭に行つてゐた。そして北部伊太利の都市の事が話題にのぼつた。その時或人がこれらの都市は墺太利の影響を受けて居る事を認めしめると云つた。或人がこれらの都市の名の一二の名を云ひ、私も一つを擧げようと思つた。私はこの都市で二日間を非常に愉快に過した事を知つて居るに拘らず、その都市の名はどうしても思ひ付かなかつた。この事は忘却に關するフロイドの學說によく合致しない。――求めらるる都市名の代りに、次の思ひ付きがあらはれて來た。即ち Capua(カプア)――Brescia(ブレスチア)――Der Löwe von Brescia(ブレスチアの獅子)等であつた。』

『この獅子を私は大理石像の形に於て目前に見る如く、自分の前に立つて居るのを見るのであつた。然しながら私はこの獅子はブレスチアの自由記念碑の上にある獅子(私はこの記念碑は繪で見ただけであつた)と云ふよりも、寧ろ私が在 Luzern(ルチエルン) の Tuilerien(チユイルリアン) (巴里王宮の名)に戰死した瑞西衞兵の墓碑に於て見たものに似て居る事に氣がついた。そしてこの墓碑の微細畫複寫版は、私の本箱の上に立てられてあるのであつた。終に求むる名は私に思ひ付いた。それは Verona(ヴエローナ) であつたのである。』

『私は又直ぐに何人がこの忘却の原因になつたかと云ふ事をも知つた。それは私が今訪問してゐた家

庭の以前の召使の女に外ならなかつた。彼女は Verona(ヴェローナ) と云ふ名で匈牙利語では Veronika(ヴェロニカ) と云ふのであつた。彼女の醜惡なる面貌及び嗄れた金切聲及び堪へ難きあつかましさ――彼女は永い間この家に勤めてゐたのでこのあつかましさが當り前の事と思つてゐた――は非常に私の氣に觸つてゐた。尙ほ彼女がその頃この家の子供を取り扱ふ時の暴君的態度は私には堪へ切れなかつた。そこで私には補充思ひ付きが何を意味したかと云ふ事も判つたのでゐる。』

『カプアに就ては、私は直ちに Caput mortuum(髑髏)を聯想した。私はヴェロニカの頭を度々髑髏に比較して考へた、匈牙利語なる Kapzsi(カプチ)(慾深か)は、確にまたこの移動の一原因となつたのであつた。勿論私はカプアとヴェローナを地理學上の概念として、又同じリズムを有する伊太利語として互に結合せしめる一層直接的なる聯想の道をも見出すのである。』

『同樣の事がブレスチアに就ても適用される。然しながら此處にも込み入つた觀念聯合の脇道があるのである。』

『私の彼女に對する反感は當時非常にはげしいものであつて、私はヴェロニカを實際胸糞の惡い奴だと思ひ、又實際あんな女にも愛の生活があり、あんな女でも人から愛される事が出來るのかと云ふ驚きを何度か發表した事があつたのである。「彼女と接吻すれば嘔氣を催すに違ひない」と私は云ひ云ひし

た。而も彼女は確かに、疾くより戰死瑞西衞兵の觀念と關係づけらるべきものであつた。』

『ブレスチアは少なくとも匈牙利國では獅子と一緒にしては呼ばれず、屢〻他の一野獸と一緒にして呼ばれてゐて、この國で最も嫌はれて居る。名は北部伊太利に於けると同樣に Haynau（ハイナウ）將軍のそれである。これは無造作に Hyäne（ヘエーネ） von Brescia（ブレスチアの印度狼）と呼ばれて居るのである。憎まれて居る暴君ハイナウから聯想の絲はブレスチアを經てヴェローナの町に導かれ、他の聯想の絲は嗄聲の墓掘動物（Totengräbertier）ヴェロニカを呪ふ言葉の觀念――この考への絲は墓碑の考の思ひ泛ぶ事をも限定する――を經て髑髏及び私の無意識界に於てひどく罵倒されて居るヴェロニカに進むのである。この、ヴェロニカは匈牙利及び伊太利の自由戰爭の後の墺太利の將軍の樣にこの家にぢやぢやばつてゐたのであつた。』

『ルチェルンに就てはヴェロニカが主人達と一緒に近くにある湖（Vierwaldstätter See（フイアワルドステツテル））のそばで過した夏に就ての考へが聯想される。「瑞西衞兵」(Schweizer Garde)に關しては、彼女が子供等のみならず家庭の大人達を壓制し、女衞兵（Garde Dame）の役目をする事に滿足を感じてゐたと云ふ追想が關聯して居るのである。』

『私はヴェロニカに對する私の反感は――意識的には――疾くに征服された事である事を強調するも

のである。彼女はその後——彼女に好都合な事だが——彼女の外觀と態度を改めた、從つて私は彼女に對して正しい親しみを以て對する事が出來た——勿論さう云ふ機會は滅多にはなかつたが——。私の無意識界は然しながらいつもの樣に一層頑强にこれらの印象に固着した。私の無意識界は遲れ馳せであり、又物事を根に持つ性質のものであつた。』

『チュイルリー宮殿は、一層年とつた佛國婦人たる第二の人物を諷示してゐる樣に思はれる。この婦人はこの家の婦人連を多數の機會に於て實際に守護してゐた。そして大人からも子供からも尊敬され又多少恐れられてゐた。私は暫くの間佛蘭西語の會話に於て彼女の弟子（élève）になつてゐた。「ヱレーヴ」なる言葉に就ては、私が嘗てこの家の主人の義兄弟を北ボヘミアに訪ねてゐた頃、その地方の住民が同地にある林學大學の學生（élève）の事を獅子（Löwen）と綽名してゐたのを大笑ひした事を思ひ出すのである。この愉快なる追想もまた「ヘヱーネ」（印度狼）（譯者註 Hyäne には「殘忍刻薄なる女」の意味もある）よりして獅子（Löwen）への移轉に關與して居るものと思はれるのである。』

(11) 次の例もまた現在或人を支配して居る自己凝結觀念（Eigenkomplex）が隨分懸け離れた處に於て「名の忘却」を惹起する事を示すものである。

『六箇月前に Sizilien（シチリエン）（シシリー島）に一緒に旅行した老若二人の男が當時の愉快にして意義深かつ

た日の事どもを語り合つた。「Selinuntへの遠足に行く前に一泊した場所は何と云ふ處でしたでせう、Calatafimi ぢやなかつたかしら？」と若い方のが尋ねた。年とつた方のがこれを否定して「確かにさうではなかつたが、私も其處に泊つた時の事は細大洩さず記憶して居るけれども、矢張りその名を忘れました。私は他人が或名を忘れたのを見ると、直ぐにその忘却が傳染する性分です。どうでも一緒になつてその名を探して見ようぢやありませんか？ 處で私には Caltanisetta と云ふ名以外のものは思ひ泛びません、而もそれは確かに當つてゐません」と云つた。「いえ、その名はWと云ふ文字で始まつて居るか、或はその名の中にWと云ふ字が入つてゐます」と若い方が云つた。年とつた方は「伊太利語にはWと云ふ字はありませんよ」と注意した。「私も勿論Vと云ふつもりでした、私の國語で習慣になつてゐるものだからWと云つたに過ぎなかつたのです」と若い方が云つた。年とつた方はVなる字が含まれてゐたと云ふ事に反對して「私はシシリアの地名を澤山忘れてしまつたものと見えます、さあ試して見ませう、例へば昔 Enna と云つた高い場所は何と云つたつけな？ ——ああ私は思ひ出しました Castrogiovanni と云ふんです」と云つた。次の瞬間に若い方の人が又忘れられた名を見出した。彼は Castelvetrano と呼び、自分が曩に主張した様にVと云ふ字がその中に證明された事を喜んだ。老いたる方は尙ほ暫くの間は、これを知つて居ると云ふ感じがなかつた。然しながら結局この名を承

認した。後に彼は何故にこの名が彼に忘られたかと云ふ事の詳細なる説明を與へねばならなかつた。彼は考へた。『確にこの名の後半なる vetrano が Veteran（老兵）を想起せしめるからだ。私は自分の年老い行く事を考へる事を好まず、その事を考へさせられる時には奇妙な風に反應する事を知つて居る。例へば私は近頃目に立つ服装をして居る私の尊敬して居る友人に向ひ、彼が「青年時代を疾く過して仕舞つて居る」と云ふ事に就て訓誡を與へた、何故なればこの男は、以前或時私に散々お世辭を云ひ「自分は最早若い人ではない」と主張したことがあつたからである。私に於てカステルヴェトラノなる名の後半に對して抵抗があつたから、この名の初音がカルタニセツタなる補充名に還つて來た事が判ります』――「そんなら Caltanisetta なる名そのものは？」と若い方の人が尋ねた。――「それは若い女の愛稱呼として、いつも私にあらはれるものです」と年とつた方が白狀した。

『暫時の後、年とつた方が附け加へた。「Enna に對する名も勿論補充名であつたのです。そして今合理化作用によつて現れた名カストロギオヴァンニは、忘れられたる名カストロヴェトラノが「ヴェテラン」（老兵）即ち「老」と云ふ事を想起せしめると同様に Giovane――jung（若い）を想起せしむるのです」と。』

『斯くして年とつた方の人は自分の「名の忘却」の理由を説明したものと信じたのであつた。如何な

る動機からして、若い方の人が同じ缺落現象を生じたかと云ふ事は研究されずに終つた。』「名の忘却」の動機以外にその心的機制もまた吾人の興味を向けるだけの價値がある。多數の場合に於て、名はそれ自體が斯くの如き動機を呼びさますのではなく、この動機の向ふ或る他の名と同音若くは類音であると云ふ點に於て、輕く接觸する事によつて忘れられるものである。吾人は條件の斯くの如き弛緩によつて、この現象が一層容易に起る事を理解する事が出來る。卽ち次の諸例に於て然りである。

(12) Dr.（ドクトル）Hitschmann（ヒツチマン）の報告例。N.君が書店名 Gilhofer（ギルホーフエル）& Ranschburg（ランシユブルヒ）を或人に告げようとした。この書店名は平生は彼に非常に云ひ易かつたに拘らず、如何に考へてもランシュブルヒと云ふ名のみしか思ひ泛ばなかつた。この事に輕い不滿を感じた彼は家に歸り、既に外見上眠つてゐた彼の兄弟に書店名の前半を尋ねたほどに、この事が彼は重大な樣に思はれたのであつた。兄弟は躊躇せずにその名を彼に告げた。N.君には直ちにギルホーフェルに次いで Gallhof（ガルホーフ）と云ふ語が思ひついた。ガルホーフへは彼は數箇月前に彼の心目を引くや、女と一緒に想ひ出多き散策をしたのであつた。少女は彼に記念のためとて或る品物を贈つた、それには、「樂しきガルホーフ散步の時を記念して」と記されてあつた。この「名の忘却」の起る前の或日、この記念品は外見上偶然に「抽出しを急に閉づる際N.

君によつてひどく壞はされた。――この事は症候行爲の意義をよく知つてゐたN.君――につよい罪惡感を感ぜしめたのであつた。彼はその頃この婦人に對して兩極性の感情狀態にあつたのである。卽ち彼は一面この婦人を愛してはゐたが、彼女の結婚の希望に對しては躊躇の態度を持してゐたのであつた。」(Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse, I, 1913)

(13) Dr. Hanns Sachs. の報告例。「Genua（伊太利國ゼノア）及びその近郊の事を話してゐた或る青年は Pegli と云ふ場所をも云はうと欲したが、彼はこの名を非常に骨折つて考へた擧句、はじめて想ひ出す事が出來たのであつた。歸宅の途上、彼は平常非常によく知つて居るこの名の苦しかつた脫落(忘却)の事を考へた。そしてその際非常によく似た音を持つて居る Peli なる語に導かれたのであつた。彼は南海島嶼の一つがペリーと云ふのであり、其處の住民が一二の奇妙な習慣を保つて居る事を知つてゐた。彼は或る人類學の書物でこの事を讀み、その際この發表を自分の假說に利用しようと企てた。次いでペリーと云ふのは、彼が興味と愉快を以て讀んだ或る小說卽ち Laurids Bruun の Van Zanten の最も幸福なる時」の舞臺になつてゐた事が思ひ泛んだのであつた。――この日、殆ど絕間なく彼の念頭にあつた考へは、その日の朝彼が自分の大事な婦人から受取つた手紙に關聯してゐた。この手紙は彼が約束してゐた會見を拋棄せねばならなくなるかも知れぬと云ふ事を彼に氣遣はせ

たのであつた。不快なる一日を過した後、彼は夕刻もう何時迄もこの不快な考へに苦しんでゐないで彼が行く豫定になつて居り、非常に價値あるものと考へてゐた社交を、出來るだけ愉快に樂しまうと云ふ決心を以て出掛けたのであつた。ペグリと云ふ語によつて、彼のこの計畫がひどくおびやかされた理由は明かである。それはペグリとペリーとが發音の上に於て密接なる關係があつたからである。然しながらペリーと云ふ語が、彼の人類學上の興味から自己關係の意義を得るに至つた爲、この語は獨りヴァン・ツァンテンの「最も幸福なる時」のみならず、彼自身の「最も幸福なる時」從つて又彼が終日持つた不安と心配をも實體化させた事が判つたのであつた。この簡單なる說明が、婦人からの第二の手紙により、疑惑が轉じて不日逢ひ得ると云ふ嬉しい確實さに變化した後に、初めて出來た事は特異なる事と云ふべきである。」

この例によく似たネルヴィなる地名が思ひ出されなかつた實例(例(1))を思ひ合はす時、私共は一つの言葉の意味の曖昧なる事が、二つの言葉の音の類似によつて置き換へられる事を見るのである。

(14) 一九一五年伊太利との戰端が開かれた時、私は平生容易に思ひ出し得る多數の伊太利地名が、急に自分の記憶から除去された事を觀察する事が出來た。多數の他の獨逸人と同じ樣に、私は休暇の

一部を伊太利に過すことを習慣にしてゐた。そしてこの多數の「名の忘却」は、以前の贔屓に代つて起つた伊太利に對する無理のない敵愾心の表示である事は疑ひの餘地がなかつた。この直接の動機による「名の忘却」の外に、間接のものも現れ、これも同じ影響に歸すべきものであつた。私は伊太利以外の地名の忘却の傾向を示した。そしてこれらの出來事を研究するに當り、それらの地名が敵國の禁ぜられたる名と何かしら遠い音の類似によつて關聯して居る事を見出したのであつた。例へば私は或日、Bisenz なる町の名を思ひ出す事に苦心した。終にこれが自分に思ひついた時、私は直ぐにこの忘却がオルヴィエトーの palazzo Bisenzi に關係して居る事を知つた。この「パラツオー」(大厦高樓)には Hotel Belle Arti と云ふホテルがあり私はオルヴィエトーに於ける滯在には此處に泊つたのであつた。勿論最も愉快なる記憶が變化したる感情的態度の爲に最も强く障礙されたのであつた。

種々雜多なる企圖の爲に「名の忘却」なる失錯作業が起り得る事を一二の實例によつて思ひ起す事は好都合の事である。

(15) A. J. Storfer の分析例(計畫の忘却を確保する爲の名の忘却)。「バーゼル市の某婦人は、或朝ベルリン生れで彼女の幼友達であり、目下新婚旅行中であつた Selma X が旅行の歸途、バーゼルに到着したと云ふ報知を受けた。伯林の友はバーゼルには一日だけ滯在する筈になつてゐた。それでバー

ゼルの女は直ちに「ホテル」に急いで行つた。友達が別れに際し、午後に再會し、伯林の女が出立する迄一緒にゐようと約したのであつた。――午後になつてバーゼルの女は會見の事を忘れてしまつた。この忘却の原因は判らないが、この狀態（新婚の幼友達との會合）には、再度の會合を妨げる種々の定型的なる限定があり得るのである。この例に於て面白い事は、この失錯作業の無意識的安全裝置の意味を持つ第二の失錯作業にあるのである。伯林の女と再會すべき筈の時間に、バーゼルの女は或る社交上の集ひに行つてゐた。話はウィーンのオペラ歌手 Kurz（クルツ）の近頃行はれた結婚のことに及んだ。バーゼルの女はこの結婚を非難した。然しながら彼女が女歌手の名を云はうとした時に名（姓氏の前の）が思ひ出せないので大變困つた。（姓が一綴の字である場合には、名を一緒に云ふ事になつて居る事は人の知る所である）バーゼルの女はクルツ歌手の唱ふのを度々聽いた事があり、從つてこの人の全體の名は平生彼女に熟知されてゐたから、この記憶の薄弱なる事には一層苛々したのであつた。他の何人かがこの忘れられた名を云はぬ内に話頭は他に轉ぜられた。――同じ日の夕方、このバーゼル後の仲間との女は午一部分同樣なる仲間の人々と一緒になつた。偶然にも再びウィーンの歌手の結婚談が出て、彼女はこの度は難なく Selma（セルマ） Kurz（クルツ） と云ふ名を云つたのであつた。直ぐにこれに彼女の感嘆詞が續いた。「嗚呼!!　今私は思ひ出した。私は今日午後わが友セルマとの約束があつたのだ。」と。

彼女が時計を一瞥した處時計は友が既に出發した筈の時を示してゐた。(Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse, II, 1914) 私共はこの立派な實例をその凡ての關係に於て正しく評價し得るだけに十分なる用意が出來てゐないであらう。次の例はもつと簡單であつて、これでは名ではないが、外國語の一つの言葉が、その時の狀態に存する動機からして忘却されたのであつた。(私共は既に固有名名(姓氏の前の)外國語の言葉或は言葉の配置の何れに於ても、同じ過程を處理するものである事を認めるのである。)この場合に於ては、一青年が彼に望ましき、ある行爲への動機を見出すために Gold (金) に對する英語(gold……それは獨逸語の字と同じものである)を忘れたのであつた。

(16) Dr. Hanns Sachs の分析例。「或る青年が同じ下宿で自分に氣に入つた英國婦人を知つた。彼が彼女と知合ひになつた最初の晩、彼が可なりよく操り得る彼女の國語で話して居て、金と云ふ字の英語を用ゐようとした時、非常に骨折つたに拘らずこの語彙が思ひ泛ばなかつた。これに反し彼には佛語の or 羅典語の Aurum 希臘語の Chrysos 等の補充語が頑強に迫つて來た。彼はこれらの言葉が自分の求むる語との間に何等の類似點をも持つてゐない事を確かに知りながらも、これを斥けるに骨が折れたのであつた。終に彼は自分を理解せしめる爲に、婦人が手に嵌めてゐた金の指輪に觸れる外なかつた。彼は永い間かかつて探した金と云ふ字の英語は、獨逸語と同じ發音を有し gold である事

を、婦人から聞かされて恥ぢ入つたのであつた。斯くして忘却によつて起された接觸の大なる價値は、戀人によつて熱情的に用ひられる他の機會に於てのみ可能なる把握慾、若くは接觸慾の自由なる滿足にあるだけでなく、求婚の見込みを表明する事を可能にする點に大なる價値があるのである。婦人の無意識界は、これが話對手に對し益〻同情的なる態度を持して居る場合には、無邪氣の假面の背後に隱れて居る忘却の愛慾的企圖を推量するであらう。彼女が接觸を受け容れ、その接觸の動機を嘉納する有様は、男女兩方の側に無意識的ではあるが而も今始まつた巫山戯の道理を解するための非常に意義深き手段方法となるのである。

(17) 私は J. Starcke に從ひ、尙ほ一つの固有名忘却竝びにその回復の興味ある觀察を報告しよう。この觀察は名の忘却と同時に Braut von Korinth (「コリントの花嫁」) の例に於けると同様に、或詩の言葉の配置の誤りを伴つてゐたのであつた。

老法律家にして又言語學者なる Z氏は或る會合の席上に於て彼が獨逸に於ける大學生時代に一人の大學生を知つて居り、この大學生は非常に馬鹿であり、その人の馬鹿に就て彼は多數の逸話を知つて居ると云ふ事を話した。然しながら彼れはこの大學生の名を思ひ出す事が出來ず、この名が W と云ふ字で始まつてゐたと信ずると云つたが、後にはこれを取消した。彼はこの馬鹿な大學生が後に酒屋にな

つた事を思ひ出した。次いで彼はこの大學生の馬鹿な事に就ての逸話を語り、今一度その人の名を思ひ出せないを不審がり、そして「彼が何度敎へてやつても瑞典語をどうすれば彼の腦裏に染み込ませる事が出來るのか判らない程の馬鹿者であつた」と語つた。一瞬間の後にZ氏は求むる名が……Manを以て終つてゐた事を思ひ出した。其處で私共はManを以て終る他の名が思ひ泛ぶかと尋ねた處彼れはErdmanと云つた。――「それは一體何人ですか?」と尋ねた處、彼は「それは矢張り其當時の大學生でした」と彼は答へた。――彼の娘は然しながら大學教授の中にエルドマンと云ふ人があると云つた。詳しい說明をきいてみるとこのエルドマン敎授は近頃Z氏が送つた論文を短縮したる形で、自分の編輯して居る雜誌に掲載せしめ、而もそれに贊成してゐなかつた事や、それからZ氏がこの事をかなり不快に感じてゐた事が判つて來た。(尙ほ私は後になつてからZ氏が往年現在エルドマン敎授が講義して居ると同じ學科の敎授になるべき望みがあつた事、從つてこの點からもエルドマンといふ名は多分彼に癪に觸つたであらうと云ふ事を聞く事が出來た。)

この時急に彼にこの馬鹿な大學生の名が思ひ泛んだ。それはLindeman!!と云ふのであつた。彼は既にこの名がManで以て終つて居る事を前に思ひ出したのであつたからLindeは一層永く壓迫された儘になつてゐた譯である。この「リンデ」に就て、彼に何か思ひ泛ばないかと尋ねた處、最初の

間は全然何も思ひつかないと云つたのであつたがそれにしても何か思ひ泛びさうなものだが、と私が問ひつめたのに對して、彼は上方を眺め、手を以て空中に手眞似をしながら「さあ、リンデ（菩提樹）……立派な木ですね」と云つた。それ以上彼にはその際思ひ泛ばなかつた。人々は默し、各自は讀書やその他の仕事を續けたが、總に數分時の後Z氏は夢の樣の調子で次のものを引用した。

Steht er mit festen
Gefügigen knochen
Auf der Erde,
So reicht er nicht **auf,**
Nur mit der Linde
Oder der Rebe
Sich zu vergleichen

（堅くして而もしなやかなる骨もて地上に立つて居るが、彼は菩提樹若くは葡萄の樹に比肩

する事が出來ない）

私は大喜びの叫び聲を發した。「其處にヱルドマンがあらはれてゐます」「地上に立つ彼の男卽ち Erde-mann（ヱルデマン）或は Erdmann（ヱルドマン）はみづから「リンデ」（菩提樹）（Lindeman（リンデマン））或は「レーベ」（葡萄の樹）（Weinhändler 酒屋）と比較するに十分ではない。換言すればかのリンデマン……後に酒屋になつた馬鹿な大學生は旣に馬鹿者であつた、然しながらヱルドマンは尙ほ遙かに大きい馬鹿者であり、このリンデマンと尙ほ比較されない」と云ふ譯でせう」と私が云つた。――無意識界に斯くの如き嘲笑或は罵詈の言辭が保持されて居ることは通常の事である、だから「名の忘却」の主なる原因は最早見出されたものと私は思つたのであつた。

私は上に引用された行は何の詩から來て居るかと尋ねた。Z氏はそれがゲーテの詩であると云ひ、その詩は、

Edel sei der Mensch

Hilfreich und gut!

（慈仁にして善良なる人は尊し）

に始まり、尙ほその先きの方に

Und hebt er sich aufwärts,

So spielen mit ihm die Winde.

（そして彼は高く聳え立ち

風は彼に戯れ遊ぶ）

と云ふ處がある事を信ずると云つた。

次の日、私はゲーテのこの詩を探し出した。そしてこの例が最初考へたよりも一層立派な、そして又複雑なものである事が判つたのである。

(a)引用された初めの方の行は次の樣になつて居る。（上記のものと比較せよ。）

Steht er mit festen

Markigen knochen

（彼は堅くして強き骨

を以て立つて居る……）

だからして Gefügige knochen（しなやかなる骨）は可なり異樣な聯結である。然しながら、これに就ては私は深く立ち入らうとは思はない。

(b)この段の次の行は左記の樣になつて居る。

Auf der wohlbegründeten
Dauernden Erde,
Reicht er nicht auf,
Nur mit der Eiche
Oder der Rebe
Sich zu vergleichen.

（彼は型く强き骨もて
能くかためられ、永久に變らぬ
地上に立てども
唯だ槲の木或は葡萄の木
に比するに足らず）

即ち金詩の中に Linde（菩提樹）と云ふ字は全然出てゐないのである!! Eiche（槲）を Linde（菩提樹）を以て置き換へたのは Erde ――Linde――Rebe（土地――菩提樹――葡萄）なる言葉の洒落

（ひつかけ言葉）を可能にする爲に（彼の無意識界に）起つたに過ぎないのである。

(c)この詩は ,Grenzen der Menschheit‘（人性の限界）と云つて、神の萬能と人間の微力との對照を含んで居るものである。最初の處が、

Edel sei der Mensch,

Hilfreich und gut!

となつて居る詩は、二三頁先の處にある外の詩である。この詩は ,Das Göttliche‘（神性）と云ふのであり、矢張り神と人間に就ての考へを含んで居るものである。この點に關しては深く立ち入つて研究した譯ではなかつたから、私は矢張り「生と死」「現生涯と永劫」及び「自分の弱い生命と將來の死」に關する考へが、この例の成立に際して一定の役を演じたと云ふ事を高々推察し得るに過ぎない。*

* この例は De invloed van ons onbewuste in ons dagelijksche leven (Amsterdam 1916) なる標題の下に出て居る。本書の和蘭版から取られたものである。獨逸語では (Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse VI, 1916, S. 43.) に印刷されて居る。

是等の諸例中或るものに於ては「名の忘却」を說明するために微妙纎細なる、あらゆる精神分析上の技術が必要とせられるのである。斯くの如き研究についてより多く知りたいと希望する人には、私

はE. Jones（ロンドン）の報告を紹介する。この報告は英文から獨文に飜譯されたものである。（精神分析學中央雜誌第二卷（一九一一年）所載「名の忘却の一例に於ける精神分析」）。

(18) Ferenczi は「名の忘却」は又「ヒステリー」症狀として來得ると云つて居る。この場合には、失錯作業の心的機制より遙かに懸け離れた機制があらはれるのである。兩者の區別が如何に考へらるべきであるかは彼の云ふ處によつて明かにされるであらう。

『私は今「オールドミス」なる一婦人患者を治療中である。この患者は外の事に對しては記憶力が良好であるに拘らず、彼女が始終用ひて居り從つて熟知して居る固有名が思ひ泛ばないのである。分析の結果は、彼女がこの症狀によつて自分の無智を證據立てようとして居る事が判つたのである。彼女のこの無知の示威的表明は、元來彼女に高等教育を授けなかつた彼女の兩親に對する非難に外ならない事が明かである。尙ほ淸潔法への苦しい强迫(「主婦の精神病」)もまた一定度迄同じ源泉から來て居るのである。卽ち彼女は大體斯う云はうとして居るのである。「あなた等（兩親）は私を女中に仕立てたのだ」と。』

私は後に出て來る多數の題目に向つて問題になる凡ての觀點を、この第一の題目の處で說明する事を避けるつもりになれば「名の忘却」の實例を增し、それに就ての論議をもつと續けて行く事は出來

るのであるが、私はさうしないで此處に述べた分析の結果を二三の文章に總括しようと思ふ。「名の忘却」(名の一時の忘却（Entfallen）と云つた方がよい）の心的機制は不明であり、その瞬間には意識的でない觀念列によつて名の故意の再生が妨げられる事に存するのである。障礙されたる名と障礙する凝結觀念との間には最初から關係がある事があり、或はこの關係は時には人工的に見える道程を辿つて、表面的なる外聯合によつてつくられるものである。

障礙のもとになる凝結觀念の中では、自己關係（Eigenbeziehung）(個人的、家族的、職業的)が最も有効なるものである。

多義のために二三の觀念圏（凝結觀念）に屬する名は、一つの觀念列と關係（聯絡）しようとする際に、他のより强力なる凝結觀念への關係のために障礙される事屢〻である。

これらの障礙の動機の內で追想によつて呼び起される不快感を避けようと云ふ企圖が明かにあらはれる。

私共は大體に於て「名の忘却」の二つの主なる場合を區別する事が出來る。即ち名そのものが不快なる事を動かす場合か、或は名が不快なる事を動かす作用を有する他の事に關係づけられる場合である。從つて名はそれ自身のため、或はその遠近種々なる聯想關係のために再生を妨げられる事になる

のである。

これらの一般的なる文章を通觀するならば、私共の失錯作業の中で「名の一時の忘却」は最も屢々見られるものである事を理解する事が出來る。

(19) 然しながら私共はこれを以て、この現象の凡ての特徴を書き盡したものとは到底云へないのである。私は尙ほ「名の忘却」は非常に傳染性のものである事を指示したいのである。對話して居る二人の中一方の人が或名を忘れたと云つただけで、この名を第二の人にも忘れさせるに十分である。然しながら忘却が感應によつて起つた場合には、忘れられた名が再現する事も容易なものである。嚴密に云へば集團心理學上の現象に屬するこの集合性忘却(Kollektive Vergessen)は、未だ精神分析的研究の對象にはなつてゐないのである。唯一の然しながら特に優秀なる實例に於て Th. Reik(テオドル・ライク) はこの注意に値する出來事の良き說明を與へる事が出來た。*

* Über kollektives Vergessen. Internat. Zeitschrift. für Psychoanalyse, VI, 1920. (Auch in Reik, Der eigene und der fremde Gott, 1923.)

『哲學科の女大學生二名を混へた大學卒業者の小さい集ひに於て、或人が基督敎の起源が文化史竝びに宗敎科學に課する多數の問題に就て發言した。この話に加つてゐた婦人の一人は、近頃讀んだ英語

の小說中に、當時を動かした多數の宗教運動の興味ある光景が書いてあつた事を思ひ出した。彼女はこの小說には基督の全生涯が、出產の時から死ぬ時迄叙述されてあつたと附け加へた。然し彼女に小說の名は思ひ泛ばなかつた。(この書の裝幀及び標題の印刷像に對する視的追想は、非常に明瞭であつた。)座にゐた男子の內の三人も、この小說を知つて居ると主張した。而も不思議にも彼等にもこの名は思ひ出せないと云つた。』

この若い婦人のみがこの「名の忘却」を說明するための分析を受けた。この書の標題は Ben Hur (Lewis Wallace 著)と云ふのであつた。彼女の補充の思ひ付きは Ecce homo——homo sum——quo vadis?(見よ! まあ何と云ふ人間だらう!——予は人間なり——何處へ行く(聖ペテロの語)等であつた。この少女は「この名が彼女及び凡ての若い女が——若い男の居る處では尙さら——用ふる事を欲しない言葉(譯者註 Hur は亞剌比亞語であつてこれから來て居る Huris=Huldinmem は美、愛嬌、歡樂を司る三女神を云ふ。又 Hure=娼婦は多分同じ語源から來て居るものと思はれる)を含んで居るために」忘れたのである事を自ら理解してゐた。この說明は、非常に興味ある分析によつて一層深められたのであつた。一度觸れられたる(卽ち上に述べられたる)關係に於ては homo と云ふ字の飜譯なる Mensch(人間)も不名譽なる意味を有するのである。そこで Reik は次の如く推論したの

である。この若い女はかの如何はしい標題を若い男達の前で話す事が彼女の人格にふさはしからず、且つ苦痛な事として拒否したる希望を、自分が持つて居る事を自白する事にでもなるかの如くにこの言葉を取扱つたのである。簡言すれば無意識的には彼女は Ben Hur の發言を、性的提供と同一視したのであり、從つて彼女の忘却はこの種の無意識的誘惑に對する防衛機轉に相當するのである。私共はこれに類似の無意識的過程が。若い男達の忘却の原因となつたものと假定すべき理由を持つて居るのである。彼等の無意識精神は、少女の忘却をその眞の意味に於て理解し、これを……謂はば分析したのである……男達の忘却は、斯くの如き拒否する女の態度に對する顧慮をあらはして居るのである……男達は話し相手の女が突然に示した記憶薄弱によつて、男達が無意識的によく理解し得る合圖を與へられた事になるのである。

又連續性の「名の忘却」なるものもある。この場合には一聯の名が記憶から除去されるのである。或る一つの忘れられたる名を見出さうとして、この名と密接なる關係ある名を素早く引換へようとするとこの我々の手がかりとして新しく探される名も逃げ去る事は稀ではないのである。かくして忘却は容易に除き得ない障礙の存在を證明するかの樣に一つの事より他の事に飛火して行くのである。

第四章　幼兒期記憶及び隱蔽記憶

一八九九年精神病學神經病學月刊雜誌に發表されたる第二論說に於て私は、意外なる領域に於て私共の記憶（追想）が偏頗であり、故意によつてなされる性狀ある事を證明し得た。私は或人の幼兒期記憶が、屢ゝどうでもよい緊要でない事がらを保存し、而も重要にして印象深く感情に滿ちたる印象は屢ゝ――いつもの事でない事は確かである――成人の記憶に少しの痕跡をも殘してゐないと云ふ著しい事實から出發した。記憶は與へられたる印象の內で選擇をするものであると云ふ事は既知の事實であるから、この場合私共は兒童期に於けるこの選擇は知的成熟の後とは全然別の原則に從つて起るのではないかと云ふ假定に直面して居るのではないかと云ふ氣がするのである。然しながら詳細なる研究は、この假定が不必要な餘計な事である事を證明する。重要ならざる幼兒期記憶は移動過程によつて存在するのであり、彼等は他の實際に重要なる印象再生の代理形成であり、この印象の追想は精神分析によつて彼等幼兒期記憶よりして發現せしむる事が出來るのであるが、この印象の直接の再生は抵抗によつて妨げられて居ることを明かにしたのである。彼等幼兒期記憶は彼等の存在を彼等自己の

內容からではなく、彼等の內容の他の壓迫されたる觀念への聯想的關係に負ふのである。從つて彼等は余の命名による隱蔽記憶（Deckerinnerungen）なる名稱を受くるに値する譯である。

上記の論文では私は隱蔽記憶の關係や意義の多種多様なる點に輕く觸れただけであつて、決して委曲を盡さなかつたのであつた。當時詳細に分析されたる實例に於て、私は隱蔽記憶とこれに隱蔽される內容との時間的關係の詳細を取り立て論じたのであつた。卽ちこの實例では隱蔽記憶の內容は小兒期初年の或年に屬し、而も隱蔽記憶によつて代表され、殆ど無意識狀態にある觀念經驗は、當人の後年期に屬するのであつた。私はこの種の移動を遡及性或は逆行性隱蔽記憶（rückgreifende oder rückläufige Deckerinnerungen）と名づけた。私共は多分この種の場合よりも屢〻反對の關係に遭遇するであらう。卽ち最近の重要ならざる印象が隱蔽記憶として記憶に存續して居り、この印象は直接の再生に對して抵抗ある以前の經驗との聯想によつて、はじめて記憶に取り立てられるのである。これは先取性或は進行性隱蔽記憶（vorgreifende oder vorgeschobene Deckerinnerungen）である。この場合には記憶に干與する主なるものは、時の關係に於て隱蔽記憶の彼方にあるのである。最後に第三の可能なる場合、卽ち隱蔽記憶が單に內容上のみならず、又時の連續關係に於て隱蔽記憶によつて隱蔽されて居る印象とむすび付いて居る場合も起つて來る譯である。之は同時性或は接續性隱蔽記憶

(gleichzeitige oder anstossende Deckerinnerungen) である。

私共の記憶の如何程大なる部分が隱蔽記憶の範疇に屬するかと云ふ事、及び隱蔽記憶が種々なる神經官能症性考慮過程に於て如何なる役目をなすかと云ふ事は、私は當時深く立ち入つて評價しなかつたが此處でも又それはしないでおかうと思ふ。唯記憶の誤りを伴ふ「固有名の忘却」と隱蔽記憶の形成とが同種のものである事を强調する事は必要である。

一寸見ると、兩方の現象の相違點は類似點よりも遙かに顯著である。前者は固有名に關する事であり、後者は現實或は思考の上に於て經驗された纒りたる印象である。前者は記憶の官能の明かなる失敗であり、後者は私共に奇妙に見える記憶作業である。前者は一時的の障礙であり、今忘れられた名は以前には百度も正しく再生された事であり、又明日からも同樣であり得るのであるが、後者は缺損のない永續的の所有物である。何となれば重要ならざる小兒期の記憶は、我々の生涯の永い部分を通じて我々に伴ひ得るからである。我々の科學的好奇心を刺戟するものは前者に於ては忘却であり、後者に於ては保存されて居る事である。處で少し深く觀察すると、私共は心的材料及び兩方の現象の持續時間は違つて居るけれども、一致點は遙かに多いのを認めるのである。前者も後者も共に追想の誤りであり、正しく再生さるべき筈のものが記憶によつて再生されず、その補充として他の何かが再生

されるのである。「名の忘却」の場合にも補充名の形に於ける記憶の作用はあるのであり、隱蔽記憶形成は他の重要なる印象の忘却に基くのである。兩方の場合に於て知的感覺は、或る障礙の干渉が其處にある事を私共に報ずるのである。ただそれが各〻の場合に別な形にあらはれるのである。卽ち「名の忘却」の場合には私共は補充名が本當の名でない事を知り、隱蔽記憶では私共はこの記憶を持つて居る事を不思議に思ふのである。從つて精神分析の結果、兩方の場合に於ける代理形成が同じく表面的聯想に依る移動機制によつて起る事が證明されるならば、材料、持續時間及び兩方の現象の覘ひ處の異なる事は、私共が或る重要にして普遍的價値ある事を發見したと云ふ期待を一層强くする事に役立つものと云つてよいのである。この普遍的の事と云ふのは再生作用の休止及び誤謬は、私共の想像以上に屢〻或る一方の記憶を促す。反對に他の一方の記憶を邪魔する事に努力して居る偏頗なる要素或は傾向の干涉によつて起るものであると云ふ事である。

小兒期記憶の問題は非常に重要であり興味深いものと思はれるから在來の觀點以上に出づる尙ほ一二の論評を加へようと思ふ。

一體記憶は小兒期のどれ程早い時期迄達し得るものであらうか？　私はこの問題に關しての一二の研究を知つて居る。例へば V. et C. Henri*（アンリ） 及び Potwin**（ポートウイン） 等のそれである。これらの研究の結果は、

被研究者によつて大なる個人的差異があり、或人は彼等の最初の記憶を生後第六箇月目に持つて行き他の人は滿六歳どころか滿八歳迄の彼等の生活に就ては何も知らないと云ふ事になつて居る。然しながら小兒期追想の狀態に於けるこの差異は何に關係するか、又この差異に如何なる意義を歸すべきであるか。この問題に向つての材料を集團尋問によつて得る事は明かに不十分であつて、被尋問者も一緖になつてこの材料を更らに研究する事が必要である。

(*) Erquête sur les Premiers Souvenirs de l'enfance. L'année psychologique, III, 1897.

(**) Study of early memories. Psycholog. Review, 1901.

私共は幼兒期記憶缺損(infantilen Amnesie)即ち私共の生活の初年に向つての記憶の缺損の事實を餘りに冷淡に考へ、これをば奇妙なる謎と考へる事を怠つて居ると私は考へる。私共は四歳位の子供が非常に高い知的作業、非常に複雜なる感情の動きを經驗し得る事を忘れて居る。而も後年の記憶はこれらの心的過程を殆ど全く保存してゐない事を實際不思議な事と思はなくてはならぬ筈である。特にこれらの忘れられたる小兒期作業は、本人の發達に際して跡形もなく消失するものではなく、その後の生活に向つて一定の影響を及ぼすものと假定すべき凡ての理由があるに於ておやである。かく非常に有効なるものであるに拘らず彼等は忘却されるのである。この事實は私共が今迄認識し得なかつた

意識的再生の意味に於ける記憶の特別なる條件が此處にある事を指示するものである。この小兒期の忘却は私共の新しい認識により、凡ての神經官能症性症狀の形成の根柢をなす記憶缺損（Amnesie）の理解の鍵を私共に與ふる可能性が大いにあるのである。

保存されて居る小兒期記憶の內一二のものは私共によく理解されるけれども、他のものは奇妙な或は理解の出來ないものとしてあらはれる。兩方の種類の記憶に就て一二の誤謬を訂正する事は困難な事ではない。或人が保存して居る記憶を分析的に調査して見ると、私共はそれが正しいと云ふ保證を與へ得ないものである事を容易に決定する事が出來るのである。追想像の或るものは、確かに間違つて居り、或は不完全であり、或は時間的空間的に移動されて居る。最初の記憶が大體二歲位から來て居ると云ふ樣な被研究者の陳述は、明かに當てにはならないのである。間もなくその經驗の歪み及び移動を理解せしむる動機を見出す事が出來、又この動機は單純なる記憶の不正確がこの記憶の誤りの原因ではあり得ない事をも明かにするのである。後の生活時期よりの强い力が、小兒期經驗の記憶能力に形を與へたのであつて、この同じ力が多分私共を一般に私共の小兒期の理解から非常に遠ざけるやうにしたのである。

大人の追想は種々の心的材料に於て起る事は人の知る處である。或人は視像に於て追想する、即ち

彼等の追想は視的特徴を有するのである。他の人々は自ら經驗した事の非常に不完全なる輪郭さへも記憶に再生する事が出來ないのである。私共は斯くの如き人を Charcot(シャルコー) の提議に從ひ、視官性の人(Visuels)に對立せしめて聽官性(Auditifs)及び運動性(Moteurs)の人と稱するのである。夢を見る際にはこの區別はなくなり、私共は凡て主として視像に於て夢みるのである。小兒期追想に於てもこの發達はなくなり、後年の記憶が視的要素を缺く人々に於ても小兒期の記憶はくつきりした視的追想像として現れるものである。即ち視的追想は幼兒性追想の型(タイプ)を保存するものである。私に於ては早期の小兒期記憶が唯一の視的特徴を有する記憶である。これは正に實物の如く造り上げられた光景であつて舞臺に於ける實演にのみ比すべきものである。これら小兒時代の光景に於てはこれがほんたうのもの、或は間違つて居るものである事が判る場合であつても、いつも自分の子供の時の姿がその輪郭と當時の服裝に於て見出される。これは不思議に思はれる事である。視官性の大人は彼等の後年の*經驗の追想に於て、最早彼等自身の像を見ないのである。小兒の注意が、彼の經驗に際して外的印象に向けられず、專ら彼自らに向けられると云ふ事を假定する事は、私共の凡ての經驗に一致しない事である。私共は所謂最も早期の小兒期追想は、實際の記憶の痕跡(Erinnerungsspur)ではなく、多數のその後の心的作用の影響を受けて改作されたものと考へらるる記憶の痕跡を保有するものである

と云ふ假定を餘儀なくされるのである。個體の小兒期追想は斯くして一般的に隱蔽記憶の意義を得るやうになり、これによつて傳說や神話に記載されて居る各種族の小兒期記憶との間の著しき類似を獲得するやうになるのである。

精神分析法によつて一定數の人々の精神を研究した事のある人は、その研究に際し各種の隱蔽記憶の多數の實例を蒐集した。然しながらこれらの例を報告する事は、前述小兒期記憶と後の生活との關係によつて非常に困難にされるのである。小兒期記憶に隱蔽記憶の價値を得せしめる爲には、屢々その本人の全生活史を描寫せねばならぬ事がある。次の立派な實例に於ける如く、箇々の小兒期記憶をその關係から拔出して發表し得る場合は非常に稀である。

＊私は私の集めた一二の問診の結果に依ってこの事を主張するのである。

二十四歲になる或男は、彼の五歲の時から次の像を保存した。彼は或る夏別莊の庭で叔母のそばに小椅子に腰掛けて居り、叔母は彼に文字を敎へようと骨折つてゐた。m と n との區別が彼に難しくて兩者を何處で見別けるかと云ふ事を敎へて吳と彼れは叔母に乞うた。叔母は m は n よりも一片だけ、卽ち第三の線だけ多いのだと注意したと云ふのである――この小兒期記憶の確實性には疑ひの餘地はないのである。然しながらこの小兒期記憶は、後にそれがこの男の子の他の知識欲に對する

象徴的代理の役をなすに適當になつたときに、初めてその意義を得るに至つたのであつた。何故なら彼れが當時 m と n との區別を知りたかつたと同樣に、彼は後に男兒と女兒との區別を知りたいと骨折つた。そして又この叔母が彼の教師になる事に同意してゐたらしい。ついで彼は又區別は似てゐて、男兒は女兒よりも矢張り一つの物だけ餘計に持つて居る事を見出した。而してこの認識の際に、彼はこれに一致する小兒の知識欲に就ての記憶を呼び起したのであつた。

今少し後の兒童期よりの實例をあげよう。現在四十歳以上になつて居り、愛の生活に於てひどく制止されて居る男は九人の同胞の最年長者であつた。一番末の妹が生れた時、彼は十五歳であつたのである。然しながら彼は母の姙娠して居る處を一度も見た事がないと主張した。私はそんな事は信ぜられないと云つた處、彼に次の如き記憶が泛んで來た。十一歳か十二歳の年、或時彼は母が鏡の前で、急いで上衣を脱ぐ處を見たと云ふのであつた。ついで彼は進んで母が街路から家に入つて來て、不意に陣痛に襲はれたのであつたと云ふ事を附け加へた。上衣の紐を解く(Aufbinden)は然しながら出産(Entbindung)に對する隱蔽記憶である。この場合の如く言葉の橋渡し(Wortbrücken)を用ふる事は他の例に於ても私共は遭遇するであらう。

唯一つの例に於て何等の意味もない樣に思はれた小兒期記憶が、分析的研究によつて如何なる意義

を得るやうになるかと云ふ事を示さうと思ふ。私が四十三歳の時、私の興味を私の小兒期の記憶に向け始めた時、その前から永い間に時々意識に上つて來た樣に思はれ、且つ適當なる特徴によつて滿三歳以前に起つた事と思はれる光景が泛んで來た。私はせがみながら號泣しつつ一つの箱の前に立つて居る自分を見出した。この箱の扉を私の二十歳年上の異父母の兄が開いた儘持つてゐた、其處へ急に美しいすらりとした私の母が街路から歸つて來たやうな樣子で室に入つて來たと云ふのである。これらの言葉で私はありありと見えた光景を云ひあらはしたのであるが、この光景にはその外に何等の手がかりもなかつた。私の兄がこの箱――この光景の最初の說明の時には、これは戶棚(Schrank)と云ふ事になつてゐた――を開かうとしてゐたのか、それとも閉ぢようとしてゐたのか、又何故私が泣いたのか、母の來た事がこれと如何なる關係があるのか、そんな事は全然判らなかつた。私はこれは兄が私をからかつてゐて、それが母によつて止められた所の記憶であると說明しようとした。記憶に保存されて居る子供時代の場面に就ての斯くの如き誤解は珍しい事ではない。私共は或る一つの狀態を想ひ起すがこの狀態は中心點を定められてゐない。私共は一つの狀態の何の要素に心的重點をおいていいかわからないのである。處で分析的努力はこの像の意外なる說明に私を導いたのである。私は母の不在に氣がつき、彼女が戶棚か或は箱の中に閉ぢ込められて居るのではないかと云ふ疑を起し、その爲

に兄に箱をあけて呉れとせがんだのであつた。兄が私の頼みを容れ、私は母が箱の中にゐない事が判つてから泣き出したのであつた。これは私の記憶に固執されて居る要素であつて、其後間もなく母が現れ私の心配と憧憬とは靜められたのであつた。然しながら何故子供が不在の母を箱の中に探さうと云ふ觀念を抱くやうになつたのであらうか？　同じ時に見た夢はぼんやりながらも一家庭女教師を指示した。この女教師に就ては尙ほ他の記憶も保存されてゐた。例へば彼女が愼しみ深く私が人から貰つた小さな貨幣を彼女に渡す事を常に奬勵してやらせた事などあつて、この細目は後に起る事に對する隱蔽記憶の價値を要求するものである。其處で私はこの場合分析作業を容易にしようと思ひ、今では年老ひたる母にかの保姆の事を尋ねた。私は色々の事を知つた。その中には、をかしかつたが不正直なこの人物は母の產褥の間に大泥坊を働き、異父母の兄の煽動によつて訴へられたと云ふ事もあつた。この話は恰も光明に照らされた樣に私の子供の時の光景を理解させた。保姆が不在になつた事は私には大事件であつた。私はこの兄が多分彼女のいなくなる際に、一定の役割を演じた事を知り兄に向つて彼女が何處に居るかと尋ねた。そして彼は不得要領に、又いつもの樣に酒落的に「彼女は箱の中に入れられて居るのだ」(eingekastelt) と答へた。この答を私は子供らしく解した。然しながらそれ以上何も判らなかつたので問ふ事を止めた。その後間もなく母が不在になつた時に私はこの

意地惡い兄が、母を保姆と同じやうな目には遭せたのではないかと邪推し、彼に箱を開けさせた事があつた。私は今又何故に小兒期視像の說明に際して母のほつそりして居る事が强調されたかと云ふ事も理解する事が出來るのである。この母のほつそりして居る事は新しく起つた事實として目立つ事に違ひなかつたのである。私はその時に生れた妹よりも二年半だけ年長であつた。そして私が滿三歲になつた時に、異父母の兄と私との同居は終りを告げたのであつた。*

* 「この小兒期の精神生活に興味を持つ人は、この大きい兄に課せられた要求の一層深い限定を容易に覺るであらう。まだ三歲にもならない子供は、最近に生れた妹が母の胎內に出來た事を理解した。彼はこの家庭の人數の增加には全然不同意であり、母のお腹がまだ外にも子供を持つて居るかも知れぬと云ふことを心配した。彼にとつては戶棚 (Schrank) 箱 (Kasten) は母胎の象徵である。從つて彼はこの箱の中を見たいと要求し、これを大きい兄に賴んだのである。他の材料からも判つた事であるが、この兄は父の代理者として小さい子供の競爭者になつて居るのであつた。この兄に對しては彼がゐなくなつた保姆を「箱の中に入れさせた」と云ふ根據ある疑ひの外に、他の疑惑、卽ち彼が最近に生れた子供を母の胎內にそつと忍び込ませたのではないかと云ふ疑惑が向つて居るのである。箱を開いて見て、それが空虛である事がわかる時の失望の感情は、子供らしい要求の表面的動機から出發して居る。深い動機に對しては、この感情は見當違ひの處に

立つて居るのである。これに反して外から歸つて來た母のほつそりして居る事に就ての非常なる滿足は、この深層にある動機からしてはじめて、完全に理解されるものである。」

第五章　話し損ひ

國語に於ける私共の談話の常用材料は「忘却」と云ふ事からは保護されて居る觀があるが、その代りにその使用は「話し損ひ」(Das Versprechen) として知られて居る、別の障礙を非常に屢々受ける。正常人に見らるるこの「話し損ひ」は、病的條件の下に起つて來る所謂不全失語症 (Paraphasien)の前楷梯であるかの印象を與へるのである。外の場合とはちがつて、私はこの場合除外例的に既に發表し損つて居る一研究を批評し得る立場に居るのである。一八九五年 Meringer 及び C. Mayer は「話しされ及び呼び損ひ」に就て一研究を發表したがその觀點は私のそれとは相距る事遠いものである。本文の代表者たる著者の一人は言語研究者であり、人が話し損ひをする場合の原則を見出さうとする言語學上の興味から、この研究をする事になつたのである。彼はこの原則よりして『一つの言葉、一つの文章の音及び言葉そのものが、互ひに非常に特有なる有様に於て結合され連結される場合の一定の心的機制』の存在を推し得ん事を望んだのである。

著者等は彼等の蒐集したる「話し損ひ」の例を、先づ純叙述的觀點よりして次の様に分類した。

置換（Vertauschungen）

例　Venus von Milo の代りに die Milo von Venus とするが如きもの、

先響或は先發（Vorklänge od. Antizipationen）

例　es war mir auf der Schwest……auf der Brust so schwer）

餘響或は後置（Nachklänge od. Postpositionen）

例　Ich fordere Sie auf, auf das Wohl unseres Chefs aufzustossen（anzustossen の代りに）

汚染（Kontaminationen）

例　Er setzt sich einen Kopf auf 及び Er stellt sich auf die Hinterbeine の二文よりして Er stellt sich auf den Hinterkopf が造られ話さるる如き場合。

代用或は代理（Substitutionen）

例　Ich gebe die Präparate in den Briefkasten（Brütkasten の代りに）

以上の主なる種類に尚ほ一二の餘り重要ではない（或は私共の目的に向つては意義のより少ない）範疇が追加されて居る。この分類においては置換（Umstellung）歪み（變形）（Entstellung）融合（Verschmelzung）等が言葉の一つ一つの音綴、或は話さうと企てられた文章の凡ての言葉に關して起

つてもそこに何等の區別を立てないのである。

觀察された種々の「話し損ひ」を說明するためにメーリンゲルは語音の心的價値の差を考へた。私共が一語の第一音、一文の最初の語に神經刺戟の分布(Innerviation)を與へると興奮過程は後の音や語に向つて起つて行くものである。從つて一つ以上の神經刺戟の分布が同時に起る場合にはこれらはお互ひに變化を起させる樣に働くのである。心的に他のものよりも强い語音の興奮は先響或は餘響を生じ、弱い或は價値の低い神經刺戟分布過程を障礙するのである。其處で何れが一つの言葉の最も價値高き音であるかと云ふ事を決定する事が必要になつて來る譯である。メーリンゲルは次の如く考へたのである「一つの語の何れの音が最大の强度を有するかを知らうとするには、或る忘れられた言葉例へば或る名を探す場合に於ける自分を觀察して見よ、最初に意識に歸つて來るものは兎にも角にも忘れられる前に最大の强度を持つてゐた事になる。價値高き音は即ち根綴(Wurzelsilbe)の初音(Anlaut)及び言葉の初音(Wortanlaut)及び一方或は他の語勢の强められた母音である」と。(百六十二頁)

私は此處で反對せずには居られないのである。名の初音が言葉の最も價値高き要素に屬するかどうかは、兎も角、これが言葉の忘却の場合に、最初に意識に再現すると云ふ事は確かに當らない。從つてこの原則は用ふる事が出來ないのである。忘れた名を探す場合の事を自ら考へて見ると、私共はそ

の名が或る一定の字で始まつて居ると云ふ確信を、比較的屢〻發表する樣に強ひられる。然しながらこの確信には根據のない場合とある場合とが同じ位屢〻起つて來るのである。それ處か私は大多數の場合誤つた初音が再生されるものと主張したいのである。Signorelli の例に於ても補充名には初音が失はれて居り、又主なる綴は失はれたのである。却つて價値少ない一對の綴なる elli が Botticelli と云ふ補充名に歸つて來て居るのである。補充名が忘れられた名の初音を顧慮する事の非常に少ない事は次の例でもわかるのである。或時私に首都 Monte Carlo とする小さい國の名が思ひ出せなかつた。これに對する補充名は次のものであつた。

Piemont, Albanien, Montevideo, Colico.

間もなくアルバニエンの代りに Montenegro が現れ、それから Mont (Mon と發音する) なる綴りが最後のコリコ以外の凡ての補充名に屬して居る事が私に目立つて來た。斯くして Albert 侯の名からして忘れられた Monaco を見出す事が私に容易にされたのであつた。Colico は忘れられた名の綴順及び韻律を模倣して居るのである。

「名の忘却」に向つて證明されたと類似の心的機制が「話し損ひ」の現象にも關係するものと假定するならば、私共は「話し損ひ」の場合に對しても一層深い根柢を有する判斷に到達するであらう。「話

し損ひ」として現れ來る話の障礙は、第一にはその話の中にある他の要素の影響即ち先響、或は餘響或は私共が話さうと思つて居る文章、或はその前後の關係の中にある第二の意味であつて私共が話さうと欲する事とはちがつて居るものの影響によつて起されるのである。――上記メーリンゲル及びマイエルから引用された實例は、凡てこれに屬する――第二には然しながこの障礙は Signorelli の場合に於ける過程と同じやうに、言葉、文章或はその前後關係以外にあり、私共が話さうと企てない要素からの影響によつて起り、この要素の興奮に就ては私共は正にこの障礙そのものから知る事になるのである――兩方の種類の「話し損ひ」の生成の有様に於て、共通なる點は興奮が同時に起る事にあり、差異點は障礙のもとになる要素の位置の差、即ちそれが文章或はその前後關係の中にあるか外にあるかにあるのである。兩者の差異は「話し損ひ」の症候學から得られる一定の推論だけから云へばあまり大きくないやうである。然しながら前者の場合即ち文章或はその前後關係の内部にある要素によつて起る場合に於てのみ「話し損ひ」の現象からして發音の相互の影響によつて音や言葉を聯結する機制を推論し、依つて以て言語學者が「話し損ひ」の研究からして引出さうとした結論をなし得る望みがある事は明かである。當該文章或はその前後關係の外部に存する影響に依つて起る「話し損ひ」の場合には障礙のもとになる要素を知る事がとりわけ問題になる譯である。そしてこの場合には又この

障礙の機制が言語形成の法則を我々に暗示して呉れるやうな事がありはしないかと云ふ問題が起つて來るであらう。

私共はメーリンゲル及びマイエルが「複雜なる心的影響」による言語障礙の可能性即ち言葉、文章或は話の連續の外部にある要素に依て言語障礙の起り得る事を看過したものと主張してはならない。彼等の云ふ音の心的價値の不同の學說は、嚴密に云へば發音障礙の說明及び先響餘響の說明にのみ十分である事を認めなければならなかつたのである。言葉の障礙が音の障礙に還元され得ない場合、例へば言葉の代用及び汚染等の場合に於ては、彼等も躊躇せずに「話し損ひ」の原因を話さうと企てられた る關係以外に求め、此事を立派なる實例によつて證明して居るのである。私は次の箇所を引用しよう、(六十二頁)『Ru. と云ふ人は彼の心の中では尾籠な話 (Schweinereien) だと考へる事柄に就て物語つてゐた。然しながら彼は稍々穩當な形 (云ひ表し方) を探してそして話しはじめた。

Dann aber sind Tatsachen zum Vorschwein gekommen……と彼は云つたのであつた。マイエルと私とは其の場に居合はせた。そして Ru. は Schweinerien を考へた事を確言した。この考へられた言葉が本來ならば Vorschein なる語があらはれるべき筈の處に現れ、突然有効になつた事は言葉の類似と云ふ事で十分に說明される。』(譯者註、Dann……zum Vorschein gekommen…… ついで

その事實があらはれた……。)

（七十三頁）『代用の場合に於ても汚染の場合と同樣に、或は多分一層著しく浮動性或は浮浪性の言語像が大なる役目を演ずる。これらは意識の域下ではあるが、それでも有効なる近さに存し容易に話される觀念群の類似によつて引き寄せられ、以て脫線を惹起し、或は言葉の進行を妨害するこの「浮動性」或は「浮浪性」言語像は既に述べたる如く、直前に起つた言語過程の落伍者である事屢々である。(餘響)』

（九十七頁）『脫線は――若しも類似の言葉が話される運命を持たないで、而も識域下で近くにある場合には――又類似によつても可能である。これは代用の場合にさうである。――そこで私は他人がこの事を追試される場合には私のこの、法則を確かにして呉れる事を希望する。然しながらさうするには、その人は他人が話す時にその話し手が考へた凡ての事を明かにする事が必要である。此處に面白い例がある。「クラス」の長なる Li. と云ふ人が、私共と一緒にゐた時に Die Frau würde mir Furcht einlagen と云つた。私は吃驚した。l が理解出來なかつたからである。私はその人に einlagen は einjagen の誤まりではないかと云つた。（譯者註 Die Frau würde mir Furcht einjagen ＝その婦人は私を恐れさせるであらう）處が彼は直ぐに自分が ich wäre nicht in der Lage（＝私は……が出

來ないであらう）等を考へてゐたからだと答へた。

『他の一例を擧げて見よう。私は R. v. Schid と云ふ人に、彼の病馬がどう云ふ經過をとつて居るかと尋ねた。彼は答へて Ja, das draut…… dauert ielleicht noch einen Monat（ハイ多分もう一箇月もつ位のものでせう）と云つた。一箇の R を有する draut は私に理解が出來なかつた。dauert の r がこの樣に作用する事は不可能の事と考へられたからである。私はだから R. v. Schid. にその點に就き注意を促した處、彼は Das ist eine traurige Geschichte（＝それは悲しい事だ）と考へたからだと說明した。即ち話し手は二つの答へを考へたので、この二つがごつちやになつたのであつた。』

識域下に存し、而も話されない浮浪性の言葉の像を顧慮する事、及び話し手が考へた凡ての事を知れと云ふ提唱が私共の「精神分析」に於ける狀態に非常に近い事は明かな事である。私共は無意識的の材料を探すのである。而も同じ道を通つて探すのである。唯私共は障礙を釀す要素を見出す迄は込み入りたる聯想列を經、長い道程を跡にしなければならないだけである。

私はメーリンゲルの例が證據を與へる今一つの興味ある狀態を少しく說明しよう。この學者の認識によると、話さうと企てられた文章中の一つの言葉と、他の話さうとは思はれない言葉との或る種の類似があつて、後者が歪み（變形）混合形成、妥協形成（汚染）等を引起し、以て意識にあらはれる

と云ふのである。

lagen, dauert, Vorschein.
jagen, traurig, ...schwein.

さて私は「夢判斷*」の論文に於て潜在性夢想からして所謂顯在性の夢の內容が生ずる際に、凝縮作業が如何なる役目をなすかを述べた。無意識的材料の二つの要素の間に、事物の類似或は言葉の觀念の類似があれば、これが第三の要素即ち混合觀念或は妥協觀念をつくるきつかけとなるのである。そしてこの混合或は妥協觀念は、夢の內容に於て上記兩方の成分を代表して居り、又この根源から出來て居る關係上屢〻多數の矛盾して居る限定を具備して居るのである。「話し損ひ」の場合に於ける代理形成および汚染の形成は、したがつて夢の組立ての場合にもつとも活潑なる役目をする凝縮作業(Verdichtungsarbeit)の始まりである。

* Die Traumdeutung. Leipzig und Wien, 1900, 7. Aufl. 1922.

廣い範圍に讀ませる目的で書かれた小論文(一九〇〇年八月二十三日發行の Neue Freie Presse 所載)「如何にして人は話し損ふか？」に於てメーリンゲルは言葉の置換の一定の場合、特に私共が一つの言葉を意味の上では全然反對なる言葉によつて置き換へる樣な場合に向つて、特別なる實際的意義

を要求した。彼は述べて居る。「私共は近頃墺太利衆議院議長が議事を開いた時の樣子を今も尙ほ記憶して居る。諸君!! 一定數の諸君の出席がありますから議事を閉ぢます!!（……geschlossen !）と彼が云ひ、滿場の哄笑に逢つてはじめて彼は氣づいてその誤りを訂正したのである。この場合に於ては議長は餘り良い結果を期待し得ない會議を早く閉ぢ得る立場にゐたいと希望したと云ふ事に說明すべきであらうと思はれる。然しながらこれは屢〻見る現象であり、副觀念（Nebengedanke）が少なくとも一部分現れ、その結果 eröffnet（開會）の代りに geschlossen（閉會）が出て來たのであつて、卽ち話さうとした事の反對が現れた譯である。私は多數の觀察によつて、私共が對になつて居る言葉を非常に屢〻互ひに置き換へる事を知り得た。これらの對照語は私共の言語意識に於て聯合を示し、非常に近接して存在して居り、容易に誤り呼び出されるものである」と。

對照語との置換の凡ての場合に於て、この議長の例に於ける樣に單純に「話し損ひ」が、話す人の心の中に話される文章に對して起つて來る抗議の結果起るものと考へる事は出來ないのである。alliquis の實例の分析に於て私共は類似の心的機制を見出したのであるが、あの場合には內的に起つた撞着は對照語による補充ではなく、一つの言葉の忘却によつて現れたのであつた。然しながら私共はこの兩方の例の間の懸隔を少なくするために alliquis なる語は schliessen と eröffnen の場合に類似

の對照を生ずる事が元來不可能の事であり、尙ほ eröffnen と云ふ樣な語は私共の語彙の中でも常に用ひられる要素であつて忘れられる事の出來ないものだと云ふ事を述べておかう。

メーリンゲル及びマイエルの後の方の諸例は、話し損ひは同じ文章の中にある先響及び餘響を生ずる音及び語に依つても起り、又話さうと企てられる文章の外にある語であつて、その興奮が平生ならば現れなかつた筈のものの作用に依つても起る事を示して居る。さうすれば私共は先づ第一に「話し損ひ」に二種類を判然と區別し得るかどうかと云ふ事及び如何にして一方の種類の例を他の種類の例より區別し得るかを知りたいのである。此處で私共は言語發達の法則に就ての廣汎なる研究（民族心理學第一卷第一部三七一頁、一九〇〇年發行）に於て「話し損ひ」の現象をも論じて居る Wundt の說をも心にとめる事が必要である。ヴントの云ふ處によると、これらの現象及び他のこれに近い現象に必ず存在するものは一定の心的影響である。「先づ積極的條件として、これに屬するものは話された音によつて刺戟され、促された音及び言葉の聯想の制止されない流れであつて、これをば消極的條件として、この流れを制止する意志及び此處にも意志作用として活動する注意力の消失若くは弛緩が助けるのである。かの聯想の遊戲が將に現れようとする音が先鞭をつけ、或は前に出た音が再生され或は習慣的に用ひられて居る音が他のものの間に挿入され、或は最後に話された音との間に聯想上の

關係ある全然別の言葉が此處に來り作用すると云ふ風にあらはれるかどうかと云ふ事――これら凡ての事は起る聯想の方向及び兎も角も活動範圍に於ける區別を名づくるものであつて、聯想の一般性に於ける區別ではないのである。又ある場合には私共が一定の障礙を如何なる形のものに歸すべきであるかと云ふ事、或は私共が一層大なる權利を以てこの障礙を原因の合併の原則による二三動機の協同に歸せなければならぬのではないかと云ふ事は疑はしい事がある。(三八〇頁並に三八一頁)

私はヴントのこの言は正しく且つ非常に教訓的であると考へる。私共は多分ヴントよりも一層斷乎として「話し損ひ」の積極的促進的要素――卽ち聯想の止め度なき流れ――及び消極的補助的要素――卽ち注意力の制止作用の弛緩――が常に共働し、從つて兩方の要素が色々の程度に於てこの過程を限定する事になるものと强調してよいであらう。注意の制止作用の弛緩すると共に――もつと確かに云へばこの弛緩に依つて――聯想の止め度なき流れが活動する事になるのである。

私自身が蒐集した「話し損ひ」の例の中にはヴントの所謂「音の接觸作用」(Kontaktwirkung der Laute)だけで「話し損ひ」が起つたものは一つもなかつた。殆ど規則的に私はこれに加ふるに企圖されたる話の外部にあつて邪魔をする影響を發見した。そしてこの邪魔をするものは箇々の無意識的觀念であつて「話し損ひ」によつて表面に現れ、或は又深い分析によつて初めて意識に持ち出され得

るものであるか、或は全體の話に反對する一層一般的なる心的動機であつたのである。

(1) 私は林檎を噛む時に醜く顔をしかめた娘に對して次の文章を引用しようとした。

Der Affe gar possierlich ist,

Zumal wenn er vom Apfel frisst.

（猿は林檎を食ふ時に殊に可笑しいものだ）

然しながら私は Der Apfe……を以て始めた。これは Affe と Apfel との汚染（妥協形成）であるやうに思はれ、又或は準備された Apfel の先驅と解する事も出來るのである。然しながら一層精細なる事情は次の様である。私はこの引用文を既に一度云つたのであつた、そして第一回の時には云ひ損ひはしなかつたのであつた。私は娘が他の方面から抑留されて居て、私の云つた事に傾聽しなかつた爲、必要に迫られて今一度云つた時にこの「話し損ひ」をしたのであつた。この反覆、それと關聯してこの文章から免れようとする焦燥を私はこの話し損ひの動機と考へるのであつて、この言語障礙は凝縮作業をあらはすのである。

(2) 私の娘が Schresinger 夫人に手紙を書くと云つた、その夫人は Schlesinger と云ふ人であつた。

この「話し損ひ」は多分發音を樂にしようとする傾向と關係があるのである。何故なればｌはｒの發音を繰返した後には云ひ難いものであるからである。然しながら私はこの「話し損ひ」が私がその數分間前に娘に Affe の事を Apfe と云つたから起つた事を附け加へねばならない。さて「話し損ひ」は「名の忘却」と同樣に、非常に傳染性のものである。メーリンゲル及びマイヱルもこの特徴を認めて居る。この心的傳染性の原因は私は云ふ事は出來ない。

(3) Ich klappe zusammen wie ein Tassenmescher……Taschenmesser（私は「ナイフ」の樣に疊まれる。と一人の婦人患者が治療時間の初めに音を置換して云つた。この場合も矢張り Wiener Weiber Wäscherinnen waschen weisse Wäsche（ウィーンの女の洗濯女が白い洗濯物を洗ふ）—— Fischflosse（鰭）及びこれに類似の檢査用語と同樣に、發音の困難と云ふ事が話し損ひの云ひ譯になり得るのである。「話し損ひ」があつたと注意されて彼女は速かに「はい、それはあなたが今日 Ernscht と云はれたからです」と答へた。私は實際その日が休暇前の最終時間に當つて居たので Heute wird es also Ernst（「今日は眞面目にやりませう」）と云ふ言葉で彼女を迎へたのであつた。そして冗談に Ernst と云ふ語を Ernscht と云ふ風に長くしたのであつた。その治療時間の間彼女は度々「話し損ひ」をした、そして私は終に彼女が單に眞似をして居るだけでなく、彼女の無意識界に「名」としての

Ernst なる言葉に滞留すべき特別の理由が存する事を認めたのであつた。*

* 彼女は即ち妊娠及び避妊に關する無意識觀念の影響を受けて居る事が判つた。彼女が意識的に云つた Zusammengeklappt wie ein Taschenmesser なる言葉によつて彼女は母胎内に在る子供の姿態を叙述しようとしたのであつた。私の話しかけた言葉の中の Ernst なる語は彼女に避姙藥を賣る店として廣告して居るウィーンのケルトネル街にある有名なる店舗の名を思ひ起させたのであつた。

(4) Ich bin so verschnupft, ich kann nicht durch die Ase natmen——Nase atmen (私はひどく風邪を引きまして鼻で呼吸が出來ません) と云ふ言葉が、別の時に同じ患者から出て來た。彼女は直ぐにどうしてこの話し損ひが起つたかと云ふ事を知つた。彼女は云つた「私は毎日 Hasenauerstrasse で電車に乗ります、今日早朝電車を待つて居る間に若し私が佛蘭西人であつたら Assnauer と發音するであらうと云ふ事が思ひ泛びました。何故ならフランス人はいつも初音のHを抜きにして發音しますから」と云つた。それから彼女は自分の知つて居る佛蘭西人に關する記憶を色々と語り出で、彼女の想ひ出に於ける永い迂路を經て彼女が十四歳の少女として Kurmärker und Picarde と云ふ小演劇に於て Picarde の役割を演じ、その際片言交りの獨逸語を話したと云ふ事に到達した。彼女の寄寓して居る家に、巴里から一人の客が到着したと云ふ偶然の出來事が多數の記憶を呼びさましたのであつ

た。だからして音の置換は全然知らぬ關係よりの無意識的觀念による障礙の結果である。

(5) 今一人別の婦人患者の「話し損ひ」の機制はこれと類似して居る。彼女の記憶は永く忘れられて居た子供の時の記憶の再生の最中に於て彼女を見放したのであつた。他人の好奇心の強い好色の手が彼女の身體の何の部分を摑んだかと云ふ事は彼女に思ひ出せなかつた。彼女はその直ぐあとで友人を訪問し夏の住居に就て彼女と話し合つた。どう云ふ場所に m と云ふ土地にある彼女の家があるのかと尋ねられて彼女は Berglehne（綏傾斜の山腹）と云ふ代りに Berglende〔山の腰（Lende)〕と答へた。

(6) 私は他の一人の婦人患者に對して治療時間が終つた後に、「お叔父さんはどうお暮しですか?」と尋ねた。彼女は Ich weiss nicht, ich sehe ihn jetzt nur in flagranti（私は存じません。私は此頃叔父とは in flagranti に逢ふだけですから）と答へた。翌日彼女は云つた「私はあなたに馬鹿なお答へをして恥かしう御座いました。あなたは私をいつも外國語を取り違へる無教育な人間だとお思ひになつたでせう。私は en passant（折々）と云はうと思つて居て in flagranti と云つたのでした」と。その時は私共は彼女が何處からこの間違つた他國語を授つて來たのか判らなかつた。然しながらその同じ會見時間中に前日の題目の繼續として彼女は一つの想ひ出を語つた。その想ひ出の中では das Er-

tapptwerden in flagranti（現行犯に於て引摑まる）と云ふ事が主な役を演じて居たのであつた。前述の「話し損ひ」は當時また意識されて居なかつた追想を前觸れして居たのであつた。

(7) 他の婦人患者に私は分析の一定の箇所に於て、私共が今丁度論じて居る事のあつた當時、彼女が自分の家庭を恥しがり、彼女の父に對して私共にまだ判つて居ない何かの非難をした事があるのではないかと云ふ推測を話した。彼女はその事は思ひ出さず、尙ほそんな事はありさうにない事だと說明した。然しながら彼女は自分の家庭の話を續け Man muss ihnen das eine lassen : Es sind doch besondere Menschen, sie haben alle Geiz――ich wollte sagen Geist（私共は彼等に一事を許さねばならない、彼等は特別の人間である、彼等は凡て貪慾(Geiz)を持つて居る――私は精神（Geist）を持つて居るんだからと云はうと思つたのでしたと云つた。「話し損ひ」の場合に私共が阻止しようと思つた考へが却つて押通して現れる事は屢〻見る事である。（メーリンゲルの zum Vorschwein gekommen の例と比較せよ）。兩者の差はメーリンゲルの例では、本人は意識的なのを阻示しようとしたのであり、私の患者は何かを阻止した事を知らず、又何を阻止したかと云ふ事を知らない點にあるのである。

(8)「話し損ひ」の次の例も故意の阻止に原因するものである。私は或る時 Dolomiten（ドロミーテン）（白雲石山脈（特に墺國チロールの））に於て女流漫遊者の服裝をした二婦人に出會つた。私は彼等と少しの距離の

間同行した。私共は漫遊者の生活の愉快な事、苦勞な事を話し合つた。婦人の一人はこの種の日暮しには幾多の不愉快な事のある事を是認した。彼女は「太陽に照らされて終日歩き、襯衣(シャツ)や肌衣が全部汗に濡れた時には實際氣持が惡い」と云つた。その文章に於て彼女は一度一寸云ひ澱んだ。次いで彼女は語をつぎ Wenn man aber dann nach Hose kommt und sich umkleiden kann……(然し私共が Hose(ホーゼ)(歸つて着物を差換へる事が出來る時には……)と云つた。私はこの「話し損ひ」を説明するために取調を必要としないであらう。この婦人は明かに凡てを數へ立て Bluse (襯衣) Hemd (肌衣) 及び Hose (ズボン) と云はうと企てたのであつた。然しこの第三番目の洗濯物を名づける事は彼女は品位を保つために抑壓したのであつた、そして內容の上からは全然無關係なるその次の文章に、この抑壓された言葉は類似の言葉なる Nach Hause(ハウゼ) (家へ) の外觀を變へたものとして、彼女の意志に反してあらはれたのであつた。

(9)「あなた敷物をお買ひになるなら Matthäusgasse(マットホイズ狹路) の Kaufmann(カウフマン) の處にお出でなさい、私はあなたをそこへ御紹介してあげてもよろしいです」と或る婦人が私に云つた。「さうするとマットホイズの處に行くんですね……カウフマンと云はうと私は思つたのでした」と私は繰返した。私が一つの名の代りに他の名を繰返した事は精神錯亂の結果であるかの觀がある。實際又この婦人の話は私を精神錯

亂（茫然自失）の狀態に導いたのである。何故なら彼女の言葉は私の注意を敷物よりも遙かに大切なる他の事に導いたからである。卽ちマツトホイズ狹路には私の妻が許嫁として住んで居た家がある。この家の入口は他の狹路にあつた。そして私はその狹路の名を忘れ、この名は廻り道をして初めて意識的にしなければならぬものである事に氣づいたのであつた。從つて私が引つかかつたマツトホイズなる名は私にとつては忘れられた名の補充名である。この名は補充名としてはカウフマンよりも適當である。何故なればマツトホイズは專ら人名として用ひらるるものであり（譯者註＝Kaufmann は人名としても用ひられ一方に「商人」と云ふ字である）カウフマンはさうではないのである。そして忘れられた街路の名は矢張り人名から來た Radetzky（ラデツキー）と云ふのであつたからである。

(10) 次の例は後に述べる「考へ違ひ」の例にも加へ得る場合であるが、言葉の補充の起るもとになる音の關係が特に明かであるから玆に擧げよう。或る婦人患者が彼女の夢を私に話した「或る子供が蛇の咬傷によつて自殺しようと決心し、この決心を實行した。」彼女は子供が痙攣を起してもだえる有樣を目擊したと云ふのであつた。彼女はこの夢と晝間に起つた出來事との聯絡を見出さねばならぬ事になつた。彼女は直ぐにその前晩蛇の咬傷の應急手當に就ての通俗講演を聽いた事を思ひ出した。大人と子供が同時に咬まれた場合には、先づ子供の傷を治療すべきであると云ふのであつた。尙ほ彼女

は講演者の云つた治療法をも記憶して居ると云ふ事であつた。彼は又咬まれた蛇の、種類も大關係があると云つたさうである。此處で私は彼女の言を遮つて尋ねた。「此の地方には有毒なものは少なく又如何なる種類のものが恐るべきであると云ふ樣な事を云はなかつたか?」と。さうすると彼女は答へて「はい、彼は Klapperschlange（響尾蛇）の事を取り立てて云ひました」と云つた。私が大笑ひしたので彼女は何か間違つた事を云つた事に氣付いた。然しながら彼女は名を訂正しないで自分の云つた事を撤回した「さう、さう、それは私共の方にはゐないのです、彼は Viper（蝮蛇）と云つたのでした。何故私は Klapperschlange と云つたのでせうか?」と彼女は云つた。私は彼女の夢の背後に隱れて居る觀念の干渉を推察した。蛇の咬傷による自殺は美しい Kleopatra への諷刺以外のものではあり得ないのである。兩方の言葉の間の著しい音の類似、同じ順序に列んで居る字 Kl……p……r の一致、及び强調されたる a の一致は見逃がす事が出來なかつた。Klapperschlange 及び Kleopatra なる名の間のよい關係は、彼女に判斷の瞬間的制限を引き起し、その爲に彼女は講演者がウィーンの聽衆に向つて響尾蛇の咬傷の治療を指示したと云ふ主張をするに躊躇しなかつたのである。彼女は私と同樣この種の蛇が故國の動物誌に屬してゐない事を知つてゐたのである。私共は彼女が Klapperschlange を何の躊躇もなく埃及に持つて行つた事を決して無理だとは思はないのである。何故なれば

私共には歐羅巴以外の凡ての事、即ち異國のものを凡て一緒くたにしてしまふ癖があるのである。そして私共自身も響尾蛇と云ふものが新世界（アメリカ）にのみあるものである事を主張する前に一寸考へねばならなかつたのである。

分析の續行に際してその他の確實にする點があらはれた。この夢を見た人は前日にはじめて彼女の住居の近くに建てられてある Strasser（ストラッセル）（彫像家）のアントニウス群像を視察した。これが夢の第二の原因をなしたのであつた。（第一原因は蛇の咬傷に就ての講演である）。彼女の夢の續きに於て、彼女は一人の子供を彼女の腕に抱いてゆすぶつてゐた。その光景に關して彼女に Gretchen（グレッチヘン）が思ひ泛んだ。その先の思ひ付きは Arria（アリア） und Messalina（メッサリナ） に關する思ひ出を持ち來したのであつた。斯く多數の演劇の名が思ひ泛んだ事は夢を見た人が以前にひそかに女優の職業に憧憬を持つた事を推察せしめたのであつた。夢の初めの部分即ち「一人の子供が蛇の咬傷によつて自殺しようと決心した」と云ふ事は實際は彼女がいつかは有名なる女優にならうと企てた事を意味して居るのである。最後に Messalina なる名から考慮の道が枝分れし、この道は夢の主なる内容に進むのであつた。最近に起つた一定の出來事は、彼女に彼女の唯一人の弟がアリアン人でない女と不釣合なる結婚（Mesalliance）をするかも知れぬと云ふ不安を呼びさましたのであつた。

(11) 全然無害なるか或は多分動機が十分に明かにされてゐない實例を私は此處に述べようと思ふ。何故なればこの例は心的機制の明かなるものを認めしめるからである。

伊太利を旅行中であつた獨逸人が、旅行鞄の破損したのを縛る皮帶を必要とした。辭書は Riemen（皮帶）に對する伊太利語なる Coreggia(コレギア) を彼に提供した。この言葉は Correggio(コレギヲ) なる畫家を思ひ起させるものであるから記憶は容易だと彼れは考へたのであつた。ついで彼れは或る店に入つて una(ヴナ)-ribera(リベラ)（一本の「リベラ」）を要求した。

彼は自分の記憶にある獨逸語を伊太利語に代へる事が出來なかつたらしい。然しながら彼の努力は全然の失敗には終らなかつた。彼は或る畫家の名に固着せねばならぬ事は知つて居た。其處で彼は伊太利語と似た音を持つた畫家の名を思ひ出さないで、獨逸話の Riemen(リーメン) に近い彼の畫家（Ribera——スペインの畫家＝譯者註）の名を思ひ出したのであつた。私はこの例は勿論「名の忘却」の場合にも又この「話し損ひ」の場合にも屬せしめる事が出來るのである。

私がこの書の第一版に向つて「話し損ひ」の經驗を蒐集した時には、私は自分の觀察し得た凡ての例——その中には餘り感じの深くないものもあつたが——を分析したのてあつた。その後多數の人々が「話し損ひ」を集めてこれを分析する興味ある努力を拂ひ、その結果私を一層豐富なを材料から選

り好みをなし得る位置において呉れたのである。

(12) 或る青年が彼の姉妹に向つて「私は今では D とは全然不和になりました、私は最早 D の家との人達と挨拶しません」云つた。姉妹は彼に答へた。Überhaupt eine saubere Lippschaft と。彼女は Sippschaft と云はうとしたのであつた。(Überhaupt eine saubere Sippschaft = 兎も角ももつとよい血統のもの) 然しながら彼女はこの「話し損ひ」に於て、尚ほ二つの事柄をつめて云つたのであつた。それは彼女の兄弟がこの家庭に娘と「いちやつき」を始めた事があつた事及びこの娘が近頃許されない戀愛關係(Liebschaft) に本氣なつてたづさはつて居ると云ふ噂のあつた事の二つである。

(13) 或る青年が街上で一婦人に次の言葉で話しかけた Wenn Sie gestaten mein Fräulein, möchte-lich Sie begleit-digen 彼は明かに彼女と一緒にあるき (begleiten) 度いと考へたのであつた。然しながら彼女にこの申込みをする事が、彼女を侮辱する (beleidigen) 事になりはしないかと氣遣つたのであつた。この互ひに矛盾する二つの感情が、正に一つの言葉 (begleit-digen) として「話し損ひ」にあらはれて來たのであつて、これは此の青年の本來の企圖が非常に純なるものでなく、又この申込みをなす事がこの婦人に向つて自己を卑しくするものと考へたに違ひない事を示して居るのである。然しながら彼がこの事を彼女に隱さうと努めて居るに拘らず、彼の無意識精神は、この本來の企圖を裏

切らんとの悪戯を爲し、その結果彼は「一體あなたは私をどうお考へになるのですか？ 何故あなたは私をそんなに侮辱するのですか？」」と云ふ世間並みの答へる婦人から取り越して居る事になるのである。（この例は O. Rank からさ話れたものである。）

私は Stekel が「無意識的自白」なる題下に一九〇四年一月四日の「伯林日日新聞」に載せた論說から一定數の例を引用しよう。

(14)「次の例は私の無意識觀念の不快なる部分を暴露するものである。勿論私は醫師としての立場から決して金儲けと云ふ事は考へず、いつも患者の利益のみ眼目にして居る事を先づ以て申述ておかう。さて私は重病後の回復期にある患者に醫療を加へに行つてゐた。私共は苦しい日夜を共に過したのであつた。私は彼女がよくなつた事を喜び、彼女に Affazia に於ける滯在の愉快であつた事を述べ、その際次の結論を用ひた。wenn Sie, was ich hoffe, das Bett bald nicht verlassen werden——（私が希望する樣に間もなくあなたが床拂ひが出來なかつたら——）。これはこの富裕なる患者を尙ほ永く治たいと云ふ無意識界の利己的動機から出て居るのであつた。これは私の覺醒時の意識が全然知らず私療しが怒つて斥ける筈の願望から出たものである。

(15) 他の一例（シュテケル）「私の妻は或る佛蘭西婦人を家庭教師として午後來て貰ふ談判をしての

條件について一致した後に彼女の證明書（性格、行爲、資格等の）を取つておかうとした。佛蘭西婦人はつぎの理由から證明書を自分で持つてゐたいと云つた。Je cherche encore pour les après-midis pardon pour les avant-midis（「私、午後も……あら御免なさい、午前も致したうございます」）明かに彼女は外を探して多分もつとよい條件を得ようと企てたのであつた。――この企てを彼女は實行したのであつた。

(16)（ドクトル、シュテケル）「私はある婦人にお說敎をする事になつた。そして彼女の夫――その人に賴まれてこのお說敎をした譯です――は戶の外に立ち聞きをしてゐた。明かなる感動を與へたこのお說敎の後で私は‚Küss' die Hand gnädiger Herr！（「左樣なら御主人さん」）と云つた。識者には私が主人に向つてお說敎をした事及び彼のためにお話をした事がこれによつてわかるであらう。

(17) ドクトル、シュテケルは自分の事に就て次の樣に報告して居る。彼は或る時トリエストから來て居る二人の患者を治療してゐたが、彼はこの二人をいつも取違へて挨拶した「ペロニーさんお早う」とアスユリと云ふ人に云ひ「アスユリさんお早う」とペロニーと云ふ人に云つた。最初の間は彼はこの取り違へには深い理由はなく、兩人の間に多數の共通點ある事で說明しようとしてゐた。然しながら彼は「名の取り違へ」はこの場合一種の法螺である事を容易に確かめ得た。卽ち彼は之によつて自

分の治療して居る各伊太利人患者に後者が自分の治療を受けるためにウィーンに來て居る唯一のトリエストの人ではない事を知らしめる事が出來るのである。

(18) ドクトル・シュテケルは或る騷々しい總會席上「議事日程第四項に進行しよう (Schreiten)」と云ふ處を Streiten (鬪ふ) しようと云つた。(Wir streiten (Schreiten) nun zu Punkt 4 der. Tagesordnung.)

(19) 或る大學教授は彼の就任演説において「私は私の尊敬すべき先輩諸君の功績を述ぶるに適任 (geeignet) ではない」と云ふべき處を「……を述ぶる事を好まない (nicht geneigt)」と云つた。

(20) ドクトル・シュテケルはバセドー氏病があると察して居る或る婦人患者に向ひ「あなたは妹さんよりも頭だけ (um einen kopf) 大きくいらつしやる」と云ふ處を「……クロツプだけ (um einen Kropf) 大きくいらつしやる」と云つた。(譯者註 = Kropf は甲狀腺腫でありバセドウ氏病の場合にも見られるものである。)

(21) ドクトル・シュテケルは報告して居る。或人が二人の友人の間の關係を述べようとした。その内の一人は猶太人であると云はれてゐた。彼は「二人は Kastor(カストール) と Pollak(ポルラック) のやうに一緒に住んで居る」と云つたのであつた。(譯者註 = Kastor und Pollux(ポルルツクス) は雙生兒を意味し Pollak は波蘭人の事を蔑

んで云ふ時の呼稱である。）これは決して洒落ではなかつたのである。話した人は自分の「話し損ひ」した事を氣付かずシュテケルによつて初めてその事を注意されたのであつた。

(22) 時々「話し損ひ」は詳細なる性格の描寫の代りになる事である。家庭の主權を握つて居る若い婦人は彼女の病夫の事を語り、夫が醫師の處に彼に適當な食餌の事を尋ねに行つて來たと云つた。然しながら醫師は食物には關係はない「彼は私——婦人——の欲するものは何を飲食してもよい」(Er kann essen und trinken, was ich will) と云つたさうです、と彼女は語つた。(譯者註＝彼女は卽ち……was er will と云ふべき處を……was ich will と「話し損ひ」をして、自分の嬶天下を思はず明かにした譯である)。Th. Reik（テオドル・ライク）(Intern. Zeitschr. f. Psychoanalyse, III, 1915)に據る次の二例は「話し損ひ」の特に起り易い狀態から由來して居る。それはこの狀態には云つてよい事よりも抑壓されなければならぬ事が多いからである。

(23) 或る男が近頃夫をなくした若い婦人に向つてお悔みを云ひ、それから次の言葉を附け加へた。Sie werden Trost finden, indem Sie sich völlig ihren Kindern Widmen 卽ちあなたは子供に專心なさる事によつて慰められなさるでせうと云ふ處を話し損ひ widmen の代りに widwen と云つたのである) 抑壓されたる觀念は他の種類の慰藉を指示して居

る。即ち「若くて美しい未亡人（Witwe）は間もなく新しい性の喜びを享受するであらう」との觀念である。

(24) この同じ男は或る夜會に於て、同じ婦人と復活祭の爲に伯林に於てなされる大仕掛けの準備に就て語り合つてゐた。そして彼は「あなたは今日ウェルトハイム（譯者註＝伯林の大百貨店）の窓飾を御覧になりましたか？ 大變立派に飾られてゐますよ（……Sie ist ganz dekolletiert)」と彼女に尋ねた。（譯者註＝彼は dekoriert（飾られる）と云ふべき處に dekolletiert を用ひた譯である）彼は美しい婦人の Dekolletage（デコレツータジユ）（婦人の頸、胸、肩を現したる裝飾）に就ての彼の驚歎をあからさまに云ひあらはす事が出來なかつた。そこで彼が商店の飾窓（Warenauslage）の裝飾（Dekoration）を「デコレッタージュ」に變へる事によつて、禁ぜられた觀念が表面にあらはれたのであつた。この場合飾窓（Auslage）と云ふ話は無意識的に曖昧に用ひられて居るのである。

(25) 「或る婦人がその婦人も私も共に知つて居る或男の事を物語り、彼女が最近にこの男を見た時には彼はいつもの様に立派な服裝をして居り、特に彼は非常に立流な茶褐色の短靴を履いてゐたと云つた。何處で彼女が彼に逢つたかと尋ねた處、彼女は次の様に話した。「彼は私の家の扉（ドアー）の前に立つて

呼鈴（ベル）を鳴らしました。そして私は捲き上げ日覆の隙間から彼れを見ました。然し私は扉を開きもせず、又人の居る樣な氣配を見せませんでした。それは私が既に町に歸つて來て居る事を知らせたくなかつたからです」と。私は耳をすましながら聽いてゐて、彼女が何か私に祕して居る事があると考へた。そして彼女が獨りだけで家にゐたのではないと云ふ事及び訪問者に逢ふ樣にお化粧をしてゐなかつた爲めに、扉（ドアー）を開かなかつた事が本當らしいと考へた。そして私は少々諷刺的に尋ねた。「さうするとあなたは閉めてあつた日除けを通して彼の Hausschuhe（上靴）――Halbschuhe（短靴）を賞美する事がお出來になつたのですね？」と。Hausschuhe と云ふ言葉には、話す事を禁ぜられた彼女の不斷着（Hauskleid）に關する觀念があらはれて居る Halb（半分）なる言葉は一面に於て これに「あなたは私に半分しか本當の事をおつしやらず、あなたが裸で（半分だけ着物を着て）いらつしつた事を祕していらつしやいますね」と云ふ禁ぜられたる答への核心が含まれてゐたために、除去しようと試みられたのであつた。この「話し損ひ」は私どもがその直前にこの男の結婚生活、彼の家庭上の幸福（häuslichen Glück）に就て話してゐた事によつて促がされたのであつて、之も一部彼の人物への移動を限定したのである。最後に私は短靴を穿いて居るこの立派な紳士を街路に立たせた時の彼に對する「嫉み」も手傳つて居る事を自白せねばならない。私は近頃自分でも茶褐色の短靴を買つたが、それは

最早決し立派なものではなかつたのである。

現今の樣な戰時は多數の「話し損ひ」を出させるが、それを理解する事はあまり難かしくない。

(26) 「どの軍隊にあなたの令息がおいですか?」と一人の婦人が他人から尋ねられ Bei den 42er Mördern と答へた。(譯者註＝彼女は Bei den 42er Mördern (第四十二臼砲隊)と答へる筈であつたが Mörser の代りに Mörder (虐殺者)と「話し損ひ」をした譯である)

(27) Henrik Haiman(ヘンリック・ハイマン) 少尉は戰場よりの通信に於て「私は偵察勤務の電話手の代理をするために暫くの間好きな書物を讀むことが出來なくなるでせう。砲兵陣地の電送試驗にたいして私は Kontrolle richtig, Ruhe (「コントロール」よし。休息)と反應した、服務律に從へば Kontrolle richtig, Schluss (「コントロール」よし、終り)と云ふべきであつた。私のこの脫線は讀書の出來ない事に就ての怒りによつて說明される」と述べた。(Intern. Zeitschr. f. Psychoanalyse, IV, 1916/17.)

(28) 一特務曹長は兵員に對し彼等の宛名を正確に家に云つて遣れ Gespeckstücke(ゲスペックスチユッケ) (Gepäckstücke(ゲペックスチユッケ) 小包)が紛失しない樣にと敎へた。(譯者註＝この特務曹長が何故に話し損つて Gespeckstücke と云つたかは譯者にはよく判らない、然しながら「ハム」や「ベーコン」の脂身を Speck(スペック) Speckseite(スペックザイテ)と云ふから不自由なる戰地にあつて喰意地の張つてゐた彼が「スペック」の事を空想してゐた爲に兵員に

教へる際に口をすべらせて Gepack を Gespeck と云つたのではあるまいかと思はれる。)

(29) 次の特に立派な、そして慘なる背景に依つて意義深い例を Dr. L. Czeszer が私に話して呉れた。彼は戰時、中立國なる瑞西に滯在中この觀察をなし、之を詳細に分析したのであつた。私は彼の書簡を餘り拔かないで次に記述しよう。

「私はOと云ふ處のM・N・教授が昨年の夏の學期にやつた「感覺の心理」についての講演中に陷つた「話し損ひ」の一例を述べます。前以て申上げておきますが、この講演は大學の講堂で抑留されて居る佛國捕虜及び聯合國贔屓の佛蘭西系瑞西人である大學生の大群集の下に開かれました。Oでは佛蘭西に於けると同樣に boche なる言葉が廣く又專ら獨逸人の稱呼として用ひられます。然しながら公開の發表や講義等に於ては、高官、大學教授及びその他責任ある位置に居る人々は中立を保つためにこの惡い言葉は避けるやうに努められてゐます。

さてN教授は感情の實際的意義を說き、それ自體としては面白くもない筋肉作用でもこれに快感を附與し、これを強くさせるために目的を意識して感情を利用する事の例を引用しようとしてゐました。勿論佛蘭西語で彼は丁度その頃當地の新聞紙が獨逸の新聞紙から飜刻して載せた獨逸の學校教師の話を物語つたのでした、この學校教師は生徒を庭園で働かせ、且つ一層精を出して働く樣に生徒を煽て

る目的で、土塊ではなく佛蘭西人の腦天を叩きつける心算になつてやれと生徒に要求しました。此話を述べる際 N は勿論獨逸人の事を云ふ時に Allemand（アラマン）と云ひ boche（ボッシュ）とは云はなかつたのでした。然しながら彼がその點に來た時に、彼は學校教師の言葉を次のやうに述べました。Imaginez vous, qu'en chaque moche vous écrasez le crâne d'un Français（諸君、諸君はその一塊一塊の moche に於てフランス人の腦天を打ち砕くつもりになつて呉れ給へ）即ち彼は motte（土塊）といふ處を moche と云つたのでした。

此處に私共はこの正しい學者が話の初めから習慣に負けないやう、又多方誘惑に陥らぬ樣、殊にも瑞西聯邦の命令によつて堅く禁ぜられて居る言葉を大學講堂の教壇から發する事のないやうに注意して居るのを明かに見るではありませんか！ 而も彼が幸にも最後に instititeur allemand（獨逸教師）と正しく云ひ、而もひそかに呼吸をつきながら危險のない結末に急いで居る瞬間に、今迄骨折つて抑壓してゐた言葉が motte と云ふ言葉との同音に固著し——この不幸な事が起つたのでした。外交上の失策に對する不安、使ひ慣れて居り而かも凡ての人から待ち設けられて居る言葉を用ふる事の被壓迫的愉快及び生れ出でたる共和論者及び民主論者の言論自由束縛に對する不滿等がこの例を正しく述べようとする主なる企圖に干渉したのです。この干渉する傾向は、講演者には判つて居り、彼

は「話し損ひ」の前にこの傾向を考へた事は疑ひのない事であります。N教授は彼の「話し損ひ」に氣付かなかつた。少なくとも私共が多くの場合に自動的にする様に訂正をしなかつたのでした。これに反してこの「話し損ひ」は、大部分佛蘭西人から成つてゐた聽衆からは滿足を以て受けとられ、故意の洒落と全然同じやうに作用したのでした。然しながら私はこの外見上惡意のない過程に實際の內的興奮を以てついて行きました。何故なれば私は判り易い理由からしてこの教授に精神分析法に從つて起つて來る問題を以てぶつかつて行く事は思ひ止まらねばならなかつたからでした。然しながら私にとつてはこの「話し損ひ」は、失錯行爲の限定及び「話し損ひ」と洒落との間の深い類似と關係に關するあなたの學說に向つての決定的なる證據になりました。」

(30) 次の「話し損ひ」も亦戰時の悲しい印象の下に起つた。故國に歸つた墺太利のT（ティー）中尉が語つたものである。

「數箇月續いた私の伊太利に於ける捕虜生活の間、私共二百人の將校は或る手狹まなる別莊に收容されてゐました。この期間に私共の仲間の一人が流行性感冒で死にました。この出來事によつて起された印象は勿論深いものでした。何故なれば私共が當時存した狀態、醫療の缺如、私共の當時の賴りない生活狀態は、この病氣の傳播をばありさうな事に考へさせたからでした。私共は死骸を或る穴藏に

納めたのでした。或晩私が一友人と家の周圍を巡視しました時、私共二人は死骸を見たいと云ふ希望を表明しました。先になつて歩いてゐた私が穴藏に入りました時、ひどく私を驚ろかせる光景があはれました。何故なれば意外にも棺は入口に非常に近い處におかれてあり、私は瞬く蠟燭の火によつて明滅する顔を非常に近い處から見なければならなかつたのでした。この印象をあとに残す光景を腦裏に描きながら私共は巡回を續けました。滿月の光を浴びて居る公園、明るく照らされて居る芝生及びその背景をなして居る薄霞の衣の見える場所に來ました時に、私はこれに關聯した觀念を「圓陣をつくつた小妖魔がそれに近接して居る顎のへりの下で「ダンス」をして居るやうだ」と云ひ現しました。

翌日の午後私共はこの死んだ友を葬りました。私共の收容所の近くの小さな場所にある墓場迄の道は私共にとつて同じやうに苦しく且つ侮蔑を感ぜしむるものでありました。大聲で騒ぐ若者共、嘲笑し、愚弄するあたりの住民、無作法な叫ぶ人々は、この出來事をよい事にして露骨に彼等の好奇心と憎惡心を混へた感情を現しました。この無抵抗なる狀態に於てさへ怒らずに止まり得ると云ふ感じと私共に對して示された無禮に對する嫌厭の感は晩になる迄私を怒らせたのでした。前日と同じ時間に同じ人を伴つて、私共は今度も同じやうに砂利道を通つて家の周圍をあるきました。穴藏の格子戸！——その背後に死骸がおかれてあつた——の前を通りました時に、死骸の光景が私に残した印象の追想

が私を襲つて來ました。再び同じ滿月の光を浴びた公園の見える場所に私は立ち止まり、同伴者に向つて Wir könnten uns hier ins Grab——Gras setzen und eine Serenade sinken！と云ひました(譯者註＝「私共は此處で墓……草原に坐し晩樂をうたつても（Singen）よい」と云ふべき處を Sinken（沈む）と彼は「云ひ損ひ」をした譯である）第二の「話し損ひ」の處で私ははじめて氣がつきました、最初の時は私は誤りの意味を意識せずに訂正したのでした。そこで私は考へて ins Grab — sinken（墓場に入る）とならべて見ました。電光の如くに次の像が次々に起つて來ました。月光を浴びて踊り浮動して居る小妖魔、納棺された戰友、呼びさまされた印象、埋葬の際の箇々の光景、受けたる不快及び妨げられたる悲哀の感、發生した惡疫についての箇々の對話の記憶、二三の將校の恐怖の表示等であつた。後に私はその日が父の命日であつた事に氣がつきましたがこの事は私が平生日の記憶の非常に惡い事と考へ合せて不思議に思はれる事でした。

後になつてつらつら考へてみて私に兩方の晩の外的條件が合致した事、即ち時間を同じうし、照明を同じくし、場所と同伴者を同じくした事が明かになりました。私は流行性感冒の傳播の心配があると云はれた時に感じた不快を思ひ出しました、然し又それと同時に恐怖にとらはれてはならぬと云ふ內的禁止をも思ひ出しました。「私共も死ぬかも知れぬ」(wir könnten ins Grab sinken）と云ふ言葉の

列べ方も、其後その意味が私に意識され、又私はそれについての確信も得ました。唯最初に起つた Grab より gras への訂正ははつきり判らずに起つたが、これが第二の「話し損ひ」(singen より sinken への)を引起し抑壓された凝結觀念に窮極の作用を保證したのであります。

私は當時私に近い關係ある家族のものが度々病氣したり、或は一度は死にさへしたといふ心配な夢に惱みました。私は捕虜になる一寸前に、流行性感冒がこの家族のものの鄕里に於て猖獗を極めて居ると云ふ報知を受取り、私の非常なる恐怖を彼女に云ひ送りました。それ以來私は音信不通で居りました。數箇月後に私は彼女が上記の出來事のあつた時から二週間前に流行病の犧牲になつたと云ふ報告を受けました。」

(31) 次に述ぶる「話し損ひ」の例は、醫者には避け難い苦しい精神軋轢の一つを電光の如く照らすものである。死にさうに衰弱して居る一人の男――然しその人の診斷はまだ決定してゐない――が彼の難問題の解決を待つべくウィーンに來て、今は知名の醫師になつて居る彼の靑年時代の友に治を乞ひ醫師は不承不承彼の治療を引受けたのであつた。患者は或る病院に入る事になり、醫師は Hera 療養所に入院を勸めた。患者はそれは特別の目的に向つてのみの病院(產院)であると云つて反對した。否々と醫師は急込んで云つた。In der „Hera" kann man jedens Patienten umbringen――unterbringen

meine ich（「ヘラ」療養所ではどんな患者でも殺す……入院させることが出來るんです）と。次いで彼は自分の「話し損ひ」の說明に對して烈しく反對した、そこて「あなたはまさか私があなたに敵意を持つてるとは信ぜられないでせう」と云つた。十五分間位後に醫師は患者の看護を引受けて、彼を連れて出て行く看護婦に對して「自分は今は何も見出さないし今後も見出すであらうとは思はない。然し兎も角も大量の「モルヒネ」を與へませう。さうすれば安息が來る（……Aber wenn es so seinsoltte, bin ich für eine tüchtige Dosis Morphium, und dann ist Ruhe）」と云つた。これによつて醫師は患者が最早や助からないと云ふ事がきまつて居るから、藥でもつて患者の惱みを短くするやうな條件を與へた事が判るのである。即ち醫師は實際に友人を殺す役目を引受けた譯であつた。

(32) 證人の云ふ處によると廿年も前に起つた事だと云ふ事だが、次の例は特に有益なる「話し損ひ」の例として捨て難いものである。『或る婦人が嘗て或る會合の席上で——彼女の話し振りによつて彼女の言葉が興奮の狀態に於て又色々の隱れたる感情に迫られて出て來た事が讀めましたが——「勿論女と云ふものは男の氣に入る爲には美しくなつてはならない。その點では男の方は遙かによい。男は五本の眞直な手足（……fünf geraden Glieder……）さへあればそれでよいのです」と云つた。この例は凝縮或は汚染によつて起る「話し損ひ」のかくれたる機制への深い洞察を私共に與へるものである。

此處に意味の似通つた二つの成句が融合して居る事を假定し得るのである。

wenn er seine vier geraden Glieder hat

wenn er seine fünf Sinne beisammen hat

（彼が四本の眞直な手足を持ち

彼が五官を皆持つて居るならば。

然しながら又 gerade（眞直）なる要素は、次の二つの語句の共通なるものである。

wenn er nur seine geraden Glieder hat.

alle fünf gerade sein lassen.

（彼が彼の眞直な手足を持つてゐさへすれば

五本凡てが眞直であるべきである。）

gerade Glieder の文章の中に先づ一つの數字を加へ、ついで單なる四本(simpeln vier)の代りに隱れた意味を持つて居る五本（fünf）と云ふ字を入れる爲に fünf Sinnen の句及び gerade fünf の句が共働したものと假定して差支ないのである。この融合は然しながら「話し損ひ」としてあらはれたる形に於て善良なる意味を持つてゐなかつたならば、又婦人の口からは勿論露骨に云へないやうな野鄙

なる意味を持つてゐなかつたならば確かに起らなかつたであらう。――最後に私共はこの婦人の話は、その文句から云へば面白い「話し損ひ」であると同時に、優秀なる洒落を意味し得る事を指摘しなくてはならない。唯彼女がこの語を意識的の企圖を以て話したか、それとも無意識的企圖を以て話したかと云ふ事は問題になるのであるが、この場合に於ける話し手の態度は勿論意識的企圖を否定し洒落を除外するのである。

「話し損ひ」はオー・ランクの報告例に於ける様に、非常に洒落に近接する事がある。この場合には「話し損ひ」の發頭人が自らこれを洒落として笑ひ出したのであつた。

(33) 小娘の様な外觀を保存しようと心をくだいて居る妻から、度々の性交をいやいやながら許されて居る若くして結婚した男が、彼夫婦を非常に面白がらせた次のやうな話を私にきかせた。或晩、彼が彼の妻の節慾命令を終に蹂躙してしまつた後、朝に彼は夫婦の寢室で顏を剃り、その際――今迄も便宜上何度もした事だが――まだ睡眠中の妻の手箱の上にあつた白粉刷毛を使用したのであつた。自分の血色に就いて大變心配して居るこの婦人は、彼にこの事をして吳れるなと斷つてゐた。だから今彼女は彼に對して怒つて叫び出した。Du puderst mich ja schon wieder mit deiner Quaste! (あなたは又あなたの刷毛で私にお白粉をおつけになりましたね!)と。彼女は Du puderst dich schon weider

mit meiner Quaste !（あなたは又私の刷毛で白粉をおつけになりましたね！）と云はうとしたのであつたが、彼女の「話し損ひ」に對する夫君の笑ひによつて注意を呼び起され、彼女も終に一緒に笑ひ出したのであつた。pudern はウィーンの人には誰にも判つて居る性交の云ひ廻しであり刷毛（Quaste）は男根の象徴である事は疑ひの餘地がないのである。（Internat. Zeitschr. f. Psychoanalyse, I, 1913.）

(34) 洒落の企圖については私共は次に述べる A. J. Sforfer の例に於ても考へる事が出來るであらう。

明かに精神性の原因から起つて居る病氣に惱んで居る B 婦人は度々精神分析醫 X に相談せよと忠告され、その都度「精神分析療法は正しいものではなく、醫師は何事でも不當に性的の事に持つて行くものである」と云つてこの忠告を斥けてゐた。終に彼女はこの忠告を容れる事になつた。そして尋ねた「そこでこのドクトル X は何時 ordinären するのですか？」と。（譯者註＝彼女は ordinieren（治療する）と云ふべき處を ordinären と云つたのであつて ordinär は野鄙、鄙俗等を意味する語である。」

洒落と「話し損ひ」との類似は「話し損ひ」なるものが屡ば短縮に外ならないと云ふ事にもあらはれて居る。

(35) 若い娘が學校卒業後時代の風潮を斟酌して醫學の研究に入つたが、數學期の後に彼女は醫學を化學に取りかへたのであつた。數年後に於て彼女はこの變節に關して次の樣に語つた。「私は一體解剖をする事は恐れなかつたのですが、或時死體で指から爪を引き拔かなければならなくなつた時に私は全……化學に對する興味 (die Lust an der ganzen——Chemie)、を失つてしまつたのです」と。(譯者註＝彼女は Anatomie (解剖學) と云ふべき處に Chemie (化學) と云つた譯であり、この場合の Chemie は解剖學と化學とをつめたものであり、結局彼女は何も興味を持つてゐない事を示すのである。)

(36) 私は此處に說明に何等の技巧をも必要としない「話し損ひ」の他の例を列べよう。「敎授は解剖學に於て內臟學中非常に難しい部分とされて居る鼻腔の說明を骨折つてやつてゐた。敎授が聽衆に對して彼の說明が判つたかと尋ねた處凡ての人が「ハイ判りました」と答へた。それに對してこの名うての驕傲なる敎授は次の樣に云つた、私はさうは信じない。何故なら鼻腔を理解して居る人はウィーンの樣な大都會でさへ一指——失禮私は一方の手の指 (卽ち五指) のつもりでした。——を數へ得るのみなのだから」と。

(37) 同じ解剖學者は別の時に「女性生殖器に於ては多數の Versuchungen (誘惑) ——失禮 Versu-

che（實驗）あるに不拘……」と云つた。

(38) ウィーンの Dr. Alf. Robitsek（ドクトル・アルフ・ロビトセック）は古代佛語學者によつて注意された「話し損ひ」の二例を私に指示して呉れた。私は未飜譯（佛文）の儘此處にあらはさう。Brantôme（ブラントーム）（一五二七——一六一四年）著「麗人傳」第一話「私は絶世の美人にして且つ社交に長けた一婦人をよく知つて居るが、この人に就てから云ふ話がある。嘗て彼女が朝廷に出仕して居る一人の社交に上手な紳士と內亂の事で色々戰爭の話をしてゐた時「私は王様がその國の橋を悉く切り落させた（rompre tous les ponts）と云ふ事を承つて居ります」と云ふつもりだつたのを、「王様がその國のC……（姦婦の夫？）を皆切り殺させた（rompre tous les c……（cocu?）と云つてしまつた。蓋し彼女は夫と床を偕にしたばかりであつたか、或は彼女の戀人のことが頭にあつた時とて、この言葉（C……）をまだそのまま口に含んでゐたものと想像するに難くはない。そして又この紳士はこの言葉によつて彼女を愛するやうになつた。」

「更に私の知つて居る今一人の婦人は、彼女よりも立派な或る婦人との會話の中に、その人の美しさを讃めちぎつた擧句にかう云つた。「いいえ奥様、私が唯今申上げましたことは決して adulterer（姦通）ではございません」と彼女は「決して adulater（おべつか）ではございません」と云ふつもりであつた。何となれば彼女は直ぐに「私が姦通の事を考へてゐたと思召せ」と取り繕つたから。」

(39) 勿論「話し損ひ」による性的曖昧の成立のより近代的の例もあるのである。F. 夫人は或る語學講習の第一時間目の事について次の如く語つた。「それはそれは面白いんですよ、先生は小綺麗な英國人です、彼は第一時間に直ぐに Blume（花）と云ふべき處を Bluse（女の襯衣）と云ふ事によつて彼が私にむしろ個人教授をしたがつて居る事を暗示しました」と。（ストルフェル）

私が神經官能症の症狀を分析し除去するに用ひて居る精神療法の實施に際し、偶然に出て來る話だの「思ひ付き」からして隱れようと努力してゐながらも、思はず現れる考慮内容を嗅ぎつける任務を課せられる事は非常に屢〻である。この場合私が確かな、そして一面非常に奇異なる實例において證明し得るやうに「話し損ひ」は最も價値ある役目をなすものである。例へば患者は彼等の叔母の事を話し、「話し損ひ」と氣付かずに絶えず「私の母」と呼び、或は彼等の夫をば兄弟と云ふのである。斯くして彼等は彼等の感情生活に於て同じ「タイプ」の人の再現を意味するこれらの人々を、互ひに同一視し同列において居る事を認めしめるのである。或は、二十歳になる青年が私に向つて云つた。「私はあなたが治療して下すつた N. N の父である。――失禮、私は兄弟だと云はうと思つたのです。彼は私よりも四つ年上です」と。私はこの「話し損ひ」によつて彼が彼の兄と同樣に父の罪によつて病氣して居る事、彼の兄の樣に治療する事を要求して居る事、父が治療を最も切實に望んで居る事を

云ひあらはさうとして居る事を理解するのである。他の場合には異樣にひびく言葉の組立て、無理がある樣に見える云ひあらはし方などあり、之は別の動機を持つて居る患者の話の中の被壓迫的觀念の部分を暴露するに十分である。

だからして「話し損ひ」の中に包括さるる粗大なる話の障礙及び微妙なる話の障礙に於て、私は音の接觸作用の影響ではなく、話の企圖以外に存する觀念の影響が「話し損ひ」の成生に對して決定的のものであり、又これが出來た「話し損ひ」の理解に十分である事を見出すのである。勿論私は語音が相互に作用し變化を及ぼし合ふ事の法則に疑義を挾まうとは思はない。然しながら私はこれらの法則が單獨にて話の正しい實行を障礙するに十分有効であるとは思はないのである。私が詳細に研究し洞察し得たる場合に於ては、これらの法則は單に豫めつくられて居る機制に過ぎないものであり、この機制をば遠くに存する心的動機が便宜上利用するのである。而もこの心的動機は音の關係の勢力範圍の一部を形成するものではないのである。實際に於て代用 (Substitution) の多數の場合に於ては、「話し損ひ」に際し、斯くの如き語音の法則は全然認められない。私はこの點に於てはヴントと全然一致したる意見を持つて居るのであつた。ヴントは矢張り「話し損ひ」の條件は複雜なものであり、音の接觸作用をはるかに超越したものであると假定して居るのである。

私はヴントの云ふ所に從つて、この遠い心的影響は確實に存する事と考へるが、一面に於て速度を早められたる談話及び多少注意の外に外れて居る樣な場合に於ては「話し損ひ」の條件がメーリンゲル及びマイヱルの定めた法則に容易に限られ得る事を認めるに何の差支もないと考へるのである。この二人の學者によつて蒐集された實例の或る者に於ては一層複雜なる分析が出來さうである。私は前に擧げた場合を例にとつてみよう。

Es war mir auf der Schwest.....Brust so schwer.

（私は大變胸が塞がつてゐた）

この場合に Schwe が同じ價値を持つ Bru を先響（Vorklang）として押除けたと云ふ風に、さう簡單に行くものであらうか、Schwe なる音が、その外に特別の關係によつてこの「出しやばり」を可能にされる事は否定する事が出來ないのである。そしてこの關係は Schwester（姉妹）――Bruder 兄弟なる聯想、多分その外に他の觀念圏に進んで行く Brust der Schwester（姉妹の乳房）なる聯想以外のものではあり得ないのである。この舞臺の背後に居る見えざる援助者が、平生は無害な Schwe に力を與へ、その結果は「話し損ひ」となつてあらはれるのである。

他の「話し損ひ」に對しては卑猥なる言葉及び意味への類似が障礙を起させるものである事が假定

されるのである。不作法な人々が非常に好む言葉や句の歪みは無害な、何でもない機會に際して禁ぜられて居る事を思ひ起させる事を目的として居るのである。而もこの遊戯は非常に屢々行はれるものであり、從つてこれが故意にではなく、或は又意志に逆つて實行されたとしても不思議はない譯である。Eischeissweibchen を Eiweissscheibchen（蛋白質切片）の代りに、（譯者註＝Weibchen は小さい女或は細君を意味する）Apopos Fritz を Apropos の代りに（譯者註＝Apropos は多分 a propos）「序でに云へば」とか「時に」とか云ふ意味を持つて居る。）の事であらう。Fritz は男の名である。Apopos Fritz が何を諷示するかは譯者には判らない。唯 popo に「お尻」の意味がある事を述べるに止めよう。）Lokuskapitäl を Lotuskapitäl の代りに（譯者註＝Lotuskapitäl は Lotus（蓮）の花を柱頭に飾りつけたものである、Lokuskapitäl はよく判らないが Lokus には局部の意味があり、陰部か何かの隱し言葉ではないかと思はれる）用ひるが如きはこれである。多分又 Alabüsterbachse（Alabasterbüchse）der hl. Magdalena（譯者註＝聖マグダレナは基督に救はれた娼婦であり、基督が礫になつてから基督の傷に香油を塗りつけ、後に自分の髮の毛でそれを拭つたと云ふ話がある。Alabasterbüchse は多分その香油を入れた匣の事であらう（Alabaster は羅典語では香油を入れる瓶の様なものを意味する事になつて居る）處で「話し損ひ」の結果出來た Alabüsterbachse は何を諷示するものかは譯者に

は全然理解出來ないのを遺憾とする。强ひて「こじつけ」て見るならば Büste には胸の意味があり、女の乳房でも暗示するものではあるまいか。）などもこの範疇*に屬するものである。

＊ 私の婦人患者の一人に病狀としての「話し損ひ」が非常に永く續いた。この「話し損ひ」は ruinieren（衣類を破り汚す）なる言葉を urinieren（小便する）なる言葉によつて置き換へる小兒の惡戲に原因して居る事が判る迄存續したのであつた。――この「話し損ひ」の技巧によつて、野鄙な許されない言葉を自由に用ひようとする誘惑には『アブラハムの所謂「過度の代償の傾向」(überkompensierende Tendenz)による失錯作業に關する觀察』(Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse VIII 1922) が關聯して居る。固有名の最初の綴を吃音によつて二度重る輕い傾向のある一婦人患者は Protagoras なる名を Protragoras に變化した、その少し前彼女は Alexandre の代理に A――alexandros と云つた、問診の結果彼女は子供の時に初音の綴なる A及び Po を繰返す惡習を養つた事が判つたのであつた。この兒戲から子供の吃音がはじまる事は稀ではないのである。Protagoras なる名に於て彼女は最初の綴の r を落して Po―Potagoras と發音する危險を感じたのであつたがこれに對する防禦をして彼女はこの r を痙攣性に固執し尙ほ一つの r を第二の綴に挿入したのであつた。これと似た有樣に於て彼女は他の場合に Parterre（土間）及び Kondlenz（弔慰）なる語を Partrerre 及び Kodolenz に變化した。それは彼女の聯想に於て手近にある Pater（Vater）（父）及び Kondom（サツク）なる言葉から逃避するためであつた。アブラハムの他の一患者は Angina（扁桃腺炎）と云ふ語の代り

にいつも Angora（アンゴラ）と云ふ傾向ある事を自供した。多分 Angina の代りに Vagina（ヴァギナ）（膣）と云ふ誘惑を恐れる爲である。從つてこれら「話し損ひ」は歪みを起させる傾向よりも防衞の傾向の方が優つて居る事によつて成立するのである。そしてアブラハムはこの過程と強迫觀念性神經症の症狀形成との類似を注意して居るが之は尤もなる事である。

Ich fordere Sie auf auf, das Wohl unseres Chefs aufzustossen（譯者註＝aufzustossen は anzustossen の「話し損ひ」であり、話し手は「諸君、私共の上役の健康を祝して乾杯しませう」と云はうとしての「云ひ誤り」である、そして aufstossen は「嘔吐を催す」「むかつく」等の意味を持つ語である）は故意の戲詩の餘響としての故意ならぬ戲詩に外ならないものである。若しも私が上役であつて、自分の御祝に祝賀演說者がこの「云ひ誤り」をしたとするならば、私は羅馬人が凱旋したる皇帝の兵士をして、皇帝に對する內的の抗議を諷刺歌によつて聲高くあらはさしめた故智に思ひ及ぶのである。——メーリンゲルは自分自身の事を物語つて居るが、彼は或る團體に於て最年長者として親しみをあらはす尊稱なる Senexl 或は altes Senexl と呼びかけられてゐた或人に向つて Prost, Senex altesl と云つたのであつた。彼はこの「云ひ誤り」に驚愕したと云ふのである。私共は Altesl が alter Esel（年老いたる馬鹿者）なる罵詈の言葉に非常に近い音を持つて居る事を想ひ起す時、彼の感情を說明する事

が出來るであらう。老人に對し畏敬——子供の時に引戻して云へば父に對する畏敬——の毀損に對して大なる内心の罰が課せられたのである。

私は讀者が何物によつても證明する事の出來ないこれらの說明と、私自身が蒐集し分析によつて說明した諸例との價値の差を忽諸に附せざらん事を希望する。然しながら私が靜かに外見上單純に見ゆる「話し損ひ」の例も、企圖されたる關係の外に存する半ば抑壓された觀念による障礙に歸し得ると云ふ期待に固着する時、メーリンゲルの注意に値する言が私をその方へ誘惑するのである。この學者は何人でも自分が「話し損ひ」をした事を承認する事を欲せない事は注意すべき事であり、非常に聰明にして正直なる人々であつて、而も彼等が「話し損ひ」をしたと告げられる時に、侮辱された樣に感ずるものがあると云つて居る。私はこの主張をメーリンゲルが「何人でも」と云ふ字によつて云ひあらはして居る程に普遍的に取らうとは思はないのである。然しながら「話し損ひ」の知せに關係して起る、明かに羞恥の性質を持つ痕跡的の感情は、それだけの意義を持つて居るものである。この痕跡的感情は、私共が忘れられたる名を思ひ出し得ない時の憤懣及び外見上無價値なる記憶の保存される事に對する驚歎と同等に取扱ふべきものであつて、いつもこの障礙の成立に一つの動機が參加して居る事を指示するものである。

名を捩ぢ歪める事は、これが故意に起る場合には侮辱に相當し、故意ならずして現れる多數の場合に於ても、同じ意味を持つものと見てよからう。マイヱルの報告に依ると、ある時 Freud(フロイド) の代りに Freuder(フロイデル) と云ひ誤り ――何故なら 彼はその後間もなく Breuer(ブロイエル) なる名を出したから(三十八頁)―別の時に Freuder ― Breudsche Methode (フロイデル―ブロイド氏法) と云つたと云ふ (二十八頁) かの男は同じ專門の人ではあつたが、この方法に特に有頂天にはなつてゐなかつたのである。確かに外に說明のしやうのない名の歪みの一例を私は後に「書き損ひ」の條下に報告しよう。*

* 貴族は彼等が診斷を乞うた醫師の名を特に屢々歪める。之によつて彼等が醫師を鄭重に過するに不拘心中これを輕視して居る事を推論して可なりと云ふ事が出來る――私は此處に當時トロントに居たドクトル・イー・ジョーンズによつて書かれた私共と同じ題目の英文論說(The Psychopathology of Every day Life. American Journal of Psychology. Oct, 1911)から「名の忘却」に就ての二三言を引用しよう。「他人が自分の名を忘れた事を見出した場合――特にこの人が自分の名を覺えて居る事を希望し、或は期待してゐた場合――に起り來る不快の感を防ぎ得る人は少ない、彼等は熟慮せずして直ちに次の樣に考へる。「若しも自分がこの人に一層深い印象を殘してゐたならばこの人は自分の名を忘れるやうな事はなかつたであらう。何故ならば名と云ふものは人格の本質的要素をなすものであるからと。」一方に於て人が期待してゐなかつた場合に、高貴な人から自分の名でもつて話しかけられた場合程氣持のよく感ぜられる事は少ない。人を處過する技術に於ける名人

なるナポレオンは、一八一四年の不幸なる行軍に於て、この方向に於ける彼の記憶の驚歎すべき實驗を提供した。彼がGraonne(グラオンネ)の附近の或る都市にゐた時、其處の市長なる De Bussy(ド・ブッシー) を約二十年前或る聯隊に於て知つてゐた事を思ひ出した。その結果は有頂天になつた、デ・ブッシーが無制限なる獻身に於て彼のお役を勸めたのであつた。これに一致して人が、或人の名を忘れたかの如き態度を取る事程その人を侮辱するによい手段はないのである。人はこれによつてその人が名を覺えるだけの骨折さへも必要としない程無關係であると云ふ事を表示する事になるのである。この技巧は文學上にも一定の役割を演じて居る。例へばツルゲネフの「煙」(Rauch)の中の或る箇所に次の事が書かれて居る。「あなたにはバーデンがまだ御愉快ですか――リトヴィノフさん」(Sie finden Baden noch immer amüsant, Herr――Litvinov) ラトミロフ はいつもリトヴィノフの名を考へ出さねばならないかの樣に躊躇しつつ話すのを例とした。之によつて彼は挨拶の際に帽子を取る時の傲慢なる態度と同樣に、リトヴィノフの自尊心を傷けようと欲したのであつた。「父と息子等」(Vater und Söhne) の中の他の箇所でツルゲネフは次の樣に書いて居る。「知事は Kirsanov(キルサノフ) 及び Bazarov(バザロフ)を舞蹈會に招待した。そして數分時の後にこの招待の言葉を繰返した。その際彼は彼等を兄弟と見做して居る樣な態度を示した。そして Kisarov(キサロフ) と發音した。この場合に於て前に招待の辭を述べたことを忘れた事及び二人の青年を別にしておく事が出來なかつた事が、正に怒らせる要素の連續を意味して居る譯である。名を歪める事は「名の忘却」と同じ意義を持つものであつて忘却への第一歩である。」

これらの諸例に於ては、障礙を起す要素としてその瞬間に於て話す人の企圖に合致しないものとして押し除けておかるべき批評が干渉するのである。

逆に名の補充、知らぬ名の獲得、名の云ひ損ひによる同一視等は、その瞬間に於て何等かの理由の下に背景に止まるべき筈のものの承認を意味するものである。この種の一つの經驗をフェレンチーは彼の學校時代から取つて物語つて居る。

『中學一年生の時、私は私の生涯に於て初めて公衆の前（即ち全級生徒の前で）一つの詩を朗讀しなければならなくなつた。私は十分に準備してゐた。而も朗讀しはじめると直ぐに笑ひの一齊射擊によつて邪魔されて吃驚した。教授は次いでこの奇妙なる歡迎の理由を説明した。即ち私は詩の標題なる「遠方から」(Aus der Ferne) は正しく云つたが、作者としては實際の詩人の名を云はず、自分自身の名を云つたのであつた。詩人の名は Alexander (Sándor) Petöfi であつて私自身と同じ名（姓氏の前の）をもつて居る事がこの取違へを促したのであつた。然しながらその元來の原因は確かに私が內心深くの希望に於て、當時この讚美されて居る詩豪と自分を同一視して居た事にあつたのである。私は意識的にも彼に對して崇拜に近い愛と尊敬とを持つてゐたのであつた。勿論この失錯作業の背後には、不快なる功名心（功名凝結觀念）(Ambitionskomplex) が隱れてゐたのである。』

名の取り違ひによるこれに類似の同一視の現象は一人の若い醫師によつて私に報告された。この醫師はおづおづと又非常に敬意を表しながら有名なる Virchow（ヴィルヒョウ） に向ひドクトル・ヴィルヒョウなる名を以て自己紹介をした。教授は驚いて彼に向ひ「ああ、あなたもヴィルヒョウと仰しやるのですか」と尋ねたと云ふのである。私はこの若い野心家がどう云ふ風にこの「云ひ損ひ」を辯解したか、即ち偉大なる名と列べて、彼自身の名は消失してしまふ程小さくなつたと云ふ衒つた言譯を彼が見出したけれども彼が何時かは自分もヴィルヒョウの様な偉人になり度いと思つて居るのであるから、樞密顧問官閣下も彼を輕々しく取扱つて呉れないやうに希望すると云ふだけの勇氣を持つたかどうかは私は知らない。兎も角もこの兩方の考への内の一方——或は多方面同時にこの若い男をして自己紹介に際して混亂せしめたものと思はれるのである。

非常に個人的なる動機からして私は次の例にも類似の説明が應用され得るかどうかと云ふ事は未決定のままに置かねばならないのである。一九〇七年アムステルダムに於ける萬國會議に於て、私の「ヒステリー」學説が活潑なる論議の對照となつた。私の最も強硬なる敵の一人は、私に對する罵詈に於て彼自らを私の立場におき、私の名に於て話すやうな有樣に於て度々話したと云ふ事である。例へば彼は「ブロイエルとフロイド」と云はんと欲した時に「ブロイエルと私が人も知る如く説明した云々」

と云つたのである。この敵の名は私の名との間に少しも音の類似を示さないのである。私共はこの例及び多數の他の「話し損ひ」の場合に於ける名の取違への例に依つて「話し損ひ」は類音による助力はなくとも、內容上の關係の補助によつてあらはれ得る事を敎へられるであらう。

他の遙かに意義深い場合に於ては自己批判、自己の發表に對する內的抗議が「話し損ひ」のみならず企圖されたる事に對する正反對の事による補充を要求する。この場合には或る斷言の文句が如何にしてその斷言の企圖を除き又如何にして「話し損ひ」が內的の不正直を暴露させるかと云ふ事を知つて私共は驚くのである。この場合には「話し損ひ」は身振狂言的なる表情法となるのであつて勿論屢〻私共が云はうと欲しなかつた表現に對しては自己をあばく手段となるのである。例へば婦人との關係に於て所謂正常的なる交際を好まない或男が、仇つぽいと云はれて居る少女について、その對話に於て次の樣な言葉を以て話を中斷した樣な場合はそれである。彼は「私との交際に於ては彼女は Koettieren は旣に捨ててしまつてゐたであらう」と云つたのである。云はんと欲した Kokettieren（媚態を作る事）なる言葉に作用してこれを變化させたものは、他の言葉なる Koitieren（交接する事）である事はこの場合疑ひの餘地はないのである。或は次の例に於けるが如きもそれである。「私共に一人の叔父があるが、私共がちつとも彼を訪ねなかつたので、數箇月來彼は非常に感情を害してゐた。叔父

が新居に轉じたのを機會に、私共は久し振りに彼を訪問した、彼は外見上非常に喜んだ、そしてお別れ際に非常に感動に滿ちて「今後私はあなた方には今迄よりももつと稀に（seltener）逢ひ度いものですね」と云つた。

偶然に惠まれて、話の材料は屢〻祕密暴露の破壞的作用或は諧謔の滑稽的なる効果を有する「話し損ひ」の實例を成立せしめる。

次に擧げる Dr. Reitler（ドクトル・ライトレル）の觀察報告せる例の如きはそれである。

この新しい綺麗な帽子は勿論あなた御自身でお飾りになつたのでせうね？」と一人の婦人が驚歎したやうな語調で他の婦人に云つた。（但し彼女は aufgeputzt（飾りつける）と云ふ處を aufgepatzt と云つたのであつた）彼女は云はうと思つた讃辭を續ける事が出來なかつた、何故ならば心ひそかに持つた批評「帽子の飾りつけ方は橫柄である（Patzerei）」と云ふ事があまりにも露骨に、この好ましからぬ「話し損ひ」にあらはれ、世間竝の讃辭が凡て本當らしくなくなつてしまつたからである。

次の例に於ても批評は稍〻穩當ではあるが明確である。

「或る婦人が知人を訪問した。そしてその人の言葉數の多い迂遠な話に飽きて辛抱しきれなくなつた。總に彼女は辭去すべく立上がつた。彼女は自分について前房に出て來たこの知人から更におしやべり

によつて引止められ、ついで愈々辭去しようとして扉の前に立ち更に傾聽しなければならなかつた。知人終に彼女は Sind Sie im Vorzimmer zu Hause? なる問によつて知人の話を遮つたのであつた。知人の吃驚した顏付によつて彼女は「話し損ひ」した事を認めた。彼女は前房（Vorzimmer）に於ける長話にあきあきして「あなたは午前（Vormittag）はお家ですか」と云ふ問によつて話を打ち切らうとしたのであつてかくして、更にここに滯留する事に對する苛立ちをあらはしたのであつた。

Dr. Max Graf の經驗した次の例は、自己意識への警告に一致して居る。

記者協會 Concordia の總會に於て、いつも金に困つて居る若い協會員が猛烈なる反對演說をなし、彼の興奮に於て Vorstands-oder Ausschussmitglieder（理事或は委員）諸君と云ふ代りに Die Herren Vorschussmitglieder（貸付係員諸君）と云つた。處でこの貸付係員は金錢を貸付ける權利を持つて居るのであつた。そしてこの若い演說者もまた金錢借受けの願書を提出してゐたのであつた。

Vorschwein の例に於て私共は罵詈の言葉を抑壓しようと骨折る時に「話し損ひ」が生じ易いのを見た。この場合に私共はこの方法に於て私共の胸をすかす譯である。

不器用な使用人との交涉に於て、動物學に脫線しようと企てた寫眞師は、一杯に入つて居る大きな皿の水を流さうとして、勿論その半ばを床の上に撒けた徒弟に對して「人間よ、先づその一部分を掬

ひ取りなさい」(Aber Mensch, schöpsen Sie doch zuerst etwas davon ab!) と云つた。(譯者註＝但し彼は abschöpfen (掬ひ取る) の代りに abschöpsen と云つたのであつて Schöpse は去勢羊、愚人を意味するのである)。その後間もなく彼は不注意の爲に大切なる寫眞原板十二枚を危險に瀕せしめた女助手に對し、永い罵詈の經過中に於て Aber sind Sie denn so hornverbrannt……(然しお前はそんなに角を燒かれて居るのか……(そんなにお前は慌てて居るのか……)) と云つた。

次の例は「話し損ひ」による自己の秘密漏洩の重大なる場合を示すものである。附隨せる一二の事情は精神分析中央雜誌*第二年號所載ブリルの報告をそのまま此處にあらはす事を正當にする。

* Zentralbl f. Psychoanalyse では誤つてこれがイー・ジョーンズに歸せられて居る。

『或晩私は Dr. Frink と散歩に出かけ、紐育精神分析學會の一二の要件に就て語り合つた。私共は同業者なる Dr. R に出逢つた、この人には私は數年來逢つた事もなく、彼の私生活については何も知らなかつた。——私共は再會を喜び合ひ、私の申出によつて或る「カフェーハウス」に入り二時間の間活潑に話し合つたのであつた。彼は私の事を詳しく知つて居る樣であつた。何故なれば通り一遍の挨拶の後に、彼は私の小さい子供の事をきき出し、私に向つて彼が時々共通の友人から私の事を聞いて居ると云ふ事、私の仕事に就ては醫學雜誌で讀んで興味を感じて居ると云つたからである。私は彼

が結婚して居るかと尋ねた時、彼はこれを否定し、自分の様なものは結婚する必要がないんだと附け加へた。

「カフェーハウス」を去るに臨み、彼は急に私に向ひ「私はあなたが次の様な場合にはどうなさるか知りたいものです。私は離婚訴訟に共犯者として捲き込まれて居る一看護婦を知つてゐます。或る夫人がその夫に對して離婚の訴訟を提起し、看護婦を共犯者と稱し、そして彼が離婚訴訟に勝ちました。(…er bekam die Scheidung)」と云つた。私は彼を遮つて「あなたは夫人が離婚を得たと云はうと欲するのでせう (Sie wollen sagen, sie bekam die Scheidung)と云つた。彼は直ぐに訂正して「勿論夫人が離婚をかち得たのです」と云ひ、尙ほ看護婦がこの訴訟と醜聞のために非常に興奮し、酒を飲みはじめ非常に神經質になつたと云ひ、どう云ふ風にして彼女を治療すべきかと云ふ助言を私に求めた。』

＊私共の(亞米利加の)法律に從へば、夫婦の内一方が姦通をした事が證據立てられた場合にのみ離婚が宣告される。卽ち、離婚は欺かれた方にのみ許可される。

『私はこの「云ひ損ひ」を訂正するや否や、彼にこの「云ひ損ひ」を說明せん事を求めた。然しながら私は例の呆れた答へを得たのであつた。彼はどんな人でも「話し損ひ」はするものであり、それは偶然な事であり、その背後には何もないと云つた。私は反駁して「話し損ひ」には凡て根據がなくては

ならぬ事、若しも前に彼が結婚してゐないと云つてゐなかつたならば、私は彼自身がこの話の主人公である事を信ぜしめられたであらう。何故なればさうすれば彼ではなく、彼の妻が訴訟に敗れ、従つて彼は私共の國の婚姻法によつて扶助料を支拂ふ必要なく、紐育市に於て再婚し得ると云ふ願望によつてこの「話し損ひ」が説明されるからであると云つた。彼は頑強に私の推察を斥けたのであつた。然しながら同時に非常に強い感情的反應、明かなる興奮の徴候、ついでは哄笑によつて益々私の推測を強からしめた。科學上の闡明の爲に眞實のことを云つて呉れと云ふ私の要求に對して私は次の答を得たのであつた。「あなた方が若し虚言を云つて欲しくないならば、あなた方は私の童貞を信じなくてはならないのです。從つてあなたの精神分析的説明は根本から間違つてゐます」と――尙ほ彼は些細な事を一々注意するやうな人は危險であると附け加へた。急に彼は他の會見の約束を思ひ出して、辭去した。』

『私共兩人（ドクトル・フリンクと私）は、然しながら彼の「話し損ひ」に就ての私の説明を確信した。私は證據かそれとも反證を取調べによつて得ようと決心した。――數日の後私はドクトルRの舊友なる某隣人を訪問した。この人は私の説明を完全に確かめる事が出來た。この訴訟事件は數週間前に起り、看護婦は共犯者として召喚されて居た――ドクトルRは今ではフロイドの心的機制の正しい

事を堅く信じて居る。

自己を裏切る事はオツトー・ランクの報告して居る次の例に於ても疑ひの餘地はないのである。

少しの愛國心も持合せなく、また彼の子供等を自分が餘計な事だと思ふこの感情を持たない樣に養育したいと思つてゐた或る父親は、彼の子供等が或る愛國的示威運動に參加した事を非難し、息子等が叔父さんもこれに參加した事を引合ひに出したのを斥けて次の樣に云つた。「お前達はこの叔父さんに見習つてはならないぞ、彼は Idiot（白痴者）なんだから」と。父親のこの異常なる語調に驚いて居る子供等の顏を見て、彼は自分が「云ひ損ひ」をした事に氣がついた。そして辯解するやうに彼は云つた。私は勿論 Patriot（愛國者）と云はうと欲したのであつた」と。

ヨット・シュテルケの（前掲書）の報告して居る「話し損ひ」は對話相手方からも自己の裏切りとして說明された。そしてこの「話し損ひ」に就てはシュテルケは適切であり、而も說明の任務以上に出づる考へを附け加へて居る。

或る女齒科醫がかつてその姉妹との間に、いつか一度姉妹の二本の臼齒の間に接觸があるかどうか（卽ち臼齒がその側面を以て互ひに相接觸して居り、從つて食物の殘物がその間に止まり得ない樣になつて居るかどうか）を診て遣らうと約束してゐた。今やこの姉妹は自分がこの診察を非常に永く待

損ひ」をし、今一度この補充を用ひる事によつて私の推定を確かめたのであつた。彼の答へは次のものであつた。Das erscheint mir doch zu jewagt（譯者註＝gewagt の「云ひ誤り」であつて、彼は「それはあまりにこじつけである」と云はうとして云ひ誤つたのである。）私は彼が「話し損ひ」をした事を注意した處、彼は私の判斷を承認するに至つた。

激しい議論の最中に話の企圖が逆になる様な「話し損ひ」が、議論をして居る二人の内の一方に起る場合には、この「話し損ひ」は直ちに彼を相手に對して不利な立場におくのである。何となれば相手方は自分のよくなかつた立場を利用する事を怠らないからである。

この場合に於て、人は一般に他の失錯作業同様に、「話し損ひ」に對しても私がこの書に於て主張して居ると同様なる解釋をする事は明かである。而も彼等は理論に於てはこの解釋に賛成せず、又彼等は事が自己に關する場合には、失錯作業を寛容する事に伴ふ利益を捨てたがらないのである。決定的の瞬間に於ける斯くの如き話の失錯が、必然惹起する笑ひと嘲笑とは一般に認められて居る因襲、即ち、「話し損ひ」は舌の誤り（失言）（Lapsus linguae）であり、心理學的に無意義のものであると云ふ考へ方に對する反證を意味するものである。獨逸帝國內閣總理大臣ビューロウ侯その人は、一九〇七年十一月彼の獨逸皇帝擁護演說の文句が「話し損ひ」によつて逆になつた時に、この異議申立て

たねばならなかつたと苦情を云ひ、そして冗談に「今では彼女は多分同僚をば治療するであらうが、彼女の姉妹はまだまだ待たなくてはならない」と云つた。女齒科醫は姉妹を診察し、實際に小孔を一方の臼齒に發見して云つた。「私はこんなに悪いとは思はなかつた。私はあなたが Kontant（現金）を持つてゐない――Kontakt（接觸）を持つてゐないだけだと考へたのでした」。と――姉妹は笑ひながら叫んだ。あなたがあなたの金を拂ふ患者よりも遥かに永く私を待たせて置いたのは、あなたの慾深の爲だと云ふ事が判つたでせう？」と。――

（私は勿論彼等の思ひ付きに私の思ひ付きを加へ、それから結論を引出すべきではないが、この話し損ひの事を聽くに際し、私の考慮の進行は直ちにこの愛すべき怜悧なる二婦人は未婚者である事、及び若い男と餘り交際しないと云ふ事に向つて行つた、そして私は彼女等がもつと金（Kontant）を持つて居たならば、若い男子等ともつと接觸（Kontakt）の機會を多く持つたであらうと云ふ事を私自身に問うて見たのであつた。）

テオドル・ライク（前掲書）が發表して居る次の「話し損ひ」の例も自己の裏切りの價値を持つて居る。

『或る若い娘が、彼女に同情のない若い男と婚約しなければならなかつた。この二人の若い人々を接

近させる爲に彼等の兩親は會合をなし、この會合には未來の花嫁花婿も參加した。この若い娘は彼女に對して非常に慇懃に行動した彼女の求婚者をして、彼女の嫌惡を認めしめないだけの自制力を持つてゐた。然しながら彼女の母が彼女に對し、この若い男が氣に入つたかどうかと尋ねた時に、彼女は丁寧に次の如く答へた。Gut. Er ist sehr liebenswidrig「はい、彼は非常に厭な男です」と。(彼女は liebens würdig(愛すべき親切なる)ものであると云はんと欲したのであつたが、內心嫌惡感が裏切つて liebens widrig と「云ひ損ひ」をしたのであつた。

オツトー・ランクが諧謔的「話し損ひ」として記述して居る「話し損ひ」の例もこれに劣らぬ價値あるものである。

『逸話を好んで聽き、又相當な贈物さへ貰へば不義の求愛に對しても之を辭せないと稱せられて居る或る既婚の女に向ひ、彼女の寵愛を求むる若い男が、魂膽があつて昔から知られて居る次の話をした。二人の商賣友達の內の一人が、仲間の稍〻情の冷い妻の愛を得ようと努力した。終に彼女は千「グルデン」の贈與金に對して彼に許す事になつた。さて彼女の夫が旅行に出掛けようとする時に、彼の仲間は彼から千「グルデン」を借り、翌日それを彼の妻に返却する事を約した。勿論この男はこの金額を友人の妻に對する想像的なる戀の報酬として與へるのであつて、結局この妻は歸宅した夫が千「グ

ルデン」を彼女に要求する時には惡事を發見され、尙ほ氣の毒にも罵倒される譯である。――若い男がこの話を物語り、誘惑者が彼の仲間に向つて「私はその金を明朝あなたの奥さんにお返ししませう」Ich werde das Geld morgen deiner Frau zurückgeben と云ふ處迄達した時に、彼の傾聽者は意味ありげな次の言葉で彼を遮つたのであつた。「もしもし、あなたはそのお話を旣に以前にお返し(zurückgegeben)……いえいえ、失禮、私はお話し(erzählt)になつたのではありませんか、と云はうと思つたのでした」と。彼女は同じ條件の下にその事を許すと云ふ承諾を直接に云はずして、而も非常に明かにあらはした事になるのである。(Internat. Zeitschrift für Psychoanalyse, I, 1914)

V. Tausk(フワウ・タウスク)は「祖先の信仰」なる題下に無害なる轉機を取つた、この種の自己裏切りの好例を報告して居る。A君は次の物語りをした。『私の嫁は基督敎徒であり、猶太敎に入る事を好まなかつたので、私は結婚する爲には猶太敎から基督敎に入らねばならなかつた。私に信仰を換へる事に就て、内的抵抗がないわけではなかつた。然しながら目的は信仰の變化を辯護するやうに見えた。殊に私は別に宗敎上の確信を持つてゐた譯ではなかつたので、猶太敎への外面的所屬を拋棄すればよいだけであつたのである。それにも拘らず私はその後不相變猶太敎を奉じて居り、私の知人で私が洗禮を受けた事を知る人は少なかつた。この結婚から二人の息子が出來、彼等は基督敎の洗禮を受けた。子供等が

相當に大きくなつた時、彼等が學校に於ける猶太人排斥主義の影響を受け、つまらぬ理由から父に背く様な事があつてはならぬと云ふ譯で、彼等が猶太人の出である事を敎へてやつた。數年前私は當時小學校に行つて居た子供等と一緒にDに於ける避暑地に行き、或る學校敎師の家庭に泊り込んだ。或日私共は、平常は非常に親切なこの家の人々とおやつ(午後の中食)に坐つてゐた時、宿の女主人は彼女の避暑客が猶太人の出である事を全然知らなかつた爲、猶太人に對する實に鋭い攻擊をやつた。私は私の息子等に確信の度胸の手本を示すために勇敢に事情を宣言すべきであつた。然しながら一面に於て、斯くの如き白狀に續いていつも起る不快なる論判を恐れた。尙ほ又私は若しも宿の人々が私共の猶太人である事を知つて、私共に對する態度を變ずる様な事があつたならば、私共は折角見つけた好い宿泊所を捨てねばならぬ事になり、私にも子供等にも、さらでだに短い休養期を臺なしにしなければならないかも知れない事を恐れた。然しながら私は子供等が永くこの話に加はつてゐた場合には、率直に、無邪氣に、重大なる結果を有する事實を暴露するかも知れないと考へたので、私は子供等を庭の方に遣り、仲間から遠ざけようと思つた。そして Geht in den Garten Juden——(お庭へ出なさい、猶太人——)と云ひ、素早く Jungen(若い人たちよ)と訂正した。私はこれで失錯作業によつて私の確信の度胸をあらはした事になるのである。他の人々はこの「話し損ひ」に何等の意義をも

與へなかつた爲、この「話し損ひ」からは何等重大なる結果も招來されなかつた。然しながら私は祖先の信仰は、自分が息子であり、又子息を持つ場合には罰なしにはこれを否定する事が出來ないものであると云ふ敎訓を得た」と。(Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse, IV, 1916)

「話し損ひ」の次の例は決して無害には濟まなかつた。この例は裁判官がその訊問の途中に於て、この蒐集のために書きつけて置いて吳れなかつたならば、私は發表しなかつたであらう。

家宅侵入を以て訴へられたる軍人が次の樣に云つた。「私はそれ以來此 militärischen Diebsstellung (譯者註 = militärische Dienststellung (軍務) の「云ひ誤り」であつて Dieb は泥坊を意味する)から免ぜられてゐないから現在尙ほ軍籍にあります」と。

「話し損ひ」は異議のある際に精神分析作用中の醫師に大いに好都合なる事を確かめる手段として用ひらるる場合には愉快に作用するものである。私の患者の一人に於て、私は一つの夢を判斷する必要に迫られた。その夢には Jauner(ヤウネル) と云ふ名があらはれたのであつた。夢を見た本人は、この名の人を知つてはゐたが、何故にこの人が夢の關係の中に取り入れられたかと云ふ事は判らなかつた。其處で私は (Gauner(ガウネル) (無賴漢) と云ふ罵詈の言葉と音が似通つて居る名であるから出て來たのではないかと云ふ推測を患者に敢て告げた處、彼は急に又强くこれに反對した、然しながらその際に、彼は「話し

によつてその狀態を救はうと努力した。

『さて現在卽ちウイルヘルム第二世皇帝の新時代に關しては私が一年前に云つた事を繰返し得るのみである。卽ち皇帝を取卷いて居る責任ある顧問(verantwortlicher Ratgeber)連の事を云々する事は……(この時聲高く Unverantwortlicher (無責任なる) と叫ぶものあり)……無責任なる顧問連の事を云云する事は不當であり、不正である。失言を陳謝する』(喝采)。

然しながらビューロウ侯の文章は否定詞の重複によつて多少不透明にされた。尙ほ演說者に對する同情、彼の困難なる立場に對する顧慮等は、この「話し損ひ」をそれ以上彼に不利に利用される事がない樣にした。處が一箇年後、同じ場所に於て別の人に事が一層まづく行つた。この人は皇帝に對する腹藏なき表明を促さうと欲した。而もその際意地惡い「云ひ損ひ」によつて、彼の忠義な胸の中にある他の感情を思ひ起させたのであつた。

ラットマン(獨逸國民黨)『吾人は上奏の問題に關しては議會の慣例の地盤の上に立つて居る。これによつて議會は斯くの如き上奏を皇帝に奉る權能を持つて居る。吾人は獨逸國民の統一したる思想と希望は、この事件に於ても一致したる表明に到達し得るものと信ずるのである。而して吾人がこの事を君主の感情を十分斟酌するが如き形式に於てなし得るならば、吾人はこの事を rückgratlos (脊骨

なしに)になすべきである。(數分間續く嵐の如き喝采)諸君、rückgratlos ではなく rückhaltlos に(腹藏なく)と云ふのであつた。(喝采)而して斯くの如き腹藏なき表明を、この困難なる時に際して皇帝が御採用になる事を私は希望する』

一九〇八年十一月十二日發行の Vorwärts は、この「話し損ひ」の心理學的意義を明かにする事を怠らなかつた。「反猶太系議員なるラットマンが、質問第二日に於て、嚴肅なる熱情に於て彼及び彼の友の皇帝に對する rückgratlos なる意見を表明せんと欲すと脫線して告白したる時程帝國議會の一議員が思はざる自己非難に於て、彼及び議員の多數の君主に對する態度を適切にあらはした事は未だ嘗てないであらう。各方面から起つた嵐の如き喝采はこの氣の毒な議員のその後の言葉を窒息せしめたのであつた。しかも彼は語を強めて rückhaltlos と云はうと思つたのだと吃りながら辯解した」と。

私は「話し損ひ」が、正に氣味惡い豫言の特徵を得た尙ほ一つの例を附加しよう。「W市に於ける成金の內でも最も新しい成金の一人であり、兎も角も最も富裕であり、年齡に於ても最も若い人である銀行家のXが、短期間續いた競爭の後に×××銀行の最多數の株劵を持つ事になり、その結果注意に價する株主總會に於て、この銀行の年とつた頭取であり、古い部類に屬する財政家が再選されない

で、若いXが銀行の頭取になつた事が一九二三年新春の萬國經濟界の注意を喚起した。取締役の一員なるドクトルYがなした舊頭取の送別演說に於ける繰返しての痛い「話し損ひ」が、二三の聽者に氣がついたのであつた。ausscheidenden Präsident（退職された頭取）と云ふべき處に dahinscheidenden Präsident（別れ去る（死去する）頭取）と云ふ言葉が度々出て來た。——ついで再選にもれたこの舊頭取が、この總會の數日後に死亡すると云ふ事が起つたのであつた。尤も彼は旣に八十歲を超えてゐた。（ストルフェル）。

話す人の祕密漏洩よりも、舞臺の外に居る聽者の啓蒙を目的とする「話し損ひ」の好例が「ワルレンスタイン」の「ピッコロミニー」第一幕五場に出て居り、この方法を用ひた詩人（シルレル）が「話し損ひ」の心的機制と意味をよく知つてゐた事を私共に示して居る。前の舞臺に於てはマックス・ピッコロミニーは非常に熱情的に公爵の味方をし、彼がワルレンスタインの令孃を伴つて、陣營に旅行して行く途上に於て知つた平和の喜びに有頂天になつてゐた。彼は自分の父及び宮廷よりの使者なるQuestenberg を非常なる驚愕に於て殘し去つた。かくて第五場が次の如く進んで行くのである。

クュステンベルグ。困つた事だ！　さうなつたのか？　我が友よ、私共はこの謬想に於て彼を去らしめねばならぬのか、そして直ちに彼の眼を開かすべく呼び戻す事は出來ないのか。

オクタヴィオ。（深き瞑想より我に還り）彼は既に私の眼を開かしめた。そして私は私を喜ばしむるもの以上のものを見るのです。

クェステンベルグ。我友よ、何ですつて？

オクタヴィオ。呪ふべきこの旅行よ！

クェステンベルグ。何故？それは何の事ですか？

オクタヴィオ。さあいらつしやい！私は直ぐにこの不幸なる足跡を追はねばならない。そして私自身の眼を以て見ねばならない――いらつしやい――（彼を連れ行かうとする）

クェステンベルグ。どうしたのですか？何處へ行くのです？

オクタヴィオ。（せき立てながら）彼女の處へ（zu ihr）

クェステンベルグ。……の處へ？（zu――）

オクタヴィオ。（自ら訂正しつつ）公爵の處へ！行きませう。云々。

この Zu ihm でなく Zu ihr と云つた些細なる「話し損ひ」は、クェステンベルグが「父が全然の謎を以て自分に話す」事を歎いて居る間に、父が彼の息子が味方した事の動機を洞察した事を私共に示すものである。

「話し損ひ」の詩的利用の他の例をオツトー・ランクはシェークスピアに於て發見して居る。私は精神分析學中央雜誌第一卷第三號によつてランクの發表を引用しよう。

『フロイドが「ワルレンスタイン」に於て示した「話し損ひ」と同樣に詩人が「話し損ひ」(失錯作業の心的機制と意味を熟知し、その理解を聽衆にも前提して居り、詩的に巧みに動機づけられ、技巧的にも非常にうまく用ひられて居る「話し損ひ」の例が、シェークスピアの「ヴェニスの商人」の第三幕二場に存在する。父の意志に依つて彼女の婿選びを富籤によつてするやうに束縛されてゐたPorzia(ポルチイヤ)は、今まで彼女の好まぬ求愛者を偶然の幸によつて逃れて來た。彼女が最後に實際に愛する求婚者、Bassanio(バツサニオ)を見出した時、彼女は彼も又わるい籤を引き當てはしないかと恐れた。彼女は彼がたとひ惡い籤を引いても、彼女の愛を得る事は確かであると非常に云ひたかつた。然しながらそれを云ふ事は彼女の神に對する誓によつて妨げられた。この內的葛藤に於て、詩人は彼女をして好きな求愛者に對し次の樣に云はして居る。

お願ひです待つて下さい。一二日だけ、あなたが籤を引く迄。何故なれば若しあなたが間違つた籤を引いたなら、私はあなたと交際するが出來なくなる、だから猶豫して下さい。

何かが私に云ひます(それは戀ではないけれども)私があなたを失ひたくないと云ふ事を

私はあなたを正しい選擇に導く事は出來るのだが、さうすれば私は神への誓を破る事になるの。ですそれは私は欲しません。さうすればあなたが私を失ふ事になります。
然しながらあなたがさうすれば、あなたは私を罪惡的に望んだ事になり、私は誓を破つた事になるのです。おお、私を見落し。私を二分した汝の眼を呪へ、私の半ばはあなたのものです。他の半ばはあなたのものです…… 私のものだと私は云はうと欲したのでした。然しながら若し私のものであれば、さうすればあなたのものです。即ち全部があなたのものです。

彼女が既に籤引き以前に全然彼のものであり、彼れを愛して居る事を實際に默してゐなければならなかつた爲に。おだやかに暗示したかつた事を詩人を驚歎すべき心理學的の明敏さに於て「話し損ひ」によつて表面に現れしめたのであつて、この技巧に依つて詩人は籤引の結果に對して持つ愛する人の堪へ難き不確實感、及び同じ氣分を持つて居る聽衆の緊張をなごやかにする方法を知つて居るのである。「話し損ひ」に對する私共の解釋が、大詩人から味方をして貰ふ價値があると云ふ興味に於て、私はアネスト・ジョーンズによて發表されたる第三の例を引用してもよいと思ふ。

『オツトー・ランクは疾くに發表されたる論文に於て、シェークスピアが彼のあらはす人物の一人なるボルチアをして「話し損ひ」をなさしめ、これによつて彼女の祕密の考へが注意深い聽者に判つ

た好例を指摘した。私は最も偉人なる英國の小說家なる George Meredith の傑作「利己主義者」("The Egoist")からして類似の例を述べようと思ふ。この小說の脚色を簡單に述べると次の樣である。仲間の人々からは非常に驚歎されて居る貴族なる。Sir Willoughby Patterne は Miss Konstantia Durham と婚約したが、彼女は彼に於て世間に對しては巧みにかくして居る甚しい利己主義を發見し、彼との結婚を避ける爲に Oxford と云ふ海軍大佐と駈落ちしたのであつた。數年後彼は Miss Klara Middleton と許婚になつた。さてこの書の大部分はクララミツドルトンが彼女の許婚の男に於て同樣の眼に立つ特徵を發見した時に、彼女の心に起り來る精神軋轢の叙述にみたされて居るのである。外的の事情と彼女の名譽心は、彼女をその約束に縛り付けたが、一方彼女の約婚の夫は彼女に益々輕蔑すべきものに見えたのであつた。彼女は彼の從兄弟であり祕書である Vernon Whitford——この男と彼女は終に結婚するに至つた——に一部分彼女の祕密を打明けてゐた。然しながらホイツト、フォードはパッターンに對する忠義及び他の動機からして差控へてゐたのであつた。

或る獨白に於てクララは次の樣に彼女の苦惱を語つて居る。「或る氣高い紳士が私の樣な者を見て私を助けて下さるのだつたら！ おお荊棘と藪のこの牢獄から逃れたいものである。私は獨りで私の道をひらいて行く事が出來ないのだ。私は臆病者だ。一つの指圖(Fingerzeig)が私を變化させるであら

ら、私は信ずる。一人の仲間の處に私は逃れる事が出來る。血みどろに搔き裂かれ、輕侮と叫び聲に怒號されつつ………コンスタンチアは一人の軍人に出逢つた。多分彼女は祈願したのであらう。そしてその祈願は聽屆けられたのだ。彼女の行は正しくはなかつた。さりながら、おお、私はその爲に如何に彼女を愛する事よ！　彼の名はハリー・オツクスフォードである………彼女は躊躇しなかつた。彼女は鎖を斷ち切り、明らさまに他の男に乘り移つた。勇敢なる少女よ、汝は私をどう考へるだらうか？　然しながら自分には一人のハリー・ホイットフォードがないのだ、私は孤獨だ！……」

＊飜譯者（フロイド）註、私は最初原文にある beckonig of a finger を Fingerzeig と譯せずに leiser Wink（微かなる合圖）と飜譯しようとした。然しながら Finger と云ふ語を抹殺する事は、この文章の心理學的の精緻を奪ふものである事をさとるに到つた。

彼女がオックスフォードの代りに別の名（ホイットフオード）を用ひた事の突然の認識は、鐵拳の様に彼女を打つた。そして彼女を燃える様に赤々させた。

兩方の男の名がフォード（ford）で終つて居る事實が兩方の名を取違へる事を容易にした事は明かであつて、多數の人々はその十分なる原因と見るであらう。然しながら眞の深い根據は作家によつて明かに述べられて居る。

他の箇所に同じ「話し損ひ」があらはれて居る。この「話し損ひ」のあとに精神分析學及びユングの聯想に就ての研究によつて私共が知つて居り、半ば意識的なる凝結觀念が觸れられる場合にのみ起る自發的躊躇、及び話題の急なる變化が出て居る。パッターンはホイットフォードをかばふ樣な調子で云つた。「間違つた警戒だ（大丈夫だ）善良なる老ヴァーノンは突飛な事の出來る人間ではないんだ」。クララは答へた。「然しオックスフォード……ホイットフォードが……ゐたら……あなたの白鳥が湖水をこちらの方へ進んで來ますよ。彼等は怒つてゐる時には如何に美しく見える事よ！　私はあなたにお尋ねしようと思つて居た事ですが、他の何人かに對する明らさまなる驚歎をまのあたり見て、男達は自然に落膽させられるものでせうか？」サーウィロウビーは急にさとつた。彼はかたくなつて立ちあがつた。

倘ほ他の一箇所に於てクララは他の「話し損ひ」によつてヴァーノン、ホイットフォードと親密にしたいと云ふ祕密の希望をあらはして居る。一人の若者に話しながら彼女は云つて居る。「晩にヴァーノンさんに云つて下さい——晩にホイットフォードさんに云つて下さい云々*」』

* 詩人の企圖に從へば意味があり多くは自己暴露と解すべき「話し損ひ」の他の實例が、シエークスピアのRichard（リチャード） II (II, 2) 及び シルレルの Don（ドン） Carlos（カルロス） (II, 8, Eboli（エボリー） の「話し損ひ」) に存在する。これらの目錄

を完全にする事は容易な事である。

此處に述べたる「話し損ひ」の解釋は、細目に亙つても正しく確める事が出來る。私は「話し損ひ」の極く些細なる又最も手近にある例に於ても、それだけの意味を持つて居り著しい例と同樣に同じ解釋を許すものである事を度々示す事が出來た。私の意志に全然反し、自らの堅い計畫を以てブダペストへの短期間の遠足を企てたその婦人患者は、私に對し彼女が僅か三日間だけ其處へ行くのだと言ひ譯をした。然しながら彼女は「云ひ損ひ」をしてただ三週間だけ (für drei Wochen) と云つた。かくて彼女は私が彼女に向つて不適當であると考へた團體に三日よりも寧ろ三週間の間止まりたいと思つた事を裏切つたのであつた。――或晩私は妻を劇場に迎へに行かなかつた事を辯解せねばならぬ事になつた。そして「私は十時十分過ぎに劇場に參りました」と云つた處「あなたは十時前にと云はうと思つたのでせう」と訂正された。勿論私は十時前 (vor 10 uhr) と云はうと欲したのであつた。十時後では勿論辯解は成立たなかつた。私は劇場の「プログラム」には劇が十時前に終るとかいてあると云はれてゐた。私が劇場に到着した時には、控室は眞暗になつて居り、劇場はからになつてゐた。演劇は早過ぎて終り、私の妻は私を待たなかつたのであつた。私が時計を見た時には十時にまだ五分缺けてゐた。然しながら私は私の場合を家庭に於て一層好都合にするために、十時にまだ十分缺けてゐ

たと云はうと企てたのであつた。殘念ながらこの「話し損ひ」は、私の企圖をだめにしてしまひ、單に私の不正直を暴露する結果になつた。即ち「話し損ひ」は私が自白しなければならなかつた以上に私を自白せしめたのであつた。

此處に於て私共は困惑の狀態に於けるロごもり、或は吃音等の樣に箇々の言葉を傷けずして全體の話の「リズム」や實行を害するだけである爲に「話し損ひ」としては記述されない話の障礙に到達するのである。然しながらこの場合も同樣に內的の精神軋轢が話の障礙によつて表面にあらはれるのである。私は實際陛下に謁を賜るが如き場合、眞面目なる求愛の際、陪審官の前に行はるる名譽と名の辯明演說の場合等、簡言すれば所謂吾人が眞劍になつて居る場合には何人と雖も「話し損ひ」をしないものであると信ずる。著述家の書く樣式の批評の際にすら私共は箇々の「話し損ひ」の根源をつき止める際に缺く事の出來ない說明の原則を持つて行つてよいのであり、又持つて行く事に慣れて居るのである。明晰にして曖昧ならざる書き方は著者が彼自身とぴつたり一致して居る事を私共に敎へるのであり、無理がありうねうねして居る云ひあらはし方であり所謂一つ以上の光明に向つて斜視する表現の仕方が認められる場合には、私共は十分に明かにされてゐない考へ、煩雜にする考へが其處に存する事を認め、或は著者の自己批評の窒息されたる聲を聞*き出す事が出來るのである。

* 心にあることは
はつきりと現れる
そしてそれを表す言葉は
容易に見出される。（ボアロー作詩法）

この書が最初發行されて以來外國語を話す友人や同僚は彼等の國語を話す國々に於て觀察し得たる「話し損ひ」の例に彼等の注意を向け始めた。彼等は豫期の如く失錯作業の法則は言語材料とは無關係である事を見出し、此處に獨逸語を話す人々に於て說明されたと同樣の解釋を繰返したのである。私は此處に數へ切れない程多數の例をあげる代りに唯一例を揭げよう。

ドクトル・エー・エー・ブリル（紐育市）は自分の事に就て次の報告をして居る。「一友人が或る神經病患者の事を敍述し、私が彼を治療し得るかどうかと尋ねた。私は精神分析によつて彼の凡ての病狀を早晩除き得るものと信ずる。それは durable case（永續きのする病例）だから——,curable' case（治療し得る症例）だからと云はうと思ひながら——と云つた」と。（A contribution to the Psychopathology of Everyday Life a'us Psychotherapy, vol. III, Nr. I, 1909.）

最後に私は一定度迄の努力を辭せず、又精神分析に對し未知でない讀者のために一例を附加しよう

と思ふ。この例からして「話し損ひ」を追究する事が精神の非常なる深みに導き得る事が判るのである。

Dr.（ドクトル） L.（エル） Jekels（イエーケルス） は次の例を報告して居る。「十二月十一日。私は或る懇意な婦人から波蘭語で挑戰的に而も傲慢に次の言葉で呼びかけられた。「何故私は本日私が十二本の指を持つて居ると云ふ樣な事を云つたのでせうか?」と、――彼女は私の要求に應じて、この私の出た場面に就て物語つた。彼女は訪問の目的で娘と一緒に外出の用意をしてゐた。そして寛解情態にある早發性癡呆病患者なる娘に襯衣を着替へよと命じ、娘は隣室で着替へた。娘が再び室に入つて來た時に母は爪の掃除をしてゐた。そこで二人の間に次の樣な對話が起つたのであつた。

娘。「おや、私の方は用意が出來ましたよ、あなたはまだでしたね!」

母。「お前さんは襯衣(Bluse)一枚だけぢやないの。私は十二本の爪を持つて居るんだもの」

娘。「何ですつて?」

母。(短氣を起して)「勿論私は十二本の指を持つて居るんですよ。」

この物語を一緒になつて聽いてゐた同僚は、彼女に向つて十二(zwölf)に就て何か思ひ泛ぶ事はないかと尋ねた處、彼女は同じやうに迅速に且つきつぱりと答へた。「十二は私にとつては大切な日附

(Tatum)ではありません」と。指(Finger)に就ては少しくためらひながら次の聯想が與へられた。「私の夫の家庭に足に六本の指あるものが出來ました(波蘭語には趾に對する特別の言葉はない)私共に子供が生れました時には彼等が六本の指を持つて居るかゐないかを直ぐに調べました」と。外的事情からその晩には分析は續行されなかつた。

次の朝(十二月十二日)この婦人は私を訪ねて來た。そして明かに興奮して次の如く物語つた。「私に起つた事をどうぞ考へて下さい。二十年來私は丁度今日に當る私の夫の年老いたる叔父の誕生日の御祝を云うて來ました。そしていつも十一日の日に手紙をかく事にしてゐました。處が今度はそれを忘れましたので、丁度今電報を打たねばならなかつたのでした。」

私及びこの婦人は昨晩同僚が彼女に向つてその誕生日を想起させるに非常に好都合な十二と云ふ數について尋ねた時に彼女が「十二は彼女にとつて意義ある日附でないと」云ふ言を以て非常にきつぱりとその問を斥けた事を思ひ出した。

ついで彼女は夫のこの叔父は多大の遺産を遺す望みある金持である事、彼女が常に――特に現在の彼女の非常に逼迫したる經濟狀態に於て――この叔父の遺產をあてにしてゐた事を自白した。

從て數日前知人が彼女が澤山の金を手に入れる事になるだらう云ふと事を「カード」によつて豫言

た時には、この叔父の事、延いては彼の死と云ふ事が直ぐに考へられたと云ふ事であつた。直ちに彼女にはこの叔父が彼女及び子供等が金を獲得し得る唯一の人であると云ふ事が頭腦にひらめいた。又彼女はこの場面に於て瞬間的に嘗てこの叔父の妻が遺言狀を書くやうな場合には、彼女の子供等を考慮に入れる事を約した事を思ひ出した。然し、この叔父の妻は、遺言狀なしに死んで行つたのであつた。それで彼女は叔父の妻がその夫（叔父）にそれに關する委任をしてゐたであらうと考へてゐた。

彼女が自分に豫言をした婦人に向ひ「あなたは人殺しをするやうに私を誘惑しますね」と云つたさうだが、その際には彼女に叔父に、對する「死の願望」が非常に強く起つてゐた事は明かである。

この豫言のあつた日から叔父の誕生日迄の四五日間に於て、彼女は叔父の住地に於て發刊されて居る新聞紙上に叔父の死亡に關する記事を探したのであつた。從つて彼の死を非常に強く希望してゐた爲に、差迫つた祝すべき誕生日の事及び誕生の日附が彼女によつて非常に強く壓迫され、その結果は年來行ひ來つた計畫が忘却されたばかりでなく、同僚の訊問によつてさへもこの事が意識に持來たされなかつた事に不思議はない譯である。

「十二本の指」なる「云ひ誤り」に於て、壓迫されてゐた「十二」が表面に現れて、この失錯作業を部分的に限定したのである。

私がこの部分的の限定だと考へるのは「指」(„Finger")への注意すべき聯想が、私共に尙ほ別の原因動機ある事を思はせるからであつて、この聯想は何故に十二なる數字が十本の指と云ふ樣な無害なる熟語を云ひあやまらせたかと云ふ事を私共に說明するのである。

彼女の思ひ付には次の樣なものがあつた「私の夫の家庭には足に六本の指あるものが出來ました。」六本の趾は一定の異常の徵候であり、從つて六本の指は一人の異常兒であり、十二本の指は二人の異常兒を意味するのである。

そして事實この事はこの場合に適中した。非常に若くして結婚したこの婦人は、常々奇矯な變つた人物だと云はれてゐた。そして短い結婚生活の後に死亡した彼女の夫の唯一の遺産として、二人の子供を持つてゐた。彼等は醫師より父系の重い遺傳素質であり、又普通とは變つて居ると度々云はれてゐた。

長女は重い緊張病發作の後に最近家に歸つて來た。その後間もなく思春期にある若い方の娘が重い神經官能症に罹つたのであつた。

子供等の異常がこの場合叔父に對する死の希望と一緒にされ、この比較すべきものがない位強く壓迫されて居り、一層大なる心的價値を有する要素と凝縮された事は、この「話し損ひ」に對する第二

の限定として異常兒に對する死の希望を私共に假定せしむるのである。

十二と云ふ數字が死の希望として重大なる意義を有する事は、この婦人の觀念界に於て叔父の誕生日が死の概念と非常に密接に聯想されて居る事から明かになるのである。何故なれば彼女の夫は十三日即ち叔父の誕生日の一日後に死亡したのであつた。その時叔父の妻は、この若い未亡人に向つて「昨日迄も彼は心からそして愛を以て我が夫の誕生日を祝福してくれた……而も今日ははや！」と云つたのであつた。

尙ほ私はこの婦人は子供等の死を希望すべき實際の理由を、十分に持つてゐた事を附加へようと思ふ。彼女はこの子供等からは何の喜びも經驗し得ず、唯苦惱と彼女の自治權に對する苦しい制限のみに苦しまなければならず、彼女は子供等の爲に、愛と幸福の全部を抛棄しなければならなかつたのであつた。

この場合にも彼女は一緒に訪問に出かける娘の機嫌を損ねて凡ての原因を避ける事に非常に努力してゐた。實際早發性癡呆症患者に對して斯くする事に何れだけの忍耐と克己とを必要とするか、又その際如何に多數の怒りの感情を抑壓するを要するかは何人も想像し得る事である。

これによつてこの失錯作業の意味は次の樣になるであらう。——叔父は死ね。異常兒等は死ね。(い

はばこの全異常家族は死ね）そして私は彼等から金を得べきである。

この失錯作業は私の見解では稀有なる構造の特徴の二三を持つて居る。即ち

(a) 一つの要素に凝縮されたる二つの限定の存在。

(b) 二つの限定の存在は「話し損ひ」が二重になつて居る事に現れて居る（十二本の爪、十二本の指）

(c) 十二と云ふ數字の意義即ち子供の異常をあらはす十二本の指が間接の表現を代表して居る事は注意すべき事である。この場合心的異常は身體的異常によつて——即ち最高のものが最低のものによつて——表現[*]されて居る事等である。

* Internat. Zeitschrift für. Psychoanalyse, I, 1913.

第六章　「讀み損ひ」と「書き損ひ」

「讀み損ひ」及び「書き損ひ」に對しては「話し損ひ」に對すると同じ觀點と記述が適用される事は、これらの官能が內的に類似して居る以上不思議のない事である。私は此處には注意深く分析された二三の實例を報告するに止め、これら現象の全體を包括して說く事はしないであらうと思ふ。

(A)　「讀　み　損　ひ」

(1)私はカフエーに於てライプチヒ繪入り新聞の或る號を斜めに持ち、頁を繰つてゐた。そして頁一杯にひろがつて居る繪の下の處に「Odyssee に於ける結婚式」(Hochzeitsfeier iu der Odyssee) と書いてあるのを讀んだ注意を喚起され、驚いて頁を眞直にし「Ostsee 沿岸に於ける結婚」(Hochzeits-feier an der Ostsee(東海、バルト海))と讀み直した。どうして私はこんな馬鹿な讀み誤まりをしたのであらうか?。私の考へは直ぐに Ruth 氏の「音樂、幻影等に關する實驗*的研究」と云ふ書に導かれ

た。この書は私が取扱つて居る心理學上の問題と密接な關係があるので、私が近頃勉強して讀んでゐたものであつた。この學者は「夢の現象の分析と根本原則」なる一書を近い將來に上梓する事を豫告してゐた。丁度「夢判斷」を公表した私が、非常なる緊張を以てこの書の出版を待つた事に不思議はなかつたのである。音樂幻影に關するルースの書に於て、私は前の方の內容目次に古代希臘の神話、及び傳說は、假睡、幻影、音樂幻影、「夢の現象」及び譫妄狀態に、その主なる根源を有する事の詳細なる歸納的證明の豫告を見出した。私は其時直ぐに本文を繰つて見て彼も亦た Odysseus が Nausikaa の前に現れたるが如き場面をば、一般の裸體の夢に歸すべき事情に通じて居るかどうかを見たのであつた。(譯者註＝オディッソイスは希臘ホーメルの敍事詩「オデイッセー」の主人公であり、この詩はオディッソイスの漂流譚である)。私の友人某は G. Keller の Grünem Heinrich (綠の藜に)のよい箇所を指摘し、この箇所は「オディッセー」のこの挿話を故鄕より遠く漂流して居る船乘りの夢を客觀化したるものとして說明して居る事を注意して吳れ、又私は裸體の暴露夢 (Exhibitionstraum) への關係を附加へたのであつた。(夢判斷、第七版一七〇頁)ルースの書にはその事については何も發見されなかつた。この「讀み損ひ」の場合には、私に創始者としての權利があると云ふ考へが、私を支配したものと思はれるのである。

* Darmtadt 1898 bei H. L. Schlapp.

(2) 或日私は新聞紙上に於て、徒歩での (in Fuss) 歐羅巴旅行と讀むべき處を、樽の中に入つての歐羅巴旅行 (Im Fass durch Europa) と讀んだが、私はどうしてこの「讀み損ひ」をする事になつたであらうか？　この分析は永い間私に困難を與へたのであつた。直ぐに起つた「思ひ付」は勿論これがディオゲネスの樽の事であるに違ひない事を示した。そして私は最近美術史に於てアレキサンデル時代の美術の事を少し讀んだのであつた。そこでアレキサンデルの有名なる言葉「若し自分がアレキサンデルでなかつたなら、自分はディオゲネスでありたい」を考へる事が手近にあつた。又私には箱の中に荷造りされて旅行に出かけた Hermnn（ヘルマン） Zeitung（ツァイツング） 某の事が思ひ泛んだ。然しながらこれ以上には關係はつくられず、又この話が見えた美術史の頁を今一度あけて見ることも出來なかつたのであつた。數箇月後に初めてこの捨てておいた謎が急に私に思ひ起され、且つ同時にその解決もついたのであつた。私は或る新聞の標題に、巴里の世界大博覽會を見に行くのに人々が、如何に奇妙なる運搬法 (Sonderbare Arten des Beförderung) を選ぶべきかと云ふ文句が書いてあつた事を思ひ出した。そして其處には又滑稽的に或男が樽に入つて、他の男に巴里迄轉ばさせる計畫を立てて居ると云ふ事が書かれてあつたと信ずる。勿論これらの人々は斯くの如き馬鹿な事をする事によつて人目を聳動する外

に何の動機もないのであつた。ヘルマン・ツァイツングは實際斯くの如き異常なる運搬法に向つて、第一の例を與へた男の名であつたのである。つぎに私が嘗て或る患者を治療したが、その人の新聞紙に對する病的不安は自分の事が新聞紙に印刷され、自分が有名なる人として新聞に書き立てられたいと云ふ病的名譽慾に對する反應である事が明かにされた事が私に思ひ泛んだ。マセドニアのアレキサンデルは確かに今迄住んでゐた人間の內で最も名譽慾の強い人であつた、彼は自分の事績を詩歌に詠じて吳れるホーメルを見出し得ないだらう事を嘆じたのであつた。然しながらどうして私は今一人のアレキサンデルが自分の側近に居る事を思ひ及ばなかつたのであらう。又アレキサンデルが自分の弟の名である事をどうして考へることが出來なかつたであらうか？　私は直ぐに厭な、そして壓迫を必要とする考へをこのアレキサンデルに就て見出し、又この考へに向つての動機を見出した。私の弟は鐵道の賃率や運送に關する事に於ての物識りであり、高等商業學校に於ける彼の敎授に向つて、一定の時期が來れば「プロフェツソール」の稱號を得る事になつてゐた。私は大學に於て數年來この同じ昇進（Beförderung）に向つて始めてゐた。而もこの昇進をかち得なかつたのであつた。私共の母は當時彼女の小さい息子が大きい方よりも早く「プロフェツソール」になるのは不思議な事だと云つた。私がこの「讀み損ひ」の解決を見出し得なかつた時には、さう云ふ狀態になつてゐた。その後私の弟

にも困難が起つて來た。彼が「プロフェツソール」になり得る「チヤンス」は私よりも以下にあるやうになつた。然しながらここに於てかの「讀み損ひ」の意味が明かになつた。恰も弟の「チヤンス」が少くなつた事が、障礙物を除去したかの様に思はれた。私は恰も弟の任命の事を新聞紙上に讀んで居るかの如き態度を取つたのであつた。そしてその際獨り言を云つたのであつた。「彼が職業としてやつて居る様な馬鹿馬鹿しい事で新聞に出得る（即ち教授に任命される）とは妙な事だ！」と。それからは私はアレキサンデル時代の希臘化した東洋文化の美術に關する箇所を容易に開いて見る事が出來た。そして私は前にさがした時には度々同じところを讀んで居りながら、その都度消極的幻覺（negativen Halluzination）の支配の下にでもあるかの様に、該文章を看過してゐた事を確かめて驚いたのである。而もこの文章は何が私の忘却に値するかと云ふ事を明らかにする何物をも持つてゐなかつた。書物の中に見出し得ないと云ふ症候が私を誤らせる爲に創造されたものと私は考へるのである。私は私の研究を障礙された場所即ちマセドニヤのアレキサンデルに就ての或る觀念に於て、私の觀念連結の續きを求むべきであつた。そしてその爲に同名の弟からして、より確實に轉向されるべきであつた。實際又この事は完全に達せられた。私はかの美術史の失はれたる箇所を再び見出す事に私の努力を傾倒したのであつた。

Beförderung なる言葉の二重の意味（運搬―昇進）はこの場合に於て、二つの凝結觀念―新聞記事によつて起された、大して重要でない凝結觀念と、一層興味があるが不快なるものの――間の聯想の橋をなすのである。この例からしてこの「讀み損ひ」の様な出來事は、明かにする事が必ずしも容易ではない事が判るであらう。時には都合のよい時が來る迄解決を延期せねばならぬ事がある。然しながら分析作業が難かしい程、私共は一層確實に終に發見される障礙のもとになる觀念は、私共の意識的考慮に對して見知らぬ、又反對なるものとして判斷されるものなる事を期待してよいのである。

(3) 或日私はウィーンの近くから私を吃驚させる報告を私に告げる一通の手紙を受取つた。私は直ちに妻を呼び、不幸なる Wilhelm M.（ウィルヘルム エム）が重病に罹り醫師から見放されたと云ふ事に對する同情を求めた。私が私の悲しみを表した言葉に何かの間違ひがある様なひびきがあつたに違ひない、何故なれば妻は疑ひを抱いて手紙を見せろと要求した。そして彼女の確信としてさうではあるまいと云つた。何故なれば何人と雖も夫人を夫の名で呼ぶ人なぞある筈がなく、特に文通をする女の人に夫人の名（姓氏の前の）がよく判つて居るんだからと云つた。私は自分の主張を頑强に云ひ張り、夫人が夫の名（姓氏の前の）を書いてある名刺を用ふる事がある事を指摘した。終に私は手紙を手に取らなければならなくなつた。そして私共はその中に實際 „der arme W. M.“（氣の毒なヴエムー・エム氏）

それのみならず私が全然見落した „der arme Dr. W. M.“ (氣の毒なドクトル、ヴェー・エム)を讀んだのであつた。私の「讀み損ひ」は悲しい變事を頭から彼の妻に移さうとする、いはば痙攣性の努力を意味する事になるのである。冠詞及び形容詞と名の間にある稱號はそれが夫人を意味するに相違ないと云ふ要求に一致しなかつた。だからしてこの稱號は手紙を讀む際に除かれたのであつた。この「讀み損ひ」の動機は私が夫君に對してよりも夫人に對して同情が少なかつたからと云ふ譯ではなく、氣の毒なこの夫の運命は私に近い關係ある別の人に對する私の心配を呼びさましたのであつて、この人は私に知られて居る病氣の條件を、この場合と共通に持つてゐたのであつた。

(4)私が休暇中見知らぬ都市の街路を散歩して居る際、屢〻經驗する「讀み損ひ」は腹立たしくも又馬鹿らしいものである。かう云ふ場合に私はどうかして自分に向つて來る店の看板を Antiquitäten (骨董品)と讀むのである。此處に蒐集家の冒險慾(珍しいものを集めようとの慾)があらはれるのである。

(5) Bleuler(ブロイレル)は「感動性、推感性、パラノイア」(一九〇六年一二一頁)なる意義ある著述に於て、次の樣に云つて居る。『私は讀書をして居る時に嘗て一夜二行下の處に私の名が見える樣な知的感情を持つた。驚いた事には私は Blutkörperchen (血球) と云ふ語を見出しただけであつた。私が分析した數千例の周邊性並びに中心性視野に於ける「讀み誤り」の中でこれは最も甚しいものであつた。私が自分

の名を見るやうに思ふ時には、その誘因になる語は多くは私の名に遙かによく似て居り、大多數の場合には正に私の名の凡ての文字が近くにあつて、斯くの如き誤謬が起るのが通常である。然しながらこの場合には關係妄想及び錯覺は、非常に容易に説明する事が出來た。私が丁度その時に讀んでゐたものは科學的論文の書き方の一種の惡い樣式に就ての論述の終りの部分であつたのであつて、斯くの如き樣式は私自身にも全然ないとは云へない樣に感ぜられたのであつた。』

(6) ハンス・ザックス。『人々を驚かせる物の傍を彼は彼の Steifleinenheit に於て行き過ぎる』（譯者註＝Steifheit と云ふ字には「固苦しきこと」、「儀式張りたること」「不自然」等の意味があり、Steifleinen は「硬布」、「ゴム引粗麻布」の事である。）この言葉が私に目立つた。そしてよくよく見るとそれは Stilfeinheit（優雅なる「スタイル」）と云ふ語である事が發見されたのであつた。その箇所は獨逸の大學教授風をあまりにひどく發揮するので、私が嫌つて居る或る歷史家の事を私の尊敬して居る某著述家が非常に稱讚して書いてある發表の中に存するのであつた。

(7) Dr.（ドクトル） Marcell（マルセル） Eibenschütz（アイベンシユツツ） は精神分析學は中央雜誌第一卷第5/6分冊に於て、彼が言語學をやつてゐた際に於ける「讀み損ひ」の一例を報告して居る。「私は普魯西、科學大學出版の「中世の獨逸語聖書」Deutschen Texten des Mittelalters）の中に發表すべき、中期高地獨逸語の宗教的傳說書なる

殉教者傳を後世に傳へる仕事に從事してゐた。今迄まだ出版されてゐなかつたこの仕事に就ては、殆ど何も知られて居なかつた。唯 J. Haupt(ヨット・ハウプト) の殉教者に關する中期高地獨逸書に就て」(ウィーン會議報告一八六九年第七〇巻一〇一頁)の一論文あるのみであつた。——ハウプトは彼の仕事をするのに古い手書を基礎にせず、それよりも近代即ち十九世紀に出來た重要なる手書 C. (Klosterneuburg(ノイブルヒ修道院))の寫本を根據にしたのであつた。この寫本は宮廷圖書室に保存されて居るのである。この寫本の終りの處に次の如き署名がある。

この書は紀元一八五〇年十字架宣揚記念祭の前日、起草翌年復活祭の前日脱稿。神の御助けにより當時ニウェンブルヒ敎會主宰者なる不肖ハルトマン・ドゥ・クラスナの著す處なり。

さてハウプトは彼の論文に於て、右の署名が手書Cを書いた人から出來して居るものとして、これを發表して居る。そして羅馬字で書かれた年數一八五〇を徹頭徹尾讀み損つて一三五〇年に書かれたものとして居る。而も彼はこの署名を全然正しく寫し書きし、又この署名は論文に於て引用されて居る箇所に於ては全然正しく)即ち MDCCCL)と印刷されて居るのである。

ハウプトの發表は私に對して困惑の源をなした。先づ第一に學問上の全然若い初學者として、私は全くハウプトの權威の下にあつた。そして永い間明瞭に正しく印刷されて居る署名をハウプト同樣に

一八五〇と讀まずして一三五〇と讀んでゐた。然しながら私の用ひた主要なる手書Cには署名は跡形もなく尙ほ十四世紀全體を通じてノイブルヒ修道院にはハルトマンと云ふ僧正は全然住んでゐなかつた事が判つて來た。そして終に私の眼前にあるヴェールが落ちた時は、また凡ての事情を明かに知る事が出來たのであつた。そして尙ほ研究を續けた結果は、私の推論が確かめられたのであつた。度々述べた署名はハウプトの用ひた寫本にのみ存し、それを書いたP.(ピー) Hartmann(ハルトマン) Zeibig(ツァイビヒ) から來てゐた。この人はメーレン(Mähren)のクラスナに生れた人でありノイブルヒ修道院に於けるアウグスチーヌス宗派の僧正であり、住職であつて、一八五〇年に該修道院の寺寶保管人として手書Cを書き寫し、彼の寫本の終りの處に古めかしい書き方で自分の名を書いたのであつた。自分の取扱つた仕事に就てなるべく澤山發表したいと云ふ希望、及び手書Cにも日附をつけたいと云ふ希望がハウプトにあつた處へ、この署名の、中古の文體から成つて居り、古い正書法で書かれて居る事が手傳つて、彼をしていつも一八五〇年を一三五〇年と讀ませたのであつた。(失錯行爲の動機)

(8) Lichtenberg(リヒテンベルグ) の「諧謔的竝びに諷刺的思ひ付」の中に多分實際の觀察から來たものと思はれ、且つ「讀み損ひ」の全學說を包含する次の記載がある。彼はいつも angenommen と讀むべきところを Agamemnon と讀んだ。それほどに彼はホーメルを盛んに讀んだのであつた。

即ち非常に多數の場合に於て讀者の用意が本文を變化し、彼が着眼點を置いて居り、或は彼がとらはれて居る事を本文に讀み込むのである。本文そのものは言葉の像に於ける或る類似點を提供する事によつて「讀み損ひ」を迎へるのであつて、この類似を讀者は彼の意味に變化するのである。輕忽にながめる事、特に訂正されない眼を以て眺める事が確かに斯くの如き錯覺の可能性を助長するものであるが、これはこの錯覺に對する缺くべからざる條件ではないのである。

(9) 私共の凡てに對し一定のかたい永續的なる先入觀念を作つた戰時は、他の失錯作業よりもとりわけ「讀み損ひ」を甚しく起りやすくした。私はその多數を觀察する事が出來たが、殘念ながらその二三しか保存する事が出來なかつた。或る日私は晝刊或は夕刊新聞紙の一つを取り上げて見て大活字で印刷された Der Fiede von Görz と云ふ語句を見出した。然しながらそれは唯 Die Feinde vor Görz (ゲルツ前面の敵)と云ふのであつた。二人の息子を軍人として戰場に送つて居る人は斯くの如き「讀み損ひ」に陷り易いものである。他の或る人は或る關係に於て alte Brotkarte (古い麪包カード)の事が書かれてあると思つてよくよく見ると、彼は alte Brokate(錦襴)と取り違へたのであつた。兎に角彼は歡迎される客として屢〻訪問して行く或る家に於て、主婦に麪包の「カード」を與へる事によつて喜ばれてゐたと云ふ事を此處に述ぶる價値がある。工兵某——その人の武裝は工事中隧道內の濕氣に

永く堪へなかつた――が或る廣告に Schundleder（譯者註＝Schund には皮肉の屑、廢物、いかさま物等の譯があり Leder は皮である）でつくつた物が推稱されて居るのを讀んで驚いた。然しながら商人の正直な事は稀な事である。處でその廣告に買ふ樣に推稱されてゐたものは Seehundleder（海豹の皮）でつくつたものであつた。

讀者の職業或は現在の狀態は又「讀み損ひ」の結果を決定するものゝある。最近の優秀なる研究に關し、自分と同專門の同僚と論爭して居た或る言語學者は Schachstrategie（將棋戰術）をと讀む處を Sprachstrategie（言葉の戰術）と讀んだ。見知らぬ都市を散步してゐた男が、丁度彼の治療によつてつくられた腸の活動の調節さるべき時間に於て、高い百貨店の建物の二階の大看板に Klosethaus（Klosett＝便所）と云ふ語を讀んだ。それに就ての滿足には慈惠病院に於ける竝々ならぬ保護に對する驚嘆もまじつてゐたのであつた。次の瞬間には但しその滿足は消失した。何故ならば看板にかかれてあつた語は Korsethaus（コルセツトを賣る家）と正しく讀まれたからであつた。

(10) 第二群の場合では「讀み損ひ」に於ける本文の役割は遙かに大きいのである。本文は讀者の防衛機轉を活潑にさせるもの、卽ち彼に苦痛なる報知或は期待を包含し、爲に「讀み損ひ」によつて拒否或は願望成就の意味に於ける訂正を受けるのである。從つてこの場合には勿論本文は訂正を受ける前に

——意識がこの最初の讀みに就ては何も知らないとは云つても——先々正しく領取され、判斷されるものと假定せねばなるまい。前の頁に揭げた例(3)はこの種のものである。著しい現實性を持つて居る他の例を私は Dr. M. Eitingon(イグロー野戰病院にありし頃Internat. Zeitschrift. f. Psychoanalyse 四、1915)に從つて報告しよう。

「戰時外傷性神經病で私共の病院に入つて居たX少尉は、或る日私に向ひ、非常に早く戰死した詩人ワルテル・ハイマン*の詩の最後の段の結句を明かなる感動を以て讀み上げた。

* W. Heymann. Kriegsgedichte und Feldpostbriefe,p. 11: „Den Ausziehenden,"

さりながら何處に書かれてあらうか、余は問はん。
凡ての人の內、余が生きながらへ
他人が余の爲に仆れようとは?
汝等の內何人が仆れようとも、その人は確かに余の爲に死ぬのである、而も余は生き殘るべきであるか? 何故
生き殘つてはならないか? (,Unb ich soll übrig blen? Warum denn ich?')

私が驚いたので氣がつき、彼は困惑の色を見せながら讀み直した

而も余は生き殘るべきであるか？　一體何故余が生き殘るか？　(Und ich soll übrig bleiben? Warum denn ich?)

Xの場合に於て私は戰時外傷性神經症の心的材料への一二の分析的洞察を得た。そしてここに仕事多く醫者の少ない戰時野戰病院の不便なる狀態に於て働かねばならぬ有樣ではあつたが、原因として高く評價されて居る榴彈爆發以上に些か洞察する事が出來た。

この場合に於てもこの神經症の著しい症例と一見して著しい類似を呈する劇しい震顫、不安、泣き易い事、痙攣性であつて、小兒らしい運動拋棄を示す怒りの發作の傾向及び些細なる興奮に際して起る嘔吐の傾向等があつたのである。

最後の症候の心因性のものである事、而も第一に第二次的病症利得に役立つて居る事は何人にも起つて來る考へでなくてはならない。病室に於て病院長が時々來て恢復しつつある者を診る時、街路に於て知人の發する言葉「あなたは大層よくおなりでしたね。たしかにもう健全ですね」は直ちに嘔吐發作を發せしむるに十分であつた。

「健全……再び隊伍に就く……一體何故余が隊伍につくのか？」

(11)　「戰時」の「讀み損ひ」の他の例をドクトル・ハンス・ザックスが報告して居る。

『或る親しい知人が繰返して私に說明した、「彼に順番が廻つて來た場合、彼の卒業證書によつて證明されて居る專門的素養を利用せず、これによつて相當の任務を內地に於てさせて貰ふ要求を捨てて戰線勤務に就く」と。その時期が事實到來した少し前に、彼は或日極く簡單に何等の論據を與へずして、彼が自分の專門的素養の證明書を當該官廳に提出したから、間もなく工業の方面の仕事に割當てられるであらうと云つた。その翌日私共は役所で出逢つた、私は丁度机の前に立つて字を書いて居た。彼は近寄つて來て暫く私の肩越しに見てゐたが、ややあつて云つた。『ああその上の方に書いてあるのは,Druckbogen「(印刷全紙)と云ふ字ですね。私はそれを,Drückeberger'(兵役忌避者)と讀みました』と。(Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse, IV. 1916/17.)

(12) 私は電車に乘つてゐて、華奢で弱かつた私の幼友達の或者が今では私ならば確かに參つてしまうだらうと思はれる非常に過激な勞働に堪へる事が出來て居ると云ふ事を考へてゐた。此の喜ばしからぬ考への最中に於て、私は電車の進行中半分の注意を以て或商店の看板の大きい黑字 Eisenkonstitution(鐵の樣な體格)を讀んだ。一瞬時の後にこの言葉は店舖の廣告文字としてはふさはしからぬものである事に思ひつき、速かに振向いて急いでその字に一瞥を與へた。そしてそれが Eisenkonstruktion'(鐵の組立)と云ふのが正しい字であつたのを認めた。

(13)　夕刊に間もなく誤報である事が明かになつた「ルーター」電報 Hughes（ヒューグ）が北米合衆國の大統領に選擧されたと云ふのが載つてゐた。そのあとの處に、この選出されたと云ふ人の略歴が載つて居り、その中に於て私は Hughes（ヒューグ）がボン大學を卒業したと云ふ記事に遭遇した。選擧日に先立つ數週間の新聞紙上の論議に於て、この事が少しも說かれてゐなかつた事が私に不思議に思はれて、今一度調べてみた處 Brown（ブラウン）大學と云ふ事が書かれてあるだけであつた。この「讀み損ひ」の成立に向つては、可なり著しい牽强附會を必要とした。この著しい例は新聞を讀む際の輕忽以外に私にとつてこの新大統領の中歐諸國に對する同情は單に政治的の理由だけでなく、それ以上に個人的理由からも將來の親善關係の基礎として望ましい事であると思はれた事によつて說明されるのである。

(B) 書き損ひ

(1)　多くは業務上の興味に關する日記を書いてある紙上に、私は九月の正しい日附の間にはさまつて「書き損ひ」の日附「木曜日、十二月二十日」を見出して驚いた。この取越しを願望のあらはれとし

て說明する事は難しくはなかつた。私はその數日前に休暇旅行から歸つて來た。そして澤山なる醫療上の仕事を期待した。然しながら患者の數は少なかつた。私が歸つた時、私は十月二十日に來ると云ふ或る患者の手紙を見た。私が九月に於て同じ二十日の日を書き込んだ時、私は多分斯く考へたに違ひない。「何某が旣に來て居るならいいのに、まだ丸一箇月もあるとは困つた事だ」と。そしてこの考へに於て私は日附を早めたのであつた。この場合に於ては邪魔をする考へは大して不快なものとは云へなかつた。だからして私はこの「書き損ひ」を發見すると直ぐその說明を知つたのであつた。これと全く同樣であつて、同じやうな動機に胚胎して居る「書き損ひ」を私はその次の年の秋に繰返したのであつた。――アーネスト・ジョーンズは日附に就ての類似の「書き損ひ」を研究した。そして大多數の場合に於てこの「書き損ひ」が動機あつて起るものである事を容易に認めた。

(2) 私は神經病學精神病學年報へ載せる自分の寄稿文の校正刷を受取つた。そして勿論色々の國民に屬する關係上、植字工に最も難しい著者名を特に注意して校正する事を要した。二三の妙な音を持つて居る名を私は實際に訂正しなければならなかつた。然しながら唯一つの名は不思議にも植字工が私の原稿に反して訂正した、而もそれは正しかつた。即ち私は Buckrhard と書き、植字工は Burckhard なる事をさとつたのであつた。私は小兒痲痺の成立に對する出產の影響に就ての或る產

科醫の論文そのものを價値あるものとして稱讚し、又その著者に對しては何も云ふ事はなかつたのであつた。然しながら彼と同じ名をウィーンの或る著述家も持つてゐた。此男は私の「夢判斷」に對する無理解なる批評によつて私を怒らせたのであつた。私は産科醫を名づくる Burckhard なる名を書くに當り他のＢ即ち著述家に就ての怒りを考へたらしい。何故なれば名を捩ぢ歪める事は、私が「話し損ひ」の處で説明した樣に侮辱を意味する事屢々であるからである。*

* „Julius Cäsar" III, 3. の中にある次の箇所と比較せよ。

Cinna, 確かに私の名はチンナです。

市民、彼を寸斷せよ！ 彼は謀叛人だ。

チンナ、私は詩人のチンナです！ 謀叛人のチンナではありません。

市民、それはどうでもよいんだ。彼の名はチンナだ。彼の心臟から名を毟り取り、彼を打遣つておけ。

(3) この主張はアー・ヨツト・ストルフェルの自己觀察によつて、非常に立派に確かめられて居る。この觀察に於て、この學者は稱讚に値する公明さに於て、彼が假想の競爭者の名を誤り思ひ出し、ついでこれを捩ぢ歪めて書きつけた動機を明かにして居るのである。

「一九一〇年十二月私はチューリヒの書店の陳列窓に於て、當時新刊の Eduard Hitschmann の「フ

ロイドの神經官能症學」を見た。私はその當時丁度演說の原稿をつくつてゐた。その演說は私が間もなく大學の學會に於て、フロイドの心理學の綱要に就てする筈になつてゐたのであつた。その時旣に書き下ろしてゐた演說の結論に於て、私は實地應用の領域に於ける研究よりしてフイロドの心理學が發達したる歷史を述べ、從つて綱要の總括的叙說には困難のある事を述べ、且つ未だ一般的叙說は發表されてゐない事を述べたのであつた。私がその時迄私に未知であつた學者の書物を陳列窓の中で見出した時には、私は最初はそれを買はうとは思はなかつた。然しながら數日後私はそれを買はうと決心した。その書物は最早陳列窓の中にはなかつた。私は本屋の人に向ひ、近頃出版された書物の名を告げ、著者として Dr. Eduard Hartmann の名をつげた。本屋は「あなたは Hitschmann の事を云つて居るのでせう」と訂正して、私に書物を持つて來たのであつた。

この失錯作業の無意識的動機は手近にあつた。私は精神分析學の綱要を總括した事を以て、一定度迄の功績であると考へてゐた。そして明かにヒッチマンの書を私の功績を少なくするものとして嫉みと不快とを以て見たのであつた。名を捩ぢ歪めた事は無意識的の敵對行爲であると、私は日常生活の精神病理に從つて自ら云つたのであつた。これだけの說明で私はその當時滿足してゐた。

數週の後私はこの失錯作業を書きつけたがその際私は何故 Eduard Hitschmann を Eduard

Hartmann に變化させたかと云ふ問題を自分に課して見た。單に名の類似が有名なる哲學者の名に導いたものであらうか？ 私の第一の聯想はショウペンハウヱルの熱心なる崇拜者なる Hugo v. Meltzl（ヒューゴー・フォン・メッツル）教授から嘗て聽いた言葉への追想であつた。その言葉は大體「ヱデュアルド・フォン・ハルトマンは臺なしにされ、左側に引くりかへされたショウペンハウヱルである」と云ふのであつた。忘却された名に對する補充形成を限定した感情的傾向は卽ち「ああ、このヒッチマン及び彼の總括的叙述は大したものではない。彼のフロイドに對する關係は、ハルトマンのショウペンハウヱルに對するそれの樣である」と云ふのであつた。

私はだからこの補充「思ひ付」を伴ふ限定されたる忘却の例を書きつけたのであつた。

半年後私が書きつけておいたこの紙が私の手に入つた。それには私が Hitschmann の代りに徹頭徹尾 Hintschmann（ヒンチマン）と書いてゐたのを認めた。(Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse, II, 1914.)

(4) 外見上これよりも重大に見える「書き損ひ」の例を次に掲げよう。この例は「摑み損ひ」の部類に入れても多分差支のないものである。

私は郵便貯金の中から三百「クローネ」の金額を引出して治療を受ける爲に不在になつて居る親戚の者に送らうと企てた。其際私の貯金高は四千三百八十「クローネ」である事を認めた。これを端數のな

い四千「クローネ」に引下げ、この金高は近い内には侵す事がない様にしようと企てた。私が爲替劵を規定通りに書き出し數に相當する數字を切り拔いた時、私は急に最初欲した樣に三百八十「クローネ」でなく四百三十八「クローネ」を要求した事を認め、私の行爲の不確實なのに驚いたのであつた。この驚きは不當なものである事を私は間もなく認めた。私は今では以前ほど貧乏ではなくなつたからである。然しながら私は暫くの間、如何なる影響が私に無意識的に私の最初の企圖を邪魔したかと云ふ事を考へねばならなかつた。私は最初邪道に入つて兩方の數 380 と 438 との間に減算をやつてみようとした。然しながらその差をどうしてよいものかと云ふ事は判らなかつた。終に急に起つて來た「思ひ付」が實際の關係を私に示した。四百三十八「クローネ」は全額四千三百八十「クローネ」の一〇%である。一〇%の割引は私共は書店に於て受けるのである。私は數日前全然不用になつた一定數の醫書を探し出し、三百「クローネ」で之を本屋に提供しようと申込んだ。本屋はそれは餘り高價であると云ひ近日確答する事を約したのであつた。若し彼が私の申込みを容れるならば、彼は私が患者の爲に支出せねばならぬ金額を丁度補塡する事になるのである。私がこの支出をしたくない事は明かな事である。私の誤りを知覺した時の感情は、斯くの如き支出によつて貧乏になる事の恐怖として一層よく理解する事が出來る。然しながらこの支出に關する悲しみ及びこれに關聯する貧乏になると云ふ不安は

私の意識には全然未知であつた。私は彼の金高を與へる事を約した時には殘念だと云ふ感じは持たなかつた。そしてその動機を滑稽なものと考へたであらう。若しも私が患者に於ける精神分析の實施によつて精神生活に於ける被壓迫的のもの（Verdrängten）に可なりよく親しんでゐなかつたならば、そして又私が數日前に同じ解決を必要とした夢を見てゐなかつたならば、私は斯くの如き感情を多分全然自認しなかつたであらう。

＊私はこの夢を私の「夢に就て」（„über den Traum“ (Nr. VIII der „Grenzfragen des Nerven -und Seelenlebens“, hg. von Löwenfeld und Kurella, 1901—全集第三卷、なる短篇論文中に範疇として採用した。

(5) ヴェー・シュテケルによつて私は次の例を引用しよう。この例が信憑するに足るものである事は私も之を認むる事が出來る。『殆ど信ぜられない程のひどい「書き損ひ」と「讀み損ひ」の例が、廣く頒布されて居る或る週報の編輯に際して起つた。この週報の管理が腐敗して居ると云ふことが公に云はれた。そこで防衛と辯護の文章を書く必要が起つて來た。實際この事が非常なる熱と情の下に行なはれたのであつた。編輯係長はその文章を讀み、勿論筆者は原稿に於て數回之を讀み、ついで試刷に於て讀んだのであつた。凡ての人は大いに滿足してゐた。突然校正者がやつて來て凡ての人に氣付かなかつた一つの小さな誤りを注意した。其處には明かに次の樣に書かれてゐた「吾等の讀者は吾等が常に

利己的なる有様に於て (in eigennützigster Weise) 全般の幸福の爲に働いて居ると云ふ證明書を書くであらう」と。勿論これは uneigennützigster (非利己的) と云ふべき處であつたのである。然しながら實際の考へが不可抗の力を以て、熱情的なる文章を突破してあらはれたのであつた。

(6) „Pester Lloyd"(ペステル・ロイド) 紙の讀者なるブダ・ペストのカータ・レヴィー夫人は近頃一九一八年十月十一日の同紙ウィーン電報にこれと類似の企圖されざる公明さを注意した。

「戰爭の間を通して吾々と獨逸聯邦との間に存した絶對的親善關係に基いて、何時でも一致の決定に到達するであらう事は疑ひの餘地なき事と假定していいであらう。現在の時期に於ても同盟國外交官の活氣ある、lückenhaft (間隙ある) (lückenlos の「書き損ひ」——譯者)共働が存する事はこれを切言するだけが餘計な事である」

その後數週間にしてこの信任關係を一層公明正大に云ひあらはす事が出來るやうになつた。從つて最早私共は「書き損ひ」や印刷のし損ひに逃げ場を求むる必要がなくなつたのであつた。

(7) 自分の妻を不和の狀態に於て見捨て、歐羅巴に滯在中であつたアメリカ人が、今では彼女と仲直りする事が出來ると考へ、彼女が一定の時期に大西洋を渡つて自分の處に來るやうにと云うてやつた。彼は手紙の中に「あなたも私と同樣に「マウレタニア」號 (Mauretania) で渡航する事が出來るとい

いんだが」と書いた。この文章の書かれてある紙は、彼は發送する事を敢てせず、それを新しく書きかへたのであつた。何故なれば彼は船名に於て必要となつた訂正を彼女が認める事を好まなかつたからである。即ち彼は先づ「ルシタニア」號（Lusitania）と書いたのであつた。

この「書き損ひ」は說明を必要としない。それは直ぐに判斷し得るものである。然しながら偶然の好意は一二の事をここに附言せしめるのである。彼の妻は戰前に彼女の唯一人の姉妹が死んだ後、はじめて歐羅巴に渡航した事があつた。私が間違つてゐないとすれば「マウレタニア」號は戰爭中擊沈された「ルシタニア」號の姉妹船である。

(8) 某醫師が一人の子供を診察して彼の爲に處方箋を書いた。その中に Alcohol（アルコール）が出てゐた。子供の母はさうして居る間も馬鹿らしい餘計な質問で彼を煩はした。彼は心の中で今その事を怒るまいと企て又實際この企圖を實行した。然しながら邪魔されて居る間に、彼は「書き損ひ」をした處方箋の上には Alcohol の代りに *Achol（アコール）と書かれてあつた。

* Achol は謂はば ,Keine Galle である。（譯者註＝Galle は立腹、癇癪等の意味を持つて居り、結局 Achol は「怒らず」「癇癪を起さず」等を意味する事になる）

(9) 材料上の類似と云ふ事からして私は此處にアーネスト・ジョーンズがエー・エー・ブリルの事を

報告して居る一つの場合をならべよう。ブリルは平生全然禁酒してゐたに拘らず、友人に誘惑されて少量の葡萄酒を飲んだ。翌朝ひどい頭痛が起り、彼の意志薄弱を悲しましめた。彼は Ethel（エテール）と云ふ一婦人患者の名を書く必要が起つて、而も Ethyl（エチール）* と書いた。この婦人患者が必要以上に酒を飲む習慣があつた事が多分問題になつたものと考へられる。

* Äthylalkohol（エチールアルコール）。

處方を書く時の醫師の「書き損ひ」は失錯作業の他の實際的價値を遙かに超越する意義を持つものであるから、私はこの機會を利用して今迄發表されて居る唯一の分析例を詳細に報告しようと思ふ。

(10) ドクトル・エデュアルド・ヒッチマン（處方を書く際に於て「書き損ひ」の反復されたる一例）。

「或る同僚が永い年月の經過中に於て、老年の一女性患者に與ふる一定の藥品の處方を書く際に、書き誤る事が數回起つた事を私に物語つた。彼は二度誤つて十倍の用量を處方し、後になつて急に氣付き、患者に危害を及ぼし、自らは非常なる苦境に陷るかも知れぬと云ふ不安から急いで處方を取り戻す事に努力せねばならなかつた。この奇妙なる症候行爲は、各の場合に於ける詳細なる叙述と分析によつて之を明かにする價値がある。

（第一の場合）この醫師は高齢の境にある貧乏な婦人に痙攣性便祕に對して、十倍量の「ベラドンナ」

丸を誤り處方した。彼は外來患者診察所を去り、約一時間の後、家に於て新聞を讀み、朝食をして居ろ最中に、急に彼の誤りに氣づいたのであつた。彼は不安に襲はれ、先づ患者の住所を尋ねる爲に、外來に歸つて行き、そこから更に遠方にある彼女の住居に急いだ。彼は老婦人が未だ處方箋そのままで持つてゐたのを見出し、その事を喜び安心して家に歸つて行つた。彼はおしやべりな外來係長が、彼が處方をかいてゐた際に肩越しにそれを眺めて自分を邪魔したからだと云ふ事で自ら慰めたのであつた。それは又まんざら理由にならぬ事もなかつたのである。

（第二の場合）この醫師は或る「オールド・ミス」の處へ往診する爲に、愛嬌のよい非常に美しい婦人患者の診察を切り上げなければならなかつた。この往診に餘り澤山の時間がなかつたから、彼は自動車を用ひた。何故なれば彼は一定の時間に彼の愛して居る若い女と、彼女の家の近くでひそかに逢ふ事になつてゐたからであつた。この場合にも同じやうな訴へに向つて、第一の場合と同様「ベラドンナ」投與の必要が起つた。而も再びこの藥を十倍強く處方すると云ふ間違ひが行はれたのであつた。婦人患者は本來の問題とは無關係な一二の面白い事を話した。然しながら醫師は言葉ではあらはさなかつたが、性急を現し、密會に十分間に合ふ様に患者の處を立去つたのであつた。約十二時間後、即ち翌朝七時にこの醫師は眼をさました。それと同時に彼が「書き損ひ」をしたと云ふ「思ひ付」と不安が

意識にあらはれ、薬がまだ藥局から取られてないかも知れぬと云ふ望を以て使を遣り、今一度處方を見たいから處方を返して吳れと乞はせた。然しながら彼は既に調劑濟みになつた處方を返へされた。物に動ぜない諦めと、經驗ある人の樂觀とを以て、彼は藥局に行つたが其處では藥局助手が勿論(或は多分又過失のため?)その藥品をより少ない分量に於て與へたと云つて、彼を安心させて吳れたのであつた。

(第三の場合) この醫師は彼の老年の叔母(母の姉妹)に「ベラドンナ」丁幾と阿片丁幾を無害なる分量に於て處方しようと思つた。處方箋は直ぐに女中によつて藥局に持つて行かれた。暫時にして醫師に丁幾と書く處を越幾斯(,extractum')と書いた事が思ひ出された。そしてその直ぐ後に藥劑師はこの誤りに就て問ひ合せの電話をかけて來た。醫師はこの處方箋が未だ完成してゐなかつた事、及びこの處方箋が意外に早く机の上から持ち去られたのであるから自分に罪がないと云ふ僞りの言葉を以て辯解したのであつた。

處方箋を書く時に起つたこの三つの過失の目立つて共通なる點は、この一つの藥に就て起つた事、いつも老年の婦人患者に於て起つた事、及び藥の分量があまりに大量であつたと云ふ事であつた。簡單なる分析に際して、この醫師の母に對する關係が決定的の意義を有するものでなければならぬ事が

判つて來た。即ち彼が嘗て――多分この症候行爲のおこる以前に――矢張り高齡なる彼の母の爲に同じ處方を書いた事、而も彼の平常の投與量が〇・〇二であるに拘らず、彼女を根本的に助けようと云ふ考へから〇・〇三を處方した事があつた事を思ひ出した。この藥に對する華奢な母の反應は逆上感と咽喉部の乾燥感であつた。彼女はそれに就て息子から來得る危險なる處方を冗談半分に諷刺して苦情を云つた。醫師の娘であつたこの母は、折々この醫師たる息子の勸むる藥に對して同じやうに拒否し、或は冗談半分に抗議を申込み、又中毒の事に就て話してゐたのであつた。

報告者がこの息子の母に對する關係を見透し得たる限り、彼は本能的には愛情の深い子には相違なかつたが、母に對する精神的評價及び人格上の尊敬は決して强い方ではなかつた。一つ年下の弟と母と同居してゐて、彼はこの同居を年來彼の戀愛生活の自由に對する障礙であると感じてゐた。尤も私共は精神分析的經驗からして勿論斯くの如き理由が內的束縛（內心に於ては母に對してつよく愛の羈に結ばれてゐる事――譯者）に對する口實として好んで濫用される事は知つて居るのである。この醫者はこの說明に對する可なりの程度の滿足を以て分析を承認し Belladonna＝schöne Frau（美婦）なる言葉が又戀愛關係を意味するかも知れないと云ふ事を微笑しながら考へたのであつた。彼はこの藥を以前には折々自ら用ひたと云ふ事である。」(Internat. Zeitschrift f. Psychoanalse, I, 1913.)

私は斯くの如き重大なる失錯作業は、私共が平生研究して居る無質なる失錯作業とは決して別の路上に起るものではないと云ふ判斷を下したいのである。

(11) エス・フェレンチーによつて報告されて居る次の「書き損ひ」の例を、人々は特に無害なものと考へるであらう。私共はこれを性急の結果起る凝縮作業と解釋する事が出來る。(第五章……「話し損ひ」(1) Der Apfe……の例と比較せよ)そしてこの出來事の一層深く立ち入つた分析によつて、この障礙のより強力なる原因的要素が證明せられる迄はこの解釋を固執してよいであらう。

「此處にあの Anekdote(アネクトーデ)(Tod＝死――譯者)が丁度適合する」と私は或時私の「ノートブック」に書いた。勿論私は Anekdote(逸話)の事を考へたのであつた。而もかの死の宣告を受けた浮浪人の事を考へたのであつた。この浮浪人は自分が首を吊られる木を選定させて貰ふと云ふ恩惠を施されん事を嘆願した。(彼は一所懸命に探したが、適當な木を見出さなかつた。)

(12) 他の場合にはこれに反して極めて目立たない「書き損ひ」が、危險なる祕密なる意味をあらはす事がある。無名氏が次の報告をした。

「私は一通の手紙を次の言葉で結びました。,Herzliehste Grüsze an Ihre Frau Gemahlin und ihren Sohn'(あなたの奥樣によろしく、そして彼女の令息にも)私がこの紙を封筒に入れる直前に、私は

‚Ihren Sohn‘ の頭字に誤り (‚Ihren Sohn‘ である筈である——譯者)ある事を認め、これを訂正しました。私が最近にこの夫妻を訪問して家へ歸る途上、私に同行した某婦人はその家の息子がその家に出入する友人某に非常によく似てゐて、たしかに彼の子供に違ひないと云つたのでした。

(13) 或る婦人が自分の姉妹に手廣い新居に入つた事に就てのお祝狀を書いた。傍に居合せた友人は、彼女が手紙に書いた宛住所が間違つて居り、而も姉妹が此度去つた住居ではなく、新婚の妻として住んだ最初の家であり、旣に疾くの昔に去つた住所を「アドレス」として書いた事を認めた。そして彼女に注意した。「なるほど、さうですね。それにしても私はどうしてこんな事をしたでせう?」と彼女は云つた。友人は考へた。「多分あなた自身が手狹に感じて居るこの家に住んで居るのに、あなたの姉妹が此度手に入れる筈になつて居る立派な大きな住所を姉妹に與へ度くなかつたのでせう。だから姉妹をその人自身にも不滿足であつた最初の家に引戻さうとなすつたのでせう」と——「確かに私は姉妹を新しい家に住ませたくないのです」と彼女は正直に自白した。彼女は續けて云つた。「それにしても人間と云ふものはこんな事位に何故何時もさう卑劣なのでせう?」と。

(14) アーネスト・ジョーンズはエー・エー・ブリルから與へられた次の「書き損ひ」の例を報告して居る。或る患者がドクトル・ブリルに手紙を書き、彼の神經病を棉花市場に於ける危機に際會し、營

業の經過に就て持つた心配と興奮に歸せようと努力した。「私の病氣は全くこの呪はしい不活潑なるWare（景氣の波）によるのです。そこには一つのSeed（景氣のよくなる種）もないのです」と。彼は „Ware“ と云ふ字で以て勿論金融市場に於ける波、或は流れを意味して居るのである。然しながら實際は、彼はWareと書かずWife（妻）と書いたのであつた。彼の心の奥には妻の夫婦生活に對する冷淡（不感症）と、子供のない事に關する妻への非難が潛んで居るのである。そして彼は自分に無理遣り與へられたるこの缺乏が、彼の病氣の原因に於ける大なる要素をなして居る事を薄々認識してゐたのである。

(15) Dr. R. Wagner（ドクトル・エル・ワグネル）は精神分析學中央雜誌第一卷に於て次の如く述べて居る。「古い講義筆記帖を讀過して居る中に、私は筆記の速かさに於て些細な「書き損ひ」に陷つてゐたのを發見した。Epithel（エピテル）（上皮）の代りに私はEdithel（エデテル）と書いてゐた。このEdithelの最初の綴を強調すると、女の名の指小辭が出來て來るのである。過去を回顧して分析して見ると、隨分簡單なものである。この「書き損ひ」をした頃には、私とこの名の所有者との間の親交は全然表面的のものであつたのであつて、ずつと後になつてから深い交際が生じたのであつた。從つてこの「書き損ひ」は私自身がまだ何等の豫感をも持たなかつた頃に於て既にあつた無意識的傾向が現れた事の立派な證據であ

つて、選ばれた指小辭の形は同時にそれに伴ふ感情をあらはしたものである。」

(16) Frau Dr. v. Hug-Hellmuth. は報告して居る。「或る醫師が一婦人患者に Levico-wasser（「レヴィコ」水）を處方しようとして Levitico-wasser と書いた。或る藥劑師に侮蔑的の言葉を發せしむるに都合のよいきつかけを與へたこのあやまりは、若しも人が無意識界からのありさうな動機を研究し、この動機——それはこの醫師とは無關係な人の主關的假定ではあるが——にその蓋然性を全然否定しないならば、今少し溫和な理解に遭遇したであらう。この醫師は患者に對し、あまり合理的でない食餌をかなりぞんざいな言葉で與へ、謂はば患者を叱りつける樣にしてゐたけれども大變繁昌してゐた。從つて彼の患者待合室は診察時間の前及びその間は一杯の人であつた。この事が醫師をして診察の濟んだ患者の着衣がなるべく早く（vite, vite）行はれて行く事を希望せしめた事は無理もない事である。私は彼の夫人がたしかに佛蘭西生れである事を記憶して居る。從つて少し無鐵砲な假定かも知れないが、彼が患者が急いで呉れる事を希望して、正に佛語を用ひる事は一定度迄無理のない事と思はれるのである。尚ほ斯くのごとき希望を外國語で云ひあらはす習慣は、多數の人々に見られる事である。私の父は散歩の際に ,Avanti gioventü'（勇しく進め）或は ,Marchez au pas'（歩調を揃へよ）と呼びかけて急がせた。それとは反對に私が頸の病氣で若い娘の時分に治療を受けた可なり老

年の醫師は彼にとつて餘り早過ぎる私の運動を靜める處の ,Piano, Piano'（軟かに）なる言葉によつて制止しようと努めたのであつた。だからしてかの醫師もこの習慣を持つてゐた事が實際考へ得るとして Levico- Wasser の代りに Levitico-Wasser と「書き損ひ」したものと思はれるのである。(Zentralblatt für Psychoanalyse, II, 5,) この著者の若い時分の追想から來る他の實例（französisch 佛蘭西の）を Frazösisch と「書き損ひ」し、又 Karl といふ名の「書き損ひ」も右の例と同じ處に記載されて居る。

(17) 内容の上からは惡い洒落に相當し、而も洒落の企圖は確かに存在しない「書き損ひ」を、私はヨツト・ゲー君（Herr J. G.）の報告から得た、この人から得たこの他の寄與は既に說明した。

「或る肺結核療養所の患者たる私は、近親者の一人に私を療養所に入る樣に餘儀なくしたと同じ病氣が診斷された事を悲しくも知りました。一通の手紙に於て私はその親類のものに或る專門家の處へ行けと云うてやりました。この人は有名なる大學教授であり、私が現在治療を受けて居り、その人の醫學上の權威に就ては私は確信してゐました。然しながら私は一面に於て、彼の傲慢なる事を歎く凡ての理由を持つてゐました。何故なればこの「プロフェツソール」は、その少し以前に私にとつて非常に必要な證明書を私の爲に書いて吳れる事を拒絕したからでした。私の手紙に對する返書に於て、私

は親類のものから一つの書きあやまりを注意されました。この「書き損ひ」はその原因が即座に判つたので、私を非常に面白がらせたのでした。私は手紙に次の文句を用ひたのでした。,………übrigens rate ich Dir, ohne Verzögerung Prof. X. zu insultieren'（………とにかく私はあなたが躊躇せずに「プロフェツソール、イックス」を侮辱する事をお勸めします）勿論私は Konsultieren（………に相談する）と書かうと思つたのでした。——私の羅典語及び佛蘭西語の知識は、この「書き損ひ」が私の無智から起るものであると云ふ説明を除外する程度のものである事を此處に指示する事は、多分必要な事であらうと思ひます。」

(18) 字を書く際に於ける遺漏（Auslassungen）は勿論「書き損ひ」と同樣に判斷すべきものである。精神分析學中央雜誌第一卷に於て法學博士 B. Dattner（ベー・ダトネル）は「歴史上の失錯作業」（historischen Fehlleistung）の注意すべき例を報告した。「一八六七年に墺太利と匈牙利との間の協定に於て一致を見たる、兩國の經濟的義務を規したる法文に於て ,effektiv'（有効なる）と云ふ語が匈牙利語の飜譯文の中に落ちてゐた。そしてダットネルは、この遺漏には墺太利に對し利益を出來るだけ少なく承認しようとする匈牙利側の法律校訂者の無意識的思潮が關與して居る事を有りさうな事に考へた。」

私共は書いたり、又は書き寫し（Abschreiben）たりする際に於て、同じ言葉が屢〻繰返される事、

――Perseverationen――も矢張り無意味のものではないと信ずべき凡ての理由を持つて居る。書き手が既に書いた同じ語を二度書いた場合には、彼はこの語から容易に離れ得ないとか、或は彼はこの場所に於てもつと多くの事を云ひ得た譯であるが、それを云はずにやめたとか、或はそれに類似の事を示すのである。書き寫しの際に於ける Perseveration（保續症）は „auch, auch ich"（私もまた）なる言葉の代りになるものの樣に思はれる。私は長々しい法醫學上の鑑定書を持つてゐたが、これは謄寫人より來る Perseverationen を特に優秀なる箇所に於て示してゐた。そして私は、これは彼の非人格的なる役目に倦怠を感じた謄寫人が「全然自分の場合である、或は全然自分の場合と同樣だ」と云ふ樣な註釋を附けようとして居るかの如き意味に之を解釋したかつたのである。

(19)　次に誤植と云ふものは植字工の『書き損ひ』として取扱てつ毫も差支なく、彼等は大部分動機あつて起るものと解して何等差支はないのである。非常に興味あり且つ爲になると思はるるこの種の失錯作業の系統的蒐集は私はやらなかつた。ジョーンズはたびたび本書に於て述べた彼の著述に、„Misprint"（誤植）なる特別の章を設けて居る。電報を捩ぢ歪める事も時々電報係の人の「書き損ひ」と解する事が出來るのである。暑中休暇に私は私の出版者から一通の電報を受取つた。それは „Vorräte erhalten, Einladung X. dringend"

と云ふのであつた。謎の解決は電文の中にあるXなる名から出來た。Xはある著者であつて、その人の著書に私は序文(Einleitung)を書く事になつて居た。これがEinladung(招待)となつたのであつた。次いで私は數日前に他の書への Vorrede (序)を出版者に送つた事を思ひ出した。それの到着と云ふ事が從つて私に非常に確實にされる。そこで正しい電文は多分次の樣になるのである。

„Vorrede erhalten, Einleitung X. dringend" (序文は受取つた。X氏の著書の序文至急送れ)

私共はこの電文が電報係の人の饑餓凝結觀念(Hungerkomplex)の犧牲になつたものと假定してよいのであり、その際文章の兩方の半分が發送者が企てたよりも一層密接な關係をつけられる事になつたのであつた。その外にこの例は多數の夢に認められる第二次的改作、(Sekundärer Bearbeitung)の好例である。

H. Silberer(ハー・ジルベレル)は萬國精神分析學雜誌第八卷(一九二二年)に於て「故意の誤植」(tendenziöser Druckfehler)の可能性に就て說いて居る。

折々他の人々から或る傾向を否定する事の困難な誤植が指摘される。例へばストルフェルは精神分析學中央雜誌第二卷(一九一四年)に於て「政治的誤植魔」(Der politische Druckfehlerteufel)に就て述べ、同第三卷(一九一五年)には小さな備忘錄を載せて居る。私はそれを此處に飜譯しよう。

(20) 今年四月二十五日發行の März(メルツ) に、次の様な政治的誤植が見られた。アルギロカストロンよりの通信としてアルバニエンに於ける暴動「エピロス」人の長（或はエピルス獨立統治の大統領と云つてもよい）なるツォグラフォスの「ステートメント」が記載されて居た。その中に次の文章があつた。「確かに自主的エピルスはウィード侯の全く固有の興味に屬するものである。侯はエピルスの上に sich stürzen（たよる事が出來るであらう）の誤植」「エピロス」人が彼に提供せんとする保護を受け容れる事が、自己の沒落 (Sturz) を意味する事は、多分この致命的の誤植がなくともアルバニエンの國王は知つて居たであらう。（譯者註＝……Könnte……sich stürzen（墜落）……するかも知れない」と。〔譯者註＝アルバニエンはバルカン半島の一州である）

(21) 私自身近頃ウィーンの日刊新聞紙上に „die Bukowina unter rumänischer Herrschaft"（「ルーマニアの統治下にあるブコヴィナ」）（譯者註＝ die Bukowina は昔の墺國の一州である）なる論説を讀んだ。この論説の標題は少なくとも餘りに早や過ぎるものと考へられた。何となれば當時「ルーマニア」人は未だ彼等の敵意を公言して居なかつたからである。内容の上からは確かに rumänisch（ルーマニアの）代りに russisch（露西亞の）と云はなければならない筈であつたのである。然しながらこの編輯は檢閲官自身がこの誤植を看過した位に、彼に不思議に感ぜられなかつたものと思はれるので

ある。

有名なる（以前には帝室並びに王室御用の）印刷所、テッセンのカルル・プロシャスカ（Karl Prochaska）の手で印刷された回章の中に、次の様な正書法の「書き損ひ」が讀まれるに至つては、「政治的」誤植（politischen Druckfehler）を考へざるを得ないのである。即ち

「目下の處聯合國の嚴命に依つて、オルザ河を境界と定める事により、シュレシエンのみでなくテッセンも二部に分たれた。その一つは波蘭に屬し、他はチェッコ・スロヴァカイに屬する（zufiel）」事になつたとなるべき處が zuviel（あまり多過ぎる）となつて居るのである。

Th. Fontane（テオドル フオンターネ）は或時餘りにも意味深長なる誤植に對し、面白い有樣に抗議を申込まねばならなかつた。彼は一八六〇年三月二十九日、出版者ユリウス・スプリンゲルに次の手紙を書き送つた。

「拜啓、私の小さな希望が容れられますやうに、私は天から賦與されて居ないやうに見えます。同封の校正刷を御一覽下されば、私の云はうとする事がお判りになるでせう。尚ほ私は前に申上げておきました理由から二「ボーゲン」(Bogen＝十六頁)を必要とするのですが、一「ボーゲン」しか送つて呉れません。第一の「ボーゲン」(最初の十六頁)を再度の閲覽の爲――特に英語及び英文のために――今一度送つて下さる事もやつて呉れないやうです。それは私にとつては大切な事なのです。例へば今日

の校正刷に於て、二十七頁にジョーン・ノックスと女王との場面に Worauf Maria aasrief（譯者註＝Ausrief の誤植）（……からマリアは叫んだ）」と云ふ事が書いて御座います。斯様な雷鳴でも轟くやうな事に對しては、私は誤植が實際に除かれたと云ふ安心を得たいものです。この aus（アウス）の代りに存する不都合なる aas（アアス）（譯者註＝Aas は、やくざ者、畜生、等の意味を持つて居る）は彼女、即ち女王が彼を心の中で實際にさう呼んだであらう事が疑ひないのでありますから、一層工合が惡いのです。敬具

テオドル・フォンターネ

ヴントは私共が「話し損ひ」よりも「書き損ひ」を一層しやすいと云ふ容易に確かめ得る事實に對し、注目すべき論據を與へて居る。「正常的なる談話の經過中には意志の制止作用は絕えず觀念の經過と發語運動とを一致させる事に向けられて居る。字を書く場合の樣に、觀念に從つて起る表情運動が、機械的の原因によつて緩徐にされる場合には………だからして斯くの如き先發（先驅）（Antizipationen）は特に起り易いのである」と彼は云つて居る。

「讀み損ひ」の起る條件の觀察は、私が說明しないで捨てておく事を欲せない樣な疑ひを惹起するの

である。何となればこの疑點は私の見込みでは收穫多き研究の出發點になりさうであるからである。「讀み損ひ」に際し讀者の注意が「テキスト」を離れて自分自身の觀念に向つて行く事屢〻なる事は私共に既知の事實である。注意のこの彷徨の爲に、他人が讀者を、讀んで居る最中に中斷させ、今迄讀んで居た事を聽いた場合に、何を讀んだか答へ得ない事は珍しからぬ事である。この場合に彼は自動的に讀んで居た事になるのである。然しながら彼は殆ど何時でも正しく讀んで居たのである。私は斯くの如き條件のもとに「讀み損ひ」が著しくその數を增すものとは信じない。大多數の官能が自動的に殆ど意識的注意を伴はず、而も極めて精確に實行されると云ふ事を假定する事には私共は慣れて居る。その結果は「話し損ひ」「讀み損ひ」「書き損ひ」の注意の條件は、ヴントの云ふ注意の脫漏、或は弛緩以外に求めねばならぬ事になるのである。私共が分析にかけた例は、元來注意の量的減少を假定すべき權利を私共に與へないものである。私共は多分これとは正確には同じ物でないもの、即ち見知らぬ出しやばりなる觀念による注意の障礙を見出したのである。

＊

何人かが署名する事を忘れる樣な場合は「書き損ひ」と「忘却」との間に挿入してよいものである。署名されない小切手は忘れられたものと同樣である。斯くの如き忘却の意義に向つて私はドクトル・

ハンス・ザックスが注意した小説の或る箇所を引用しよう。

「作家が如何なる確實さを以て精神分析學に所謂失錯行爲及び症候動作の心的機制を用ひ得るか、と云ふ事を示す非常に有利にして明瞭なる實例がJohn Galsworthy（ジョーン・ゴルスウォーシー）の「島の僞善者」(,,The Island Pharisees" の中にある。富める中流の若い男が、彼の深い社會的同情心と彼の階級の社交的慣習との間に動搖を示すと云ふ事が、この小說の中心點をなして居るのである。二十六章に彼の本來の人生觀からして今迄數回補助をしてやつた事のある若い浮浪人からの手紙に對して、彼があらはした反應の有様が書かれて居る。手紙には金を吳れと云ふ直接の願は含まれてはなかつたが非常に困つて居ると云ふ事が書かれてあつて、金が欲しいものとしかどうしても解されなかつた。手紙の受取人は最初金を以て慈惠院を補助しないで到底なほらない人間を助ける事の考へを斥けた。「唯困つて居るからと云つて際限もなく他人に救ひの手、自分自身の一部分、友人としてのうなづきを與へると云ふ事は何と云ふ馬鹿げた情操であらうか！　何處かに限界線を引いておかなくてはならない！」と。然しながら彼がこの結論をぼんやりと呟いて居た間に、彼の正直さがこれに反對するのを感じた。「嘘つき奴！お前は金を離すまいとするのだらう、それだけの事なんだ！」と。

彼は次いで親切な手紙を書き、次の言葉で結んだ、「私は一枚の小切手を同封しておきます。あなた

の正直なるリチャード・シェルトン拝」と。

彼が小切手を書いた前に蠟燭の火の周圍をぶんぶん云ひながら飛んで居た一疋の蛾が、彼の注意を他に外らせたのであつた。彼はそれを捕へて外に放して遣る事に取りかかつた。然しながらその爲に彼は小切手が手紙のなかに封ぜられなかつた事を忘れたのであつた。手紙は實際そのままで發送された。

この忘却は然しながら外見上打ち勝たれた支出節約の利己的傾向の進行と云ふ事以外に一層微妙なる動機を持つて居た。

シェルトンは彼の未來の舅姑の別莊に於て彼の約婚の女、彼女の家族、その家庭の客の間にまざつて孤獨を感じて居た。彼の失錯行爲によつて彼が自分を圍繞して居る申分のない、而も一つの傳統に從つて同じやうに刻印を捺されて居る周圍の人々とは、過去の生活に於ても人生觀に於ても全然異なつて居る被保護者を慕つて居る事が示されて居るのである。實際この補助なしにはその位置を保つ事の出來ないこの男は、數日の後に到着して手紙に書かれてあつた小切手が封入されて居なかつた理由を說明したのであつた」。

第七章　印象及び企圖の忘却

精神生活に關する私共現在の知識程度を過度に高く見積らうとする人があるならば、その人に對しては記憶の官能に於てのみは控へ目にするやうにと注意する必要がある。心理學の如何なる學說も記憶及び忘却の基本的現象を一緒に說明する事は出來ない。それのみではなく私共が實際に觀察し得る事を完全に分解する事は、未だ殆ど手をつけられて居ないのである。今日の處では多分忘却は記憶よりも不可思議の問題になつたやうである。何となれば夢や病的の出來事の硏究は、私共が疾くに忘れてしまつたものと考へた事さへも再び急に意識に泛び出で得る事を敎へたからである。

勿論私共は一般の承認を期待し得る二三の觀點を持つて居る。私共は忘却が自發的の過程であり、一定の時間的經過に歸すべきものである事を假定する。私共は忘却に際しては、與へられる印象の間に一定の選擇(セレクシヨン)が起る事、又各印象や經驗の細目の間に選擇が起る事を强調する。私共は記憶の永續性及びそれの呼びさまされ易い事に就ての一二の條件があり、これがなければ忘却される事を知つて居る。每日の生活に於ける無數の出來事に於て、私共は私共の認識が非常に不完全不滿足なものであ

る事を認めるのである。一緒に旅行したと云ふ様に共通の外的印象を受けた二人が、後に彼等の記憶を互ひに交換する有様を傾聽して見るならば、一方の人にかたく記憶されて居る事が他方の人には全然起らなかつた事でもあるかの様に忘れられて居る事がある。而も私共はその印象が一方の人にとつて他方の人に對してよりも心的に重要なものであつたと主張し得る權利を有たないのである。記憶の選擇を決定する要素の多數は、明かに未だ私共の知識以外にあるのである。

忘却の條件に就ての知見補遺をなさんとして、私は私自身に忘却が起つて來た場合にはこれを精神分析にかけるのを例として居る。私は通常斯くの如き場合の內、一定群のもののみを取扱つて居る。それは私が當然知つて居る筈であると期待して居る事を忘れ、爲に自分が不思議に思ふ樣な場合のみを取扱つて居る。尙ほ私は全體としては(卽ち學んだ事ではなく、經驗した事に對しては)健忘の傾向のない事、及び私が青年時代の短い時期の間は、實際非凡なる記憶力を持つて居ないではなかつた事を述べて置かうと思ふ。私の學童時代に、私は勿論自分の讀んだ本の頁を諳誦する事が出來た。そして大學に入る少し前には、私は科學的內容を有する通俗講演をその直後殆ど言葉通りに書く事が出來た。最終の大學卒業口頭試問を受ける前の緊張に於て、私は尙ほこの能力の殘りを用ひたに違ひなかつた。何となれば私は一二の事に就ては、試驗官に教科書の本文と正に同じ答へを恰も自動的に與へ

たからである。この教科書を私は唯一回大急ぎで目を通したに過ぎなかつたのであつた。

その後私の記憶力は益々不良になつた。然しながら私は最近迄一定の方法によつてそれを用ひない場合よりも遥かに多くの事を追想し得る事を確信して居た。例へば或る患者が診察時間中に、彼が曾つて一度私に逢つた事があると主張し、而も私がその事實に就てもその時に就ても想ひ出し得ない時には、私は臆測する事によつて、即ち現在より始めて一定數の年を速かに思ひ泛べる事によつて自ら助けるのである。記錄或は患者の確實なる陳述が、私の思ひ付のコントロールを可能にする場合には、十年以上前の事でも半年以上の間違ひ*を來さない事が明かにされた。

* 通常この場合に話して居る内に當時第一回訪問の際の細目が意識的に泛んで來るのが例であつた。

それと似た事が、私が餘り近しくして居ない知人に出逢ひ、お世辭にその人の幼い子供等の事を尋ねる時にも起るのである。彼が子供等の發達に就て物語つて居る時、私はこの子供が何歳になつたかと云ふ事を思ひ付かうと努力する。そして父の云ふ事によつて確かめて見ると高々一箇月位、少し年とつた子供の場合には三箇月位しか間違はないのである。尤も私はこの見積りをするに際して、どんな事を根據にするかと云ふ事は云ひ得ないのである。終には私は非常に大膽になり、私の見積りを自ら進んで云ひ、而も彼の子供に關する私の不知を暴露する事によつて父を怒らせる様な危險には陷ら

なかつたのであつた。私は斯くして兎に角非常に豐富なる無意識的記憶を呼びさまし、私の意識的記憶の範圍を擴げるのである。

それでは私は此處に主として私自身に觀察した忘却の著しい實例を報告しよう。私は印象及び經驗の忘却、即ち知識（Wissen）の忘却及び企圖（Vorsätze）の忘却、即ち怠慢（Unterlassungen）を區別する。全體の觀察の一律なる結果を私は先づ此處に述べる事が出來る。「凡ての場合に於て、忘却は不快の動機（Unlust-motiv）に基く事が證明される」と。

(A) 印象と知識の忘却

(1)或夏に、私の妻はそれ自體として無害な原因から私をはげしく怒らせた事があつた。私共はウィーンの或男と對坐して「ホテル」の共同食卓に就いて居た。その男は私が知つて居り、彼もまた多分私の事を追想し得たらしかつた。然しながら私には彼との相識を新たにしたくない理由があつたのであつた。向ひ側に居る男の名望ある名を聞いただけの私の妻は、彼とその隣りに居る人との對話を餘りにも露骨に傾聽し、そこに話されて居る事を取り入れた問を以て自分に話しかけて來た。私は辛抱がしきれなくなつて終には怒つてしまつた。數週間後に私は妻のこの態度に就て困つた事だと云ふ話を

私の親戚の或人に持出したのであつた。然しながら私はかの男の話した事を一語も思ひ出す事が出來なかつた。私は平生寧ろ怨を忘れない方のたちであつて、自分を怒らせた樣な出來事の細目を忘れ得ない方であるから、この場合の記憶缺損は多分妻の人格を傷けてはならぬと云ふ顧慮に動機をおかれて居るものである。つい近頃私に同じ樣な事が再び起つた。私は親しい知人に向つて數時間前に妻の云つた事を笑ひ草にしよう、とした。然しながら私はこの企圖に於てその話を跡かたもなく忘れてしまつたと云ふ著しい事情によつて妨げられた。私はその事が思ひ出し得るやうに妻に乞はねばならなかつたのであつた。この私の忘却は、私共の近親に關する事柄に於て、私共が陷る定型的なる判斷障礙を同じ樣に解すべきものである事は容易に理解する事が出來る。

(2)私はウィーンに到着した土地不案內な婦人の爲に、書類や金を入れて保存する小さい鐵製手提金庫を買ふ事を引受けた。私がこの申出でをした時に、私の眼前には私がこの樣な手提金庫を見たに相違ない市の中心にある或る「ショーウインドウ」の像が、異常に明かな活潑さを以てありありと見えて來た。私は街の名は思ひ出せなかつたが、市內を散步する際に、確かにその店舖を見出すであらうと思つた。何となれば私の記憶は、私が數へ切れない程屢〻その店舖の前を通つたと云ふ事を私に告げたからである。私は市の中心（Innere Stadt）をあらゆる方向に通つて見たけれども、この手提金

庫の竝べてある飾窓を見出す事が出來なくていらいらした。私は宿所、姓名、職業を書いた名簿錄からして金庫製造者を探し出し、二度目の巡回に於て求められたる飾窓を見出す外はないと考へた。然しながらそれにはあまり骨が折れなかつた。「アドレス・カレンダー」の中に書かれてある「アドレス」中に、之が忘れられて居たものであつたと云ふ事が直ぐにわかつた一つの「アドレス」があつた。私が曾つて數へ切れぬ程度々飾窓の前を通つて居た事は事實であつた。私は多年來同一の家に住居して居るMなる家庭を訪問する時にはいつも其處を通つて居たのであつた。この親密なる交際が止んで全然疎遠になつた時、私は別にわけもなくこのあたり、及びその家を避けるのを常とするやうになつた。私が飾窓の中の金庫を探しながら市街を散歩した時には私はその附近の街路は凡て歩いた。然しながらこの一つの街路のみは恰も禁制でもあるかの樣に避けて居たのであつた。この場合に私に見當のつかなかつた原因になる不快の動機は理解する事が出來た。然しながら忘却の機制は前の例ほど簡單なものではなかつた。私の嫌惡の感は勿論金庫製造業者に適用さるべきものではなく、或る別の人――その人の事に就ては私が何も知り度くはない――に適するのであり、この人からして忘却を起さしめた機會に轉移されたのである。前に述べた Burckhard(ブルツクヘルド) の例に於ては、これと全く類似して、或る人に對する憤怨が、他の人に關係する場合に於て名の「書き損ひ」を惹起したのであつた。この場合

に於て本能的に異つて居る二つの觀念圈の間の連絡をつくつた「名を同じうする事」の代りに、飾窓の例に於ては空間に於ける近接、引離す事の出來ない近隣と云ふ事が現れて居るのである。但し後の例は前の例に比して一層緊密に接合されて居た。卽ち尙ほ一つの內容上の結合が存したのである。何故なればその家に住んで居る家庭と疎遠になつた理由の中には金錢が一つの役目を爲して居たからである。

(3) 私はB.(ベー) & R.(ウントエル) 事務所から其處の事務員の一人を往診して吳れと賴まれた。その家へ行く途上私はその商店のある建物へは度々行つたに違ひないと考へた。私はその店の看板は一つ低い階に見え自分が前に往診した處は一階だけ上であるやうに思はれた。然しながら私はそれが何と云ふ家であつたか何人を往診したのか思ひ出す事が出來なかつた。全體の事はどうでもよい事であり、且つ無意義な事ではあつたが私はこの事件を取扱ひ、それに就ての「思ひ付」を集め、いつもの樣に迂路を經て、總にB. & R. 商店のある處より一階上にフィッシャー下宿屋(Pension Fischer)といふのがあり、其處へは私は屢々患者の往診に出掛けた事が判つて來た。そして今や私はその商店及び下宿屋を包容して居る建物をも知つたのである。それにしてもこの忘却の際に働いた動機が私には判らなかつた。私は商店そのもの、或はフィッシャー下宿屋或ひは其處に住んで居た患者に關し、追想上不快なる何ものをも見出さないのであつた。又私はその動機たるやひどく苦痛なものではなからうと推察した。

でなければ前例に於ける様な外的の補助材料を用ひないで、廻り道をして忘れた事を再び支配し得るに至らなかつたであらうと私は考へたのであつた。終に私は一寸前にこの新しい患者の處へ行く途中一人の紳士が自分に挨拶をした事を思ひついた。この男を認識するには骨が折れた、私はこの男を數箇月前に外觀上重篤なる狀態に於て診察し、進行性麻痺症の診斷を下したのであつた。然しながらその後彼が囘復した事を聞いたので、私の診斷が間違つて居たかも知れないと思つて居た。若しも麻痺性癡呆症にも見られる事のある寬解狀態が起つたのでないとすれば、私の診斷は間違つて居たかも知れなかつたのであつた！　私をしてビー・ウント・エル商店の近所の家を忘れさせた影響は、この男との邂逅にその端を發して居た。そして忘れられた事の解決を見出さうとする私の興味は診斷の疑はしいこの例から轉移されて居た。然しながら聯想上の結合は姓名が同じであると云ふ事から起つて居たのであつて、この場合には內的の關係は餘りなかつたのであつた。——卽ち期待に反して囘復したこの男も、私に患者を送つて來るのを例として居る或る大商店の事務員であつたのである——私がこの疑はしい麻痺症患者を共同診察した。その醫師は同じ建物の中に住んで居り、且つ忘却された下宿屋同樣フィッシャー（Fischer）と云ふ人であつたのであつた。

(4) 或る物品を置き忘れ（Verlegen）ると云ふ事は、私がそれを何處に置いたかと云ふ事を忘れる事

に外ならないのである。そして書き物や書物を取扱ふ多數の人々と同様に、私は机の上の勝手をよく知つて居り、必要なものを直ちに取り出す事が出來るのである。他人に對しては無秩序だと思はれる事でも自分にとつては歴史的にきまつて居る秩序である。然しながら何故に私は近頃自分に送られた書籍目錄を置き忘れて之を見出す事が出來ない様な事になつたのであらうか？　實際私はその中に廣告されて居た「言語に就て」（über die Sprache）と云ふ書を注文しようと思つたのであつた。何となればその書物が或る著者の書いたものであり、その人の機智に富み活氣ある書き方を自分が好み、その人の心理學上の認識、その人の文化史上に於ける知識を自分が尊重して居たからであつた。だからして私はその圖書目錄を置き忘れたものと考へるのである。私はこの著者の書物を啓蒙のために自分の知人に貸してやるのを常として居た。そして數日前或人がその書物を返却しに來た時に、その人は私に向つて「書き方はあなたの書き方を思ひ起させます。そして考へ方も同様です」と云つた。彼はこの言によつて何に觸れたかと云ふ事を知らなかつたのである。多年前私が未だ若くて仲間が欲しかつた頃、私が有名なる某醫學者の書いたものを稱讃した時に、自分よりも年上の同僚が殆ど同じやうな事を云つた事があつた。「丁度あなたの様な文體であり、あなたの様な書き方様式です」（Ganz Ihr Stil und Ihre Art.）と。これに大いに影響されて私はこの學者に對し、より近しい文通を乞ふ旨の

手紙を書いたのであつた。然しながら冷淡なる返書によつて私は自分の分限内に突き戻されたのであつた。この最後の經驗の背後にはその外に尙ほそれ以前の脅かす經驗が多分隱れて居るのであらう。何となれば私はこの置き忘れた「カタローグ」を二度と見出さなかつた。そしてこの前徴によつて私はこの廣告された書物を注文する事を實際に阻止されてしまつたのであつた。——「カタローグ」が見えなくなつた事によつて實際の障礙は起らなかつたけれども。私は勿論その書物及び著者の名を實際に記憶に保存して居たのであつた。

* Th. Vischer（チオドル ヴイシエル）以來「物體の惡戲」に歸せらるる多數の偶然の出來事に向つて、私は同じやうな說明を提唱したい。

(5)「置き忘れ」の他の一例は置き忘れられたものが再び見出された條件の爲に私共の興味を向けられる價値がある。或る若い男が私に次の話をした。「一二年前に私共夫婦の間に誤解がありました。私は妻が餘りに冷淡であると思ひました。そして私は妻の優秀なる性質を喜んで認めて居ましたものの私共は愛情なしに暮して居ました。或日彼女は散步から歸つて來て、私に興味があるかも知れぬと云ふので買つて吳れた一冊の書物を持つて來て吳れました。私はこの自分に注意して吳れる事の徵候を感謝し、その書物を讀む事を約し、それをちやんと仕舞ひ込みました。而もその後二度とこの書物を

見出す事が出來ませんでした。數箇月を經過し、その間私は時折この失はれた書物の事を考へ、又實際それを見出さうとしましたがだめでした。約半箇年の後に別居して居た私の愛する母が病氣しました。私の妻は彼女の姑を看護するために家を去りました。患者の狀態は重篤になりまして彼の妻に彼女の最上の半面を示すべき機會を與へたのでした。或晩私は妻の行爲に感激し、彼女に對する感謝の念に滿ちて家に歸つて來ました。私は自分の机の傍に歩み寄りました。そして特に企圖した譯ではないが、夢遊病者の樣な確實さを以てその或る抽斗をあけました。そしてその一番上の處に私は永い間見失はれて居た置忘れられた書物を見出しました。」

窮極の特徵、卽ち「置き忘れ」の動機がなくなつた時に著しい確實さに於て發見された點に於て、この例に合致して居る「置き忘れ」の一例をヨツト・シユテルケが述べて居る。(前揭書)

(6)『一人の若い娘が「カラー」を造らうと思つて布片を切る時にこれを臺なしにしてしまつた。女裁縫師が來てそれを何とか都合のよいものにしなければならない事になつた。さて愈々裁縫師がやつて來て娘が、切りちぎられた「カラー」を入れたものと信じた抽斗を開け、之を出さうとした時に彼女はそれを見出さなかつた。彼女は抽斗の中を搔き探したがそれでも見付からなかつたのであつた。彼女は怒つて坐り込み、何故それが見えなくなつたかと云ふ事を自問自答し、彼女が多分それを見出し

度くないのではないかと考へた時、彼女は「カラー」の様な簡單なものさへ之を臺なしにしてしまつたのであるから、勿論裁縫師に對して恥ぢて居るのであらうと云ふ考へになつた。彼女がかう考へた時、立上つて別の簞笥の處に行き第一着手にあけた抽斗から切りちぎられた「カラー」を引き出した。』

(7)「置き忘れ」の次の例はどの精神分析者にも知られるやうになつた「タイプ」である。この「置き忘れ」を仕出來した患者が自らこれを解く鍵を見出したものと云つてよからうと私は考へる。「精神分析療法を受けて居た一患者は、夜脱衣の際に——彼の考へる處では——一つなぎの鍵をいつもの場所に置いた。この患者では療法に對する抵抗があり健康狀態のよくない時期に、この療法の夏期の中斷が來る事になつたのであつた。次いで彼は次の日——治療の最終日であり分析醫への謝金をも支拂ふべき日——の旅立ちのために尙ほ一二の品物を「テーブル」から出して持つて行かうと云ふ事を思ひ出した。その「テーブル」の中に彼は金をも保管してあつたのであつた。然しながら鍵は見えなかつた。彼は小さい住居の中を系統的に、然し段々苛立ちながら探したが効がなかつた。彼は鍵を「置き忘れ」た事が症候行爲であり企圖された事であると認めたので、とらはれない人の助けを得て更に探して見ようと思ひ、下男を呼び起したのであつた。一時間後彼は探す事を止め、鍵を紛失してしまつたのではないかと氣遣つた。次の朝彼は机の錢入れの製造人に新しい鍵を注文し、大急ぎで

造つて呉れと頼んだ。彼が前日歸宅の際に彼と同伴した二人の知人は、彼が電車から降りる時に何か地面の上でちりんちりんと鳴つたのを聽いた樣な氣がすると云つた。彼は鍵が「ポケツト」から落ちたものと確信した。夕方下男が勝誇る樣にして鍵を彼に捧げた。鍵は厚い書物と薄い册子（私の或る門下生の書いた論文）——この小册子は彼が夏休みに讀む爲に持つて行かうと思つて居たものであつた——との間に非常に巧みに置かれてあり、何人もそんな處にあらうとは想像しなかつたのであつた。それからは彼が鍵の位置をさう云ふ風に見えないやうに眞似て置く事さへ不可能であつた。祕密な、然しながら強い動機によつて或る物品を「置き忘れ」る無意識的技巧は、全く夢遊病的確實性を想起せしむるものがあるのである。この「置き忘れ」の動機は、勿論治療の中斷に就ての不快と健康狀態が、斯くも惡いのに多額の謝金を拂はせられる事に對する祕密の怒りにあつたのである。

(8) エー・エー・ブリルが、報告して居る例であるが、或男が内心では全然興味を持たない或る社交的の催しに參加する樣彼の妻から勸められた。終に彼は妻の請ひを容れ、式服を「トランク」から出し始めたのであつたが途中で止めて先づ顏剃りをしようと決心した。それが終つて彼は「トランク」のある處に戻つて來た。然しながら「トランク」は閉ぢられて居り、鍵は見付からなかつた。日曜日の夕方の事とて鍵師を招く事が出來ず、二人はその會合に缺席する外なかつた。翌朝「トランク」が開

かれた時鍵はその中にあつたのであつた。この男はうつかりして「トランク」の中に鍵を落し込みそ、のまゝこれを閉ぢ込んだのであつた。彼は全然知らず又何等の企圖も持たずにさうしたと證言した。然しながら私共は彼が會合に行き度くなかつた事を知つて居る。だから鍵の「置き忘れ」には動機がなくはなかつたのである。

イー・ジョーンズは餘り煙草をすひ過ぎて、その爲に不快を感ずるやうになつた場合にいつも「パイプ」を「置き忘れ」る事を自ら觀察した。こんな時には「パイプ」はそれがあるべき筈でない場所、常にはおかれて居ない色々の場所に見出された。

(9) Dora Müller（ドラ・ミユルレル）は無害な而も動機の承認されて居る例を報告して居る。「私は昨晩私の胡椒入菓子包の中からいくらかの菓子を出してたべました。その際私はエス孃（彼女の母の話相手）が「お休みなさい」と云つて來ました時に、その一部分を提供せねばならぬと考へました。私はさうする事に心から興味を持つては居ませんでしたが、それでもさうしようと企てたのでした。その後彼女が來まして、私がその小包を取らうとして私の小机の方に手を伸ばしました時、私は其處に小包を見出しませんでした。私はそれを搜してそれが私の簞笥の中に入つて居るのを見出しました。私は知らず識らず小包を其處へ

仕舞込んで居たのでした」と。分析は必要なかつた。話し手自ら其間の消息を知つて居た。小包を自分獨りだけに取つて置きたいと云ふ壓迫された傾向が、正にこの自動的行爲にあらはれたのであつて、この場合は勿論その後の意識的行動によつて帳消しにされた譯である。(Internat. Zeitschrift. f. Psychoanalyse,III, 1915.)

(10) ハンス・ザックスは斯くの如き「置き忘れ」によつて或時仕事をなすべき責任逃れをした事を自ら叙して居る。「この前の日曜日の午後私は仕事をしようか、それとも散歩に出かけ、ついで訪問をしようかと暫くの間迷つた。然しながら少しく躊躇した後に終に前者を選ぶ事にした。約一時間の後私は用紙の貯藏が盡きた事を認めた。私は何處かの抽斗に數年來一束の用紙が貯へられてあつた事を知つて居た。然しながら私は机の中及び私がそれを見出し得るかも知れないと考へた他の場所を非常に骨折つて捜し、ありとある古い書物や「パンフレツト」や書類などを引搔き亂して捜したがだめであつた。そこで私はどうしても仕事を中止して出掛けねばならぬ事になつた。私が夕方家に歸り、安樂椅子に腰かけ、ぼんやりして向ひ側にある本箱を見遣つた時、私に一つの抽斗が目についた。そして私はその抽斗の中は既に永い間調べて見なかつた事を思ひ出した。そこで私は立つて行つてその抽斗を開けた。一番上の處に皮製の紙挾みがあつて、その中に使つて居ない用紙があつた。然しながら

私がそれを取り出して机の抽斗に仕舞ひ込まうとした時に、それがその日の午後に搜して見付け得なかつたその用紙であつたと云ふ事が私にはじめて思ひ泛んだのであつた、私は此處に云はなければならないが、私は全般的には吝嗇ではないが、紙に就ては非常に注意して行動し、用ひ得る凡ての殘りを保存しておくのであつた。實際の動機が消失するや否やこの忘却を直ちに訂正せしめたものは、一つの本能から養成されて居るこの習慣であつた事は明かな事である。」

「置き忘れ」の多數の實例を通觀して見ると、これが無意識企圖の結果以外に於て起る事があると假定する事は困難である。

(11) 一九〇一年の夏、私は當時科學的の問題に就て活潑な意見の交換をやつて居つた友人某に次の様に說明した。「神經官能症の問題は、私共が個體が元來兩性的性慾を持つて居ると云ふ假定に完全に立脚する時に初めて解決する事が出來ます」と。そしたら私は次の様な答を得た。「その事は私が二年半前に Br. と云ふ處で夕方の散步をした時にあなたに云ひました。當時あなたはそれを聞かうとはなさらなかつたのでした」と。其處で私は彼の創意を拋棄せしむる事になるのが氣の毒であつた。私は斯くの如き對話をなした事及びわが友がこの意見を披瀝した事を追想する事が出來なかつた。兩人の內何れか一人が思ひ違ひして居たに相違ないのである。そして「何人にそれが役立つか?」(cui

prodest ?) の問の原則に從つて私が思ひ違ひをした方でなくてはならなかつた。〔譯者註＝諺に is fecit cui prodest. (der hat es getan, welchem es nützt)「それが（その人に）役立つ。その人がそれを爲したのである」と云ふのがある。〕私は次の週の經過中に、實際私の友がどう云ふ風にして自分にその事を思ひ起させようとしたかと云ふ事を凡て思ひ出した。私は當時どう云ふ答へを與へたかと云ふ事も知つて居る。「私はまださうは考へて居りません。私はそんな事に味方しようとは思ひません」と私は答へたのであつた。然しながら私はそれ以來醫學上の文獻の何處かに私の名と關聯せしめ得るやうな二三の考への一つであり、而も私の名が其處に說明されてゐない樣なものに遭遇した場合に、以前よりもいくらか辛抱強くこれに堪へ得るやうになつた。

彼の妻に對する非難――反對側に變化したる友情――醫師の診斷に於ける誤謬――同じ方向に向つて努力して居る人の拒絕――思想の剽竊等選擇なしに集められた忘却の多數の例は、それを明かにするに當り、苦痛を起す問題に立ち入る事を必要とする事は、決して偶然の事ではないのである。それ處か私はどんな人でも自分自身の忘却をその動機の研究に引き入れようとするならば、同じやうな厭やな事の見本帳を示す事が出來るやうになるであらうと推察するのである。不快な事を忘れる傾向は私には全く常の事の樣に見えるのである。不快な事を忘れる事の能力は、多分色々の人に於て色々の

程度によく發達して居る。醫業をやつて居る内に私共が遭遇する否定の或るものは、多分忘却に歸す*べきものである。

*或人に向つて拾年か拾五年前に黴毒に感染した事があるかどうかと問診して見ると、彼は精神的にこの病氣を急性僂痲質斯とは全然別な有様に取扱つた事を非常に容易に忘れて居る――兩親が神經病に罹つた彼等の娘に就て述べる既往歴に於ては、彼等が忘却した部分と祕する部分とを明確に區別する事は殆ど出來ないのである。何故なればこの娘の後來の結婚の障りになるやうな凡ての事は、兩親によつて系統的に除かれ――壓迫されるからである。――近頃愛妻を肺病で亡くした或男は、斯くの如き忘却によつて醫師の問診が邪路に導かれる次の例を私に告げた。「私の氣の毒な妻の肋膜炎が、何週間たつてもまだよくならなかつた時Dr. P.(ドクトル・ペー)が協議醫師として招かれた。既往歴をとるに際し、彼はいつもの樣に訊ね、殊に私の妻の家庭に肺病があつたかどうかをきいた。私の妻はそれを否定し、私もそれを思ひ出さなかつた。ドクトル・ペーが辭去するに際し、話は偶然的に遠足の事に及んだ。そして私の妻は云つた。「私の可哀相な兄弟の葬られて居るランゲルスドルフ迄も永い旅です」と。この兄弟は約十五年前に數年も續く結核症で死亡したのであつた。私の妻は彼を非常に愛してゐて、屢〻彼の事を私に話し出してゐた。そればかりでなく妻が先頃肋膜炎と診斷された時彼女は非常に心配し、心が暗くなつて「自分の兄弟も肺病で死んだのだ」と考へたのであつた。然るに今その追想は非常に強く壓迫され、彼女が今述べたランゲルスドルフへの遠足の事を話した後でさ

へ、彼女の家庭に於ける病症の報告を訂正するきつかけを見出さなかつたのであつた。私自身には彼女がランゲルスドルフの事を話した瞬間に、この忘却された事が思ひ泛んだのであつた。——これと全く同じやうな經驗をジョーンズは既に度々述べた彼の著述に於て報告して居る。自分の妻が診斷不明の腹部疾患に罹つてゐた某醫師は、慰める樣な調子で「お前さんの家庭には結核症例がないからいいよ」と彼女に云つた。處が細君は非常に驚いて「あなたは私の母が結核で死んだ事、それから私の姉妹が結核症が癒らないで醫師から見放された事をお忘れになつたのです」と答へた。

斯くの如き忘却に對する私共の解釋は、勿論この態度とあの態度との間の區別を、純心理學上の狀態に制限するものであつて、兩方の反應の有樣に於て其處に同じ動機のあらはれを認めしめるのである。私が患者の家族に於て見た不快なる記憶の否認の多數の實例の中で、一例は特に奇なるものとして私の記憶に殘つて居る。或母が神經質であつて、現在思春期にある彼女の息子の兒童期の事を告げ、彼が他の同胞と同樣に遲く迄寢小便に惱んだ事を物語つた。この事は神經病者の病歷に對して無意義のものでない事は周知の事である。數週間の後、彼女が治療の狀態に就ての報告を聞きに來た時に、私は彼女に向つて、この若い男の體質的病的素質に注意せよと云ひ、既往歷にあげられてゐた夜尿症の事を引合に出した處、驚いた事には彼女はこの事實がこの子及びその同胞にもあつた事を否定し、

且つ一體私がその事を何處から知り得たかと訊ね、終に私から彼女自らがつい近頃物語つた事を告げられたのであつた。その事を彼女は忘れてゐたのであつた。*

*私がこれの頁の原稿を書いてゐた日に、私は次の殆ど信ぜられない樣な忘却の例に遭遇した。一月一日に私は患者に報酬の勘定書を送る事が出來る樣に私の診療簿を調べてゐた。その際六月の處にM…l なる名に遭遇し、而もこの名に相當する人物を思ひ出す事が出來なかつた。だんだん頁を繰つて行く中に、私はこの症例を或る療養所に於て治療して居り、數週の間毎日往診してゐたと云ふ事實を認むるに及んで、私の不審は一層加はつて來たのであつた。私はこれが男子であつたらうか、痲痺症患者であつたらうか、それとも何等興味のない症例であつたらうかと自分にたづねて見た。受取つた報酬に就ての記入の處に來て、初めて追想から逃れようとした凡ての知識が自分によみがへつて來た。M…l は十四歳になる少女であり、私の近年に於ける最も注意すべき症例であり、私が決して忘れ得ないであらう教訓を私に殘し、その終りは私に非常に苦しい時を作つたものであつた。この子供はまがふかたない「ヒステリー」症に罹つてゐた、そして私の手で速かに且つ根本的によくなつたのであつた。この輕快の後にこの子供は兩親の手によつて私から引き取られた。子供は尙ほ腹痛を訴へ、この腹痛は「ヒステリー」の症候像に於ける主役を演じてゐたのであつた。二箇月の後にこの子供は下腹部淋巴腺肉腫で死亡した。「ヒステリー」症の素質をもつたこの少女は、腫瘍の形成をその誘因として該症を起したのであつた。そして私は喧しいが然し無害なる「ヒステリー」症狀に

とらはれて徐々に起つて來る惡性の疾患を見落したのであつた。

だからして私共は健全であつて神經病に罹つてゐない人に於ても苦しい印象に就ての追想、苦痛を呼び起す觀念の表象に對しては抵抗が働くものであると云ふ事の多數の徵候を見出すのである。*

* A.(アー) Pick(ピック)は近頃「精神病、神經病患者に於ける忘却の心理」なる論文に於て、感情的要素の記憶に及ぼす影響を認め、不快感に對する防衞の努力が忘却に對して盡す貢獻を——多少明かに——承認した多數の學者を竝べ立てた。然しながら Nitzsche(ニイチエ)が彼の警句に於て示した程に、この現象とその心理學的論證を適切に又同時に印象深く表現し得たものは私共の中にはゐないのである。彼は云つた。「私はその事を致しました」と。私の記憶が云ふ。「私はそんな事をした筈がない」と。私の自負心が云ひ而も一步も假借しない。最後に——記憶が讓步する」と。

然しながら私共が神經官能症性の人の心理に立ち入つて行くならば、私共は初めてこの事實の完全なる意義を測り知る事が出來るのである。不快感を呼び起し得る觀念に對する斯くの如き原始的防衞傾向(elementares Abwehrbestreben)——痛覺刺戟ある場合に於ける逃避反射機能(Fluchtreflex)に對立せしめ得る——を私共は「ヒステリー」症狀を支持する機制の大黑柱と認むるやうに餘義なくされるのである。人々は斯くの如き防衞傾向の假定に反對し、私共が逆に吾人に迫つて來る苦しい記憶

から解放され得ない事屢〻なる事、及び悔恨、良心非難の様な苦しい感情激發を逐ひ拂ふ事の出來ない事が屢〻であると云ふ様な事は云はないであらう。勿論この防衞傾向が到る處に於て成功するものであると私共は主張するのではない。又私共はこの傾向が心的の力の間に起る勝負事に於て、他の目的の爲に正反對の事を成し遂げようと努力し、彼に頡頏して實際に之を成立せしめる様な要素に遭遇する事がいゝと主張するのではないのである。心的裝置の建築學上の原則として、層形成即ち上下に互ひに重り合つて居る動因よりの組立が推測される。そしてこの防衞傾向は低級なる心的動因に屬するものであり、高級なる動因からは制止され、阻止されるものであると云ふ事は大なる可能性のある事である。兎も角も私共が私共の忘却の例に見るが如き過程をこの防衞の傾向に歸し得るならば、この傾向の存在と、その勢力ある事が辯護されるものと云はなくてはならない。私共は或事柄がそれ自體の爲に忘れられるのを見るのである。これが可能がない場合には防衞傾向はその目標を轉じ、少なくとも他の比較的重要ならざる事であつて、而も本來の不快なる事との間に聯想上の結合に陥つた事を忘却させるのである。

此處に述べたる觀點、即ち苦しい記憶は特に容易に動機のある忘却に陥ると云ふ事は、今日までは未だ全く或は餘り顧慮されてゐなかつた、二三の領域に關係をつけられる價値があるであらう。例へ

ば法廷*に於ける證言を評價するに際して、この事は今尙ほ十分明確に强調されてゐないやうに思はれる。この場合私共は證人の宣誓に對し、これが彼の心的過程に對する淨化的影響を有するものとして過大の信頼をおいて居る觀があるのである。或る民族の傳說や傳說的歷史の成立に際しては、國民的感情に對して苦痛を起すやうな事を記憶から除外しようとする樣な動機を考慮に入れなければならぬ事は一般に承認されて居る。精細に追究するならば、民族傳說、及び各個人の幼時追想の出來る有樣の間には完全なる類似が認められるであらう。偉大なるダーウヰンは忘却のこの不快動機を認識して科學硏究者に向つての金科玉條をこれ**から引き出したのである。

* Hans Grosz, Kriminalpsychologie, 1898. と比較せよ。

** アーネスト・ジヨーンズはダーウヰンの自叙傳に於ける次の箇所を指摘して居る。この箇所はダーウヰンの科學上の眞面目さと彼の心理學上の烱眼とを明かにあらはすものである。

「多年の間私は一つの金誡 (golden rule) を守つて居る。卽ち、發表されたる事實、新しい觀察或は思想であつて、私自身の全般の硏究業績と矛盾するものを見出す場合には、私は直ちにそれを出來るだけ忠實に書きつけておく事にして居る。何となれば、經驗は斯くの如き事實や經驗は私共に好都合なるそれよりも容易く記憶から逃げ去る事を敎へるからである。」

「名の忘却」の場合と全然類似して「印象の忘却」の場合にもあやまり追想する（Fehlerinnern）と云ふ事が起り得るのである。この誤れる追想が信念を見出す場合には、記憶錯誤（Erinnerungssäuschung）と名づけられる。病的の場合に於ける記憶錯誤——偏執症(パラノイア)に於ては、この記憶錯誤は正に妄想形成の際に於ける組立てる要素の役目をなすものである——は非常に多數の文獻を呼び起して居る。而も私は之等文獻に於て記憶錯誤の動機への指示は全然見出し得なかつたのであつた。この記憶錯誤の題目は、神經官能症の心理學に屬するものであるから、此處に之を取扱ふ事は止めにしよう。その代りに私は自分の記憶錯誤の奇なる實例を述べよう。この例では無意識的なる被壓迫的材料が記憶錯誤の動機をなして居る事、及びこの材料との結合の有様が十分明かに見られるのである。

私が「夢判斷」に關する私の著書の後の方の章を書いた時には私は避暑地に居り、圖書館にも行けず參考書も手に入れる事が出來なかつた。從つて私は後に訂正する事にして凡ての關係と引用文とを記憶からして原稿に書き込んでおく外なかつたのであつた。幻想（Tagträume）に就ての事を書いてゐた際に、私に Alph. Daudet(アルフォンス・ドウデー) の „Nabab"(ナバー) の中に描寫されて居る、貧しい簿記係の優秀なる人物が思ひ泛んで來た。この人物をかりて多分この作家が彼自身の幻想を描寫したのであつた。私はこの男——私は彼を Mr. Jocelyn(ジョーセリン) と名づけた ——が巴里の街路を散歩してゐた際に描いた空想の一つを明瞭

に記憶して居るものと信じた。そしてこの空想を記憶からして再生し始めた。即ち、ジョーセリン君が街路に於て勇敢に奔馬の前に身を挺して出で、これをとどめ、ついで扉が開いてをる馬車から高貴の御方がお出ましになり、彼に握手し、彼に向つて「あなたは私の救助者です、命の恩人です、どうしてお禮を申上げませうやら」と云つた處を空想したのであつた。

私はこの空想の描寫に多少不正確な處があるかも知れないが、それは家に歸つてその本を手にすれば譯もなく訂正し得る事だと考へて自ら慰めてゐた。然しながら、其後私が „Nabab“ の頁を繰つて最早印刷するばかりになつてゐた私の原稿と比較した時、私はジョーセリン君の斯くの如き空想は何も書かれてゐないばかりでなく、この貧しい簿記係は Jocelyn と云ふ名の男ではなく Mr. Joyeuse（ジョワイユーズ）と云ふのであつたので、大いに恥ぢ入り且つ驚いたのであつた。この第二の誤謬はその後間もなく、第一の誤謬即ち記憶錯誤の說明の鍵となつたのである。Joyeux（ジヨワイユー）――その女性の形が Joyeuse となる譯である――は私の名なる Freud（フロイド）を佛蘭西語に翻譯したものとしか考へられなかつた。そこで、私がドウデーに歸したこの誤り記憶された空想は、一體何處から來たのであらうか？ この空想は私自身の製作物に外ならなかつたのである。即ち、私自身がつくり、私には意識的にならなかつたか、それとも一度意識的にはなつたが、その後根本的に忘れられた幻想であつたものと思はれるのである。多分私は自

らこの幻想を巴里に於てつくつたのである。其處では私は Charcot 先生に御交際を願ふ事が出來る樣になる迄は隨分さびしくて、自分の援助者及び保護者があつて欲しいと熱望しながら、屢ゞ散歩したものであつた。そして „Nabab" の著者には私はシャルコー先生のお宅で度々*面會したのであつた。

*つい近頃私の讀者仲間からホフマンの少年文庫中の一册が私に送り屆けられ、その中には私が巴里で空想した樣な救助の光景が詳細に書かれてあつた。一致點はあちらこちらにあらはれて居り、又一致は箇々の必ずしも普通ではない云ひあらはした方にも及んで居る。私が幼い子供の時に實際この少年讀物を讀んだかも知れないと云ふ想像は斥ける事が出來ない。私共の中學の生徒圖書館にはホフマンの叢書があり、生徒に他の如何なる精神的の糧の代りにも之を提供する準備が出來てゐた。私が四十三歲にして他人の製作物として追想したものと信じ、ついで二十九歲の時に自分のやつた事を認めねばならなかつた。この空想は十一歲乃至十三歲の間に取り入れた印象の忠實なる再生であつたかも知れないのである。私が „Nabab" の中にある無職の薄記係を主人公にしてつくつた救助の空想は、單に自己の救助の空想への道をつくるものであり、愛顧者及び保護者を得たいと云ふ熱望を自分の自尊心に堪へ得るやうにするものに外ならないのである。さすれば私自身が私の意識的の生活に於て、保護者の愛顧に依賴して居ると云ふ觀念に對し、絕大なる反抗心を持つて居り、又これに似たりよつたりの事が實際に起つた。一二の場合に於てそれに堪へ得なかつたと云ふ事を聞いても、人の心をよく知つて居る人は、誰も不思議には思はれないであらう。斯くの如き、内容を持

つ空想の深い意味及び特徴の殆ど完全なる說明を、アブラハムは「神經官能症性空想に於ける父の救助と父殺し」なる論文 (Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse, VIII, 1922.) に於て發表して居る。

十分に說明する事の出來た記憶錯誤の他の例は後に述べる「誤れる認識」(Fausse reconnaissance) を思ひ起さする。私は私の患者の一人で功名心に富み、且つ有能なる男に、或る若い大學生が近頃、「美術家、性慾心理學の試み」(„Der Künstler, Versuch einer Sexualpsychologie") と云ふ興味ある著述をして、私の門下生の仲間入りした事を語つた。一年三箇月の後にこの書が出版された時、この患者は、彼は私が最初この書の事を彼に話した前 (一箇月、若しくは半年前) に既にこの書の廣告を何處か——多分或る書店の廣告——で讀んだ事を確かに記憶して居ると主張した。彼は、尙ほこの廣告の事は、そのときに直ぐ出ひ出したと云ひ、尙ほ著者は標題を變化し、最早 „Versuch" ではなく „Ansätze zu einer Sexualpsychologie" (「性慾心理學への追加」) となつて居ると云つた。然しながら、著者によくよく訊ねてみ、且つ時の關係を比較してみて、患者があり得べからざる事を記憶しようとして居る事が判つた。この書については、出版前に何處にも廣告は出なかつたし、確かに出版の一年三箇月前に廣告したと云ふ樣な事はなかつたのであつた。私はこの記憶錯誤の判斷はそのままにしておいたところ、彼は似よりの記憶錯誤を又持ち出して來た。彼は近頃書店の飾窓で「臨場苦悶」

（„Agoraphobie"）に關する書を見た樣な氣がして、凡ての出版屋の目錄をさがして、この書を手に入れようと努力したと云ふのであつた。其處で私は何故彼の骨折りが、無効に終つたかと云ふ事を說明する事が出來た。「臨場苦悶」に關する著書は無意識的の計畫として彼の空想の中に初めて成立つたものであり、彼自身によつて書き上げらるべきものであつたのである。かの靑年と同じやうになり斯くの如き科學的業績によつて、門下生になりたいと云ふ、彼の功名心が彼をして最初の及び二度目の記憶錯誤に陷らしめたのであつた。其處で彼もまたこの間違つた認識をさせるに役立つた書店の廣告は「發生、生殖の法則」（„Genesis, das Gesetz der Zeugung"）なる標題の書に關係があると云ふ事を思ひ出した。然しながら彼が說明した標題の變化は、私の責任を負ふべきことであつた。何となれば、私自身も „Ansätze" の代りに „Versuch" と云ふ風に標題を云ひあらはす樣な不正確をやつた事を思ひ出す事が出來たから。

（B）企圖の忘却

注意力の不十分と云ふ事だけでは失錯作業を十分に說明し得ないものであると云ふ論題の證明には

「企圖の忘却」は他の如何なる現象群よりも適當して居る。一つの企圖(計畫)は既に是認されたる行爲への衝動であり、而もその行爲の實行は或る適當なる時刻迄延期されて居るものである。さて斯くしてつくられたる時限の間に勿論動機に變化が起り、企圖が實行されないと云ふ事が起り得るのである。しかしながら、この場合には企圖は忘れられるのではなくして、修正され或は抛棄されるのである。私共が日々に、又凡ての可能なる狀態に於て持つ企圖の忘却をば私共は通例動機の調整に於ける最近の變化によつて説明せず、一般にそれを不問に附するか、或は企圖の成立に缺くべからざる條件であり、從つて企圖の出來る時にはその行爲に向つて意の儘に用ひ得る樣になつてゐた行爲に必要なる注意が、その行爲を實行する際には最早それに向つて準備されてゐなかつたのであると云ふ假定の下に心理學的説明をもとめて居る。處で企圖に對する私共の正常的態度の觀察は、この説明を人爲的のものであるとして、斥けしむるものである。私が朝に夕に實行すべき或る企圖を立てるならば、私はその日の中に一二回その事を思ひ起させられる事がある。然しながら、この企圖は一日中最早全然意識されないでもよいのである。實行の時が近づく時、企圖は急に私に思ひ泛び、企圖された行爲に必要な準備を自分にさせるのである。私が散歩に出かける時に發送すべき一通の手紙を持つて行くと假定して、神經質でない正常人として、私はその手紙を手に持つて郵便箱を搜す必要はないのである。

私は手紙を「ポケット」に入れて歩き、私の考へを自由に色々のことに馳せしめるのが常である。而も最寄りの郵便箱は私の注意を刺戟して、私に「ポケット」の中を摑んで手紙を取出さしめるであらう事を期待するのである。企圖を持つて居る場合の正常的の狀態は、催眠術に於て所謂「長期の催眠術後の暗示」を與へられた人に於て實驗的に起さるる行動に、完全に一致して居るのである。「暗示された企圖は實行の時が近づく迄は、その人々に眠つて居るのである。ついで、企圖はめざめて行爲を起させるものである」と。私共はこの現象を叙述するのを常として居る。[*]

* Bernheim, Neue Studien über Hypnotismus, Suggestion und Psychotherapie, 1892. と比較せよ。

生活の二つの狀態に於ては、素人もまた企圖の忘却はそれ以上分解し得ない原素的現象であるとの考へ方を承認せず、結局白狀されない動機によるものである事を知つて居る。私は戀愛關係と軍隊に於ける從屬關係の事を云つて居るのである。媾曳を怠つて情人は「殘念ながら忘れたのだ」と婦人に辯解してもだめである。彼女は必ずや彼に向つて「一年前ならばあなたはそれをお忘れになるやうな事はなかつたでせう。今ではあなたには最早私に就ての何物もないのでせう」と答へるであらう。假令彼が上述の心理學的說明を提げて「仕事がつかへてゐて忙しかつたのだ」と辯解しようとしても精神分析の場合の醫師の樣に烱眼になつて居るその婦人は、「さう云ふ事務上の障礙が以前に起らなか

つたのは不思議な事ですね！」と答へる位が落であらう。確かにその婦人は忘却の可能性に就ては反對しないであらう。唯彼女は故意ならざる忘却からも意識的の逃口上と大體同樣なる結論——さうすることを欲しなかつたのだ（Nicht-Wollen）——と云ふ結論を引出し得るものと考へるだけの事である。而もこれは無理のない事なのである。

これと似て軍隊の勤務に於ては忘却による怠慢と、故意のそれとの間の區別を原則的に無視して居る。而もこれは尤もな事である。兵士は軍務が彼に要求する何事でも忘れてはならないのである。彼が要求を知つて居りながらそれを忘れる場合には、軍務を果さうとする動機に反對の動機が對立して居ると云ふ事になるのである。例へば一年兵が報告に際して、彼の服の釦をピカピカに光らせておく事を忘れたと云つて辯解しようとしても罰せられる事は確かである。然しながら、この罰は「規則づくめの勤務は私は徹頭徹尾厭だ」と云ふ風に、彼が怠慢の動機を彼自身並びに彼の上官に表明する場合に受ける罰よりも輕いのである。いはば經濟的の理由からしてこの罰の節約の爲に、彼は忘却を遁辭として用ひるのである。或は忘却は妥協として成立するのである。

女に對する媚も軍務も共にこれらに屬する凡ての事が忘却されてはならないと云ふ要求を出して居り、これによつて、忘却は重要でない事柄には許し得べきものであり、これに反して重要なる事にあ

つては人々がこれを重要でない事の樣に取扱はんと欲し、從つてこれらに重要性がないものと云はう[*]として居る兆候であると云ふ考へを抱かしめるのである。

* バーナード・ショウの「ケーザルとクレオパトラ」なる演劇に於て、埃及と關係を斷たうとして居るケーザルが、暫時の間彼が何かしようと企てた筈だつたが、それを忘れたと云ふ考へに苦しむ處がある。終にケーザルの忘れてゐた事が判つて來た。それはクレオパトラに別れを告げる事であつた。この些細な點によつて――歴史上の事實とは全然反して――ケーザルがこの埃及の小さい女王を如何に問題にしてゐなかつたかと云ふ事が明かにされて居るものと云ふべきである。

此處に實際に心的價値評價の觀點が存するやうに思はれる。何人と雖も、自分が精神異常ありとの疑ひをかけられる事に甘んぜざる限りは、彼自身に重要だと思はれる行爲を實行する事を忘れないのである。從つて私共の研究は多少主要ならざる企圖の忘却にのみ展開して行くわけである。私共は如何なる企圖と雖も全然どうでもよい（重要ならざる）ものとは考へないであらう。何となれば、その場合には確かに企圖はつくられなかつたであらうから。

さて私は前に述べた官能障礙に於けると同樣に私自身に於て觀察された忘却による怠慢の例を蒐集してこれを說明しようと努力し、而もこれらが全般的に白狀されない不明の動機――或は、いはば反

對意志 (Gegenwillen)——の干渉に歸すべきものである事を見出したのである。これらの場合の多數に於て、私は面白くない勤めに似た立場に一定の强迫の下に立つて居り、而もこの强迫に對して反抗する事を全然止めず、從つて忘却によつて反抗を表明したのであつた。これは私が誕生日、祝賀會、結婚式、昇任等に就ての祝辭を述べる事を特に忘れ易い事によつて說明される。私は絕えず繰返して決心をするのであるが、それに成功しない事を今迄よりも一層强く自認するのである。私は今では斷念して反抗する動機を意識的に承認しようとして居る。或る過渡期に於て私は一定の期日に自分の方へも祝電を寄越して吳れと私に乞うた或る友人に向つて、私は兩方ともの事を忘れるのであらうと豫言したのであつた。そしてその豫言が事實になつたのに不思議はなかつた。卽ち、私が同情の言葉を必然誇張して云ひあらはさねばならない場合に、同情を實際にあらはす事が出來ないと云ふ事は苦しい生活上の經驗である。何となれば、私の感動が少ないに不拘、右に相當したやうな云ひあらはしかたをする事は許されない事であるからである。私は他人の虛僞の同情を屢〻眞實のものと考へてゐた事があつた事を認識した。そして私は一方に於てこの同情表示が社交上必要である事は洞察して居るものの、この慣習には反抗して居るのである。不幸のあつた場合の「おくやみ」は、この矛盾した取扱方から除外される。私が「おくやみ」に行かうと決心した時には、私はまたこれを怠らないのであ

る。私の感動が社交上の義務と沒交渉である場合には、その感動の表示は、決して忘却によつて忽諸に附される事はないのである。

一旦抑壓された企圖が「反對意志」として表面に現れ出で、收拾する事の出來ない狀態を釀した忘却の例を T中尉が戰時の捕虜の狀態からして報告して居る。「捕虜になつた將校の宿泊所の最も上官の人が彼の仲間の一人から侮辱を受けた。彼は面倒を避けるために、彼に可能なる唯一の高壓手段を用ひてこの侮辱者を遠ざけ、別の宿泊所に轉ぜしめようと欲した。二三の友人の勸告によつて初めて彼は彼の祕密の希望に抗して、この手段をとる事を止め、多數の不便を引起すに決つて居る、名譽を重んずる道を踏んで行かうと決心したのであつた。——その日の午前この司令官は將校の名簿を一人の守衞の監督の下に讀み上げねばならなかつた。仲間の人々を既に永い間知つてゐた彼は、今迄間違ひを起した事はなかつた。處が今日は彼は彼の侮辱者の名を讀み落し、そのためにこの人はこの誤りが明かになる迄の間は他の凡ての仲間が去つてしまつたのに、一人でその場に居殘らねばならなかつた。見落された名は紙の眞中の處に非常に明瞭に書かれてゐたのであつた。——この出來事は一部の人からは故意の「いやがらせ」として說明された。他の一部の人からは氣の毒な、そして誤解され易い偶然の出來事と見られたのであつた。然しながら後になつて、この事件を起した發頭人はフロイド

の精神病理學を知つた後に、この出來事の正しい判斷を得たのであつた。

或る他人の爲に實行する事を約した行爲の實行を忘却する場合は、これと類似して因襲的の義務と自白されない內的の評價との間の葛藤によつて、說明すべきものである。この場合には忘却の辯解能力を信ずるのは賴まれた方の人（保護者、慈惠者）だけであつて、賴む方の人は疑ひもなく正しい答へを與へるのである。卽ち「この人はその事に何の興味も持たないからだ。さうでなければ彼はそれを忘れる筈がない」と彼は答へるであらう。世間には何事も一般に忘れやすい人だと稱せられて居る人がある。そしてその爲に往來で人に出逢ひながらお辭儀*をしない、近眼者同樣に人から許されて居るものとして通つて居る人がある。

* 婦人は無意識的精神過程に對し、一層纖細なる理解を持つて居り、他人が街上に於て彼等を認めず、從つて挨拶を與へない場合には手近の說明、卽ちその人が近眼者であるとか、物思ひに沈んでゐたために彼等を認めなかつたのだと云ふ風には考へず、寧ろこれを自分に對する侮辱と解する傾向があるのが例である。彼等は他人が自分等を尊重するならば疾くに彼等を認めてゐた筈だと推論するのである。

これらの人々は彼等の與へた凡ての小さい約束を忘れ、彼等の受けた委囑を不履行のままに捨てておき、而も他人がこれらの些細なる過失に就て自分を惡るく思はないで吳れと要求する。卽ち彼等の

人格によつて說明せず、機質的の特性に歸*して欲しいと要求するのである。

* フエレンチーは彼自身が「うつかり」者であり、失錯行爲を度々やる事及びその失錯動作の奇なる事によつて知人に驚かれてゐた。然しながらこの「ぼんやり」なる徵候は、彼が患者の精神分析療法を行ひはじめ、彼自身の自我の分析にも注意を向ける必要あるに至つて殆ど全然消失した。彼は云つて居る。「人は自分自身の責任を大いに廓大する場合には失錯行爲を捨てるものである」と。だから彼は放心の狀態は無意識的凝結觀念に從屬する狀態であり、從つて精神分析によつて治癒し得るものであると考へて居るが、これは尤もな事である。然しながら或日フエレンチーは、一患者に精神分析の技術上の失錯をやつたと云ふ自責の下にあつたが、この日彼の以前の「ぼんやり」が逆戻りをして來た。彼は街路を步いて居て何度も蹉跌し（治療に於ける faux pas（誤れる步武）の現れ）彼の紙入れを家に忘れ、電車の中では kreuzer（獨逸の小貨幣）を一つ少なく數へ、衣服の釦をきちんと嵌めなかつたりなどした。

私自身はこの種の人物には屬せず、又忘却を選擇し、その動機を發見するためにこの種の人物の行爲を分析する機會も持つた事はなかつた。然しながら、私は類推の上からして斯る場合には異常に強く、而も自白されない他人に對する輕蔑がその動機をなして居り、この動機は體質的要素を自分の目的のために利用*するものと推定せざるを得ないのである。

* これに就てジョーンズは云つて居る。「抵抗は屢々常態のものである。即ち忙しい男は彼の妻から――少々

迷惑ながら——頼まれた手紙を「ポスト」に入れる事を忘れる。丁度彼が彼女からの買物の注文を實行する事を忘れるのと同じやうに。」

他の場合には忘却の動機を見出す事一層困難であり、而も見出された場合に非常なる驚異を惹起する。例へば私は以前には多數の訪問に際して、無料患者の往診或は同僚の處への訪問のみを忘れ、他の訪問は忘れた事がなかつた。これを恥ぢて私はその日その日の訪問を朝に計畫として書きつける習慣をつくつたのであつた。私は他の醫師が同じやうな風にして同じ實行を僞すやうになつたかどうかは知らない。然しながら斯くして、私共は何が所謂神經衰弱症者をして彼等が醫師に話さうと思ふ事を評判の悪い「紙片」(„Zettle")に書きつけさせる樣にするかと云ふ事を朧ながらも知る事が出來るのである。彼は彼の記憶の再生能力に對する自信がないと稱して居る。それは確かに正しい事である。然しながら、場面は通常次の有樣に展開して行く。患者は色々の病苦や質問を非常に長たらしく述べ立て、それが終つてから一寸休んで「紙片」を取出し『私は何も記憶する事が出來ないので「ノート」を作つて來ました」と云ひ譯がましく云ふのである。通常彼は「紙片」の上に何も新しい事を見出さない。彼は各點を繰返して、自問自答し「やあこの事は既にお尋ねしました」と云ふのである。彼はこの備忘錄によつて、多分彼の症狀の一つ、卽ち彼の企圖が屢〻不明の動機の干渉によつて、妨げられ

る事を實證して居るのである。

尙ほ私は私が——以前には特に甚しく——借りた書物を返却する事を非常に容易に、又永い間忘れる事があつた事、或は私が特に容易に金錢の支拂を忘却によつて遲れさせる事があつた事を自白するが、この惱みは私のみでなく私の知つて居る健康者の大部分の人が惱む事である。近頃私は毎日葉卷煙草を買求める煙草小賣店に金を拂はずに立去つた。これは非常に無害な怠慢である。何となれば私はその家ではよく知られて居り、次の日に借りがある事を注意される事を期待し得たからである。然しながら、この些細なる過失、負債をつくる事の試みは、確かに私が前日中考へた豫算と無關係ではないのである。金錢と所有の問題になると大多數の所謂正しい人々に於ても分裂したる態度の痕跡が認められるのである。凡ての物體を——口に持つて行くために——摑まうとする乳兒の原始的なる欲望は文化及び教育によつて多分一般に甚だ不完全にしか征服されないものである。*

* 題目が同じである爲に、私は本書に用ひて居る分類をやぶり「金錢の事に關しては私共の記憶は特別の偏倚を示すものである」と云ふ事を上記の事に附加してもよいであらう。何かを旣に拂つてしまつたと云ふ記憶錯誤は、私自身の經驗からも判つて居る樣に時には非常に頑强である。「カルタ」遊びの場合の樣に——處世の大なる興味から遠ざかり、從つて元來面白半分に——射利的企圖を遺憾なく發揮させる場合には、非常

に正直な人々も「思ひ違ひ」「記憶の錯誤」「勘定違ひ」等に陥る傾向があり、自らはどうしてであるかよく知らないでゐて、小さな詐欺をやつて居るのを發見する事がある。遊戯に精神を爽快にさせる特徴があるがそれは一部この自由に基くものである。「遊戯の際には人の性格があらはれる。」と云ふ諺は若しも顯在性の性格を目安にして居るのでなければ承認すべきものである。――勘定係の給仕に故意ならぬ勘定違ひがあつたとしても、これは明かに同じ判斷に服すべきものである。――商人階級に於ては金錢の支出、勘定支拂ひに於ける躊躇を屢々見る。而もこれは所有者に利益を與へる所以ではないのであつて、ただ心理學的に金錢支出に對する反對意志の表現と解すべき性質のものである。――ブリルはこの點に關して警句的の鋭さを以て次の樣に云つて居る。「私共は手形の封入されて居る書信をば、照査合札の入つて居るそれよりも置き忘れ易い。」と。――婦人連が醫師に報酬を拂ふ事に特別の不快を示すのは、最も內密にして且つ最も明かにされ難い感情に關係するのである。彼女等は財布を持つて來る事を忘れて診察時間に支拂ひをする事が出來ないのが常である。ついで彼女等は報酬を家から送る事をいつも忘れるのである。從つて醫師は「彼女等の美しい眼」のために無償にて治療した事になるのである。彼女等は謂はば彼女等の美貌で以て支拂ひをするのである。

私は今迄に揭げた凡ての實例で以て全く平凡になつてしまつた事を恐れるのである。然しながら私は凡ての人に知られて居り、且つ凡ての人が同じ有樣に理解して居る事柄に遭遇すれば、それで滿足

である。何となれば私は單に日常の事を集めて、それを科學的に利用しようと企てて居るだけの事であるからである。日常の生活經驗の沈澱物である智慧が科學の收穫の中に取り入れられ得ないとは自分は考へないのである。科學的作業の本質的特徴をなすものは對象を多種多様にする事ではなくて、立證の方法を益〻精確にし、關係を愈〻廣遠につけて行く事を努力する事にあるのである。

多少重要なる企圖は、暗い動機が起つて彼等を妨げる時に忘却される事を私共は常に見出した。倘ほ一層重要でない企圖に於ては、私共は忘却の第二の機制を發見するのである。この場合には反對意志が他の何かから企圖に轉移されるのであつて、この轉移はこのものと企圖の內容との間に外的聯想がつくられた後に起るのである。次の例はこれに屬するものである。私は美しい吸墨紙に重きを置き私は今日の午後市の中心地へ行く途上でそれを買はうと企てたのであつた。然しながら、その後四日間私はそれをわすれた。そしてなにがこの怠慢の原因であらうかと自分に問うて見た。私が吸墨紙は „Löschpapier“ と書くけれども平生私共はこれを „Fliesspapier“ と云つて居ると示ふ事を考へた時、この原因は直ぐに判つた。Fliess（フリース）は伯林に居る私の友人であり、その日に彼は苦しい心配な考への發端を私に與へたのであつた。この考へからは私は逃れる事は出來なかつた。然しながら防衛傾向があらはれ、これが言葉の同じである事によつて、無關係な、從つて又抵抗力の弱い企圖の上に轉移

されたのであつた。

直接の反對意志と稍〻遠い動機とが一緒になつて次の遲延の例に見出される。「神經竝びに精神生活の境」(„Grenzfragen des Nerven- und Seelenlebens") なる叢書に、私は私の「夢判斷」の內容を抄錄した夢に就ての短篇論說を書いた。ウィースバーデンのベルヒマンは、校正刷を寄越して、この册子を「クリスマス」前に出版したいから、折返して送つて吳れと賴んで來た。私は其晩の內に校正し、翌朝持つて出ようと思つて、机の上に置いた。朝になつて私はそれを忘れ、午後になつて初めて机上の十字帶を見て思ひ出したのであつた。處がその午後にも夕方にも次の朝にも私は同じやうに忘れ終に元氣を奮ひ起して――二日目の午後になつて――何がこの遲延の原因であらうかと訝りながら――それを郵便函に持つて行つたのであつた。私は明かにそれを發送したくなかつたのである。而も何の爲かは判らなかつたのであつた。同じ散步の途上に、私はウィーンの出版屋――私の夢の本を出版した――に立寄り或る注文をした後突然の「思ひ付」に驅られたかの樣に云つた。「あなたは私が夢の事を今一度書いた事を御存じですか?」と。「ああさうですか、そんなら又お願ひしませう」と出版者が云つた。「レーウェンフェルト・クレラ叢書への短い論說ですから御安心なさい」と私は云つた。然しながら、彼はそれで滿足しなかつた。彼は、この論文が夢の賣行を惡くする事を心配した。私はそれ

版をお斷りになつたぢやないでせうか?」と。さうすると彼は「いいゝ決してそんな事はございませを否定した。そして訊ねた。「若し私が以前にあなたに出版をお賴みしたとすれば、あなたはその出ん」と答へたのであつた。私自身は全然正しい行動をとつて居り、普通一般に行なはれて居る事以外の事はしてゐなかつたのである。それでも出版者が云つたと同じやうな懸念が私の校正刷發送を遲延せしめた動機であつた事は確實であるやうに思はれるのである。この懸念は以前の機會に遡つて行つた。その機會に於ては私がどうにも仕方なくて以前他の出版に出てゐた私の腦性小兒痲痺症に關する論文から一二枚の「テキスト」を、そのままノートナーゲルの參考書の同じ問題を取扱つた處に持つて行つた時に、他の出版者が苦情を持込んで來たのであつだ。然しながらその時には非難はやはり認められなかつた。私はその時にも私の最初の出版者(「夢判斷」の出版者と同人)に正直に私の企圖を理解させてあつたのであつた。然しながらこの追想列が一層深く過去に及んで行つた時、今一つのもつと以前の出來事を私に持出した。これは佛文からの飜譯の際の事であつて、この場合には私は實際出版の際に問題になる所有權を侵害したのであつた。私は飜譯した「テキスト」に註釋をつける事に就ては著者の許しを得なかつた。そして一二年の後に、著者が私のこの擅斷に對して不滿であつた事を察すべき理由を見出したのであつた。

企圖の忘却は偶然のものではないと云ふ、世間一般の知識をあらはす諺がある。「一度する事を忘れた事はその後何度も忘れるものだ。」

そればかりではなく私共は時々私共が忘却及び失錯行爲全般に就て云ひ得る事は、凡てさなくとも人々に自明の事の樣に知られて居る事だと云ふ印象を斥け得ない事がある。而もこの判り切つて居る事を彼等に意識させる必要があるのは、隨分不思議な事ではないか！　非常に屢〻私は人がから云つてるのを聽いた事がある。「私にそんな事を賴んで吳れるな、私はそれを忘れるに違ひないから」と。この豫言が的中するのに何の不思議もなかつた譯である。さう云つた本人は自らこの依囑を實行したくないと云ふ企圖を感じ、而もこの企圖ある事を白狀する事を拒んだのに過ぎないのである。

「企圖の忘却」は私共が「誤れる企圖を立てる」（„Fassen von falschen Vorsätzen“）とも稱すべきものによつて大いに明かにされるのである。私は或時若い某著述家に彼の短篇の著作に就ての抄錄を書く事を約した。然しながら自分にもよく判らぬ內的抵抗のためにそれを延ばして置いたのであつたが、或日終に彼に催促されて餘儀なくその日の夕方書かうと約束した。私も書かうと云ふ眞面目な企圖を持つてゐたのであつた。然しながら私はどうしても延ばす事の出來ない鑑定書の作成のために、その晩をとつておいた事を忘れてゐた。斯くして私が自分の企圖の誤つて居る事を認めた位私は

自分の抵抗と闘ふ事をやめ、著述家の要求を拒絶した。

前掲メーリンゲル及びマイエルの著述から私は尙ほ次の箇所を引用しよう。(「話し損ひ」は全然獨立して存在するものではない。彼等は人類の他の活動の際に屢〻起り、而も可なり馬鹿らしくも「健忘」と稱せられて居る失錯に相當する。)

從つて私は健康者の日常生活に見る些細なる官能的障礙の背後に、意味と企圖あるものと推定する[*]第一人者では決してないのである。

* メーリンゲルの第二回の發表は、私が彼に斯くの如き理解あるものと期待した事が、彼に對して惡い事をした事を後になつて明かにした。

第八章 摑み損ひ

運動性作業なる「話す事」の失錯が斯くの如き解釋を許すとすれば、私共の他の運動性實行の失錯にも同じやうな期待を移して行く事は手近にあると云つてよいのである。私は此處に二群の場合を作つた。卽ち失錯の結果が本質的のものとして現れる場合、卽ち企圖の迷行(常道を外れるもの)を摑み損ひ(das Vergreifen)と名づけ、他の群の場合卽ち全體の行爲が不都合不適當にあらはれるもの

を症候行爲（Symptomhandlungen）及び偶然行爲（Zufallshandlungen）と名づける。尤もこの區別は矢張り、純粋には實行する事の出來ないものである。私共は勿論本論說に用ひられる凡ての分類は單に叙述的に意義あるものであつて、現象領域の內的統一には矛盾するものであると云ふ認識に到達するのである。

「摑み損ひ」の心理的理解は私共がこれを失調症特に「腦皮質性失調症」なるものに包括してしまふならば、特別の進步を經驗しないやうに思はれる。だから私共は寧ろ箇々の例をその時々の條件に遡つて研究する事を試みようと思ふ。私は矢張りこの目的に自己觀察を用ひようと思ふが、この自己觀察の機會は私には特に屢々起つて來る譯ではない。

(a) 以前私が數多く往診をやつてゐた頃、私は「ノック」するか或は「ベル」を鳴す筈の扉の前に到着した時に「ポケット」から私の家の鍵を取り出し、ついで恥ぢらひながら再び、これを「ポケット」に入れる事が度々あつた。如何なる患者に於てこの事が起つたか引くるめて考へて見ると——「ベル」を鳴す代りに鍵を出す——この失錯行爲は、私がこの「摑み損ひ」に陷つた家に對する故意を意味したものと假定せねばならない。この失錯行爲は「此處では私は自分の家に居る樣な氣がする」と云ふ考へに等しいものであつた。何となればこの事が患者からの尊敬を得た場合にのみ起つたからである。

(私自身の家の扉の處では勿論私は決して「ベル」を鳴らさないのである。)

だからして失錯行爲は意識的には重大なる事として承認されてゐない、一定の考への象徴的表現である。何となれば神經病醫は實際患者が醫師から利益を得る事を期待する間だけ彼を要求するものである事をよく知つて居り、又醫師自らは心理療法の目的のためにのみ、患者に對する過度に暖い興味を表示するものである事をよく知つて居るからである。

鍵を意味深く誤り扱ふことが私の特性でない事は、他の人々の多數の自己觀察よりしても現れて居る。

私の經驗と殆ど同じ反復を A.(アー) Maeder(メーデル)(日常生活の病的心理に關する知見補遺)(Arch. de psychol., VI, 1906))が叙述して居る。「極く親しい友人の家の玄關に立つた時に、自分の道具を取り出す事、例へば自分の家のつもりで自分の鍵で扉を開けようとして驚く事などは誰にもある事である。之はどうしたつて呼鈴を鳴らさねばならぬ事だから、一つの無駄には違ひないが、然し人間と云ふものは自分の友人と自分とを同樣に考へる——或は考へたがる——ものだと云ふ一つの證明になる」と。イ・ジョーンズ。(前掲書五〇九頁)「鍵を用ひる事はこの種の出來事の豐かなる源泉となるものである。私はその内の二例をあげよう。私が家で專心に仕事をして居る最中に或るおきまりの仕事をす

るために病院に行かねばならぬ事になつて邪魔されると、私は自分の家の机の鍵で病院の試験室の「ドアー」を開けようと努力して居る——事が度々ある。兩方の鍵は互ひに少しも似てゐないのに。この失錯行爲は私がその瞬間に於てゐたいと云ふ場所を無意識的に示して居るのである。

私は數年前或る研究所の低い位置に勤めてゐたが、この研究所の玄關の「ドーア」は鍵がかけられて居り入る爲には呼鈴を鳴らす必要があつた。數度の機會に於て、私は一所懸命になつて自分の家の鍵で、この「ドーア」を開けようとして居る自分に氣がついた。永續的にこの研究所に勤務して居る各職員——私もその一人になりたいものと熱望してゐた——は「ドーア」の處に待たねばならぬ煩を避ける爲に鍵を與へられてゐたのであつた。私の失錯行爲は斯くて彼等と同じ地位にあり、研究所に居心地よくゐたいと云ふ希望を現はしたものである。

似よりの事をドクトル・ハンスザツクスが報告して居る。「私はいつも二本の鍵を持つて居る。一方は私の事務所の「ドーア」他は私の住居の扉(ドーア)を開くものである。さて彼等が取り違へられ易い事は決してないのであつた。事務所の鍵は家のそれに比して少なくとも、三倍位大きかつたからである。それにも不拘ほ私は前者を「ズボン」の「ポケツト」に、後者を「チョツキ」に入れておくのであつた。それにも不拘、私が「ドーア」の前に立つた時に間違つた鍵を楷子段の上で用意してゐた事が度々あつたのであ

つた。私は統計的に實驗しようと決心した。私は毎日同じやうな感情狀態で兩方の「ドーア」の前に立つのであるから、二つの鍵が心的に別々に限定されてゐたものとすれば、兩方の鍵の取り違へもまた規則正しい傾向を示さなければならぬ譯であつた。その後の出來事の觀察は、私がいつも事務所の「ドーア」の前で家の鍵を取出した事を示したのであつた。唯一回だけは丁度反對の事が起ると云ふ結果があらはれた。それは私が疲勞して、家に——而も一人の客人が待つて居る事を知りながら——歸つた時の事であつた。「ドーア」の前で、私は戶を勿論遙かに大きい事務所の鍵を以て開けようと努力してゐたのであつた。」

(b) 私が六年以來毎日二度宛定つた時間に三階の「ドーア」の前に入る事を許されてゐた或る一定の家があつたが、この永い間に、短い間隔をおいて、二回私が一階だけたかく昇り過ぎをし、卽ち、「昇り損ひ」をした (verstiegen) 事があつた。一度は私が自分を「高く一層高く登ら」(„höher und immer höher steigen") しめようとの功名心に富んだ空想を抱いて居る時であつた。その時には私は足を四階に昇る階段の初めの方の段に乘せた際、問題の「ドーア」が開く音さへ聞いた樣な氣がしたのであつた。今一度は矢張り私が考に沈んで居り („in Gedanken versunken") 行き過ぎた (ging…...zu weit.) のであつた。それに氣がついて引返し、私を支配してゐた空想を素早く引捉へようとした

時に、私は自分の論文に對する「空想的」批評を慫つて居り、而もその批評では「私がいつも極端に走りすぎる」（„zu weit ginge"）と云ふ非難がなされたのを見出した。そして私はこの批評をあまり丁寧でない云ひあらはしかたなる „verstiegen" （「高く昇り過ぎる」）によつて置き換へたのであつた。

(c) 私の机の上に多年來反射機能檢査用の槌と音叉が乘つて居る。或日私は診察時間が終つてから、或る市街鐵道の列車に間に合ふ樣に出かけようと急いだ。そして槌の代りに音叉を上衣の「ポケット」に入れ、「ポケット」を下の方に引きさげるものの重みによつて、自分の「掴み損ひ」に氣づいたのであつた。この樣な些細な出來事に考へを貸す事に慣れてゐない人達は、この「掴み損ひ」をその時の「急ぎ」によつて說明し辯解する事は確かである。然しながら、私は何故槌の代りに音叉を擇んだかと云ふ問題を敢て立てて見た。急速と云ふ事は矢張り行爲のやり直しに時を費さないやうに行爲を正しく實行させる動機を持つて居るに違ひないのである。

「何人が最終にこの音叉を手にしたか？」と云ふのが私の頭腦に迫つて來た疑問であつた。それは數日前に私が感官印象に對する注意を檢査した白痴の子供であつた。そしてその子供は音叉に非常な興味を持ち、ために彼の手から音叉をはなさせるのに仲々の骨が折れたのであつた。さうすると私が白痴だと云ふ事になるだらうか？　勿論さうらしいのである。何故ならば槌（Hammer）に闗して

聯想された次の「思ひ付」は„Chaner“（ヘブリュー語であつて Esel（馬鹿）に相當する）と云ふのであつたから。

それにしてもこの惡罵は何を意味するのであらうか？　私共は此處で事情をしらべて見ねばならない。私は西部鐵道沿線の或る場所に於て對診の爲に或る患者の處へ急ぐのであつた。この患者は手紙にかいてある既往歴によると、數箇月前「バルコニー」から落ちて、それ以來歩く事が出來ないと云ふのであつた。自分を招いだ醫師は、それが脊髓の損傷であるか、それとも外傷性神經症――ヒステリー症――であるか自分には判らないと書いて來て居る。そこで自分はそれを決定せねばならないのであつた。きはどい類症鑑別に於て特に氣をつけよと云ふ警告が起つて來る譯である。同僚達はそれでなくても私共が他に、より重大な病氣があるのに餘り輕率に「ヒステリー」症の診斷を下す樣に考へて居るのである。然しながら惡罵の根據はそれだけではない。その小さい停車場のある處は、私が數年前に一人の若い男を診察したその場所である。この男は或る感動を受けた後に正しく歩行する事が出來なくなつてゐた。私はその時「ヒステリー」症の診斷を下し、後その患者に精神療法を施したのであつた。そしてその後、私は勿論正しく診斷しなかつた譯ではなかつたが、さうかと云つてその診斷は正しくもなかつた事が判つて來た。患者の示した病狀の大多數は「ヒステリー」性のものであつ

た。そしてそれは治療の經過中に實際速かに消失した。然しながらその病症の背後には、この治療法では行かぬ殘物が現れて來て、それが多發性腦硬化症に關係づける他ないものであつた。この患者を私よりも後に見た人は機質的疾患を認める事が容易であつた。私としては他にしやうもなく判斷のしやうもなかつたが、然し印象は重大なる誤診のそれであつた。彼に與へた治療の約束は守る事が出來なかつたのであつた。槌の代りに音叉を誤り摑んだ事は、次の樣に言葉に解する事が出來た。「汝、白痴よ！　馬鹿者よ！　今度は確りして、數年前同じ場所で見た氣の毒な男の樣に不治の疾患があるのに「ヒステリー」症と診斷する樣な事が二度とあつてはならないよ！」と。而もこの小さな分析の爲には幸福であり、私の氣分の爲には不幸であつたが、重い痙攣性痲痺を有するこの男は二三日前に、そして白痴の子供に、一日遲れて私の診察を受けに來たのであつた。

私共はこの場合に、自己批評の聲が「摑み損ひ」によつて聞える樣になつたのを認めるのである。自己非難として斯くの如き有樣に用ひられるのに「摑み損ひ」は特に適當なものである。この場合「摑み損ひ」は何處か外の處で人がやつた過失を表現しようとするのである。

(d)　勿論「摑み損ひ」は多數の他の不明なる企圖にも奉仕する事があるのである。此處に第一の例がある。私が物を壞す事は非常に稀である。私は特に器用な方ではないが、私の神經筋肉裝置の解剖

學上の完全の結果、望ましからぬ結果を生むやうな事になる運動の起る譯は外見上私にはないのである。だから私は私の家では今迄物を破壞した覺えはないのである。私は勉強室が狹いので非常に不便な姿勢で、私が持つて居る僅かな集品の中の古代の陶器や石でつくつた器具を取扱はねばならぬ事は度々あつた。從つて、それを傍で見て居る人々は私が何かを落して壞しはしないかと云ふ心配を云ひあらはした事があつた。然しながら、今迄一回もそんな事は起らなかつた。そんなら私は或時、私の「インキ」壺の蓋で、大理石で出來た極く簡單な細工のものを、何故下に落して壞したのであらうか?。

私の「インクスタンド」は大理石の板で出來てをり、硝子製のインク壺を入れるやうに彫り込んである。インク壺は大理石の蓋を持つて居り、これには同じ石の頭球がついて居る。「インクスタンド」の背後には靑銅製の像及び「テラコツタ」陶器の小像の一團がおかれてあつた。私は書き物をしようと思ひ、机に向つて着席し、ペン軸を持つてゐた手で非常に拙劣な手を突出す運動をやり、既に机の上にあつた蓋を、床上に落したのであつた。この過失の說明は見出すに難くなかつた。一二時間前私の姉妹が近頃新たに私が手に入れた一二の品を見に私の室に入つて來た。そして「あなたの机は實際立派に見えますね。唯「インクスタンド」がそれに相應しません。あなたは今少し立派なのをお持ち

にならねばいけません」と云つたのであつた。私は姉妹と一緒に外に出て數時間後に初めて歸つて來た。それから私はこの宣告を受けた。「インクスタンド」に執行をやつたかの樣に見えるのである。私は姉妹の言葉からして彼女が次のお祝事のあつた時に、もつと立派な「インクスタンド」を私に贈つて吳れる事を企てたものと推察し、この暗示された企圖の實現を彼女に强ふる爲に、この古い穢いのを壞したのではなからうか？　さうであれば私のこのぞんざいな運動は單に外見上拙劣であつただけの事であつて、實際は非常に巧みであり、目的を意識して居り、附近にあつた高價なる品物を凡て避ける事を知つて居た譯である。

私は人々がこれと同樣の判斷を外見上偶然的なる多數の拙劣なる運動に向つて、假定しなければならぬものと信ずるのである。この運動が多少暴力的な、投げ出す樣な、そして痙攣性失調性な點を示す事は事實である。然しながらこの運動は一つの企圖に支配されてをり、意識的なる故意の運動に劣らぬ確實を以てその目標にぶつかるものである。この暴力性と確實性なる二特徵に於て、彼等は「ヒステリー」性神經官能症に見る運動及び少なくとも一部分は夢中遊行症の場合の運動と共通である。この事實は兩方の場合に於て神經分布過程に同じ不明なる變化がある事を示すものである。

Lou Andreas-Salomé 夫人の發表して居る自己觀察もまた頑固に固執される「拙劣さ」が非常に巧

みに不明の企圖に役立つ事を明かにするものである。

「牛乳が乏しく從つて高價な賣物になりました。丁度その頃から牛乳を煮えこぼれさす事が絶えず起つて私を驚ろかせ苛立たせました。私はその他の機會には、自分が「ぼんやり」であるとか不注意であるとかは全然云ひ得ませんでしたのに、この事ばかりはうまくしようとしてもだめでした。人間のやうに Freund（フロインド）（露西亞語では Drujok）と名をつけられて居た白い愛犬の死後に、此の事が起つたのであれば寧ろ理由のある事だと云へたかも知れなかつたのです。處が犬の死後は牛乳は一滴だつてこぼれる事はありませんでした。それに就て私に起つた第一の考へはかうでした。「かまどの板の上や床の上に流れたものは最早、役に立たないんだからこぼれないのは誠に結構な事だ！」と、そして同時に私は、私の「フロインド」が調理を觀察しながら緊張して其處に坐つて居る有樣をありありと見ました——頭を斜めにして期待しつつ尾を振り、其處に起つて來る立派なる災難を多望なる確實を以て待ちながら、これで勿論凡てが明瞭になりました。私にはこの犬が私自身が意識してゐた以上に可愛かつたのだと云ふ事も明かになりました。」

斯くの如き觀察を集めてゐた近年に、私が一定の價値ある品物を壞す事が一二度起つた。然しながらこれらの場合の研究はそれが決して偶然の結果であるとか、或は目的なき拙劣の結果でなかつた事

を私は確かめた。或朝私は浴衣を着て藁で作つた上靴を履いて或室を通つた時に、突然の衝動に驅られて上靴を足から壁に向つて投げつけたのであつた。その爲にこれが美しい小さな大理石づくりの「ヴィーナス」像を腕木から落した。「ヴィーナス」像は微塵に破壞したに不拘、私は全然無頓着に、Busch(ブッシュ)の詩を誦したのであつた。

Ach! die Venus ist perdü——

Klickeradoms!——von Medici——

あつ! 畜生! メヂシーの「ヴィーナス」は失はれた。

この狂的行爲とその損害に對する私の平氣とは、當時の事情から說明が出來た。私共は家庭に重症患者を持つてゐた。その恢復の望みは最早ないものと私は心ひそかに考へてゐた。かの朝には患者は非常によくなつた。私は斯くして彼女が生命をつないで行くであらうと、自らに云つた事を知つて居る。其處で彼の破壞的狂的發作は、運命に對する感謝の氣分のあらはれであり、犧牲を捧げる行爲(Opferhandlung)の實行に役立つたのであつて、謂はば私は若しも彼女が健康になるならば、何でも犧牲にする事を誓つた樣なものである。私がこの犧牲として Venus von Medici を擇んだ事は確かに恢復しつつある人に對する慇懃なる敬意に外ならなかつたのである。然しながらこの場合にも私

が斯くも早く決心し、かくも巧みにねらひを定め、非常に近くにある他の品物には何も當てなかつた譯は判らなかつた。

私が手から外れたペン軸を以てやつた他の破壞は矢張り犧牲の意味を持つてゐた。然しながら、この場合は魔除けの爲の犧牲（Bittopfer）であつた。私は或時忠實にして價値ある友人を、ある徵候――それを私は彼の無意識活動と云ふ事からして說明した――だけを根據として非難した。彼はそれを勘違ひして私に手紙を寄越し、友人を精神分析的に取扱つて吳れるなと乞うて來た。私は尤もな事だと承認し、返書をかいて彼を宥めたのであつた。私がこの手紙を書いてゐた時に、私の前に最近手に入れたヱヂプト出來の立派な磨きをかけた像が立つてゐた。私は前記の樣にしてこの像を壞した。そして私がより大なる不幸を防ぐためにこの災難を釀した事を直ぐに知つたのであつた。幸にも親交と像の兩方共がひびが認められない位につぎ合はされたのであつた。

第三の破壞は、餘りに重大ならざる關係に立つてゐた。それは最早私がいやになつたものに對する„maskierte Exekution“（假面を被れる處分）――Th. Vischer（ヴイシエル）の Auch einer“ に書かれてある云ひあらはし方を用ひるならば――に外ならなかつた。私は暫くの間、銀の柄のついた「ステツキ」を持つてあるいてゐた。薄い銀箔が或時別に私がやつたと云ふ譯でなく破損した時修繕はうまく行かな

かつた。「ステツキ」が修繕からもどつて來た時に私は面白がつてその柄を私の子供の一人の脛にかける事に用ひた。さうした事柄では勿論折れてしまひ、私はその「ステツキ」を捨ててしまつたのであつた。

斯くの如き場合に當人がその出來た損害を受け入れる無頓着さは、それを實行する際に於ける無意識的企圖の存在の證據と見るべきである。

時折私どもは斯くの如き物を壞すと云ふ樣な些細な失錯動作の根據を研究するに際し、或人の今迄の經歷に深く喰ひ入つてをり、且つその人の現在の狀態にも固着して居る關係に遭遇する。エル・エーケルによる次の分析はその一例となるものである。

「或る醫師が左程高價なものではないが、それでも立派な土製の花瓶を持つてゐた。これは嘗て他の多數の――その中には高價なものもある――品物と一緒に、ある既婚の婦人患者から贈られたものであつた。この患者に精神病が明瞭になつた時、彼は凡ての贈物――唯遙かに安直なこの花瓶だけを殘して――を家人に返却した。この花瓶が美しいと云ふ譯で、彼はそれを手放したくなかつたのであつた。然しながらこの着服は氣の小さいこの男に內的葛藤を起させた。彼は實際この行爲の不當な事をよく意識してゐた。そして單に花瓶が價値のないものであると云ふ事、及び荷造が困難であると云

ふ事を條件として、彼の良心の苛責を片附けておいたのであつた。一二箇月の後彼が問題になつた、この患者の治療費の殘額を、辯護士の手で請求し取立てさせようとした時に、この自責の念が再び現れて來た。彼にはこの想像的の横領が家人から發見され、刑事訴訟に於て彼を告訴する樣な事になりはしないかと云ふ不安が一寸現れた。特に然しながら自責は暫くの間非常に強く、爲に彼は――恰も横領した物に對する賠償として――約百倍も高い金額の請求權を捨てようと考へた位であつた。而も彼はこの考へを馬鹿な事だとして片附け、この考へに打克つたのであつた。

この氣分で居る間に於て、平生滅多に物を壞さず筋肉裝置をよく支配するこの男に、花瓶の水を取りかへる際に、この行爲とは本質的に何の關係もない奇妙な「拙劣なる」運動によつて花瓶を机の上から落すと云ふ事が起つた。その爲に花瓶は五つ六つの大きな破片に壞れてしまつた。しかもこの事は彼が前の晩にひどく躊躇した後に、この花瓶に花を盛つて食堂の机の上に招待した客人の前に置かうと決心し、而も壞す直前に花瓶の事を考へ、これが自分の居間に存在しない事を不安に思ひ、手づから他の室から持つて來た後に起つたのであつた。彼は最初驚いた後に破片を集め、これをつぎ合はせて見て、花瓶が殆ど完全に組立る事が出來る事を確かめたのであつたが、その瞬間に二三の大きい破片が手から滑り落ちた。そして無數の破片に碎け、それと共に花瓶に對する望みもなくなつてしま

つた。

勿論この失錯作業はこの醫師に——彼が抑留してゐたものを除き、又人が彼から取り上げてゐたものを要求する事を、謂はば妨げてゐたものを除く事によつて——彼の權利を追求する事を可能にする實際の傾向を持つた事は疑ひのない所である。

然しながらこの直接の限定の他に、この失錯作業は凡ての精神分析學者に向つて今一つの比較にならぬ程深く且つ重要な象徴的限定を持つて居るのである。何となれば花瓶は疑ひの餘地なき婦人の象徴であるからである。

この小さい話の主人公は、彼の若くて美しい最愛の妻を悲劇的に失つた。彼は神經官能症に陷り、その根本になる覺え書きは「彼がこの不幸に關して責任がある」（卽ち「彼が美しい花瓶を壞した」）と云ふ事であつた。彼は又最早や婦人に對する關係を見出さなかつた。そして結婚生活及び永續的の愛の關係に對する嫌忌を持つた。この愛の關係は無意識界に於ては彼の死んだ妻に對する不貞として價値づけられ、意識界に於ては彼が婦人に不幸をもたらし、婦人を自分の故に殺す事になると云ふ事に合理化されてゐた。（だから彼は勿論花瓶を永續的に持つてゐてはならないのであつた！）

彼の強い性慾（リビドー）に於て、性質上一時的の意味ある既婚の婦人との關係（卽ち他人の花瓶を抑留しておく事）が最も適當なるものとして彼の眼前にちらついたのも無理のない事である。

この象徵に對する立派な證明は、次の二つの要素に存して居る。神經官能症の爲に、彼は精神分析療法を受けた。彼が必ず土の花瓶のこはれた事を物語つた會見の經過中に於て、彼はずつとあとになつて、今一度婦人に對する關係に言及し、自分が馬鹿らしい程氣むづかしく、例へば婦人からして、„unirdische Schönheit"（「此世では見られない美」）を要求して居ると考へた。とりも直さず彼は今も尙ほ死んだ、卽ち此世にゐない（unirdisch）妻にこだはつて居り、此世の中の美は問題にしないと云ふ、非常に明かな強調を示したのであつて、從つて「土の」（この世の）花瓶（irdenen（irdischen）Vase）の破壞が起つたのであつた。

そして彼は感情轉移に於て、彼の醫師の娘と結婚しようと云ふ空想を描いたが、丁度その時彼は醫師に一箇の花瓶を贈呈した——いはばその方向に於て彼にお返しが望ましいと云ふ諷刺として。

この失錯作業の象徵的意義は、まだ色々に變化され得る望みがある。例へば花瓶に水を滿したくないと云ふ事などである。然しながらそれよりも私に一層興味ある樣に思はれる事は多數の——少なくとも二つの——多分前意識界及び無意識界から別々に働く動機がこの失錯作業の重複——花瓶を押し

倒す事、及び手から花瓶が滑り落ちた事――にあらはれて居ると云ふ考へ方である。[*]

* Internat. Zeitschrift für Psychoanalyse I, 1913.

(e) 物體を落す事、それを倒し、或は破壞する事は非常に屢〻無意識的考慮進行の表現として用ひられる様に見える。この事は私共が折々分析に依つて證明し得る事であり、それよりも屢〻世人が迷信的に、或は冗談にこれに關して與ふる説明から知り得る事である。鹽を振り出す事、酒盃を倒す事、地上に落ちた「ナイフ」が地につき刺さつた儘になつて居る事などに、如何なる解釋が結びつけられるかは周知の事である。斯くの如き迷信的説明がどの程度迄注意される權利があるかと云ふ事は、私は後に説明しようと思ふ、唯此處では箇々の拙い行爲が定つた意味を持つものでなく、その時、その時の事情によつて色々異つた企圖を現すものである事を述べておく必要がある。

此間私の家で異常に澤山な硝子器具及び陶製器具が壞された事があり、私自身も二三壞したのであつた。然しながらこの小さな精神的の地方病は容易に説明する事が出來た。それは私の長女の結婚前であつた。斯くの如き儀式の際に私共は故意に道具を壞し、加ふるに祝辭を述べるのが例である。この習慣は犧牲の意義を持つて居り、叉他の象徴的意味を持つて居るかも知れない。

召使がこはれ物を落して壞す場合に、私共はそれに對する心理學的説明を先づ以て考へる事はしな

いであらう。然しながらこの場合にも不明の動機の加擔は矢張りありさうに思はれるのである。無教育者には美術や美術的製品の觀賞は非常に縁遠いものである。この製品に對する漠然たる敵意が、私共の召使を支配するのである。殊に價値を洞察し得ない品物が、彼等の仕事の源泉となる場合にさうである。これに反して、同じやうな教育程度、同じ位の身分の人達でも、科學方面の研究所などに於て彼等が自分を彼等の上役と同一視し、自分等をその研究所の重要なる人物と考へ始める頃になると、危險な器物を取扱ふ上に於て非常な巧みさと確實さに勝る事があるのである。

私は此處に若い技術家の云つた事を挿入しようと思ふのだが、これは物を毀す場合の機制への洞察を許すものである。

「先頃私は大學の實驗室で、二三の同僚と一緒になつて込み入つた彈性實驗をやつてゐた。この仕事は勿論私共が進んで引取けたものであるが、私共が期待してゐたよりも多くの時間をとるやうになつた。或日私は同僚と一緒に再び實驗室に行つた時、同僚は「今日は澤山の時間をとられては困る。自分には家にしなければならぬ仕事が澤山あるんだ」と云つた。私は彼に同意を表する事が出來た。そして先週に起つた或る出來事を諷刺して、冗談半分に「機械が利かなくなつて早く仕事を止めて歸る事が出來るやうになるといいんだがなあ」と云つたのであつた。――分業の關係から同僚の壓搾機

の瓣を操縦する事になつた。卽ち彼は徐かに瓣を開いて壓液を「タンク」から水壓機の圓筒の中へ入れなければならなかつた。實驗の指導者は壓力計の處に立つて適當な壓に達した時には「止めよ!」と聲をかけるのであつた。この命令に應じてFは瓣を摑んで力一杯これを左の方に回轉した(凡ての瓣は右方へ閉ぢられる樣になつてゐたのであつた!)。その爲に「タンク」の全壓が壓搾機に作用し、導管はそれに對して準備されてゐなかつた爲に、管の連接部が破裂した——これは極く無害な機械の缺陷ではあつたが、それでもその日は仕事をやめて私共は家に歸らねばならぬ事になつた。——不思議な事には暫く經つて後に私共がこの事に就て話し合つた時Fは私が確かに記憶してゐた私の云つた言葉を絕對に思ひ出さうと欲しなかつたのであつた。」

落ちる事、足を踏み外す事、滑る事等は、矢張りいつも全く偶然的な運動の失敗と說明される必要はないのである。(これらの云ひあらはし方が言葉の上に於て二重の意味を持つて居る事は、既に其處に斯くの如き身體の平衡狀態の拋棄によつて表現され得るやうな、隱れたる空想の種類がある事を指示するものである。私は婦人や少女の一定數の輕い神經病を思ひ起すのであつて、これらの病症は怪我のない墜落の後に起り、墜落の後に於ける驚愕の結果起つた外傷性「ヒステリー」症と解すべきものであつた。當時既に私は事情はこれとは別であつて墜落は既に神經症の準備をなして居り、症狀の背

後に動いて居る力と推定して可なる、性的內容を有する無意識的空想のあらはれであると云ふ、印象を抱いてゐた。この事は正に「處女が落ちる時には背中を下に向けて落ちる」と云ふ諺に云ひあらはされて居るのではあるまいか?。

何人かが乞食に銅貨や銀貨を與へる代りに金貨を與へたと云ふ樣な場合も矢張り「掴み損ひ」に加ふべきものである。斯くの如き失錯の說明は容易である。これは運命を宥め凶事を防衞するための犧牲行爲である。若し私共のやさしい母や叔母が散步に出かける前に、子供等の健康に就ての心配を云ひあらはして居るのを聞き、而もこの散步の途上に於て、彼女が厭々ながら、慈善的に振舞つたとするならば、私共は最早この彼女の云ふ處の好ましからぬ出來事の意味を疑ふ事は出來ないのである。斯くして私共のあらはす失錯行爲は、不信心になつた理性の反對を受けて私共の意識の光を避けねばならぬ樣になつて居る。凡ての敬神的及び迷信的習慣の實行を可能にするものと云ふべきである。

(f) 偶然の行爲が元來故意のものであると云ふ事は、性的動作の領域に於けるよりも寧ろ信ぜられ易いのであつて、實際この領域に於ては兩方の種類の運動の境界がなくなる樣に見えるのである。外見上拙劣なる運動が、性的の目的に向つて非常に狡猾に用ひられ得る事は一二年前に私自身に經驗した。私は或る親しい人の家に於て、お客として來てゐた若い娘に出逢つたが、この少女は私にすでに

疾く消失したものと考へられた快樂を呼びさましたのであつた。そして私はその爲に快活になり、おしやべりになり、愛想よくなつた。その時私は如何なる道程を經てこの事が起つたかと云ふ事を研究して見た。一年前にこの同じ少女に逢つた時には私は冷靜であつたからである。

さて大變年とつて居るこの少女の叔父が室に入つて來た時、私共二人は急に立上つて彼の爲に室の隅にあつた椅子を持つて來ようとした。彼女は私よりも敏捷であり、椅子に近くゐたために彼女の方が最初にその椅子を占領した。彼女は椅子をその背の處を後方に向け、兩手を腰をおろす處の端にかけて運んだ。私は遲く椅子に達したのであつたが、その椅子を運ばうとする要求を捨てず、急に彼女の背後に立ち、兩腕を後方から彼女に掛け、私の手は一瞬間彼女の膝の前の處で出逢つたのであつた。私は勿論この狀態を出來ると直ぐやめたのであつた。如何に巧みに私がこの拙劣な運動を利用したかと云ふ事は何人にも氣がつかなかつた樣であつた。

街路上に於けるかの苛々させる拙劣なる人を避ける運動——その場合人が一二秒の間あちらこちらと而も相手の男或は女と同じ方向に步み、終には兩者が向き合つて立ちつくす事、卽ち他人の道をふさぎ邪魔する事は、古代の無作法なる挑發的行爲を繰返すものであり、拙劣の假面の下に性的企圖を追ふものであると云ふ事を、私は折にふれて自らに云はなくてはならなかつた。神經官能症者に於け

る私の精神分析からして、私は若い人達や子供等に見る所謂無邪氣（Naivität）と云ふ事は、屢々本人が何等の遠慮束縛なしに鄙猥なる事を云つたりしたりする爲に用ひられてゐる、斯くの如き假面に過ぎない事を知つて居る。

ヴェー・シュテケルは自己に於けるこれと全然似よりの觀察を報告して居る。「私は或家に入つてその家の主婦に私の右手を差出した。その際をかしな事には私は彼女のゆるい朝の衣服の上にしめてゐた紐をほどいたのであつた。私は何等無禮な企圖を意識して居なかつた。然しながら私はこの拙劣なる運動を手品師の巧みさを以て實行したのであつた。」

私は私共が此處に考へて居ると同じ様に作家が失錯作業を意味あり、動機あるものとして解釋して居る事の證據を繰返し與へる事が出來た。だからして新しい實例に於て、作家が拙劣なる運動を意味されるものとし、後に起つて來る出來事の前兆として用ひて居るのを見ても、別に不思議はない譯である。

テオドル・フォンターネの小說 „L'Adultera"（「姦通」）（全集第二卷六十四頁エス・フィシヤー出版）に次の様に記されて居る「……そして Melanie（メラニー） は飛び上がつて彼女の夫に挨拶のつもりで大きな鞠の一つを投げた。然しながら彼女のねらひは正鵠を缺いた。鞠はわきの方に行つて Rubehn（ルベーン） がそれを

捕へた。」この小さな挿話をもたらした此の遠足からの歸途、メラニーとルベーンとの間に對話が起つて居るのであるが、この對話は萌えんとする傾向の最初の暗示をあらはして居る。この傾向は熱情に迄高まり、メラニーは終に夫を捨てて彼女の愛人に全然屬する事になつたのである。（ハー・ザックスによつて報告されて居る。）

(g) 正常人の「掴み損ひ」によつて起る結果は通常、最も無害なる性質のものである。正にこの理由からして醫師や藥劑師の過失の樣に重要なる意義を持つたものであり、重大なる結果を招來し得る「掴み損ひ」が、或る方向に從つて私共の觀點の限界内に入つて來るかどうかと云ふ問題に、特別の興味がつながつて來るのである。

私は醫師としての手當をする際は非常に稀なので、私は自分の經驗からは醫師としての「掴み損ひ」は報告すべきもの一例あるのみである。私が多年來毎日二度宛往診して行く非常に年とつた婦人に對して朝の往診の際に私のする事は二つあつた。卽ち私は眼に數滴の眼藥を點眼し彼女に「モルフィン」の注射をした眼軟膏を入れる靑い瓶と「モルフィン」液を入れる白い瓶の二つの小瓶がいつも用意されてゐた。兩方の仕事の間、私の考へは多くは別の事を取扱つてゐた。その事は注意力が必要でないれてゐた。兩方の仕事の間、私の考へは多くは別の事を取扱つてゐた。その事は注意力が必要でない位屢〻繰返されたのであつた。或朝私は自動機械が間違つて動き、點滴管が靑い瓶でなく白い瓶に入

り、眼軟膏でなく「モルフィン」液が眼に注がれたのに氣がついた。私は非常に驚いたが、ついで二〇%の「モルフィン」液が數滴位結膜囊に入つても、何等の害を與へないであらうと云ふ考へで安心したのであつた。驚愕は明かに他の方面から導くべきものであつた。

この小さな「掴み損ひ」を分析しようとする試みに於て、私に先づ「間違つて、老婦人を捉へる」(sich an der Alten vergreifen) と云ふ句が思ひ泛び、これが解決への近道を示す事が出來たのであつた。私はその前の晩一人の若い男が物語つた一つの夢の印象の下に立つてゐた。この夢の內容は彼自身の母との性交を基礎としてのみ說明し得るものであつた。*

* この夢はヱディプス王の傳說理解の鍵を握つて居るから、私は之を「ヱディプス」夢と名づけるのを例として居る。ソフォクレスの「テキスト」では斯くの如き夢への關係は、ジョカステの口にのせられて居る。(「夢判斷」第百八十二頁第七版第百八十三頁と比較せよ)

「ヱディプス」傳說がジョカステ女王の年齡と云ふ事で何等感情を損はないのは妙であるが、これは自分の母に對する戀愛にあつては、彼女の現在の人物ではなく、私共が子供の時に得た母の若い時の追想が問題になると云ふ結果によく一致するものと思はれるのである。斯くの如き矛盾は、二つの時期の間にさまよふ空想を意識的にし、これによつて、或る定まつた時期に結びつける場合にいつも明か

にされる事である。この様な考へに深く沈みながら、私は九十歳以上になる私の患者に思ひ及んだ。そして私は多分「エディプス」傳説の普遍的人間性を神託にあらはれて居る運命の相關として解釋しようとしてゐたに違ひないのである。何となれば私は老婦人に關して、或は老婦人に於て（bei oder an der Alten)「摑み損ひ」をやつたからである。然しながらこの摑み損ひも矢張り無害なものであつた。私は「モルフィン」の液を點眼するか眼藥を注射するか、二つの起り得べき間違ひの中で遙かに無害な方を選んだのであつた。然しながらここに重大なる害を與へる恐れある「摑み損ひ」に於ても、私共が此處に取扱つた場合と同樣、無意識的企圖を考慮に入れてよいかどうかと云ふ事が問題として殘存するのである。

期待される樣に材料は此處で私を見捨てるのである。そして私は假定や推論を賴りにせねばならぬのである。精神神經症の重い例に於て、自己傷害と云ふ事が折々病的症狀として起り、精神軋轢が自殺に終結する事は彼等に於て、決して除外し得ない事である。斯くの如き患者に起る外見上偶然的なる損傷が、本來自己傷害であり、平生自己非難としてあらはれ、或は症狀形成の補助となる自己懲罰の不斷に潛伏して居る傾向が偶然に與へられたる外的事情を巧みに利用し、或はこれを助けて希望されたる損傷を成就せしむるものであると云ふ事は、私は知つて居り又よく說明されたる實例によつて

證據立てる事が出來る。斯くの如き出來事は、中位の重さの症例に於ても決して稀ではない。そしてこれらの出來事は多數の特別なる性狀——例へば所謂不慮の災害に際して患者が保つ著しい沈着*——によつて、その無意識的企圖を暴露するのである。

* 完全なる自己滅絕（自殺）を目的としないこの自己傷害は、私共現在の文化狀態では偶然の出來事の背後に隱れるか、それとも自發的罹患の佯作によつてあらはれる外にしやうがないのである。以前の或る時代にはこれは哀悼のしるしとして習俗的に行なはれ、又他の時代には信仰及び世を捨てる事の傾向をあらはす事が出來た。

醫師としての經驗から私は唯一例を此處に報告しよう。或る若い女が馬車の事故からして片側の下腿の骨折を受け數週間臥床する事になつた。而も彼女が痛がらない事、及び靜かに彼女の苦惱を忍ぶ有樣が目に立つた。この災厄は永く續く重い神經官能症を惹起し、終に精神分析療法によつて恢復するに至つた。治療に際し、私は災厄の起つたときの事情及びそれに先立つて起つた出來事を知つたのである。この若い婦人は嫉妬深い彼女の夫と一緒に、彼女の結婚して居る姉妹の農場に、彼女の他の同胞竝びにその夫妻と共に暮らしてゐた。或晩この親しい一團に交つて彼女は自分の藝の一つを演じた。彼女は手際よく「カンカン」（Cancan）（鄙猥なる一種の舞蹈）を踊つて、親類の人々の喝采を博

した。然し夫はそれを喜ばず後に彼女を非難し「お前は又娼妓の樣な行動をやつたな」と云つた。この言葉は的中した。私共はそれが正に踊の爲であつたかどうかは不問に附して置かうと思ふ。彼女はその夜はよく眠れなかつた。翌朝彼女は馬車で外出しようと決心した。彼女は自ら馬を選擇し、一組の馬を拒絕し、他の一組を要求した。一番末の妹が自分の乳呑兒に乳母をつけて同車させようとした。それに對して彼女はよく反對した。「ドライヴ」の間彼女は神經過敏になつて居り、馭者に向つて馬が臆病になつて來たやうだと注意した。そして落ちつかなくなつた馬が實際一瞬間故障を起した時、彼女は驚いて馬車から飛び降り、脚を折つたのであつた。而も馬車の中に居殘つてゐたものには何等の怪我もなかつた。この詳細が明かにされた後には、私共はこの傷害は實際目論まれた事であると云ふ事を殆ど疑ふ事は出來ないのである。然しながら私共は罪に對して非常にふさはしい罰を課する爲に、この出來事を强ひて釀さしめたる巧みさには驚歎せざるを得ないのである。何故なれば彼女には「カンカンダンス」は永い間不可能にされる事になつたからである。

私自身の自己傷害に就ては、私は靜かな時には報告するだけのものは餘り持たない、然しながら非常なる條件の下には自己傷害は不可能ではない。私の家庭の人々の一人で、今舌を嚙んだとか指をつねつたなど訴へる場合には期待されたる同情の代りに「何の爲にお前はさうしたか？」と云ふ問が私

から發せられるのである。然しながら私自身或る若い患者が治療時間中に私の長女——丁度その時彼女が極度の危篤狀態に於て療養所にゐた事を私が知つてゐたのに——と結婚したいと云ふ（勿論眞面目にとる事の出來ない）企圖を打ちあけた時非常に痛く私の拇指をつねつた。

私の男の子の一人——彼の活潑な性質のために、病氣の時には看護が非常に困難になるのが常であつた——が或朝人々が午前中は床の中で暮らせと彼に要求したと云ふので激怒發作を示し、彼が新聞を讀んで知つてゐた樣に自殺すると云つて威嚇した。その日の夕方彼は私に胸の脇の處にある一つの瘤を示した。それは「ドーア」の「ハンドル」に打ちつけた結果出來たものであつた。私が皮肉まじりに何の爲に彼がさうしたか、それによつてどうしようと欲したかと訊ねた處、十一歳になるこの子供はわかつた樣にして「これは今朝早く私が威嚇した自殺の試みであつた」と答へた。但し私はその頃私の子供等に自己傷害に關する私の考へ方が判つてゐたとは信じないのである。

半ば故意的なる自己傷害——この拙なる云ひあらはし方が許されるとして——が起る事があるものだと信ずる人は、意識的に故意なる自殺の外に又無意識的企圖を有する半ば故意の自己滅絕即ち生命の脅威を巧みに利用し、これを偶然の災禍の樣に裝はしむる、半ば故意の自己滅絕も存する事を假定する樣に準備されて居る。斯くの如き自己滅絕は決して稀ではないのである。何となれば自己滅絕の

傾向は、これが實行される人々に於けるよりも、遙かに多數の人々に一定の强さに於て存在して居るからである。自己傷害は通常の衝動とこれに反對に働く力との間の妥協であり、又實際に自殺が起る場合にも其處にはこの傾向が永い以前から弱い强さに於て存在し、或は無意識的なる壓迫されたる傾向として存在してゐたのである。

意識的の自殺企圖と雖も時と手段と機會とを擇ぶものである。無意識的自殺企圖が、自殺の原因の一部を引受け、從つてその個體の防衛力を奪ひ、以てこの自殺企圖を壓迫より免かれしめて呉れる他の動機を待つのは全く當然な事である。*

* この場合は結局或る婦人に對する性的襲擊のそれと同じであつて、その際男子の襲擊は婦人の全力に依つて抵抗されないのである。それは被襲擊者の無意識的感情の一部がこれを促進し、これに迎合するからである。實際斯くの如き狀態は婦人の力を痲痺させるものだと云はれて居る。されば私共はこの痲痺の理由を附け加へさへすればよいだけである。この點に於て Sancho Pansa（サンチョー ペンザ）が、彼の島の總督として下した機智に富んだ判決は、心理學的には不條理なものと云はねばならない。（ドンキホーテ、第二卷第四十五章）。或女が或男を判官の前に引摺つて來た。この男は彼女の云ふ處に依れば、彼女を暴力を以て辱めたと云ふのであつた。サンチョーは被告人から取り上げた金の一杯入つて居る財布によつて彼女の損害を賠償した。そして彼女が去

つた後に男に彼女を追跡して財布を取返してもよいと云ふ許可を與へたのであつた。彼等兩人は爭ひながら引返して來た。そして女はこの惡漢が財布を奪ふ事が出來なかつた事を自慢した。それに對してサンチョーは云つた「若しもお前がお前の名譽をこの財布の樣に眞劍に守つてゐたら、この男はお前を辱める事が出來なかつたであらう」と。

私が此處に述べる事は決してむだな論議ではないのである。外見上偶然に見える災禍（馬に乘つてゐて或は車から落ちて）であつて、私の知つて居る例は一にして止まらないのであり、その詳細なる事情を調べて見ると、無意識的に許された自殺のうたがひを辯護するのである。例へば將校の乘馬競爭の際に、一將校が落馬して重傷を負ひ、その後數日にして死亡した。彼が意識を囘復した時の態度には、二三の點に於て目立つものがあつた。その以前の彼の態度行動は、尙更ら注意すべきものであつた。彼は愛してゐた母の死によつて、非常に憂鬱になり、仲間の者と一緒にゐて涕泣痙攣に陷つた事があつた。彼は親友に向つて生きてゐたくないと云ひ出し、辭職して亞弗利加の戰爭に參加したいと云つた事があつた。そんな事は平生彼に何の興*味もなかつた事であつたのである。以前には勇敢なる騎手であつた彼は今ではなるべく乘馬を避けるやうにした。終に彼が避ける事の出來ない競爭の前に、彼は悲しい豫感を云ひあらはしたのであつた。私共の考へ方からして、この豫感が事實になつて

も最早驚かないのであらう。人々は斯くの如き憂鬱狀態には健康な時の樣に馬をうまく御し得ないのは當然だと云つて反對するであらう。それは私も全く承認する。唯私は所謂「神經質」に依るこの運動制止の機制を、私が此處に强調した自殺企圖に求めようと欲するのである。

＊戰場に於ける狀態は意識的なる自殺企圖——勿論直接の道を避けたる——に迎合する樣な狀態である事は明かな事である。「ワルレンスタイン」の中にある瑞典の陸軍大尉がマックス・ピッコロミニの死に就ての言葉「人々が云つて居るが彼は死なうと欲したのだ」と比較せよ。

ブダペストのエス・フエレンチーは偶然の銃創であると云つて居る一例——それを彼は無意識的なる自殺の試みとして說明して居る——の分析を發表する事を私に委せて吳れた。私は彼の解釋に贊成であると云ふ事を述べておかう。

「J. Ad. と云ふ二十二歲の指物職の徒弟は一九〇八年一月十八日私を訪ねて來た。彼は一九〇七年三月廿日に彼の左側顳顬部に這入り込んだ銃丸が手術で除き得るかどうか、又この銃丸は取去らねばならぬかと訊ねた。時々起る輕い頭痛の外は彼は全く健康な氣分であり、又客觀的にも左側顳顬部にある火藥で黑くなつて居る特有なる瘢痕の外には何もなかつたので、私は手術はせんでもよいと云つた。その場合の事情を聞いて見ると、彼は偶然に自ら傷けたのであると云つた。彼は兄弟の持つてゐ

た短銃を弄んで居り、彈丸が裝塡されてゐないものと信じて居り、左手を以て左側の顳顬に當て（彼は左利きではなかつた）引金に指をあてた處、彈丸が發射されたといふのであつた。六連發短銃の中には三箇の彈藥筒がつめられてあつたと云ふ事であつた。私は彼に向つてどうして銃を手にする考へになつたかと訊ねてみた。彼は丁度その時徵集（兵役に）の時であつたと答へた。その前晩彼はこの武器を飮食店に持つて行つた。それは彼が喧嘩を恐れたからであつた。徵兵檢査では彼は靜脈瘤のために、不合格と云ふ事になり大いに恥ぢた。彼は家に歸り、短銃を弄したが自殺しようなどとは考へなかつた。然しこの偶然の出來事が起つたと云ふのであつた。尙ほ彼が自分の運命に關し、その他の點に於て滿足してゐたかと訊ねた處、彼は嘆息を洩らして或る少女との戀愛に就て物語つた。この少女を彼は愛して居り、彼女も彼を愛してゐたが、而も彼を捨てて去つた。彼女は單に金を得たいと云ふ欲望から亞米利加に渡航したと云ふのであつた。彼は彼女の跡を追うて行かうとしたが、兩親は彼を止めたのであつた。彼の愛人は一九〇七年一月廿日卽ち、この災禍の起る二箇月前に旅立ちしたのであつた。之等の凡ての疑はしい點があつたに拘らず、彼はこの短銃の發射は不慮の出來事であると云つて頑張つた。然しながら私は銃を弄ぶ前に裝塡されて居る事を確かめなかつた粗漏、及びこの自己傷害は心的に限定されたものである事を確信した。彼はその頃まだ不幸なる戀愛の悲しい印象の下

にあつた。そして明かに軍隊生活によつてこれを忘れようと欲した事は確かである。そして彼にこの望み迄もなくなつた時、銃を弄する事即ち無意識的なる自殺の試みが起つたのであつた。彼が短銃を右手に持たずして左手に持つた事は、彼が事實弄ぶ考へであつた事、即ち意識的には自殺しようと思はなかつた明かなる證據である。」

この觀察者から私に提供された外見上偶然的なる自己傷害の他の一分析例は「人を呪へば穴二つ」なる諺を思ひ起させるものである。

中流階級の良い家庭のX夫人は、結婚してゐて三人の子供を持つてゐた。彼女は神經質ではあつたが生活には十分堪へ得たので強力な治療は必要としなかつた。或日彼女は次の樣にして一時的のものとは云ひ、可なり目に立つ程度に彼女の顏を醜くした。彼女は修理中であつた或る道路に於て、石の積み重ねに躓づき、顏を或家の壁に打ちつけた。顏全體は擦りむけ眼瞼は蒼くなり、且つ腫れ上がつた。そして彼女は眼がどうかなりはしないかと云ふ心配から醫師を呼びに遣つた。この點に關して安心を與へた後、私は彼女に訊ねた。「それにしてもあなたはどうして倒れなすつたのですか?」と、彼女は丁度少し前に一二箇月來關節の病氣の爲に歩行の不自由であつた彼女の夫に對して、この道路では氣をつけなくてはならぬと注意したのであつたと答へた。そして彼女は斯くの如き場合に不思議にも他

の人に注意を與へたその事が、彼女自身に起ると云ふ經驗を前にも屢々持つた事があると云ふ事であつた。

私は彼女の災禍のこの限定では滿足しなかつた。そしてまだまだ話す事があるのではないかときいてみた。災禍の直前に彼女は街路の向側の店に綺麗な繪があるのを見て、急にこれを子供部屋の裝飾にしたいと思ひ、直ぐにこれを買はうと欲した。だから彼女は街路には注意せず直ぐに店の方に向つて行つた。そして石の積み重ねたものに躓き、自分の顏を手を以て保護しようとする少しの試みもせずに家の壁に打ちつけた。繪を買はうと云ふ企圖は直ぐに忘れてしまつた。そして彼女は大急ぎで家に歸つて行つたと云ふのであつた。「それにしても貴女は何故よく御覽にならなかつたのでせう?」と私は尋ねた。彼女は「さうですね、それは多分罰だつたのでせう、私があなたに內々で既に打明けましたあの話の爲の」と彼女は答へた。「さうするとあの事は不相變あなたをそんなに苦しめてゐたのですか?」と私は訊ねた。彼女は「はい――後になつて私はその事を非常に殘念に思ひました。そして自分自身を非常に惡い、罪深い不道德な者だと思ひました。然し私はその頃は神經質のために殆ど狂氣してゐたのでした」と答へた。

これは彼等夫婦が金錢上の關係から子供がもつと澤山出來る事を避けようと云ふ考へから、女が夫

との合意上、女藪醫者によつて始めさせ、專門醫によつて結末をつけて貰つた、墮胎の事であつたのである。

『私は屢々自分を「然しお前はお前の子供を殺させたではないか」と非難し、又私は「そんな事が罰なしに濟むものか」と云ふ不安を持ちました。今あなたが私の眼が何ともないと云つて下さいましたので私は安心しました。私はどのみち既に十分罰せられたのです』と彼女は云つた。だからしてこの災禍は一面に於て彼女の不正行爲を償ふための自己懲罰であつたのであり、他面に於て彼女が數箇月の永い間絕えず心配してゐた多分一層大きい知られざる罰から逃れる爲の自己懲罰であつたのである。彼女が夫に注意を與へてゐた間に於て、既に彼女の無意識界に可なり强く動いてゐた全體の出來事と、それに伴ふ凡ての恐怖心への追想が彼女が繪を買ふために突進して行つた瞬間には、壓倒的に强くなり、多分次の如き文句になつて現れたのであつた。「何の爲にお前は子供部屋の裝飾品を買ふ必要があるのだ。お前は自分の子供を殺させたではないか！　お前は人殺しだ！　重い罰が確かに近づきつつあるのだ。」

この考へは意識的にはならなかつた。然しながらその代りに、彼女はこの謂はば心理學的瞬間に於ての狀態を利用し、彼女に適當な樣に思はれたる石の積み重ねを目立たぬ有樣に於て彼女の自己懲罰

に用ひたのであつた。だからして彼女は倒れる際に決して兩手を伸ばさなかつたし、又その爲に彼女はひどく驚かなかつたのであつた。彼女の災禍に對する第二の多分はるかに弱い限定はこの事件の共犯者なる夫から免かれたいと云ふ無意識的願望に對する自己懲罰であつた。この願望は石の積み重ねのある街路に於ては氣をつけよと云ふ全然餘計な警告によつて暴露されて居る。何故なれば彼女の夫はよく歩けなかつたので、非常に氣をつけて歩いてゐたからである。*

* Van Emden, Selbstbestrafung wegen Abortus.
（墮胎の爲の自己懲罰）
（Zentralblatt f. Psychoanalyse, II/12）

或る通信者が「失錯作業による自己懲罰」なる題目に就て次の樣に書いて寄越した。「私共が街路上に於て人々が如何なる行動を取るかと云ふ事を注意して見て居ると、私共は——世間によくある樣に——通り過ぎて行く婦人を振返つて眺める男子達に小さい災禍が非常に屢〻起るのを目擊する機會を持つのである。時には或男が——平坦な地上で——足を挫き、時には彼は街燈に烈しく突當り、或は他の有樣で怪我をするのである。

この場合の詳しい事情をよくよく考察するならば、ヨツト・シュテルケ（前揭書）が火傷による外見

上偶然的なる自己傷害を犧牲的行爲と解釋して居るのを尤もな事と考へるであらう。

或る婦人――彼女の婿は兵役に就く爲に獨逸に旅立たなくてはならぬ事になつてゐた――は次の事情の下に彼女の足に火傷を負うた。彼女の娘は間もなくお產をする事になつてゐた。そして戰爭の危險と云ふ事に對する考へは勿論家人全體の心を鬱ぎ込ませた。旅立ちの前日、彼女は婿と娘を晩餐に招待した。不思議な事には彼女は先づ自分のいつも穿いて居る底の平たい深編上げ靴を脫いで、大き過ぎる而も上の方の開いて居る彼女の夫の上靴とはき換へた後に自ら臺所で食事の用意をした。彼女が煮立つた「スープ」の入つて居る大きな鍋を火から取つた時、彼女はこれを落して一方の足、殊にひらいて居る上靴であつた爲に保護されてゐなかつた足背に、可なりひどい火傷を負うた――勿論この災禍は凡ての人々から判り易い彼女の神經質に歸せられた。この燔祭(全燒にして神壇に供へる贄)の後、數日の間彼女は熱いものに對しては、非常に用心した。それにも拘らず彼女は一二日の後に熱い「スープ」で一方の手首を火傷*する事から妨げられなかつた。

*斯くの如き災害による損傷、或は死亡の例の大多數に於てはその解釋は疑はない。本人に緣の遠いものは災禍に於て偶然と云ふ事以外何ものをも見る機會を持たないであらうが、不幸に陷つたものに近い關係のある人及び內密なる細目を知つて居る人は、偶然の背後に無意識的企圖を推測すべき根據を持つのである。この

知識が如何なる種類のものであるか、又如何なる附隨した事情が問題になるかと云ふ事に就ては、次に示す若い男――この人の許婚の婦人が街上で轢かれたのだが――の報告が一つのよい實例を與へるのである。

「去年の九月に私は三十四歳になるZ孃と知合になつた。彼女は裕福な狀態で暮らしてゐた。戰前には約婚の狀態にあつたが約婚の夫は現役將校として一九〇六年に戰死した。私共は互ひに知り且つ愛し合つたが、最初の間は結婚しようと云ふ考へはなかつた。それは事情特に年齡の差――私自身は二十七歳であつた――が結婚を許さないやうに見えたからであつた。私共は同じ街に向ひ合つて住んで居り毎日一緒にゐたので、交際は時の經過と共に親密な形を取る樣になつた。その爲結婚の考へが近寄つて來て、終に私自身もこの考へに贊成するに至つた。今年の復活祭を期し婚約する事が計畫された。Z孃は然しながらそれに先立ちMに住んで居る彼女の親戚の處へ旅行しようと企圖したが、これはカップ(Kapp)騷動によつて惹起された鐵道從業員の同盟罷業によつて急に妨げられたのであつた。勞働者社會の勝利とその結果によつて將來展開して來る樣に見えた暗い前途は暫時の間私共の氣分にもあらはれ、特にZ孃――平生非常に變り易い氣分の持主であつた――には强くあらはれた。何となれば彼女は私共の將來に向つて新しい障礙を認むべきものと信じたからであつた。土曜日(三月二十日)には彼女は除外例的に愉快な氣分にゐた。この狀態は私を實際驚かせ又私をも同じ氣分に引摺り込み、その爲私共に萬事を薔薇の花の色に於て見る樣な感じを抱かせた。私共はその一、二日前、折々一緒に敎會に行かうと話した。然しながら、別に時を定めてゐなかつた。次の朝(日曜日、三月廿一日)九時十五分過ぎに彼女は私を電話口に呼び、私に敎會へ行くのに直ぐ迎ひに來て吳

れと云つた。然し私はそれを拒絕した。それは私が丁度間に合ふ時間に用意が出來かねたし、尙ほ仕事を片附けようと欲したからであつた。Z孃は著しく失望した。それから單獨で出かけ、彼女の家の階段の上で一人の知人に出逢ひ、その人と一緖にタウエンチエン街を通つてランケ街迄の短い距離を步いて行つた……頗る上機嫌で而も私共の對話の事に就ては何も云はないで、その男は――Z孃は此處で幅廣くなつて居り、そして明かに見渡し得る土手をお越えにならなければならないだけですね――と冗談を云つて彼女と別れたのであつた。――丁度その時彼女は人路の極くきはの處で馬車に轢かれたのであつた（肝臟壓潰が起り、これは數時間後に死を招來した。）――この場所は私共が以前に數百回も通つた處であつた。Z孃は非常に用心深い人であつて、私自身の不注意に屢〻制止したのであつた。その朝は、殆ど何の運輸機關も通つてゐなかつた。電車と乘合自動車は同盟罷業をやつてゐた――丁度この時間には絕對的の靜けさが支配してゐた。馬車を彼女は見なかつたとしても、彼女は馬車の音は必らず聽いたに相違ないのであつた！――世間の人は凡て「偶然」を信ずる――私の最初の考へは「そんな事は考へられない――故意の企圖であると云ふ事も、勿論云ひ得ない」と云ふのであつた。私は心理學的說明を試みたのであつた。永い間經つてから私はあなたの「日常生活の精神病理（異常心理）」に於てそれを見出したと信じた。殊にZ孃は時々自殺への一定の傾向を洩らした。のみならず、私にもさうさせようと試みた――その考へは私は隨分屢〻彼女に勸告したのであつた。例へば彼女は二日前にも散步から歸つて來て後に、外見上何の動機もなしに彼女の死と遺產整理の事を話し出したのであつた。但し彼女はそれはやらなかつた！　彼女の云つたこれらの事が、確かに故意の企圖

に持つて行かれてはならない一つの徴候である。私がこれに就て横柄でない判斷を話してもよいとすれば、私はこの不幸を偶然とは見ず、意識溷濁の結果とも見ず、偶然の不幸として假裝されては居るが、實は無意識的企圖に於て實行された故意の自己滅絶と見るべきであらうと思ふ。私はZ孃が私を未だ知らなかつた以前、及びその後に彼女の親戚の人々に云つた事、及び最近迄も私に云つた事から推して、この解釋に對する信を一層深くするものである。——要するに凡ては彼女の以前の約婚の夫の死去の結果と解すべきものであつて、この夫は彼女の眼前にある何物を以ても、決して代へる事が出來ないものであつたのである。」

この樣にして自己の整全及び自己の生命に對する怒りが、外觀上偶然の樣に見える拙劣さと運動の不完全なる事の背後にかくれて居る事があり得るとすれば、私共は他人の生命及び健康を著しく危險にする失錯に同樣の解釋を持つて行く事を可能にする爲に、別に一足飛びの必要はない譯である。此の考へ方の確實性に對する證據として私が提供し得る事は、神經官能症者に於ける經驗から得られたものであり、從つて此の場合の要求には完全に適合しないものである。私は此處に一例に就て報告しよう。この例に於ては元來の失錯と云ふよりも、寧ろ症候行爲或は偶然行爲と名づける方が適當なるものが、患者の精神軋轢の解決を可能にする手掛りに私を導いたのであつた。私は曾て一度非常に聰明なる或男の夫婦關係をよくする事を引受けた事があつた。この男と彼を非常に愛してゐた妻との間の

不和には、確かに實際の根據を引合に出す事は出來たが――彼自らが承認した樣に――この根據だけでは完全に說明する事が出來なかつた。彼は絕えず離婚しようと云ふ考へを持つた。而もその考へをいつも非難した。何故なれば彼は二人の小さい子供を非常に愛してゐたからであつた。それでも彼は不相變彼の計畫に逆戾りした。而もこの狀態を耐へ得べき狀態に改める爲の手段は、何も講じてはみなかつたのであつた。斯くの如き精神軋轢未解決の狀態は、無意識的被壓迫的動機が準備されてゐて、これと鬪ふ意識的動機を强めてゐる事の證據であると私は考へる。そして私は斯くの如き場合には精神分析に依つて精神軋轢を総結せしむる事を企てるのである。處で此の男は、或日彼の非常に吃驚した小さな出來事を物語つた。彼は大きい方の子供――彼が小さい方の子供よりも一層可愛がつてゐた――をけしかけ、子供を高く抛り上げ又これを下に降ろしたりしてゐた。そして一度は子供の腦天が天井から下つて居るしつかりした瓦斯燈の「シャンデリア」に打ちつけられたかと思はれる程の高さに子供を抛り上げた。今にも當らうとした位であつたが、それでも際どい處でやつと當らずに濟んだ！　子供はどうもならなかつたが吃驚して眼がくらんだ。父は驚いて子供を抱いたまま立ちつくした。母は「ヒステリー」性發作を起したのであつた。この無暴なる運動の特種の技巧と、兩親の現した反應の激烈さとは、この偶然的なる事の中に愛兒に對する惡意を示す症候行爲が潛んで居る

事を私に察せしめた。この父が子供に對して目前示して居る愛情への矛盾を、私はこの子供がまだ一人であつて幼く、父がこれを愛する必要のなかつた頃に遡つて、父がこの子供を害せんとする衝動を持つた事のあつた事を明かにする事によつて、除く事が出來た。その頃には妻に滿足してゐないこの男は、次の樣な考へ或は企圖を持つた事は容易に推定する事が出來た。即ち「私がちつとも愛してゐないこの小さい奴が死んだら、自分は自由になりこの妻から離婚する事が出來るのだが」と。今では非常に愛して居るものに對する死の希望は卽ち無意識的に存續してゐたにちがひなかつた。此處からしてこの願望の無意識的固定への道程は容易に見出す事が出來た。强力なる限定は、實際この患者の幼時追想から現れて來た。それは母が父の粗漏に歸した幼弟の死が、兩親の間の烈しい喧嘩を釀し、今にも離婚と云ふ處迄行つた事であつた。私の患者のその後の夫婦生活の經過及び治療上の効果は、私の分析の正しかつた事を證明した。

ヨツト・シュテルケ（前掲書）は作家が「摑み損ひ」を故意の行爲と同列におき、從つてこれを重大なる結果を招來する源と見る事に些の懸念をも持たない事の實例を示して居る。

ハイエルアンスの短話の一つの中に「摑み損ひ」或はもつと精確に云へば、失錯の一例が出て居り、これを著者は戲曲的動機として用ひて居る。

* Hermann Heyermans, Schetsen van Samuel Falkland, 18. Bundel, Amsterdam, H. J. W. Becht, 1914.

それは「トムとテッディー」(‚Tom und Teddie') と云ふ短話である——寄席に出て永い時間水中に止まり、硝子の壁に圍まれた鐵製の水槽の中で種々の藝當を演ずる——潛水者夫婦があり、その妻は近來別の男なる調教者の味方をしてゐた。男子潛水者は演技の前に着衣室に於て彼等が一緒に居る現場を押へた。靜かな場面、おどす樣な目付き、そして潛水者は「後程に」！と云つた。——愈々演技が始まつた。——潛水者は最も難かしい演技をやるのである。「彼は二分半の間密閉した箱の中で水中に止まるのである。」——彼等は既に何度もこの演技をやつた事があつた。箱は閉ぢられた。そしてテッディーは彼等の時計で時間をはかつて居る觀衆に鍵を見せた！ 彼女は尙ほ故意にその鍵を一二度貯水池の中に落し込み、急いで——箱を開けねばならぬ時迄に間に合ふ樣に——鍵の跡を追うて水中に潛るのであつた。

一月三十一日のこの晩に、トムは何時もの樣に元氣な快活な妻の小さな指によつて箱の中に閉ぢ込められた。彼は覗き孔の背後で微笑した——彼女は鍵を弄びながら警戒の合圖を待つてゐた。舞臺の翼の間に調教者がきちんとした燕尾服を着、白い「カフス」をつけ、乘馬鞭を持つて立つてゐた。彼女の注意を牽く爲に、彼は三度目の口笛を短く吹いた。彼女はその方を眺めて笑ひ、凡そ注意を轉向

させられた人が誰でも示すやうな拙劣な身振を示して鍵を亂暴に高く投げ上げた。その爲に鍵は丁度二分二十秒と云ふ時に、箱の傍で箱の脚臺を覆うてある旗布の間に落ちたのであつた。何人もそれを見なかつた。何人もそれを見る事が出來なかつた。廣間の方からは視的錯覺によつて何人もが鍵が水の中に入つて行つた樣に見た樣であつた――そして旗布は鍵の落ちる音を弱くしたために劇場の助手もそれを認めなかつたのであつた。

笑ひながら躊躇せずにテッディーは箱の緣に攀ぢ登つた。笑ひながら彼女は梯子を降りて來た――彼はよくそれを堪へてゐた。笑ひながら彼女は臺の下に消えて行つた――其處を探す爲に。そして彼女が直ちに鍵を見出さなかつた時に、彼女は盜む樣な身振りを示し、恰も彼女が「ああ何とうるさいんだらう!」と云つたかの樣な表情を顏に泛べながら旗布の前に屈んだ。

その間トムは鍵孔の背後で落ち付かなくなつた樣な風に、彼の滑稽なしかめ面をした。人々は彼の義齒の白いのを見、上鬚の下に彼の唇を嚙む運動を見、又林檎喰ひの際にも人々が見た樣な滑稽な、息吹きを見た。人々は彼の蒼白い骨張つた手指の掘りかへすやうな、引掻きむしる樣な運動、(Grabsen und Wühlen) を見た。そして人々は旣に度々笑つた樣に思つた。

二分と二十八秒!…………

三分と七秒…………十二秒

甘いぞ！　甘いぞ！　甘いぞ！…………

この時廣間には驚愕が起り足摺りが起つて來た。それは召使や調教者も探し始めたからであつた。そして蓋が除かれる前に幕が下ろされた。

六人の英吉利の女「ダンサー」が登場した——それから小馬を連れた男や、犬や猿があらはれた。そしてその様に演技は進行した。

やつと次の朝になつて公衆は不幸が起つた事、テッディーがやもめとなつて世の中に取り殘された事を聞いた。

斯く引用された處によつてこの藝人自身が斯くも適切に、この致命的失錯の深い原因を私共に示すからには、どんなによくこの症候行爲の本態を理解してゐたかと云ふ事が明かである。

第九章　症候行爲と偶然行爲

今迄叙述した行爲――私共が無意識的企圖の實行をそれに於て認めた――は他の企圖された行爲の障礙として起り、且つ拙劣（Ungeschicklichkeit）と云ふ口實の下に隱れてゐたのである。處が此處に述べる偶然行爲は「掴み損ひ」とは異なり、意識的企圖の支持を蔑視し、從つて又口實を必要としないのである。彼等は獨立して現れ且つ許容される。それは私共が彼等に何等の目的も目標もあるとは推測しないからである。私共は彼等を「何の考へもなしに」「純粋に偶然的に」或は「唯手を動かせる爲に」實行するのであつて、從つて私共は斯くの如き報告は、行爲の意義の研究を終結せしむるものと、確信して居るのである。この除外例的の位置を得んが爲に、最早拙劣と云ふ辯僻を要求しない。これらの行爲は一定の條件を滿たさねばならないのである。卽ち彼等は目立たぬものであり、彼等の結果は些細なものでなくてはならないのである。

私はこの樣な偶然行爲の多數を、自分及び他人に就て集め、各例の根本的研究の結果これを寧ろ症候行爲と名づくる方がよいと考へるのである。彼等は行爲者自身が自分等にあるとは考へず、彼が通

常他人に話さずにとつて置かうと考へる或事を現すのである。だからして彼等は今迄觀察した他の凡ての現象と全く同樣に、症候の役目をなすものである。

斯くの如き偶然行爲或は症候行爲の最も豐富なる獲物を、私共は勿論神經官能症者の精神分析療法の際に得るのである。私はこの根源より得たる二例に於て、この限に立たない出來事の限定が無意識的の觀念によつて如何に遠く、又如何に微妙に行はれるかと云ふ事を示す事の喜びを斷念する事が出來ないのである。症候行爲と「摑み損ひ」との限界は非常に不明確である。從つて私は此等の實例を前章に屬せしむる事も出來た譯であつたのである。

(1) 或る若い婦人が診察時間中の「思ひ付」として、彼女がその前日爪を切つてゐて爪床の薄皮を取除かうと骨折つてゐた際に、肉の中に切り込んだと話した。これは私共が一體何故そんな事が記憶され話されたかと不思議に思ひ、結局それが症候行爲であらうと推察する事になる位些細な事である。この小さな不器用の起つたのは實際紅さし指であり、結婚「リング」を嵌める指であつた。尚ほその日は彼女の結婚の日であつたので、この事は薄皮を傷けると云ふ事に容易に察し得る一定の意味を與ふるものであつた。同時に彼女は夫の拙劣な事及び妻としての不感症を暗示するやうな夢を物語つた。それにしても何故彼女が傷けたのは左手の紅さし指であつたらうか、結婚「リング」は右手に

嵌めるものだのに？彼女の夫は法律家「Doktor der Rechte」（文字通りには權利のドクトル）（譯註＝Rechte＝權利、正當、rechte＝右、）である。そして彼女の內心の傾向は少女として醫師「Doktor der Linke」（文字通りには左のドクトル）（諧謔的に）（譯註＝linke＝左）に屬してゐた。身分違ひの結婚（Eine Ehe zur linken Hand）と云ふ事も一定の意義を持つてゐたのである。

(2) 結婚してゐない或る若い婦人は語つた「私は昨日全然故意でなく百「グルデン」紙幣を二つに裂いて、その一半を訪ねて來てゐた婦人に與へたのでしたが、それも矢張り症候行爲と云ふ事になるでせうか？」と。詳細に調べた結果は次の樣な細目が明かにされた。百「グルデン」紙幣――彼女は自分の時と財產の一部を慈善事業に捧げてゐた或る他の婦人と共同で、彼女は孤兒の敎育をやつてゐた。百「グルデン」はかの婦人が彼女に送つて來た寄附金であつた。それを彼女は封筒に封じ込んだ儘差當り自分の机の上に置いたのであつた。

訪問してゐた婦人は立派な貴婦人であつて、この婦人のやつて居る或る他の慈善事業を彼女は補佐して居るのであつた。この貴婦人は援助を乞ふべき人々の名を書き付けようと思つたが、紙を持合せなかつたので患者は机の上の封筒を手にとり、中にあるものの事は考へないで、これを二つに裂き、一方を名簿の寫しとして自分に取つて置き、他の一方を訪問者に渡した。この不都合なる行爲の無害

なる事は明かである。百「グルデン」紙幣は裂かれても、破片を完全につぐ事が出來れば價値を減ぜない事は判り切つた事である。貴婦人がその紙片を捨ててしまふ事がないであらう事は、それに記されてある名の大切な事によつて、保證されてゐた。又その婦人が價値ある內容物を認むれば、早速それを戾して來る事に疑ひの餘地がなかつた。

それにしても忘却によつて可能にされたこの偶然行爲は如何なる無意識的觀念を表現するものであらうか？　訪問してゐた貴婦人は私共の治療に一定の關係を持つてゐた。この病める少女に以前醫師として私を推薦したのは正にこの婦人であつた。從つてたしかに私の患者はこの婦人にこの忠告に對して感謝せねばならぬと考へて居る筈である。半切りにされた百「グルデン」紙幣はこの媒介に對する、謝禮を意味する事になるのであらうか？　それだけではまだ曖昧である。

然しながら此處に他の材料が來り加はるのである。數日前全然別種の媒介者が彼女の親戚の人に向つて、この愉快なる少女（卽ち彼女）が或る紳士と交際する意志があるかどうかと尋ねたのであつた。そしてその朝貴婦人が訪問して來た一二時間前に、求愛者の求愛の手紙が到着して、彼女を非常に愉快にした。さて貴婦人がこの患者の健康狀態を尋ねる事で話を切り出した時に、彼女は次の樣に考へたらしい。「あなたは良い醫師を自分に推薦して下すつたが、若しあなたが良い男（と、そして子供）

を手に入れる事の出來る樣に、お世話して下さるなら、私は尙ほ一層あなたに感謝します」と。この被壓迫的な觀念からして彼女にとつて兩方の媒介者が一つに融合して仕舞つた。そして彼女は彼女の空想が他の人に渡さうと用意してゐた謝禮を、この貴婦人に渡したのであつた。私がその前晩に偶然行爲或は症候行爲に就て、この患者に話したと云ふ事を此處に附け加へるならば、以上の解釋は完全に納得し得るものになるであらう。さすれば彼女は直ぐ次に起つて來た機會を利用して、似よつた行爲を作り出した事になるのである。

斯く非常に屢ゝ起る偶然及び症候行爲の分類はそれが習慣的に、一定の事情の下に於ては規則正しく起るものであるか、或は箇々の場合に起るものであるかによつてなす事が出來るのである。前者（時計の鎖をいぢる事、鬚をひねくる事等のやうな）は、殆どその人の特徵として役立ち得るものであつて、種々のチツク（痙攣）運動に近い關係があり、たしかにこれと關聯させて取扱つてよいのである。第二群には私は「ステツキ」をいぢる事、鉛筆でなぐり書きをする事、ポケツトの中で貨幣をチリンチリンと音をさせる事、揑粉及び他の形を與へ得る材料をこねる事、衣服をいぢる事、及びこれに類する多數の他の行爲を加へようと思ふ。分析療法の間にあらはれる斯くの如き遊戲的作業の背後には、他の表現が禁ぜられて居る意味や意義がいつもかくれて居るのである。通常本人は自分がそ

んな事をやつて居る事を知らずに居り、或は自分のいつもの戯れに一定の變化をして居る事に氣づかずに居る。そして彼は又これらの行爲の結果をも看過し聞きのがすのである。例へば本人は自分が貨幣をチリンチリンと鳴らせた時の音を聞かず、而も私共がその事を彼に注意すると驚いた樣な態を示し、又それを信じない樣な態度をとるものである。同樣に本人が時には氣付かずして、自分の衣類に就て行ふ凡ての事は大切であり、醫師の注意に値する事である。いつもの服裝の各變化、凡ての些細なる遺漏怠慢——例へば釦を嵌めずに置くやうな事——肌ぬぎになる事の一寸した形跡等は、その着物の所有者が直接に云はんとはせず、又全然云ふ事の出來ない事柄をあらはすのである。これらの些細なる偶然行爲の解釋及びこの解釋に對する證據は、私共がこの外觀上の偶然なる事に私共の注意を向ければ、いつも十分なる確實を以て診察時間中にあつた隨伴事情、丁度今取扱つた問題、及び起り來つた「思ひ付」等から生じて來るのである。この關係から私は私の主張を分析例をあげて支持する事は止めようと思ふ。然しながら私はこれらの事が正常人に於ても私の患者に於けると同じ意義を持つ事を信ずるからしてこれを說明したのである。

然しながら私は少なくとも一例に於て習慣的に實行される象徵的行爲が、健康人の生活に於ける最も內密なる事及び重要なる事と非常に密接に關係し得る事を示さずには居られないのである。*

* Jones, Beitrag zur Symbolik im Alltag. (Zentralblatt für Psychoanalyse, I, 3, 1911).

「或る醫師が、彼の新居に家具を列べようとする際、木製の眞直な聽診器にぶつかつた。何處にこれを置かうかと一瞬間考へた後、彼は「テーブル」の上で、脇の方卽ち丁度彼の椅子と患者用の椅子との間に來る樣に置く他ないと思つた。この行爲そのものは二つの理由からして奇妙であつた。第一に彼は元來聽診器を餘り用ひないし（彼は神經病醫である）必要な時には兩耳聽診器を用ひるのであつた。第二に彼れの凡ての醫療用器具及び器械は――唯この聽診器のみを除いて――抽斗になつて居る箱の中に仕舞ひ込まれてあつた。兎も角も彼はこの聽診器に就ては最早考へなかつたが、或日未だ眞直な聽診器を見た事のなかつた婦人患者がそれが何であるかと尋ねたのであつた。彼は彼女にそれを告げた處、彼女は何故それを丁度其處においておくかと尋ねた。それに對して彼は直ちに場所は何處でもよいのであると答へたのであつた。然しながらこれが彼れを喫驚させた。そして、彼はこの行爲に何か無意識的動機があるのではないかと考へ始めた。そして精神分析法に精通して居た彼は、この事を研究しようと決心した。

第一の追想として、彼が醫科大學生であつた頃、病室廻診の際何時も眞直な聽診器を手にして居りながら、決してそれを用ひなかつた或る病院の醫師が自分に印象を與へてゐたと云ふ事實が思ひ泛ん

だ。彼はこの醫師に驚嘆し、非常に彼に私淑してゐた。後に彼が自ら病院勤務を實行するに至つた時、彼は同じ習慣を持つた。そして彼が誤つてこの聽診器を手に振りながら持つ事を忘れて病室を去るやうな事があると、非常に不快に感ずるのが常であつた。この習慣の無益である事は、彼が實際に用ひたのは「ポケツト」に持つてゐた兩耳聽診器だけであつたと云ふ事實だけではなく、この習慣は一切聽診器の要らない外科病室に行つた時にも續けられたと云ふ事實にあらはれてゐた。この觀察の意義は私共がこの象徵的行爲の男根性を指示すれば直ちに明かになるのである。

次の追想として、彼は幼い子供の時眞直な聽診器を帽子の中に入れて歩く、彼の家族のかかり付けの醫師の習慣に驚いた事實を思ひ出した。醫師が往診に行く時、彼の主なる道具を何時も持つて居る事、及び彼れが着物の一部分なる帽子をとつて、それを引き出しさへすればそれでよいと云ふ事を彼は面白いと思つた。彼れは幼い子供としてこの醫師に非常になついてゐた。そして近頃自己分析によつて彼が三歳半の時に妹の出產に關して二重の空想を持つた事を發見した。卽ち妹が第一に自分と母との間の子供であると云ふ事、第二には醫師と自分との間の子であると云ふ事であつた。だからしてこの空想に於て彼は男性及び女性の兩方の役目をしてゐた事になるのである。尙ほ彼は六歳の時、この醫師の診察を受けた事を思ひ出した。そして彼が聽診器を自分の胸に當てて居る醫師の

頭を彼の近くに感じた時の色情的快感を明かに思ひ出し、又醫師の律動的に動く呼吸運動を思ひ出した。三歳の年に彼は胸部の慢性疾患に罹つた。そして度々の診察を受けたに相違なかつたが、それは彼は實際最早思ひ出す事が出來なかつた。

八歳の時に、年上の男の子が彼に告げた言葉、即ち醫師と云ふものは婦人患者と一緒に床に就くのが慣習になつてゐると云ふ言葉は、彼に强い印象を與へたのであつた。この評判には實際一つの根據があつたのであつた。そして兎も角も近所の女共(彼の母をも含んで)は、この若くて美しい醫師に非常に參つてゐたのであつた。被分析者自身は色々の機會に於て、彼の婦人患者に關して性的誘惑を感じた。そして二度婦人患者に惚れ込んだ事があり、終にその中の一人と結婚したのであつた。この醫師との無意識的同一視が、彼をして醫業を擇ばしむるに至つた最も主なる原因であつた事は疑ひの餘地がないのである。他の分析例からしても、この事が確かに最も屢々――何の位屢々であるかは決定し難いが――見る動機である事は推定する事が出來るのである。この場合には二重に條件づけられてゐたのであつた。即ち第一には二三の機會に於て證明し得た事實、即ち醫師が自分の父よりも優れて居ると云ふ事――この父に對してはこの息子は非常なる嫉妬心を保持してゐた――第二には醫師が禁ぜらたる事に對する知識を多く持ち、又性的滿足の機會が多いと云ふ事によつて條件づけられたの

であつた。

ついで明かなる同性愛的被虐待淫亂症的（homosexuell-masochistisch）の夢*——この夢は既に別の處に發表された——があらはれた。この夢では醫師の代理人物なる一人の男がこの夢見る人を劍を以つて襲撃したのであつた。劍は彼に Nibelungen（寶を守護する神仙）傳說中の一つの物語を思ひ起させた。この話ではシーグルドが拔身の劍を自分とブリューンヒルデの間に置いて寢たのであつた。これと同じ話は Arthus（アルッス）傳說（キング・アーサーの傳說——譯者註）にもあり、この男はそれをも詳しく知つてゐたのである。

* „Freuds Theory of Dreams" American Journal of Psychol. April 1910, P. 301, Nr. 7.

其處でこの症候行爲の意味は明かになつたのである。この醫師は彼の眞直な聽診器を、丁度シーグルドが彼の劍を自分と自分が觸れてはならない女との間に置いたと同じ樣に、彼と婦人患者の間に置いたのであつた。この行爲は妥協形成であり、二つの感情に奉仕するものである。即ち魅力のある婦人患者と性的關係を結ばうとの被壓迫的願望を想像の上に於て滿足し、同時に然しながらこの願望が實現されてはならない事を思ひ起させるものであつた。これは謂はば誘惑に陷る事を防ぐ魔術で、私

はこの男の兒に對し Lord Lytton の Richelieu の中にある次の箇所、

,,Beneath the rule of men entirely great.

The pen is mightier than the sword'' *

(全く偉大なる人々の統治下に於ては「ペン」は劍よりも遙かに偉大である)

が大なる印象を與へた事、及び彼が創作力に富んだ著述家となり、異常に大きな萬年筆を用ひてゐた事を附け加へようと思ふ。私が彼に向つて何の爲にそれが必要なのかと訊ねた處、彼は「私には云ひ表はしたい事が非常に澤山あるのです」と答へた。

* Oldham の ,,I wear my pen as others do their sword'' (「私は他の人々が、劍を持つて居るやうにペンを持つ」)と比較せよ。

この分析は無害無意味なる行爲が私共の精神生活への如何に深い洞察を許すものであるか、又私共の生活の如何に早い時期から、既に象徴を以て表現する事の傾向が發達するものであるかと云ふ事を私共に教ふるものである。

私は自分の精神療法上の經驗からして尙ほ一例を述べよう。この例では麪包の心を弄んでゐた手が雄辯なる證言を與へたのであつた。私の患者は約二年來重症「ヒステリー」に罹つてゐた十三歲未滿

の男兒であつて、私は水治療院に於ける永い間の入院治療が無効である事が判つてから、終に精神分析療法に彼を引取つたのであつた。私の推定では、彼は性的經驗を持つたに相違なかつた。そして彼の年柄として性の問題に惱んでゐるにちがひなかつた。然しながら私は彼を說明によつて助けようとはしなかつた。それは私が自分の推定を今一度吟味して見たかつたからであつた。從つて私は如何なる徑路を經て、私の求むるものがあらはれて來るかと云ふことに好奇心を持つた。ところが或日彼が何かを右手の指の間に轉ばして居り、それを「ポケット」の中に入れてその中で更にこれを弄ぶ、又それを「ポケット」から引出したりして居る事が眼についた。私は彼に手に何を持つて居るのかと訊ねなかつた。然しながら彼は急に手を擴げて、それを私に見せた。それは揑ねて一塊にした麪包の心であつた。次の診察時間にも彼は同じやうな團子を持つて來た。然しながら私共が對話をしてゐる間に、彼はそれからして非常な速かさに於て、且つ眼を閉ぢたままで私の興味を呼び起すやうな像をつくつたのであつた。それは確かに頭と二本の腕と二本の脚とを持つた極く粗雜な歷史前の偶像の樣な一寸法師であつた。そして二本の脚の間に長い尖端に引伸ばされた一本の突起を持つてゐた。この突起が出來る出來ないかに彼は一寸法師を丸めてしまつた。その後彼は一寸法師を作つて、その儘に置いたが、同じやうな突起を背中から出し、或は他の場所から出させて最初の突起の意味を隱さうと

した。私は私が彼を理解した通りに彼に說明しようとした。然しながら同時に彼が人形を作つた際には何も考へてゐなかつたと云ふ逃口上を張らせないやうにしたかつた。この目的からして私は急に私が羅馬の王が王子からの使者に庭園に於て身振狂言的の返答を與へた話を知つて居るかと訊ねた。この男兒は私よりも遙かに短年月以前に學んだ筈の事を追想しようと欲しなかつた。彼はそれが滑らかに剃られた奴隷の頭上に答へを書いた話であるかと訊ねた。否、それはギリシヤの話であると私は云ひ且つ次の如く語つた。「Tarquinius（タルクキニウス） Superbus（スーペルブス） 王は彼の王子なる Sextus（セキスツス） を敵なる羅典市に忍び込ませた。この都市に於て地盤を作つた王子は、王の處に使者を遣り今後如何にすべきかと云ふ事を訊ねさせたのであつた。王は答へずして庭園に出で、そこで今一度問ひを反復させた後默して最も大きく且つ美しい罌粟頭を打ち落した。使者はこの事をセキスツスに報告する外なかつた。セキスツスは父の意を察し、市の最も有力なる市民を暗殺によつて除かしめたのであつた。」

私が話して居る間男兒は捏ねる事を續けてゐた。そして私が王が庭園に於て行つた事を物語り「默つて打ち落した」と云ふ言葉の處に達した時彼が、電光石火の如き運動にて一寸法師の頭を切り取つたのを認めた。從つて彼は私を理解し、又彼は私から理解された事を認めたのであつた。そこで私は彼に直接に訊ねる事が出來る樣になり、彼の望む知識を與へ、斯くして比較的短い期間に彼の神經官

能症を治する事が出來た。

患者に於けると同樣に、健康者に無盡藏に認め得る症候行爲は種々の理由からして私共の興味を向けらるる價値がある。醫師に對しては彼等は新しい或は彼に餘りよく判らない關係や狀態を指南し得る爲の價値ある暗示となるものであり、人間を觀察する人々は彼等は屢〻色々の事、時には觀察者が知らうと望まぬ事迄も知らしめるのである。從つてこれをよく利用し得る人は、時に自ら東洋の傳說に動物の言葉さへも理解したと云はれて居るソロモン王の如く感ずるであらう。或日私は一青年を彼の母の家で診察する事になつた。彼が私に向つて步行して來た時、彼の「ズボン」の上に特有なるかたい邊緣によつてそれと判る一つの大きい蛋白質の斑點ある事が私の眼についた。この青年は一寸狼狽した後、彼が咽喉がかすれて居る樣な氣がしたので、生卵を飮みすべつこい卵白が少し着物の上に流れたと云ひ、その證據として室內にある皿の上にあつた卵殼を指示したのであつた。斯くして怪しい斑點は無難に說明された。然しながら母が去つた時に、私は彼が私の診斷を樂にして呉れた事を感謝した。そして直ぐに彼が手淫の苦惱に惱んで居ると云ふ自白を私共の對話の基礎にしたのであつた。

別の時に私は、金持が吝嗇で馬鹿であつて自分の狀態の簡單なる根據に到達する前に澤山なる訴へ

を處理する仕事を醫師に課する婦人患者の處へ往診した。私が入つて行つた時に彼女は小さい「テーブル」の處に坐つて居り、銀貨を小さい積み重ねに積む事に從事してゐた。そして彼女が立ち上がつた時、彼女は銀貨二三箇を床上に落したのであつた。私はこれを拾ふ事を手傳つて遣り、間もなく彼女の不幸に就ての話を遮つて訊ねた。「彼女の上品な婿が一層澤山な金を浪費したか?」と、彼女はつよくこれを否認した。而もその後間もなく彼女の婿の贅澤によつて起された興奮の悲しい話を述べた。然しながら彼女はそれ以來私を招かなくなつた。私は人と云ふものは他の人々——その人々に彼が彼等の症候行爲の意味を告げる——の中に何時も友人を求め得るものとは主張し得ないのである。

ドクトル・ヨツト・エー・ゲー・ファン・エムデン(海牙)は「失錯行爲による自白」の他の例を報告して居る。「伯林の或る小さい料理店に於て「ボーイ」が勘定に際して一定の料理の値段が——戰爭のために——十「フェンニッヒ」だけ高くなつたのだと主張した。何故値段表に示されてゐないのかとの私の言に對して、彼はこれは明かに遺漏の結果に相違なく、確かにさうなつてゐたのであると返答した。全體の金高を「ポケツト」に入れる際に、彼は不器用であつた。そして十「フェンニッヒ」の金を丁度私の爲に、「テーブル」の上に落したのであつた!! 「今私はあなたが私から餘計な勘定をとつた事を確かに知つた。勘定場に行つて訊ねて見てもよいかね?」と私が云つた。

「どうぞ――一寸だけお待ち下さい」と云つて彼は直ぐに行つてしまつた。

勿論私は彼に退却を許した。そして二分間の後「他の料理との間違でしたから、どうぞあしからず」と不可解なる有樣に於て彼が辯解してから、私はその十「フェンニッヒ」を「日常生活の精神病理」への知見補遺の報酬として彼に與へたのであつた。」

人々が食卓に就て居る處を觀察する人は、彼等に於て、立派な有益な症候行爲を確認する事が出來る。

ドクトル・ハンス・ザックスは物語つて居る。私は自然にも私の親戚の老夫婦が夕食をして居る處に列席してゐた。婦人は胃病であつて、嚴格な食養法を守らねばならなかつた。主人に今丁度燒肉が「サーヴ」された。そして彼れはこの食物を一緒に戴く事の出來ない妻に向つて、芥子を出して呉れるやうにと賴んだ。妻は戸棚を開き、手をさし入れ、彼女の主人の前に自分の胃病藥の入つて居る瓶を置いたのであつた。樽形をして居る芥子壺と小さい滴瓶との間には、勿論この失錯を說明し得る何等の類似もなかつた。それにも不拘妻は主人が笑ひながらこれを注意した時に初めて彼女の取り違へた事に氣付いたのであつた。この症候行爲の意味は何等の說明を必要としないのである。

この種の貴重なる實例であつて、觀察者から非常に巧みに利用されて居るものを私はドクトル・ベル

ンハルド・ダットネル（ウィーン）のお蔭でここに擧げよう。

「私は哲學での同僚ドクトルH・と或る「レストラン」で晝食をしてゐた。彼は見習生に對してなされる不正に就て物語り、尙ほ說明として自分が硏究を終らない內に智利の公使、或は寧ろ特命全權公使の祕書官になつてゐた。「然しその後この公使が轉任した。そして新たに任命された公使には自分は會はうとはしなかつた」と云つた。そして彼がこの最後の文章を話した時、彼は一片の「パイ」を口の處に持つて行かうとした時に、彼は不器用の爲であるかの樣にそれをナイフから落したのであつた。私は直ぐにこの症候行爲の隱れたる意味を理解した。そして精神分析には餘り親しんでゐなかつたこの同僚に向ひ、偶然の樣にして「あなたは實際脂の强い一口を落しましたね」と云つた。然しながら彼は私の言葉が彼の症候行爲にも等しく關係して居る事を氣がつかず、妙に愛嬌のいい驚く程の活潑さに於て丁度私の云つた言葉——恰も私が正にその言葉を彼から取りでもしたかの樣に——と同じ言葉を繰返して、「私が落したのはほんたうに脂の强い一口でしたよ」と云つた。それから彼はこの手當のよい地位を彼に失はしむるに至つた拙劣さを詳細に物語る事によつて自らを氣輕にしたのであつた。

この象徵的症候行爲の意味はこの同僚が餘り親しくない私に、彼れの乏しい物質上の境遇について

語る事を躊躇した事、及び彼の被壓迫的觀念が祕しておくべき事を象徴的に表現する症候行爲の假面を被つて現れた事、及び、かくして話した人が無意識界よりの慰藉を得た事を考ふる時に、一層明かになつて來るのである。

外觀上企圖なくして物を取り去り（Wegnehmen）或は持つて行く（Mitnehmen）事が非常に意味深いものであり得る事は次の實例で判るのである。

ドクトル・ベー・ダットネル、「或る同僚が非常に尊敬してゐた青年時代の女友達の處へ、彼が結婚後最初の訪問をした。彼はこの訪問の事を私に語り、彼が極く短時間の訪問に止めようと決心してゐたに不拘、思はずも長居した事に就ての驚きを述べた。尙ほ彼れは其處で起つた奇妙な失錯作業に就て報告した。女友達の夫は對話にまじつてゐたのであつたが、彼は同僚が到着した時には確かに机の上にあつた燐寸箱をさがした。同僚もまた若しや自分が燐寸箱（,sie'）をポケットに入れ（,eingesteckt'）はしなかつたかと思つて探したが無益であつた。しばらく經つてから、彼はそれを（,sie'）自分のポケットの中に發見した。その際唯一本の燐寸がその中に入つてゐた事が彼に氣付いたのであつた。――一、二日の後に彼が見た夢――それは箱の象徴（Schachtelsymbolik）を明かに現した、且つ青年時代のその女友達を取扱つたものであつた――は私の與へた說明を確かなものにした。それは同僚が

彼の症候行爲に依つて、彼の優先權を主張し、彼の獨占權（箱の中に唯一本の燐寸が入つてゐた事）を宣言しようとしてゐたと云ふのであつた。

ドクトル・ハンス・ザックス、「私の家の下女は或る特別の「パイ」を好んで食べてゐた。この事實には何の疑ひもなかつた。何故なればこれが彼女が何時も上手に調理する、唯一の食物であつたから。或る日曜日に彼女はこの「パイ」を私共の處へ持つて來て、それを控卓子の上で「パイ」鍋から取り去り、前の料理に用ひた皿や小刀、肉叉、匙等を取つて今「パイ」を乘せて來た進物盆の上に積み上げ、その上に「パイ」を乘せ、私共にサーヴせずに臺所へ行つてしまつた。私共は最初は彼女が「パイ」に就て何か直す事でもあつての事だと考へた。然しながら彼女がもどつて來なかつたので、私の妻は呼鈴を鳴らして訊ねた『ベッティよ「パイ」はどうなりましたか？』と、それに對して下女は問の意味が判らない風で『何ですか？』と云つた。私共は彼女が「パイ」を臺所へ運び返した事、彼女が皿の積み重ねの上に「パイ」を乘せ「何の氣もつかずに」それを運び去つた事を告げなければならなかつた。――次の日私共がその「パイ」の殘りを食べようとした時に「パイ」は私共が前日に殘しておいたそのままになつてゐた。即ち下女は當然彼女が食していい好きな料理の一部を食べずにゐたのであつた。『何故「パイ」を食べなかつたのか』との問に對し、彼女は多少慌て氣味に『食べたくな

かつたから』と答へた。――兩方の場合共に子供らしい態度が明かに認められた。最初は子供らしい貪慾であつて、自分の欲望の對象を他人にわかつ事を欲せない事、ついでは同じやうに子供らしい反抗の反應、即ち『若しもお前が自分に呉れる事を惜むのなら、それをとつておけばよいのだ。私は要らないから』と云ふのであつた。

結婚生活の事柄に關して起る偶然行爲、症候行爲は、時に最も重大なる意義を持つものであり、無意識の心理に對する關心を持たない人々に對しては緣起（前兆）と云ふものを信ぜしむる樣な事になりさうである。若い婦人が新婚旅行の途上に於て結婚リングを見失ふ事は――たとひリングが置忘れられてゐて間もなく見出されたとしても――決して良い始まりではないのである。――私は今では夫と離婚して居る婦人を知つて居るが、この婦人は彼女の財產管理に際し、その書類に自分の結婚前の姓を以て署名した。而もそれが彼女が離婚して、再び實際にこの結婚前の姓を持つ樣になる數年前に起つたのであつた。――或時私は新婚の夫婦の處へ客人として行つてゐた。そして新妻が笑ひながら彼女の最近の經驗を話して居るのを聞いた。それによると新婚旅行から歸つた次の日、彼女は夫が仕事に行つてゐた間に、彼女の未婚の姉妹を訪ね、一緒に以前の樣に買物に出かけたと云ふのであつた。處が急に彼女に街路の向側に居る一人の男が眼についた。そして彼女は姉妹をつつきながら『御覧なさい、

あそこをL・さんが歩いて行きますよ』と叫んだといふ事であつた。卽ち彼女はこの男が一二週間來自分の夫であつた事を忘れた譯であつた。この話をきいて私は身慄ひした。然しながら私はそれに就ては何の推論をも敢てしなかつた。この短話は何年かを經て後、この結婚が不幸な轉歸を取つた後に私に想ひ出されたのであつた。

メーデル[*]（チューリヒ）によつて佛語で發表された注意に値する業績の中から、私は次の觀察を引用しよう、これは「忘却」の處で述べてもよいものである。

* Alph. Maeder, Contributions à la psychopathologie de la vie quotidienne.（日常生活の病的心理に關する知見補遺）Archives des Psychologie, T. VI, 1906.

「最近私共は一婦人からかう云ふ話を聞いた。彼女は婚禮の晴着を着て見る事を忘れてゐた。そして、それを結婚の前日、而も晩の八時頃最早仕立屋に會ひ得る見込もなくなつてから思ひ出した。と、之はこの花嫁が人妻の着物を着る事に大した幸福を感じてゐなかつた事、從つて彼女はこの辛い役割を演ずる事を忘れようとしてゐた事を證明するに十分である。彼女は今……離婚して居る。」

合圖を觀察する事を學んだ一友人が、私に偉大なる女優エレオノラ・デゥーゼの事を語り、彼女がそ

の役割の一つに於て症候行爲を用ひて居り、この症候行爲は彼女が非常に深い處から彼女のしぐさを持つて來る事を明かに示すものであると云つた。これは姦通劇であつて、彼女は今し方夫と議論をして居り、それから誘惑者が彼女に近づいて來る前に獨白をしながら立ち上がるのであつた。この短時間中彼女は指に嵌めてゐた結婚リングをいぢり、これを引拔き、又これをはめたり拔いたりするのであつた。彼女は今ではその別の男に向つて成熟して居る譯である。

テオドル・ライクが指環に關する他の症候行爲に就て述べて居る事を此處に附け加へよう。『私共は夫婦が結婚「リング」を拔いたり、嵌めたりする際に實行する症候行爲を知つて居る。私の同僚なるM・は似よりの症候行爲を示した。彼は自分の愛して居る少女から指環をおくられたが、その際少女は「この指環を失はないやうにして下さい、若し失ふ樣な事があれば、それであなたが最早や私を愛して呉れてゐない事がわかるのです」と云つた。その後彼は指環を失ひはしないかと云ふ大變な心配を持つた。時々例へば洗面の際彼れは「リング」を拔き取り、それを置き忘れ、再び之を手に入れるのに永くかかつて探さねばならなかつた。彼が手紙を「ポスト」に投げ込む時に彼は「リング」が「ポスト」の緣に引かかつて引拔かれやしないかと云ふ淡い不安を禁じ得なかつた。一度は實際彼が非常に拙いやりかたをしたために「リング」が「ポスト」の中に落ち込んだ。この時彼の發送した

手紙は、以前の愛人への絶縁狀であつた。そして彼はこの愛人に對して惡いと思つてゐたのであつた。同時に彼にはこの婦人に對する憧憬の念が呼びさまされ、これが現在の愛の對象に對する傾向との間に精神軋轢を釀したのであつた。(Internat. Zeitschrift für Psychoanalyse III, 1915.)

指環の題目に於ても私共は精神分析學者には詩人よりも一步先きに踏み出し、彼がまだ知らなかつた事實を見出す事が困難であると云ふ印象を持つのである。フォンターネの小說「嵐の前」の中で法律顧問官なるツルガニーは罰金遊び(譯者註、=遊戲の規則に違反したるものは罰金を拂ひ、後に之を受戾す)の最中に、次の樣に云つて居る「貴婦人達よ、あなた方は自然の最も深い神祕が罰金を出す事に現れるものだとは思はれませんか」と。彼がこの主張を確かめる爲に擧げて居る實例の中で、次の一つは私共の特別の興味を牽く價値があるものである。「私は盛年期にある大學教授夫人の事を思ひ出しました。この夫人は度々結婚リングを罰金として指から外すのです。その家の夫婦生活上の幸運に就てお話しませう。」と彼は云ひ、尙ほ語り續けて「同じ仲間の中に一人の男が居り、その男が英國製の「ナイフ」で十本の刄とコルク拔きと燧鎌のついて居るものをこの夫人の膝の上に度々預け、その爲にこの刄のついた怪物が終に二三枚の絹の着物をやぶつて、全體の人々の怒號の前に消え失せたのでした」と云つた。

指環の樣に豐富なる象徴的意義を有する物體は、それが結婚或は約婚「リング」として色情的結合を名づくる場合でなくても、意味深い失錯行爲に用ひらるる事は不思議のない事である。Dr. M. Kardos は斯くの如き出來事を示す次の例を私に提供して呉れた。

「數年前私よりも遙かに年下の或男が私の仲間になり、私と精神的努力を共にし、私に對しては先生に對する子弟の關係にあつた。私はこの男に一定の機會に指環を贈つた。そしてこの指環は私共二人の間の關係に何か不都合な事が起つた場合には、度々症候行爲、失錯行爲の機會を與へたのであつた。近頃彼は特に見事な透明な次の場合を私に報告した。彼は一週一回の會合――その際に彼はいつも私に會ひ、私に話をする事になつてゐた――に或る若い婦人との間の申合せの方が一層望ましかつたからだと云ふ口實の下に出て來なかつた。翌日午前に、彼は既に、疾くに自分の家を出てしまつた後に指環を嵌めてゐない事に氣がついた。彼れは指輪が毎晩自分が指輪を乘せておく、夜の箱(Nachtkästchen)の上に置き忘れられたのであつて、歸宅すれば其處にあるものと思つたので、それに就て餘り心配しなかつた。彼は家へ歸ると直ぐに指輪を見たがなかつたので、室のなかを搔き探したが無効であつた。終に彼は指輪が一年以上も前から小さい小刀と一緒に夜の箱の上におかれてあつた事が思ひ泛んだ、その小刀は彼が何時も「チョツキ」の衣嚢に入れておくのであつた。そこで彼は「うつ

かりして」小刀と一緒に指輪を「ポケット」に入れたかも知れぬと推察して、それで彼はその「ポケット」を摑んで見た。そして實際其處に探して居た指輪を發見したのであつた。——諺に『結婚「リング」を「チョツキ」の「ポケット」に入れておく』(„Der Ehering in der Westentasche‘) と云ふ事は男子が自分に指輪を與れた女をだまさうと企てる時「リング」を保存する有樣である。だから して彼の罪惡感は先づ、自己懲罰(汝は最早「リング」を嵌めるだけの資格がない)次いでは——勿論證人を持たぬ單なる失錯行爲の形に於て——彼れの不忠實の自白を引起させたのであつた。この失錯行爲の報告——それは勿論豫見し得べきものではあつたが——の廻り道を通つて犯されたる小さな不忠實の自白が起つたのであつた。

私は可なり年とつた一人の男を知つて居るが、この男は非常に若い女と結婚したが、結婚の當夜は旅行に出かけずに大都市の「ホテル」で過さうとした。「ホテル」に着くか着かないかに彼は新婚旅行のために取つておきの全金額の入つた紙入れのない事、即ち何處かに置き忘れ、或は紛失した事を發見して大いに驚いた。やつとの事に召使を電話口に呼ぶ事が出來て、召使は花婿の脫ぎ捨てた上衣の中にこの紛失物を見出し、待ちこがれてゐた人——この人はかくして無財産で結婚生活に入つたのであつた——の處へ屆けて來たのであつた。それで彼は翌朝新妻と旅行に出掛ける事が出來たが、彼

は彼の心配が先見した樣に結婚當夜迄も「無資產」であつたのである。

人々が物を紛失する事（„Verlieren“）は豫想外の大なる範圍に於て、症候行爲と見るべきものであり、從つて少なくとも紛失者の內密なる企圖にとつて好都合なものである事はせめてもの事と考ふべきである。これは紛失された物に對する輕視或はその物、或は人——その人からこの物が由來した——に對する嫌厭の表現に他ならない事がある。或は紛失の傾向は象徵的の觀念結合によつて、他の一層大なる物象からして、この物に轉移されたものである。價値あることを失ふ物は色々の感情の表現に役立つものである。これは壓迫されたる觀念を象徵的に表現する事がある。卽ち私共が聞き逃がしたい警告を反復するものである事がある。或はこれが——就中——曖昧なる運命の力——に犧牲を捧げる事を意味する事がある。この運命の力に對する奉仕は私共に於ても未だ消失してはゐないのである。

物を紛失する事に就てのこの敍述の說明のために一二の實例を此處に擧げよう。

ドクトル・ベー・ダットネル、「一同僚が私に話した處に據ると、彼は既に二年以上も持つてゐてその優秀な特徵を持つて居る點から非常に大切にしてゐた鋼鐵製の鉛筆（Penkalastift）を不意に紛失した。分析はつぎの事情を明らかにした。その前日同僚は彼の義理の兄弟から非常に不愉快な一通の手

紙を受取つたのであつた。その手紙の終りの處に「現在私はお前の輕率を怠惰に於てお前を助ける考へもなく、又時も持たない」と書いてあつた。この手紙に關聯して起つた感情は、非常にはげしいものであつて、次の日早速同僚はこの義兄弟の贈物なる鉛筆を犧牲にしてしまつた。それは彼の恩惠を蒙つてゐないやうにするためであつたと思はれる。

私の知つて居る或る婦人は、彼女の老母の喪中芝居見物をやめてゐた。一年間の喪が數日であけると云ふ時に、彼女は知人の勸めに動かされて、或る特別に面白い芝居の入場劵を買つた。劇場の前に行つた時、彼女は入場劵を紛失した事を發見した。後になつて彼女は電車から降りる際に、入場劵を電車の切符と一緒に捨てた事を思ひ出した。この婦人は不注意から物を失つた事がない事を誇つてゐた人であつた。

だからして彼女が經驗した紛失の今一つの例も善良なる動機の下に起つたものである事を推定してよからう。

或る湯治場に到着して彼女は前に泊つた事のあつた下宿屋を訪ねようと決心した。其處では彼女は舊知として歡迎され宿泊した。そして彼女が支拂をしようとした時、彼女はお客樣だと思つて居ればよかつた事を知つた。その事は彼女には腑に落ちなかつた。彼女は女中にいくらかの金を置いて行つ

て呉れてもよいと云はれた。そして財布を開いて一マルクの銀貨一箇を机の上においた。夕方になつて下宿屋の下男が「テーブル」の下に見付け、女主人が彼女のものであらうと云つたと云ふ五マルクの金を彼女の處に持つて來た。それを彼女は女中への心附を出す時に財布から落したのであつた。多分彼女は勘定を拂ひたかつたのであらう。

オツトー・ランクは長い論文[*]に於て、この行爲の根本になる犧牲心と、その深い動機とを夢の分析の助けによつて明かにした[**]。彼は時によつては紛失ばかりでなく物を發見する事(Finden)も限定されて居ると云ふ事を附け加へて居るが、これは面白い事である。如何なる意味にこれを解釋するかと云ふ事は私がここに引用する、彼の觀察から明かになるであらう。兎も角も紛失と云ふ場合には物は旣にあつたのであるし、發見する場合には物はこれから探さねばならぬと云ふ事は判り切つた事である。

(*) Das Verlieren als Symptomhandlung, Zentralbl. für Psychoanalyse I, 10/11.

(**) 同じ內容の別の發表が Zentralblatt für Psychoanalyse, II, 及び Internat. Zeitschrift für Psychoanalyse, I, 1913 に出て居る。

「物質的に兩親にたよつてゐた若い婦人が、安價な裝身具を買ひたいと思つた。彼女は店で自分に氣

に入りさうなものの値段を尋ねてみた處、彼女の貯金の高よりもその品が高價であつたので、がつかりした。然しながら僅かに二「クローネ」さへあれば、彼はこの小さい喜びを得る事が出來るのであつた。重々しい氣分で彼女は賑かな夕方の街を通つて家路をぶらぶらと歩いた。最も人通りの多い場所に於て、彼女に突然――彼女の云ふ處によると、彼女は深く考へに沈んでゐたとの事であるが――地上にある小さい紙片が、彼女が何の氣もなしにそのそばを通り過ぎた時に眼についた。彼女は向き返つてそれを拾ひ上げて、それがくしやくしやに折り疊まれた二「クローネ」の紙幣である事を認めて驚いた。彼女は考へた。「これは運命が、私がその裝身具を買ふ事が出來るやうに投げて呉れたものであらう」と。そしてこの暗示に從ふべく喜んで後戻りした。然しながら同じ瞬間に彼女はさうしてはならない、何故ならこの見出された金は、幸福の金であつて取つておかねばならぬものだからと獨語を云つたのであつた。

この偶然行爲の理解に必要なる一寸した分析は、本人自身からの報告はなくとも、その當時の事情から推論して差支ないであらう。少女が家に歸る途上持つた考への內で、彼女の貧乏と云ふ事と物質上の制限の考へが先に立つてゐたであらう、殊に私共が推察し得る樣にこの困つた狀態を脫却したいと云ふ願望成就の意味に於て、右の考へが先に立つて居たであらう。どうすれば最も容易にこの足り

ない金高を手に入れる事が出來るかと云ふ考へは、彼女の餘り大きくない希望を滿足したいと云ふ意味に對して手近にあつたであらう。そして彼女に最も簡單なる解決法卽ち拾得(發見)(Finden)と云ふ考へを持たせたであらう。斯くして彼女の注意が他の事に奪はれてゐた。(„in Gedanken versunken")(考へに沈む))ために拾得への考は完全に意識的になつてゐなかつたとしても——彼女の無意識界(或は前意識界)は拾得に向つて集點を定めてゐたであらう。實際私共はこれと似た他の分析を根據として無意識的の搜索準備(„Suchbereitschaft")は意識的に向けられたる注意よりも遙かに、早く成功に導き得る事を主張してよからうと思ふのである。さうでなければ實際何故に數百人の通行人の中で此の一人が——加ふるに不十分なる夜の照明と群集雜鬧の困難なる事情の下に於て、彼女自身にも驚かれたこの發見を爲し得たかと云ふ事は、理解に苦しむ事であるからである。この無意識的或は前意識的準備が、事實非常に盛んに存在した事は、この少女がこの見付け物をした後、卽ち最早準備が不必要となり、確かに意識的注意から遠ざかつた後、歸途郊外の街の暗いさびしい場所に於て、手巾*を拾得したと云ふ奇妙なる事實が之を示して居るのである。

* Internat. Zeitschrift für Psychoanalyse, III, 1915,

私共は斯くの如き症候行爲が正に人間の內密なる精神生活の認識への最上の通路をなすものと云は

なくてならぬのである。

箇々の偶然行爲よりして私は分析をしないでも深い解釋を許し、斯くの如き症候が最も偶然的につくられ得る條件を明かにし、尙ほ實際上重要なる註釋をこれにつけ得る一例を此處に報告しよう。或る夏季休暇の旅行中、私は或る場所で私の伴侶を待たねばならぬ事が起つた。その間私は一人の若い男と知合になつたが、その男も矢張り寂しがつて居る樣に見え、進んで私に接近して來た。私共は同じ「ホテル」に泊つてゐたので、凡ての食事を一緒にとり、又共に散步に出かけると云ふ樣になり勝ちであつた。三日目の午後に、彼は急に今晩自分の妻が急行列車で着く事になつて居ると云つた。私の心理學的興味は活潑になつて來た。何故なれば既にその日の午前、私の仲間が少し遠い處へ遠足に行かうと云ふ私の提議を拒絕した事、及び私共の小さな散步に於て、一定の道路を餘り急な坂になつて居るとか危險だとか云つて步かうとしなかつた事が私に氣づいてゐたからであつた。午後の散步の途上、彼は急に私がお腹が空いたに違ひないが、自分のために夕食を延ばして貰つては氣の毒だ、自分は妻が到着してから、夕食する心算だと云つた。私は彼の暗示を理解して食卓に就き、彼は停車場に行つたのであつた。翌朝私共は「ホテル」の玄關で出逢つた。彼は私を自分の妻に紹介した後附加へて「あなたも御一緒に朝食をなさるでせう？」と云つた。私は次の街に一寸用事があつたので、間も

なく來るからと云つた。私が用事を果して後朝食食堂に入つて行つた時、私は夫婦が小さい窓のそばの食卓に席をとり、その一方に彼等二人が坐してゐたのを見た。向ひ側には唯一脚の椅子があつた。然しながら、その椅子の背にはその男の大きな重い搗晒さない毛織物で作つた外套がかかつてゐて席を覆つてゐた。私は——確かに故意にやつた事ではないが、その代りに一層意味深長な——この外套のおき方の意義をよく理解した。それは「お前の坐る席は此處にはないよ、お前は今ではもう用はないんだ」と云ふ意味であつたのである。その男は私が坐らずに食卓の前に佇立してゐたのを認めなかつた。然しながら、彼の妻はこれを認め、直ぐに彼女の夫をつつき、そして囁いたのであつた。「あなたは、この方のお席をふさげてゐますよ」と。

此結果及び他の類似の結果を見て、私は故意ならずして實行された行爲は、人の交際上、必然誤解のもとになるに違ひないと考へた。行爲者は行爲に關聯して居る企圖を知らず從つてこれを勘定に入れず、行爲に對して責任がないものと考へる。これに反して他の人はいつも相手の斯くの如き行爲をも、その本人の企圖や意向の推論に利用するからして他人の精神現象に於て、本人が自ら承認し且つ話したと信ずるよりも以上の事を認識するものである。本人は然しながらこの症候行爲から引出された結論を持出される場合には——自分には行爲實行の際企圖に對する意識がなかつたのであるから——怒

つてそれが根據のない事であると說明し、他人からの誤解であると訴へるのである。詳細に調べてみると、斯くの如き誤解は餘りに纎細な、又餘りに多過ぎる理解に基くのである。二人が神經質であればある程彼等はお互ひに仲違ひになる發端を與へ易いのであつて、各自がこの仲違ひの論據を自己に關する限り決然として否定し、相手に關する限り確實なものと假定するのである。そしてこの事は多分人間が或る感情を最早自分で支配し得なくなつた場合に、この感情を自ら及び他人に向つて、自白すればよいものを、さうしないで「忘却」「掴み損ひ」「故意でない事」等の口實の下に現す事の不誠實に對する罰である。實際私共は各人が絕えず傍人の精神分析を行つて居り、その結果自己を知る以上に傍人をよく知つて居るものである事を一般的に主張する事が出來るのである。「汝自らを知れ」γνῶθι σεαυτόν と云ふ警告に從ふ爲の道は自己の外見上偶然的なる行爲や怠慢の研究を通つて行くものである。

折々些細なる症候行爲や失錯作業に就て記載し、或は之を用ひて居る凡ての作業中、ストリンドベルヒほどそれの祕密なる性質を明かに認め、その狀態に不氣味なる生氣を與へた人はないのである。この人の斯くの如き認識に關する天才は、勿論深い精神上の異常によつて補助されたのである。Dr.（ドクトル）Karl（カルル）Weiss（ワイス）.（ウィーン）は、彼の著述の中にある次の箇所を指摘して居る。（Internat. Zeitschrift

für Psychoanalyse, I, 1913, S. 268.)

「暫時の後、伯爵は實際にやつて來た。そして彼は徐々にヱステルに近づいた。恰も彼が彼女と密會の約束をしてでもあつたかの樣に。

――「永い間お待ちでしたか。あなたは？」と彼は調子の低い聲できいた。

――「あなたが御存知の樣に六箇月間」とヱステルは答へた、「處であなたは今日何處かで私を御覽になつたでせう？」

――「さうですとも、電車の中で、そして私はあなたの眼を見入つたからあなたと話したも同樣だと信じました。」

――「色々な事が起りましたね！ この前會つた時以來。」

――「さうです、そして私は私共の間柄はもう終つたものと信じました。」

――「それはまた何故ですか？」

――「私があなたから貰つたいろんな小さいものが二つになつてしまつた ――而も幽玄なる有樣に於て。尤もそれは古い觀察だが。」

――「何をおつしやるのでせう！ 今私は自分が偶然だと思つてゐた澤山な場合を思ひ出しました。

或時私は祖母から鼻眼鏡を貰ひました。私共が仲よしであつた頃、それは磨いた水晶から出來てゐて、屍體解剖の際に大變重寶なものであり、實際の傑作品であつたので、私は大事にしておきました。或日私は祖母と仲わるくなり、彼女は私を意地惡くしました。

さうすると、次の解剖の時に別に理由なしに硝子が落ちました。私は單純に二つになつたのだと思ひ修繕にやりました。否、それはたうとう役に立たなくなりましたのです、抽斗に入れておきましたら、何處かへ行つてしまひました。」

——「何ですつて！　眼に關する事が最も鋭敏なのは變ですね。私が友人から雙眼鏡を貰ひました。それは私の眼に大變よく合ひ、それを使用する事は愉快でした。處がその友と私は不和になりました。處がね！　別に明かな原因がないのにさうなりました。唯仲よくしてはならない樣な氣がして來るだけなんです。その次に私が「オペラグラス」を使はうとしました時、私は明瞭に見る事が出來ませんでした。眼鏡の股の處が餘り短くて、像が二つに見えるのです。股のところが短くなつたのでも、私の眼の間の距離が遠くなつたのでもない事は勿論の事なんです！　それはそれは不思議でした。毎日の樣に起り、拙ない、觀察者の氣付かない不思議なんです。さてその說明は？　憎惡心の力は私共が信じて居る以上に大きいものと思はれます。——その外に私があなたから戴いた指

環ですがそれの寶石がなくなりました——そして修繕する事が出來ないんです。あなたは今私と絽緣しようと欲せられるのですか？………(„Die gotischen Zimmer" (ゴチック式の室) S. 258 f.)」

精神分析的觀察は、症候行爲の領域に於ても詩人に優先權を讓らねばならないのであつて、唯詩人が疾くに云つて居る事を繰返し得るに過ぎないのである。Wilhelm(ウイルヘルム) Stross(ストローズ) 君はローレンス・スターの著述に係る、有名なる諷諧小説 „Tristram(トリストラム) Shandy(シャンデイー)" の中にある次の箇所（第五章第六節）を私に注意して吳れた。

そしてナジアンツムのグレゴリウスがジュリアンの速かな不安定な身振りを知覺して、他日彼が變節するであらう事を豫言し——聖アンブロシウスが、彼の書記の頭が連枷(カラボサ)の樣にあちこちと無作法に動くと云つて彼を追拂つた事——或はデモクリツスが、プロタゴラスが粗朶の束を縛る時に最も細い粗朶を中の方においたのを見て、直ぐにプロタゴラスの學者である事を認めた事等は何も不思議のないことである。——私の父は尙も語り續けて「人々に氣のつかぬ無數の穴があつて、これを通して銳い眼は心を見拔く事が出來るものだ」と云ひ、尙ほ彼は附け加へて「私は物の判つた人は彼の帽子を室に入る時に下に置く事が出來ず、或は彼が出て行く時に取り上げる事が出來ない、さうでないと、彼を裏切る何かが思はず飛び出すからである事を主張する」と云つた。

尙ほ此處に健康者及び神經官能症者に見る雜多なる症候行爲の小さい寄せ集めをあげよう。「かるた遊びに於て、負嫌ひな或る老同僚が、或晩可なり大きな負け高を、苦情を云はなかつたが然し一種特有な感情を忍んだ態度で支拂つたのであつた。彼が行つてしまつた跡に、彼の持物を色々殘して行つた事が發見された。即ち眼鏡、煙草入れ及び手巾等であつた。これは多分次の樣な飜譯を要求するものである。「泥坊等よ、汝等は俺のものを捲き上げをつたな」と云ふ意味である。

時折起つて來る陰萎症に惱んでゐた一人の男――その陰萎症は彼の兒童期に於ける母に對する關係が非常に親密であつた事に原因してゐた――は母の名の頭文字なるＳを持つて居る書きものや、圖を以て室內を裝飾する習慣がある事を告げた。彼は家から來る手紙を机上に於て他の神聖でない書類へ接觸せしむるに忍びなかつた。そしてその爲に家から來る手紙を別にして保存する樣に强ひられたのであつた。

或る若い婦人が、自分よりも前に來てゐた婦人がまだゐる治療室の「ドーア」を突然に開いた。彼女は「何の考へもなかつた」と云つて、辯解した。然しながら間もなく彼女が子供の時に兩親の寢室に闖入した際に持つた好奇心を示したものであると云ふ結果があらはれた。

美しい髮の毛に自慢の少女は、櫛や毛ピンを巧みに避けて、對話の最中に髮がほどける樣にする方

法を知つて居る。

二三の男は臥位を取つて治療を受けて居る間に「ズボン」の「ポケット」から小貨幣を撒き散し、かくして彼等の評價に應じて治療時間中の仕事に對して謝禮をする。

醫師の處へ行く時の持物、例へば鼻眼鏡、手袋、手提袋等を置忘れる人は、その醫師と絶縁し得ず、又來たいと云ふ考へのあることを示すのである。イー・ジョーンズは「醫師は一箇月間に彼が集め得る遺失品、例へば洋傘、手巾、錢入等の數の多さによつて、彼が精神療法の實施にどの位成功して居るかと云ふ事を大體はかる事が出來る」と云つて居る。

極く些細な習慣的の仕事、而も極小の注意を以て行はれる事例へば就寢前に時計を卷く事、室を去る前に消燈する事等が折々妨げられ、これに依つて非常に強い力を持つて居ると稱せらるる「習慣」に對する無意識的凝結觀念の影響が明かに示される事がある。メーデルは „Coenobium“ と云ふ雜誌に、或る病院の醫師の事を述べて居る。この醫師は或晩勤務があつて、病院をあけてはならない事になつてゐたに不拘、或る重要なる用件の爲に町に出かける事にした。彼が歸つて來た時、自分の室に燈がついてゐたのを見て驚いた。彼は外出の際に室を暗くする事を忘れたのであつて、こんな事は彼には今迄にない事であつた。然しながら、彼は間もなくこの忘却の動機を思ひついた。病院内の家に

住んで居る院長は醫員室に燈がついて居る事からして、醫員が院內に居る事を察せねばならなかつた事は勿論である。

心配が多過ぎて時々憂鬱に陷る事のある男が、私に向つて「前晩に生活が苦しくて生きて居る事がいやになつた樣な時には、何時も翌朝時計が止まつて居るのを見る」と告げた。即ち彼は時計を卷く事を怠る事によつて、次の日を經驗する事が彼に大した問題にならないと云ふ事を現して居る譯である。

私自ら知つてゐない他の或人が、私に手紙で以て次の樣に云つて寄越した。「困難なる運命に際會して私は生きて居るのがいやになつた。そして次の日を過すだけの氣力もないと想像した。そしてその時、私は殆ど每日以前には決して忘れず就床前に殆ど機械的にやつてゐた時計を卷く事を忘れるのを認めた。唯稀に私が翌月に何か大切な事、或は私の興味を縛する樣な事を企てて居る時ばかりは、私は時計を卷く事を思ひ出した。これは矢張り症候行爲でせうか？ 私はこの事を全然說明する事が出來なかつた」と。

ユング（「早發性癡呆症の心理に就て」一九〇七年、六二頁） メーデル（「心理學への新しき道――フロイドとその學派 ,,Coenobium(チエノビウム)“ Lugano(ルガノ) 一九〇九年）の樣に、人が企圖せず、又時には氣が

附かずに口を閉ぢてゐて歌ふ「メロディー」に注意するだけの勞を辭せない人は、その「メロディー」の本文と、その人の取扱つて居る題目との關係を多分いつも發見し得るであらう。

談話や書き物に於ける觀念表現の微妙なる限定に對しても細心なる注意を拂ふ價値がある。私共は一般に如何なる言葉を以て私共が自分の考へを裝ひ、或は如何なる像を以て私共が自分の考へを扮装させるかと云ふ選擇をなすものと信じて居る樣である。然しながら仔細に觀察して見ると他の顧慮がこの選擇を決定する事、及び觀念の形で以て一層深く且つ時には企圖されない意味がほの見えて來る事を示すのである。或人が好んで用ひる像や話し振りはその人を判斷する事に向つて無關係ではないのであり、又他の像や話し振りは屢〻話す人を力強く摑んでは居るが、而もその時には背景に保たれて居る或る題目への諷刺である事が判るのである。私は或人が或時學問上の話に於て繰返し „Wenn einem plötzlich etwas durch den Kopf schieszt"（「或人に急に何かの考へが起つて來る場合には」）と云ふ話風を用ひて居るのを聞いた事がある。然しながら、私は彼が最近彼の息子の一人が被つてゐた兜を露軍の彈丸によつて前から後ろへ射貫かれたと云ふ報知を受けた事を知つてゐた。（譯者註＝射る＝schieszen）

第十章　思ひ違ひ

記憶の誤謬（die Irrtümer des Gedächtnisses）は、誤れる追想を伴ふ忘却（das Vergessen mit Fehlerinnern）とは一つの點に於て區別される。それは誤謬（誤れる追想）が、そのものとして認められず、信念を見出す點である。然しながら思ひ違ひ（Irrtum）なる語の使用は、尙ほ一つの他の條件に關聯するやうに思はれるのである。再生される心的材料に於て、客觀的實在の特徵が强調される場合、卽ち私共自己の精神生活の事實以外の或物が、記憶され、或は寧ろ他人の記憶に依つて確かめられ、或は論駁される或る何かが、追想（記憶）される場合には、私共は「誤り追想（記憶）する」（„falsch Erinnern" とは云はないで「思ひ違へる」（„Irren"）と稱するのである。この意味に於ける「記憶の誤謬（誤り）」の相反は、不知（無識）（Unwissenheit）である。

私の「夢判斷」*（一九〇〇年）なる書に於て、私は歷史的材料及び事實上の材料に於ける一定數の誤謬をやつたのであつて、これに對しては私はこの書が出版された後に氣付いて驚いたのであつた。詳細に吟味して見た結果、私はそれが私の不知から出たのではなくて、分析によつて明かにし得る記

憶の誤謬に歸すべきものである事を發見した。

* 第七版一九二二年

(1) 第一版、二百六十六頁に於て、私はシルレルの誕生地としてマールブルヒ市を名づけた。その名はシュタイエルマルク(墺太利の一州)にあらはれて居る。この「思ひ違ひ」は、夜の旅行中に見た夢の分析の中にあるのであつて、私は車掌の呼んで居る市名「マールブルヒ」によつてこの夢から呼びさまされたのであつた。夢の內容に於てはシルレルの或る書物の事が訊ねられて居る。さてシルレルはマールブルヒと云ふ學都で生れたのではなくて、シュワーベンのマルバツハに生れたのであつた。私は尙ほこの事は何時でもよく知つてゐた事を主張するものである。

(2) 百三十五頁にハンニバル(Hannibal)の父が、ハスドルーバル(Hasdrubal)と名づけられて居る。この誤謬は私には特に苛立たせるものであつたが、然し又斯くの如き「思ひ違ひ」の解釋に於て私の信念を最もつよくかためさせたのであつた。この書物の讀者の中には「バルカス」家の歷史に於て、著者以上に通曉して居る人は少ないであらう。而も著者はこの「誤り」を書き下ろし、三度の校正に際してこれを見落したのであつた。——ハンニバルの父はハミルカール・バルカス(Hamilkar Bar-kas)と云ふのである。——ハスドルーバルはハンニバルの兄弟の名であり、尙ほ彼の義兄弟及

びその先祖の名であつた。

(3) 百七十七頁及び三百七十頁に、私はツオイスが彼の父なるクロノスを去勢し、これを王位より突落したと主張して居る。この殘虐なる行爲を、私は誤つて一代だけ遲らせたのであつた。ギリシヤの神話は、この殘虐行爲をクロノスをしてその父なるウラノスに對して犯させて居るのである。*

* これは全然の誤りではない! この神話のオルフオイスの飜譯は息子なるツオイスによるクロノスの去勢を繰返させて居る。Roscher(ロッシェル)の神話辭典(Lexikon der Mythologie)

さて私の記憶――この書の讀者が確信し得る樣に、平生私の記憶は隨分かけ離れた、又不用な材料を私に供給するのに――が、これらの點において誤りを起させたのどう説明すべきであらうか? 尙ほ又私が注意して行なつた三回の校正に際して盲人の樣にこれらの誤りを看過したのはどう云ふ事であらうか? ゲーテはリヒテンベルクの事を次の樣に云つて居る。「彼が洒落を云ふ處には一つの問題が隱れて居る」と。同じやうな事を私は私の著書の上に掲げた箇所に就て主張する事が出來る。卽ち「誤謬のある處には壓迫(Verdrängung)が背後にかくれて居る。より正しく云へば、被壓迫的の事象に根柢をおいて居る不正確や歪みが隱れて居る」と。あの書物に發表した私の夢の分析の際に、私は夢想が關係して居る問題の性質上、一面に於ては分析を完成させないで途中の何處かで中斷し、

他面に於ては輕度の變形（歪み）によつて不謹愼な細目からその鋭さを奪ふ樣に强ひられた。私は外に仕樣もなかつたし又實例や說明を提供しようとしても他に選擇の仕樣がなかつたのであつた。私のこの困つた立場は、被壓迫的事象、即ち意識され得ない事象に表現の機會を與へる夢と云ふものの特徵上必然起つて來るものである。それにも不拘敏感な心を苛立たせる材料が十分に殘つてゐたものと思はれる。私自身の今尙ほ知つて居り、且つ引續き存在して居る觀念を變形させたり、或は祕して云はずにおくと云ふ事は痕跡も殘らないやうに成就されるものではないのである。私が抑壓しようと欲した事は屢〻私の意志に逆らつて、私が取り上げたものの中に侵入して來て、私に氣のつかない「思ひ違ひ」としてあらはれたのである。但し上揭の三つの實例に於ては同じ題目が根本になつて居るのであつて「思ひ違ひ」は死んだ私の父に關する被壓迫的觀念の製產物である。

(a) 二百六十六頁に分析されて居る夢を讀過する人は、私が父に對する都合の惡い批評を含むやうな考への處で、中斷してある事を一部分は露骨に知る事が出來、一部分は諷刺より推測する事が出來るであらう。さて觀念及び追想のこの方向に於ける續きの處に不快な話があり、この話に於ては書物及びマールブルヒと云ふ私の父の商賣上の友人が一定の役割を演じて居るのであつた。このマールブルヒと云ふのは、南方鐵道の一停車場であつて、その名を呼ぶ聲で私が眼をさました處と同じ名であ

る。このマールブルヒなる男を、私は分析に際して私及び讀者に對して揉み消さうと欲したのであつた。處がその復讐として、彼は自分の屬しない場所に干渉し、シルレルの誕生地の名（マールバツハ）をマールブルヒに變化させたのであつた。

(b) ハスドルーバルをハミルカールの代り、卽ち兄弟の名を父の名の代りにした「思ひ違ひ」は、私の中學校時代に持つたハンニバル空想及び「我が國民の敵」に對する父の態度への不滿を論ずる關係に於て起つたのである。私は私の父に對する關係が、英國への旅行に依つて如何に變化したかと云ふ事を語り續ける事が出來た譯であつたが、それをしなかつたのであつた。この英國行は、父の前の結婚生活から出來——英國に住んでゐた異腹の兄と私とを知り合ひにした。この兄は私と同年の長男を持つてゐた。從つて私が父の子でなくて、この兄の子供として生れてゐたらどうなつてゐたらうかと云ふ空想を持つ事に何のさはりもなかつた事であつた。この抑壓されたる空想は、私が分析を中斷した箇所に於て、兄弟の名を以て父の名に更へさせ、私の著書の「テキスト」を誤らしめたのであつた。

(c) この同じ兄についての追想の影響で、私はギリシヤの神代に於ける神話的殘虐行爲を一代だけずらせたのであつた。この兄が、私に與へた訓戒の內の一つは永い間私の記憶に殘つて居る。「お前の生活をやつて行く上に於て、お前が父の二代目でなくて元來三代目に屬すると云ふ一事を忘れるな」

と彼は云つたのであつた。私共の父は後年に於て再婚した。その爲に第二の結婚生活から出來た子供よりも非常に年老いてゐたのであつた。私は私の書に於ける上述の「思ひ違ひ」を親子の間の敬虔を論ずる箇所に於て爲したのであつた。

私の友人や患者――その人達の夢を私が報告し、或は夢の分析に於てその人達の事を諷刺した――が、私とその人達とが一緒に經驗した出來事の狀況が、私によつて不正確に物語られて居ると云つて注意をして來た事が一二度あつた、さてこれは矢張り歷史的の誤謬である。私は箇々の場合を訂正した後に再吟味した。そして事實に關する私の記憶は、矢張り私が分析に於て或事を故意に變形させ、或は祕した處に於てのみ不正確であつた事を確かめたのであつた。即ち此處にも故意の隱し立て、或は壓迫に對する代償としての氣づかぬ誤謬がある譯である。

壓迫現象より發するこれらの「思ひ違ひ」と、實際の不知に基く誤謬とははつきり區別される。例へば私は Wachau へ遠足した時に、革命者フィツシュホーフの滯在地を通過したものと信じたのは、不知の爲であつたのである。兩方の場所は唯共通の名を特つて居るだけである。フィツシュホーフのエンメルスドルフはケルンテン（墺國の州名）にあるのである。私はそれ以上は何も知らなかつたのである。

(4) 今一つの恥しいが然し爲になる「思ひ違ひ」の例をあげよう。これは謂はば一時的無知の實例である。或る患者が或日ヴェニスに關する二冊の約束の書物を持つて行き度いと云つた。この書物で彼は復活祭旅行の準備をしようと欲したのであつた。私は用意して置いたと答へそれを取りに書齋に行つた。實際は私はそれを探しておく事を忘れてゐたのであつた。何故かと云ふと、私は治療には不必要なる中絶となり醫師に對しては物質上の損害を釀すこの患者の旅行には實際贊成してゐなかつたからである。よつて私は書齋に於て、私が注目してゐた兩方の書物を急いで見廻した。「美術都市としての「ヴェニス」と云ふのが一冊の方であつた。然しながらその外に私は類似の叢書中の一冊で歴史を書いたものを持つて居るに違ひないと思つた。確かに其處に „Die Mediceer" (メヂシー家の人人」(譯者註＝「メヂシー」家は伊國フローレンスの名家である)と云ふ書があつた。私はそれを取り、待つて居る人の處に持つて來た。而も恥らひながら自分の「思ひ違ひ」を自白せねばならなかつた。私は實際メヂシー家がヴェニスと無關係である事は知つてゐた。然しながら暫くの間は全然それが間違つてゐないやうに思はれたのであつた。さて私は正義を實行せねばならない。私は患者に對して屢々彼の症候行爲を指摘したのであつたから、私は彼に對する權威を失はないやうにする爲には、正直になつて彼の旅行を好まないと云ふかくれたる動機を發表する事が必要であつた。

人間が眞實を語らうとする衝動は、人が通常自分について考へて居るよりも遙かに强いものであると云ふ事は一般の人を驚かせるであらう。但し私が最早噓を吐く事が出來ないのは、多分私が精神分析をやつて居るからであらうと思ふ。私が誤魔化しをしようとすると、何時も私は「思ひ違ひ」或は他の失錯作業に陷り、それによつてこの例及び前にあげた實例に於ける樣に、私の不正直が暴露されるのである。

「思ひ違ひ」の機制は凡ての失錯作業の內で最も表面的のものであるやうである。卽ち「思ひ違ひ」の發生は、一般に當該精神活動が或る邪魔をする影響と戰はねばならぬ事を示すのである。而も「思ひ違ひ」の種類は隱れてゐて、且つ邪魔をする觀念の性狀によつて限定されるものではない樣である。然しながら「話し損ひ」や「書き損ひ」の單純なる例の多數に於ても、同じ狀態を假定すべきものである事を附け加へておかう。私共が「話し損ひ」或は「書き損ひ」をやる場合には、私共は何時でも私共の企圖以外に存する精神機轉に依る障礙がある事を推論してよいのである。然しながら「話し損ひ」や「書き損ひ」は、類似、便宜、或は促進への傾向等の法則に從ふ事がある事を認めねばならない。而も邪魔をする要素が、自己の特徵の痕跡を「話し損ひ」や「書き損ひ」の際に出來る「誤り」の中に殘す事は許されるとは限らないのである。言語材料の方よりの迎合があつて、初めて「誤り」の限定

が可能にされるものであり、又この限定に限界が與へられるのである。

私自身の「考へ違ひ」ばかりを掲げないで、此處に尙ほ一二の例を述べようと思ふ。勿論これらの實例は「話し損ひ」や「摑み損ひ」の處に掲げてもよかつたものである。然しながらこれらの失錯作業の凡ての種類は、同じ價値を有するものであるから、そんな事はどうでもよい事である。

(5) 私は或る患者に對して、彼が絕緣しようと目論んで居る愛人に電話をかける事を禁じた。それは話をすれば、彼の絕緣に就ての葛藤を再燃せしめるからであつた。彼は最後の考へを、彼女に手紙で——手紙を彼女に手渡しする事は困難ではあつたが——書いてやる事になつた。さて彼は午後一時に私を訪ねて來て、彼がこの困難を避ける一つの方法を見出したと云ひ、なほ就中彼が私の醫師としての權威を引合ひに出してもよいかと訊ねた。二時頃彼は絕緣狀の作成に從事してゐたが、急にやめて其處にゐた母に向ひ、「私は患者にこの手紙の中に、彼の名を記してよいかどうかと云ふ事をきく事を忘れました」と云つた。彼は急いで電話口に出て行き、電話をつないで貰つて『モシモシ、お食事のあとで「プロフェッソール」にお話してもよいでせうか?』と訊ねたのであつた。さうすると「アドルフさん、あなた氣でも違つたんぢやないんですか?」と云ふ驚きの答へが而も、私の命令によつて最早聽いてはならぬ筈の聲で、彼の耳に響いて來たのであつた。彼はただ「間違つた」のであつ

た。そして醫師の家の電話番號の代りに愛人のそれを云つたわけであつた。

(6) 若い女がハブスブルゲル狹路に住んで居る最近結婚した友を訪問する事になつてゐた。彼女は食卓についてゐてその事を話してゐたが、間違つて「バーベンベルゲル狹路に行かねばならぬ」と云つてゐた。食卓についてゐた他の人々は笑ひながら、彼女の氣のつかなかつた「誤り」――「話し損ひ」と云ひたければ云つてもよい――を指摘した。その二日前にウィーンでは共和國の宣言が布告され、黑――黃の墺國の旗の色はなくなり昔のオストアルク（譯者註＝獨逸東部邊境の國）の旗の色、即ち赤――白――赤に變り、ハブスブルヒ家（譯者註＝墺匃國王朝の人々）は除かれてしまつた。話した人はこの置き換を友人の「アドレス」に於て行つた事であつた。因みにウィーンには有名なるバーベンベルゲル街（Strasze）はあるがウィーンの人でこれを狹路（Gasse）と云ふ人はない筈であつた。

(7) 或る暑中休暇中、貧乏だか然し立派な一青年學校教師は、大都市から來てゐた別莊の持主の娘に求愛した結果、娘は終に彼を熱愛する樣になり、地位や人種の相違があつたに不拘結婚を是認して貰ふ樣に彼女の家庭の人々を動かしたのであつた。然しながら或日、この教師は自分の兄弟に一通の手紙を書いて「娘つ子は決して美人ではないが非常に可愛ゆく、その點はいいのです。然しながら私が猶太人の女と結婚する決心がつくかどうかは未だわかりません」と云つてやつた。この手紙が愛人の手に入

り、彼女は――彼の兄弟が同時に自分に持ち出された愛の宣誓に吃驚させられてゐた間に――婚約を止めさせてしまつたのであつた。私にこの事を報告した人は、此處に「間違ひ」があつたのであつて其處に何等狡猾なる「トリツク」はなかつた事を證言した。私は一婦人が彼女のかかつてゐた某老醫に不滿を持ち、而も明らさまに彼を斷る事が出來ないで、手紙の取り違へによつて、この目的を達した他の一例を知つて居る。然しながら少なくともこの場合には「誤り」が原因になつたのであつて、意識的詭計が例の喜劇的動機を用ひたものでない事を確言する事が出來る。

(8) ブリルは一婦人の事を報告して居る。この婦人は彼に或る共通の知人の健康狀態を訊ねた。その際彼女は誤つてこの婦人をその人の處女名（結婚前）の姓で呼んだのであつた。注意されて彼女はこの婦人の夫が嫌ひであり、從つてこの婦人の結婚に非常に不滿であつた事を自白せねばならなかつた。

(9) 此處に「話し損ひ」として記述してもよい「思ひ違ひ」の一例がある。或る若い父親が、彼の次女の出產屆をしに戶籍吏の處に行つた。子供の名は何と云ふかと訊ねられて、彼は「ハンナです」と答へたが、吏員から「あなたにはその名のお子さんが既に一人おありですね」と云はれた。私共はこの次女は以前長女が生れた時程歡迎されてゐなかつた事を推論するであらう。

(10) 私は此處に「名の取違へ」の他の一二の觀察を附け加へよう。これは勿論本書の他の章に入れてもよいものである。

一婦人は三人の娘の母であつて、娘の内二人は既に嫁いでゐて、最も若い娘はまだ彼女の運命を待つてゐた。懇意にして居る某婦人は、今迄の二度の結婚に際し同じ贈物をして來た。それは高價な銀製茶器であつた。處でこの道具の話になると、母はいつも間違へて第三女をそれの所有者として名づけるのであつた。この「誤り」は末の娘も結婚させたいと云ふ希望を現す事は明かである。彼女はその際娘が同じ結婚の贈物を貰ふ事を前提して居るのである。

母が娘、息子或は婿の名を取り違へる場合も同じやうに容易に説明する事が出來る。

(11) 頑固な「名の取違ひ」の立派な實例であり、容易に理解し得るものを私はヨット・ゲー君が居る病院に入院中の自己觀察から取らう。

「療養所の共同食卓で、私は餘り面白くもなく又全然世間竝の話に於て、私と同じ食卓で隣りに坐る女に特に愛想のよい言葉を用ひた。いくらか年とつて居るこの娘は、彼女に對してこの樣に愛想よく親切である事が、私の平常の狀態でないと云ふ事を認めずには居られなかつた——それに對する返答は私等二人共が知つて居り、私がいつも一層大きい注意を拂つて居る、或る令孃に對する多少の同

情及びそれよりも寧ろ明かな諷刺を含むものであつた。私は勿論直ぐにそれを理解した。私共のその後の對話の經過中に於て、私は隣りに坐つて居るその女から、私が彼女にかの令孃の名でもつて話しかけた事を注意されて非常に苦痛であつた。彼女はこの令孃を自分よりもより幸福な競爭者と見做した事に無理はなかつた。

(12) 私は重大なる背景を有する出來事であり、この出來事に近い關係を持つてゐた證人が私に報告して呉れたものを「思ひ違ひ」としてここに述べよう。一婦人は彼女の夫と一緒に二人の他の男と伴れ立つて一夕を戶外に過した。この二人の他人の內の一人は、彼女の非常に親密な友であつたがその事に就ては他の人々は全然知らず、又知つてはならなかつたのであつた。友人等は夫妻に伴つて「ドーア」の前迄行つた。「ドーア」の開くのを待つて居る間に別れが告げられた。婦人は他人にお辭儀をし握手して、一言二言お世辭を云つた。ついで彼女は祕密の愛人の腕を摑み、彼女の夫の方を向き、彼に同じやうに告別しようとした。夫はこの狀態に同意し、帽子を取つて非常に鄭重に「奥樣、手に接吻して下さい」と云つた。吃驚した婦人は愛人の腕を放した。そして門番が出て來る迄の間、暫し嘆息した。そして云つた。「いゝえ、どう致しまして！　そんな事をしてよいものですか？」と。この夫は妻の不義を凡ての可能性の埒外に移さうとする種類の亭主に屬してゐた。彼は度々「若しそんな事が

あつた場合には、一つ以上の命があぶないんだ」と誓つた事があつた。即ち彼はこの「誤り」に含まれてゐた挑戰を認むる爲の、最も強い內的阻止を持つてゐたのであつた。

(13) 私の患者の一人の「思ひ違ひ」は、反對の意味への反復によつて特に有益なものになる。非常に神經質な或る若い男が、永い間の內的葛藤の後に、永い以前から彼を愛してゐた――丁度彼が彼女を愛してゐたのと同樣に――娘と結婚の口約束をした。彼はこの許婚の女を彼女の家に送つて行き、彼女と別れ、非常に幸福な氣分で電車に乘り、女車掌から――二枚の乘車劵を買つたのであつた。約半年の後には彼は旣に結婚してゐた。然しながら未だ伉儷の樂を實際に見出す事が出來なかつた。彼は結婚したのが良い事であつたかどうかと疑ひ、以前の樣な親密な關係はなくなり、舅姑についてあらゆる事を非難したのであつた。或晚彼は若い妻を彼女の兩親の家から連れ出して、市街電車に乘つて、そして女車掌からただ一枚の乘車劵を求める事に滿足した。

(14) いやいやながら抑壓してゐる願望を「誤り」によつて滿足し得る事の立派な實例をメーデルが報告してゐる。一同僚が休日を邪魔されないで樂しみたいものと考へた。然しながら彼はルツェルンに於て一箇所訪問せねばならぬ處があつた。この訪問を彼は好まなかつた。永い間考へた末、彼はそれでもルツェルンに行くことに決心した。彼は樂しみにチューリヒ――アルト――ゴルダウ間の汽車

旅行の間新聞を讀み、そこで乘換へて又新聞を讀み續けた。旅行を續けて居る間に監督車掌は彼が間違つた列車に乘つて居る事、即ちルツェルン迄の切符を買つておきながらゴルダウから、チューリヒに歸つて行く汽車に乘つてゐた事を發見した。(Nouvelles contributions etc., Arch. de Psych. VI, 1908.)

(15) これと類似して壓迫された願望を「間違ひ」の同じ機制によつて現さうとした試み――それは完全に成功しなかつたが――をドクトル・フォン・タウスクが「誤れる旅行の方向」なる題下に報告して居る。

「私は休暇を得て戰地からウィーンに歸つて來た。ある老患者は私がウィーンに居る事を知つて自分が臥床して居るので往診をしてくれと乞うた。私はその請に應じ、彼の處で二時間を過した。辭去するに際し、彼は「いくらお拂ひしませうか?」と訊ねた。私は「今は休暇で歸つてゐて醫業をやつて居りません」「だから私の訪問を好意上の事と思つていらつしやい」と答へた。患者は職業上の仕事を無報酬の好意として要求する權利がないと思つたので躊躇した。然しながら終に彼は私が精神分析醫であるから、確かに正しい行動をとるのであると云ふ敬意を拂つた考へ方――この考へ方は金がかからずに濟む事の喜びから限定されて居る――から私の答を承諾したのであつた。――私自身には

既に數瞬間の後に私のこの貴族風が正しいかどうかと云ふ懸念が起つて來た。そして――殆ど解決を許さなかつた兩義的の疑ひに滿たされて、私は電車線Xの電車に乘つたのであつた。少し行つてから私はY線に乘換へるべき筈であつた。乘換場所に待つてゐた間、私は報酬の事は忘れて了ひ、患者の病的症狀の事を考へてゐた。間もなく私の待つてゐた電車が來て私は乘つたのであつた。然しながら次の停留所で私は再び降車せねばならなかつた。卽ち私は誤つてY電車に乘る代りにX電車に乘つてゐて、丁度今來た方向卽ち私が謝禮金を取らうとしなかつた患者の家の方向へ走つてゐたのであつた。私の無意識界は謝禮金を取つて來ようと欲したのであつた。」(Internat. Zeitschrift für Psychoanalyse, IV 1916/17.)

(16) 實例(14)と非常によく似た曲藝が私自身にも一度成功した。私は自分の嚴格なる長兄に、この夏英國の海水浴場に於て疾くに期限を過ごした訪問をする事を約した。そして時が迫つてゐたので何處にも泊らずに最短の道を通つて旅行して行く事を誓つた。私は和蘭に寄るために、一日の延期を兄に乞うたが、彼はそれは歸途の事にしてもよからうと云つたのであつた。依つて私はミュンヘンからケルンを經て和蘭の沙嘴なるロッテルダムに向ひ、汽車に乘つて行つた。そこから汽船が夜中にハペウツチに向つて渡航するのであつた。ケルンに於て私は乘換へる譯であつた。私は汽車から降りてロッ

テルダム行の急行列車に乘換へようとした。然しながら其の列車は發見されなかつた。私は色々の鐵道從業員に訊ね、あちらの「プラットホーム」こちらの「プラットホーム」へとやられ、非常な絕望に陷つた。そして私がこの無益な探索をやつて居る内に、連絡列車に遲れたのであらうと云ふ事を斷定する事が出來た。この事が確かめられた後に私はケルンに一泊しようかと考へた。さう考へさする事には特に敬神の念も手傳つてゐた。何故なら私の家の古い傳說によると、私の先祖は嘗て猶太人迫害の際にこの都市から逃れたと云ふ事であつたからである。然しながら私は別な風に決定し、後の列車でロッテルダムに向つて行き、其處へは深夜に到着した。そして一日を和蘭で過すやうに餘儀なくされた。この日は私に永い間抱かれた希望を滿足させて吳れた。私は海牙及びアムステルダム國立博物館に於けるレンブランの繪畫を見る事が出來た。やつと翌日午前になり、私が英國に於ける汽車旅行の最中に、私の印象を集める事が出來る樣になつた時に、私に疑ひのない記憶が浮んで來た。それは私がケルンの停車場で列車から降りた場所の數步前方の處卽ち同じ「プラットホーム」に Rotterdam——Hook of Holland（ロッテルダム——和蘭の沙嘴）と書いた看板を見たと云ふ記憶であつた。其處に列車が待つてゐて、それに乘れば私は旅行を續ける事が出來た筈であつた。若し人々が兄の指圖に反してレンブランの繪畫を往路に於て觀賞したいと云ふ事が、私の企圖であつたと云ふ事を假定しな

いならば、私がこの明かなる指導があつたに拘らず、他の場所へ急いで行つて列車を探した事を、理解し難い眩惑と名づけたでもあらう。私の巧みに演じた困惑、ケルンに一泊しようとする敬神的企圖の思ひ泛んだ事などは、私の企圖が完全に遂行される迄それをかくす爲の準備であつたのである。

(17) 裏面上捨ててしまつた願望を滿足するために「健忘性」によつてなされる準備の同樣なる例をヨツト・シユテルケが自分自身の事から報告してゐる。

「私はある時ある村落で、寫眞を見せての講演をする事になつた。この講演は一週間だけ延期された。私はこの延期に關する手紙に返書を出し、變つた日附を手帳に書きつけたのであつた。私は既に午後にもこの村に行き、其處に住んで居る知合の著述家を訪問したかつたが、殘念ながら當時私はその爲に午後の時間をあける事が出來なかつた。殘念ながら私はこの訪問を思ひ止まつたのであつた。

講演のある夕方が近づいた時、私は幻燈の畫の一杯入つて居る袋を持つて停車場に急いだ。私は列車に間に合せる爲に「タクシー」を賴まねばならなかつた（私には列車に間に合ふ樣に「タクシー」を賴まねばならぬ位ぐづぐづして居る事が度々ある）。その場所に到着した時に、停車場には——小さい場所での講演の際には驛に出迎へに來る事が例になつて居るのだが——私を案內して吳れる何人もゐなかつたのは少々驚いた。急に講演が一週間延期になつた事、從つて私が今最初に定められてゐた

れを發送する事を忘れた。終に彼はそれを發送したが、手紙は不能配達信書取扱所から彼に返されて來た。それは彼が「アドレス」を書かなかつたからであつた。二度目に彼は「アドレス」を書いて發送したが、手紙は再び返されて來た——今度は「スタンプ」が貼られずに。この手紙を發送する事に對する無意識的嫌厭の感があつた事を彼は最早見のがす事が出來なかつた。

(4) Dr.（ドクトル） Karl（カルル） Weisz.（ワイス）（ウィーン）の短篇の報告は内的抵抗に抗して一定の行爲を實行しようとする努力の無効である事を非常に印象深く記述して居る。

「無意識界が或る企圖を實行せしめないでおかうとの動機を持つ場合には、如何に頑強にその目的を達し得るか、又この無意識界の傾向を防ぐ事がどんなに困難であるかと云ふ事は、次の出來事によつて說明されるであらう。一知人が私に一冊の書物を貸してくれと云ひ、次の日にそれを持つて來てくれと乞うた。私は直ぐにその約束をした。然し私はその時には說明し難い、明かなる不快感を經驗した。そして後になつてそれが私に明瞭になつたのであつた。その人は年來私から一定額の借金をしてゐた。而もそれを支拂ふと云ふ事は彼は考へてゐない樣に見えた。私はその事に就てはそれ以上考へなかつたが、翌朝同じ樣な不快感と共にこの事を想ひ出した。そして直ぐに自らに云つた。「お前の無意識界は書物を忘れさせるかも知れないが、お前は不親切な事をせず、從つて忘れない樣に努力せ

第十一章　複合失錯作業

前章に述べた「誤り」の二例、即ち「メヂシー」家を「ヴェニス」に持つて行つた事の「思ひ違ひ」及び愛人との電話による對話によつて禁止を出し拔いた若い男の「思ひ違ひ」の例は、元來不精密に敍述されたのであつて、これを注意して觀察するならば、忘却と「思ひ違ひ」の合體したものとしてあらはす事が出來るのである。同じ樣な合體を私は他の一二の實例に於ても示す事が出來る。

(1)　或る友人が私に次の經驗を物語つた。「數年前私は或る文藝協會の委員に選ばれる事に同意した。それはこの團體が何時かは私の「ドラマ」を上演する事に於て私を援助するかも知れぬと思つたからであつた。そして餘り興味もなかつたが規則正しく每金曜日の會合に出席してゐた。さて數月前私の「ドラマ」の一つがFに於ける劇場に於て上演されると云ふ保證を得た。そしてそれ以來私がいつもかの協會の會合を忘れると云ふ事が起つて來た。私が彼等の「プログラム」豫告を讀んだ時、私は自分の忘却を恥ぢ、私が彼等を必要としなくなつた今日缺席する事は卑しい事だと自ら責め、次の金曜日には決して忘れない樣にしようと決心した。私はこの企圖を繰返して思ひ出し、終にこれを實行し

會議室の「ドーア」の前に立つた。驚いた事には「ドーア」は閉ぢられてをり、會合は既に過ぎてしまつてゐた。卽ち私は日を間違へたのであつた。その日は土曜日であつた。

(2) 次の實例は症候行爲と「置き忘れ」との複合である。これは廻り路を經て私の手に入つたものであるが、然し確かな源から得られるものである。

一婦人が彼女の義兄弟——有名な美術家——と一緒に羅馬へ旅行した。この訪問者は羅馬在住の獨逸人から高い榮譽を與へられ、尙ほ就中古代の金「メダル」を贈られた。婦人は義兄弟がこの立派な贈物を高く評價し得ない事を悲しんだ。彼女が家に歸つて來た後に、彼女は荷物を解いてゐて——どうしてだか判らないで——自分が「メダル」を家に持つて歸つて來た事を發見した。彼女は直ぐに手紙でこの事を義兄弟に知らせてやり、「メダル」を次の日に羅馬へ送り返すと云つてやつた。然しながら「メダル」は非常に巧みに置き忘れられて見出す事が出來ず、又送り返す事も出來なかつた。其處で、この婦人に彼女の「ぼんやり」が何を意味するかと云ふ事がかすかに判つて來た。卽ち彼女がこの「メダル」を取つておきたかつたのであると云ふ事である。

(3) 此處に失錯行爲が頑强に繰返され、而も同時にその行爲の樣式の變化する一二の實例がある。ジョーンズ(前揭書、四百八十三頁)は不明の動機から或る手紙を數日間机上に殘して置き、每回そ

日時に於て、無益な旅行をして來た事が私に思ひついた。私が自分の健忘性を心からのろつた後、私は次の列車で家に歸るべきかどうかと考へた。よくよく考へた際、私は今こそ希望してゐた訪問をする絶好の機會であると考へ、實際に又訪問をしたのであつた。途中に於て、私は初めてこの訪問のための適當な時間を得たいと云ふ滿たされざりし欲望が、陰謀を立派に用意してゐた事に思ひついた。重い袋（幻燈の畫の一杯入つた）を引摺つて行つた事、及び汽車に間に合ふ樣に急いで行つた事は、無意識的企圖を一層巧みにかくす事に見事に役立つた事になるのであつた。」

人々は、私が此處に說明した一群の「誤り」を非常に多數に起るものであり、又特に意義深いものであるとは思はないであらう。然しながら私共は同じ觀點を日常生活並びに科學にたづさはる人々が示す遙かに重要なる判斷錯誤の判斷にも押し擴むべき理由を持つのではないかと考へるのである。最も精選され、最もよく均衡のとれた精神にして初めて外界の現實の知覺像を歪み――この歪みは知覺者の心的個人性を通過する際に知覺像が受けるものである――より保護し得る樣に思はれるのである。

よ」と。私は家に歸り、書物を紙に包み、それを私が手紙を書く間机の上で私の傍においた。暫くして私は出かけた。數歩あるいた後、私は郵便箱に入れるために持つて行かうと欲した手紙を机上に殘した事を思ひ出した。（序に云つて置くが、その內一本の手紙は、私に或事をやる樣に勸めてゐた人に宛てたものであり、その手紙には私は少々不快な事を書かねばならなかつた。）私は後戻りして手紙を取り、再び出かけた。電車の中で私は、自分の妻の爲に買物をする約束をした事を思ひついた。そして私はそれが小さい包みにしかならない事を喜んだ。ここで急に包——書物なる聯想が起つて來た。そして今私は書物を手にしてゐない事に氣がついたのであつた。卽ち私は最初出かけた時ばかりでなく、私が手紙を取りに行つた時にも矢張り忘れたのであつて、而もその手紙のそばに書物が置いてあつたのであつた。

(5) 詳細に分析されたオツトー・ランクの觀察にも同樣の事が見られる。

「非常に几帳面な、そして緻密過ぎる癖のある男が、彼には全然常ならざる次の經驗を報告して居る。或日の午後、彼が街路上に於て時間を見ようとした時、彼は時計を家に置き忘れて來た事を認めた。こんな事は彼の記憶して居る處では今迄一度も起つた事はなかつた。彼はその晩方時間を定めての約束があり、その前に時計を取つて來る時間がなかつたので、親しい婦人を訪ねて時計をその晩

だけ借る事にした。彼はその以前からの約束で、その翌日午前にこの婦人を訪問する事になつてゐたから、この事は非常に好都合であつた。彼はその時に時計を返却する事を約した。然しながら、その翌日彼が借りた時計をその所有主に渡さうと思つた時、彼はそれを家に置き忘れて來た事がわかつて驚いた。この際には彼は自分の時計を「ポケツト」に入れてあつた。彼はそこで婦人の時計を午後に返却する事を堅く決心し、叉その計畫を實行したのであつた。然しながら彼が辭去するに際し、時を見ようとした處、自分の時計を忘れてゐて、非常に怒り且つ驚いたのであつた。この失錯作業の反復は、平生非常に几帳面なこの男には非常に病的なことに思はれた。從つて彼はその心理學的動機を知りたいと云ひ、早速彼が最初忘却した日に何か不快な經驗があつたかどうか、叉如何なる關係に於てそのことが起つたかと云ふ精神分析の問題を課する事によつて判つて來た。彼はその問に對して、直ちにその日彼が外出し、時計を忘れた少し前に晝食後母と話をし、母が今迄彼に色々の心配をかけ、金錢上の犧牲を拂はせた輕率な或る親類の男が時計を入質した事、そしてその時計は家で用ひるものだから質受けする金をくれと願つて居ると云ふ事を話した事を物語つた。この殆ど强制的に金を出させられる事は、彼に非常に氣に觸つた。そしてこの親類の男が多年來彼に與へた凡ての不快なる出來事を再び記憶に持ち出させたのであつた。だから彼の症候行爲は何處にも限定されて居る事が判つた

のである。第一にこの症候行爲は「俺はそんな風に、金をねだり取られたくはない。そして時計が必要なら俺の家に置いておかう」と云ふ意味の考へ方を現すものである。然しながら彼自身晩方の會合の爲に、時計が必要であつたから、この企圖は單に無意識的道程に於て、症候行爲の形に於てのみ實行され得たのであつた。第二にこの忘却は、次の意味を持つのである。「このやくざ人間の爲に、何時迄も續く金錢上の犧牲は、自分を全然破產させ、自分は凡てのものを與へてしまはねばならなくなる」と云ふ事である。さてこの話に就ての怒りは、彼の云ふ處によれば、瞬間的のものであつたと云ふ事であるが、この症候行爲が反復された事はこの怒りが無意識界に於て強く働き續け、恰も意識が「この話は私の頭腦から去らない」と云ひ現す場合に等しいものであつた事を示すのである。假りに婦人の時計が、後に同じ運命に逢着した事は無意識界のこの態度から見れば何の不思議もない事である。」*

* 無意識界に於けるこの連續は或は、失錯行爲に續發する夢の形に於て現れ、又、或は失錯行爲の反復若くは訂正の不履行にあらはれる。

「然しながら特殊の動機が多分「この罪なき」婦人の時計への轉移を促したものと思はれる。手近にある動機は、彼がこの時計を、犧牲にされる自分の時計の代りに持つてゐたいと云ふ事であつて、

その爲に彼は翌朝時計を返す事を忘れたものであらう。尙ほ彼は時計を婦人の記念物として持つてゐたかつたのであらう。尙ほ又婦人の時計を忘れる事は、尊敬して居る婦人を今一度訪問する機會を彼に與ふるものである。彼は、勿論翌日彼女を別の用事で訪問する事になつてゐた。そして時計を忘れると云ふ事は、この旣に前からきまり切つてゐた訪問を、時計を返却するついでに用ひる事は、彼に勿體なく思はれたにとをしめすやうに思はれるのである。また自分の時計を二度忘れて婦人の時計を代りに用ふる事が出來る樣になつた事は、この男が兩方の時計を同時に持つ事を避けようとして居る事を示すのである。明かに彼は——親類の男の貧乏な有樣との間に著しい對照を示す事になる——有り餘つて居ると云ふ事の外觀を避けようと努めてゐたのである。一方に於て彼は、この事を彼が、この婦人と結婚したいと云ふ明かなる企圖に對し、自分が家庭（母）に對して大きな義務を負つて居ると云ふ自戒として利用したのである。婦人の時計を忘れた事の今一つの理由は、彼が前晩獨身者として女の時計を持つて居る事を恥ぢ、こつそりと時計を見た事、及びこのいやな狀態を繰返す事を避ける爲に、彼がこの時計を持つて居る事が出來なかつたと云ふ事實に求むべきである。然しながら、彼は、時計を返さねばならなかつたのであるから、この場合にも無意識的に實行された症候行爲が起つたのであつて、これは互ひに鬪ふ感情の間の妥協形成であり、又無意識的動因の高價に買はれた勝利

である。」(Zentralblatt f. Psychoanalyse, II, 5.)

ヨツト・シュテルケの三つの觀察を此處に掲げよう。

(6) 壓迫されたる反對意志の表現としての——「置き忘れ」——「破壞」——「忘却」(Verlegen—Zerbrechen——Vergessen)「或る科學的研究の說明圖を集めたものの中から、私は一二の圖を弟に貸さねばならぬ事になつた。それを弟は或る講演に用ひようと欲したのであつた。私は一瞬間自分が非常に苦心して集めたものの複寫を自分に先立つて弟に供覽させ、發表させたくないと思つたが、それでもその望まれた陰畫を探し出し、それの幻燈の畫を作つてやる事を約した。——處が陰畫は見出されなかつた。この問題に關した陰畫を貯藏してあつた箱の中を私は見通し、二百枚位の陰畫を一々手に取つて見た。然しながら私の探す陰畫は其處にはなかつた。私は元から兄弟にこれらの畫を與へる事を好んでゐない事を察した。私がこの好意のない考へが自分にある事を意識し、これを責めた後に私は貯藏の一番上の箱を傍に置いた儘それをよく見通せなかつた事に氣がついた。そしてこの箱の中には正に探してゐた陰畫が入つてゐたのであつた。この箱の盖にはその內容に關する簡單な說明があり、私は多分それをこの箱の傍に置く迄に一寸見たに違ひないのであつた。好意のない考へ方はそれでもまだ全くは征服されなかつたらしい。何故なれば幻燈の畫が發送される迄に色々の事が起つたか

らである。幻燈の畫の硝子面を綺麗に磨いてゐた時に、私は一枚の畫を抑へて壞したのであつた――私は平生こんな風に幻燈の畫板を壞した事はなかつた――この硝子板を更に新しく作つた時、それが手から落ちた。そして私が足を前に突出してそれをとらへた爲に板は壞れなかつたのであつた。私が繪を表裝してゐた時、全部のものが今一度床上に落ちた。幸に何れも壞れなかつた。そして最後に私がそれを荷造して發送する迄に尙ほ二三日の間があつた。それは私が毎日さうしようと企てながら、その企圖を忘れたからであつた。

(7) 『反復されたる忘却』――『最後の實行の際に於ける「摑み損ひ」』「或日私は一知人に葉書を出さねばならなかつた。而もそれを二三日も繰返し遷延した。その際私は次の事が原因であらうと云ふ強い想像を持つた。一通の手紙で彼は私にその週の内に或人が私を訪問したいと云つて居る事を報じて來た。私はその訪問を熱望してゐなかつた。その週が過ぎてしまつて、好ましからぬ訪問のある見込が非常に少なくなつた時に、私は終に葉書を書き、何時話をする事になるかを知らせてやつた。私がこの葉書を書いた時、私は最初間斷なき骨の折れる、或は數多つかへてゐた仕事 (*druk werk*) の爲に手紙を書くことが出來なかつた事を書き添へようと思つた。然しながら私は終にそれを書かなかつた。それはかう云ふ月並の云ひ草は、理性のある人からは決して信ぜられないからであつた。この

つまらぬ嘘がそれでも現れなくてはならなかつたのかどうかは、私は知らない。然しながら私が葉書を郵便箱に投込んだ時に、私は誤つて箱の下の方の穴——印刷物を投込む穴（,*drukwerk*'＝Drucksachen（印刷物））——に投込んだのであつた。」

(8)「忘却」と「思ひ違ひ」「或る少女が或朝非常に天氣がよかつたので、石膏模型の繪をかくために「リクス」博物館（,Ryksmuseum'）に出かけた。この様な好晴の日には寧ろ散歩に行きたいと彼女は思つたのであつたが、それでも彼女は精を出し繪をかかうと決心した。彼女は先づ畫用紙を買はねばならなかつた。彼女は博物館から歩いて十分位の處にある店に行き、鉛筆やその他の繪道具を買つた。然し畫用紙を買ふ事を忘れて博物館に行つた。そして彼女が椅子に腰かけて、いざ始めようと用意した時に、紙を持つてゐなかつたので更に店に行かねばならなかつた。彼女は紙を持つて來た後、實際に繪をかき始め、仕事は大いに進んだ。そして暫くして博物館の塔から澤山な數の鐘の音が鳴るのを聽いた。彼女は「もう十二時だらう」と考へ、なほ鐘が十五分を報ずる迄仕事を續け、十二時十五分過であると考へ、繪道具をつつみ「フォンデル公園」（,Vondelpark'）を通過して彼女の姉妹の家に散歩して行き、其處で「コーヒー」を飲まう（＝和蘭に於ける第二食事）と決心した。「スアッソー博物館（,Suasso-Museum'）の傍を通る時、彼女は十二時半ではなくて、やつと十二時であるのを見て驚いた

のであつた！——誘惑する様な好天氣は、彼女の勤勉を欺き、その爲彼女は塔の鐘が十一時半に十二を打つた時に塔の鐘が半の時にも鳴る事を考へなかつたのであつた。」

(9) 前揭の觀察の一二のものが、既に示して居る樣に、無意識的なる邪魔をする傾向は同種類の失錯作業を頑固に繰返させる事に依つて目的を達し得る事を示して居る。私は此處に向つて「フランク・ウェデキンドと劇場」と云ふミュンヘンの「ドライ・マスケン」書肆から出て居る小さな書物から面白い例を引用しよう。然しながら「マーク・ツウェイン式（Mark Twain は滑稽小說家である——譯者）の中に物語られてゐる話に對する責任は、この書物の著者に委せなければならない。

「ウェデキンドの一幕物 ‚Die Zensur‘（「檢閱」）の中に於て最も重大なる箇所に次の言葉がある。『死に對する恐怖は「考へ違ひ」である。』(‚Die Furcht vor dem Tode ist ein Denkfehler.‘) この箇所が氣に懸つてゐた著者は、試演の際に俳優に向つて Denkfehler と云ふ字の前の處で短時間の間を置いてくれと乞うた。上演の晩に俳優は彼の役を進めて行き、實際又「間」を正しくおいたが、故意ならずして勿體振つた語調で「死に對する恐怖は Druckfehler（誤植）である。」と云つた。幕が閉ぢた後、著者は俳優に向ひ、彼には非難の打ちどころはなかつた。唯例の場所は「死に對する恐怖は——Druckfehler である」と云ふのではなくて Denkfehler であると確かめた。「檢閱」が翌晩も繰返さ

れた時、俳優は意識的の箇所に於て、再び儀式張つた聲で「死に對する恐怖は——‚Denkzettel‘（覺え書）である」と云つた。ウェデキンドは再び俳優を非常に稱賛し、ただ序に「Furcht……Denkzettelでなく Denkfehler である」と注意した。——その次の晩「檢閱」が演ぜられ、著者と懇意になり、藝術に關する意見の交換をやつたその俳優は、例の箇所になつた時に非常に勿體ぶつた顏付をして「死に對する恐怖は——Druckzettelである」と云つた。——俳優は著者の無條件なる稱賛を得たのであつた。この一幕物は尙ほ屢〻繰返された。然しながら著者は、‚Denkfehler‘なる概念は何時でも駄目なものと考へた。」

ランクは又失錯行爲と夢との非常に面白い關係に注意を拂つた。（Zentralbl. f. Psychoanalyse II. S. 266 u. Internat. Zeitschr. f. Psychoanalyse III, S. 158）然しながらこの關係は失錯行爲に續發する夢の詳細なる分析なしには辿る事が出來ないのである。私は或時自分が財布を紛失した夢を長〻しく見た。朝になつて着物を着る時、私は實際財布がないのに氣がついた。私は夢を見た夜、寢る前に財布を「ポケツト」から出して、いつもおく場所に置いたのを忘れたのであつた。從つてこの忘却は私には不可知のものではなかつたのである。これは多分夢の內容に現れようとしてゐた無意識的觀念をあらはすものであつたのである。[*]

*「紛失」「置き忘れ」等の失錯作業が夢――この夢において本人は紛失物の所在を知る――に依つて取消される事は、そんなに稀な事ではないのであり、而も夢みる人と紛失者とが同一人である限り、これは何等神祕的の事ではないのである。或る若い婦人は次の樣な手紙を寄越した「約四箇月前私は――銀行で――非常に美しい指環を紛失しました。私は自分の部屋の隅々を探し拔きましたが、それが見つかりませんでした。一週間前に私はその指環が煖房室の箱の傍にあると云ふ夢を見ました。この夢は勿論私を寢させて吳れませんでした。そして次の朝私は實際その場所に指環を發見しました。」彼女はこの出來事に驚歎し、彼女の思考や希望がこの樣にして滿足される事が時にあると主張した。然しながら彼女は指環を紛失した時からその再發見迄の間に於て、彼女の生活に如何なる變化が起つたかと云ふ事を硏究する事を等閑に附して居るのである。

私は斯くの如き複合失錯作業が、私共が前に箇々の場合に於て見なかつた新事實を私共に敎ふるものであると主張しようとは思はない。然しながら失錯作業が同じ結果を保ちながらその形態を色々に變化する事は、一定の目標に向つて努力して居る意志に成形的作用ある事の印象を私共に與ふるものであり、從つて失錯作業が偶然的のものであり說明を必要としないものであると云ふ考へ方に對して一層強く反對するものである。又これらの實例に於ては、意識的企圖は失錯作業の成功を阻止する事に全然失敗するものであると云ふ事實も私共に眼に立つ事である。私の友人は文藝協會の會合に出席

する事を成就しなかつた。又婦人は「メダル」を手放す事が不可能である事を見出したのであつた。これらの企圖に反對して作用したる、かの不明なる或るものは、彼に第一の道が塞がるや別の出口を見出したのであつた。この不明の動機に打克つ爲には、即ち意識的の反對企圖以外の他のものが必要である。それは不明なるものを意識に知らしめる様にする心的作業を必要としたのである。

第十二章　定命論——偶然の信念と迷信——觀點

前記の箇々の解說の一般的の結論として、私共は次の認識を主張する事が出來るのである。卽ち私共の心的作業の一定の不十分なる事（Unzulänglichkeit）——それの共通なる特徵に就ては、直ぐに詳細に定めようと思ふが——及び何等企圖のないやうに見える一定の實行は、私共が精神分析學的研究を之れに應用するならば、明かに動機があり、而も意識には知られてゐない動機によつて限定されるものである事が判るのである。

斯く說明すべき現象の部類に加へられる爲には、心的失錯作業は次の條件を滿足せねばならないのである。

(a)この失錯作業は私共の評價によつて定められ「正常の範圍以内にある」と云ふ言葉によつて名づけられる一定の度を超えてはならない。

(b)これは瞬間的及び一時的の障礙であると云ふ特徵を具備してゐなければならない。私共はこの同じ作業を以前には一層正しく實行したのであり、或はこれを正しく實行し得る事をいつも信ずるもの

でなければならない。私共が他人から訂正される場合には、その訂正の正しき事、及び私共自身の心的機轉の正しくない事を直ちに認識しなければならない。

(c)私共が一體失錯作業を知覺する場合には、私共はその失錯作業の動機に就ては私共の心の内に何物をも感知してはならないのであつて、これを不注意によつて起る事と說明し、或は偶然の事と主張する樣に誘惑されなければならない。

斯くしてこの群には「忘却」の諸例、よく知つてゐながらの「思ひ違ひ」「話し損ひ」「讀み損ひ」「書き損ひ」「摑み損ひ」及び所謂偶然行爲等が現存する事になるのである。

これらの語が Ver なる接頭語(前綴)を持つて居り、同じ樣な構成を有する事はこれら現象の大多數が內的に同じ種類のものである事を言葉の上に於て示すものと云ふべきである。然しながら斯く定められた心的過程の說明には、一部分非常なる興味を喚起するであらう多數の觀察が結び付いて來るのである。

(A)私共は心的作業の一部を目的觀念によつて說明し得ないものとして抛棄し、以て私共の精神生活に於ける限定(Determinierung)の範圍を無視するのである。處で限定はこの場合——及び他の領域

に於ては尙更ら——私共の想像以上に達するものである。私は一九〇〇年に雜誌 Zeit 所載、文學史家マイエル（R. M. Meyer）の論說に於て、故意に又隨意に無意味なる事（Unsinn）は構想する事不可能であると論じ、又實例に就て說明されて居るのを見た。多年來私は私共が或る數を勝手氣儘に思ひ泛べる事は不可能の事であり「名」もまた同樣である事を知つて居る。私共が外見上隨意につくられた多位の——而も冗談に或は大陽氣の狀態に於て話された——數を硏究して見ると、私共が實際可能であるとは考へなかつた樣な嚴格なる限定がそこに存する事が判つて來るのである。私は此處に人工的に選ばれた個人名（姓の反對）の例を簡單に說明し、ついで考へなしに云はれた或る數の例を詳細に分析しよう。

(1) 私の患者の一人の病歷を發表する準備中、私は何と云ふ名を論文に於て彼女に與ふべきかを考へた。選擇の範圍は非常に大きいやうに見えた、確かに一二の名は初めより除外された。第一に實際の名、それから私の家族の人達の名——それに於て私は不快を感ずるであらう——及び特に珍しい發音を持つて居る他の婦人名等である。それにしても私は名を見つけるに困らない筈である。私が多數の女性名を自由に用ひ得る事は人々の期待する處であらうし、私自身もまた期待するのである。然るに唯一つが思ひ泛び、その外には泛ばないのであつた、それはドーラ（Dora）と云ふ名であつた。

私はその限定を調べてみた、誰がその外にドーラと云ふのであらうか？　次に起つて來た觀念を私は信じないでこれを斥けようと欲した、それは私の姉妹の保姆が、ドーラと云ふ名の女であると云ふ事であつた。然しながら私は分析に於ける自己訓練或は練習を大いにやつてゐたので思ひ付を把持し、更に益々これを紡いで行つた。處が私に直ぐに前晩の出來事が思ひ泛びそれが求むる限定を私に提供したのであつた。私は私の姉妹の家の食堂の「テーブル」の上に「ローザ・ヴェー孃（Fräulein Rosa W.）」と表書した手紙を見た。驚いて私はこれが何人であるかと訊ね、ドーラだと思つてゐた人は元來ローザ（Rosa）と云ふのだが、ローザと云ふ名は私の姉妹に關係するからと云ふので、この彼女の名はこの家に住込む時に捨てねばならなかつた事を敎へられた。私は氣の毒になつて云つた「氣の毒な人だ。彼等は自分の名さへも保持する事が出來ないんだ！」と。私は今この事をきいた時に、私が暫時靜かに色々な眞面目な事を考へ始めた事を思ひ出した、そしてその考へはその時には不明瞭なる事の中へ進入して行つたのであつたが、今では容易に意識し得る事であつた。斯くしてその翌日私が自身の名を保持してはならない婦人の爲に名を求めた時に、私にはドーラ以外のものは思ひ付かなかつたのであつた。この場合に於ける獨占は堅い內的聯想に基いてゐた。何故なれば私の婦人患者の病歷に於て、治療の經過に向つて決定的なる影響が餘所の家に奉公して居る家庭女敎師から來て居たからである。

この小さな出來事は數年後思はぬ繼續を見出したのであつた。私が或時今ドーラと名をつけた少女の疾くに發表された病歴を私の講義に於て話した際、私の二人の婦人聽講者の一人が、色々の關係に於て何度も學ばなければならなかつたドーラと同じ名の所有者である事が私に思ひついた。そして私はこの若い婦人同僚――その人を私は個人的にも知つてゐた――に、彼女が矢張りドーラと云ふ名の人である事を實際に考へなかつたと云ふ事、及び講義に出て來る名を他の名に取り換へようと云つてゐびたのであつた。私は早速他の名を選ぶ事に着手した。そしてその際他の婦人聽講者の個人名を用ひる様な事があつてはならない事、そしてそんな事をして既に精神分析學を學んで居る同僚に惡い例を與へてはならないと考へた。こんな譯で私はドーラの代りにヱルナ（Erna）と云ふ名を思ひつき、それを講義に用ひて非常に滿足したのであつた。講義の後に私は何處からヱルナと云ふ名が來たであらうかと云ふ事を考へてゐた、そして私の心配した事が代りの名を選擇するに際して、少なくとも一部分實現されてゐたのを認めた時失笑を禁じ得なかつた。別の婦人の家族名はルツェルナ（Lucerna）と云ふのであつた、Erna はその一部分である。

(2) 或る友人への手紙に於て、私は「夢判斷」の校正を終つた事を報じ「その中に2467の誤謬があつたとしても、最早この著述の何處をも變へようとは思はない」と云つて遣つたのであつた。私はこ

の數字を說明しようと試み、短い分析を「追伸」として手紙に書き添へておいたのであつた。私はこの處置を取つた當時書いた儘を此處に引用するのが最もよいと思ふ。

「尙ほ私は日常生活の精神病理への一知見補遺を急いで此處に書き添へよう。あなたはこの手紙の中に「夢の書」の中にあるかも知れない誤謬のおどけ交りの勝手な見積りの數として 2467 なる數字を見出されるであらう。これは『どんなに澤山な「誤り」があらうとも』と云ふ意味である、そしてその時にこの數字があらはれて來たのであつた。さて精神現象には勝手な而も定限なきものは何もないのである、だから多分あなたも無意識界がこの數を定限しようと急ぎ、意識界からこれが解放されたものである事を期待されるであらう、今しがた私は新聞紙上に E. M. 將軍が步兵大將（墺國の）として退職した事を讀んだ。私がこの人について興味を持つた事をお話しよう。私が軍醫生として勤務して居た頃、當時陸軍大佐であつた彼が、或る時病院に入院して來た。そして醫師に向つて云つた「あなたは私を八日間によくして吳れなければならない、私は皇帝が待つて居られる仕事をせねばならぬから」と。當時私はこの人の經歷を追つて行かうと企てた。そして今や（1899年）彼はその經歷の終りなる步兵大將となり、旣に退職したのである。私は彼が何年間にこの道程をたどつたかを計算しようと思ひ、私が 1882 年に彼を病院に於て見たものと假定した。さうすれば 17 年と云ふ事になる譯で

ある。私はこの事を妻に話し妻は「さうすればあなたも既に退職して居らねばならぬ譯でせうか？」と云ひ、私はそれに反對して「とんでもない事だ」と云つたのであつた。この對話の後に私はあなたに手紙を書く爲に机に着いたのであつた。然しながら以前の考へが續いて行つたのに不思議はなかつた。計算は間違つて居た、私はそれに對して確かな點を記憶に持つてゐた。私の成年即ち私の二十四回目の誕生日を私は軍隊の禁錮に於て祝つた——私が許可なくして休んだ爲に——それは1880年の事であつて、それから19年になる譯でなる。さうすると2467と云ふ數が出て來た譯である！さて私の年齡43を取り、これに24を加へると67と云ふ數が得られる！即ち私も退職する事を欲するかと云ふ問に對して、私はいま24年間働きたいと云ふ希望をあらはしたのであつた。外見上私がM・大佐の跡を追うて行つた期間に於て、多くを成し遂げ得なかつた事は私を怒らせたのであつた。而も彼は最早終つてしまひ、自分にはまだ爲すべき事があると云ふ事實には喜悅があるのであつた。斯くして何の氣なしに投げ出された2467と云ふ樣な數字さへも、無意識界からの限定を缺いてゐないと云ふ事が正に云ひ得るのである。

(3) 外見上任意に擇ばれた數字の說明のこの第一例以來、私は度々同じやうな試みを繰返し、いつも同じやうな結果を得た、然しながら大多數の場合は非常に內密なる內容を持つて居る爲に、報告が

出來ないのである。

だからして私は Dr.(ドクトル) Alfred(アルフレッド) Adler(アドラー) が、彼の知つて居る全然健康なる證人から得た「數の偶然」の興味ある分析を此處に加へる事を怠る事が出來ない。この證人は次の様に報告して居る、『昨晩私は「日常生活の精神病理」を讀みにかかつた。そして注意すべき偶發事件が私を妨げなかつたならば、その書を讀了したかも知れなかつた。即ち私が、私共が外見上全然隨意に意識に呼び起した各數が、一定の意味を持つものであると云ふ事を讀んだ時、私は實驗をして見ようと決心した。私に1734なる數が思ひ泛んだ。次で急に次の思ひ付が次々に起つて來た 1734:17＝102, 102:17＝6。ついで私は 1734 を 17と34に崩した。私は今 34 歳である。私は嘗てあなたに云つた様に記憶しますが 34 歳を少壯時代の最終と見做して居る。だから私はこの前の誕生日には非常に悲しく感じた。私の 17 歳の終りに私にとつては發達の非常によい面白い時期が始まつた。私は私の生活を 17 年宛の時期に分けて居る。この區分は何を意味するのであらうか? 私には 102 なる數に關し「レクラム」の萬有文庫の 102 番には Kotzebue(コッエブ) の「人嫌ひと後悔」(Menschenhass und Reue)と云ふ戯曲が載つて居る事が思ひ泛んだ。』「私の現在の心境は人嫌ひと後悔である。文庫の第六卷——私は澤山な卷を諳記して居る——はミュルネルの「罪」(Schuld)である。私は私の能力によつて成り得るものにならなかつたのは、私の責任によ

ると云ふ考へに絶えず惱んで居る。ついで私に文庫の34番には同じミュルネル Der Kaliber と云ふ標題の話が載つて居る事が思ひ付いた。私はこの言葉を Ka——liber に分割し、尙ほこの言葉が„Ali‘ „Kali‘ を含んで居る事が思ひついた。この事は嘗て私が六歲になる息子の Ali と一緒に詩を作つた事を思ひ出させた。私は彼に Ali に就て詩を作つて見よと要求した。彼には詩が思ひ付かず、私に作つて吳れと云つた時、私は Ali reinigt den Mund mit hypermangansaurem Kali (アリーは過マンガン酸加里で口を淸めた) と云つたのであつた。私共は大笑ひし Ali は大變可愛かつた。此頃私は彼が最早以前の樣な可愛い Ali でない (Ka(kein) lieber Ali sei) 事を不滿ながらも確かめなければならなかつたのであつた！」

ついで私は文庫の17番は何であるかと自分に訊ねてみたが思ひ出す事が出來なかつた。然しながら私は以前には確かにそれを知つてゐたのであるから、私はこの數を忘れようと欲して居るものと假定した。色々に考へを廻らしたがだめであつた。私は書物の先の方を讀まうと思つたがただ機械的に讀むだけであつて一語も理解し得なかつた。17と云ふ數が私を惱ませたからである。私は燈を消して更に探した。終に17番はシェークスピアの或る戲曲でなければならぬと云ふ事が思ひ泛んだ。然しそれが何であつたらうか？ 私に Hero（ヒーロー） und Leander（レーンダー） が思ひ泛んだ。これは明かに私の注意を轉向さ

せようとする私の意志の馬鹿な試みであつた。私は終に立上がり、文庫の目錄をさがした。17番は Macbeth(マクベス) である。驚いた事には私は「マクベス」なる戲曲に就ては——私ぷシェークスピアの他の「ドラマ」よりもこれに興味を持つたに不拘——殆ど全く知らなかつた。私にはただ Mörder(殺人者) Lady Macbeth(マクベス夫人) Hexen(魔女)「美は醜なり」など及び私がシルレルによる「マクベス」の飜譯を非常によいと思つた事が思ひついたに過ぎなかつた。だからして私は疑ひもなくこの戲曲を忘れようと欲したのであつた。尙ほ私に17と34を17で割れば1と2になる事が思ひついた。文庫の1番と2番はゲーテの「ファウスト」である。私は以前には私にファウストの樣な處を多分に見出したのであつた。」

この醫師の遠慮が これらの思ひ付の多數のものに就ての意味を洞察せしめない事は遺憾である。アドラーはこの男には彼の分析の統合が成功しなかつたのであると云つて居る。彼の聯想はこれを續けて行く事によつて1734なる數及び觀念の全連鎖を理解し得る鍵を私共に與へて吳れるのでなければ此處に記述する價値がない譯である。

『今日朝早く私は勿論フロイドの考へ方の正しい事を辯護する一つの經驗をした。私が夜中に起き上がる事によつて眼をさまさせた私の妻は、文庫の目錄をどうしようと思ふのかと私に訊ねた。私は彼

女にその話をした。彼女は凡ては詭辯的の事であるが面白い事だと云つた。私が大いに困つた「マクベス」の事を彼女は單に看過した。彼女は數の事を考へても何も心に起つて來ないと云つた。私は答へた「一つやつて見ようではないか」と。それに對し彼女は117と數を云つた。私はそれに對して直ちに答へた『17は私が丁度今あなたに話した事に關係して居る、尙ほ私は昨日あなたに「妻が82歲で夫が53歲であつたならそれは非常に不釣合である」と云つた』と。この二三日來私は妻が82歲の年とつた小さいお母さんの様だと云つて妻をからかつてゐた。82＋35＝117である』

彼自身の數をどう限定すべきかを知らなかつたこの男は、彼の妻が外見上全く勝手に選んだ數を云つた時に直ぐにその解決を見出したのであつた。實際妻は如何なる凝結觀念(Komplex)から彼女の夫の數が來てゐたかと云ふ事はよく理解してゐた。そして自分自身の數を同じ凝結觀念から選擇したのであつた。この凝結觀念に於ては二人の年齡關係が問題になつてゐたのであつたから、この凝結觀念は確かに兩人に共通であつたのである。此處に於て私共は、この男に起つて來た數を說明する事は容易になつたのである。ドクトル・アドラーが云つて居る樣に、これは夫の壓迫されたる希望を現したものであつた。それは完全に云ひあらはせば、次の意味になるのであつた。34歲の私には17歲の女が釣合ふ」と。

人々が斯くの如き「遊戯」を餘りに輕く考へない樣にするために、私はドクトル・アドラーから近頃私が聞かせられた事、即ちこの分析が發表された後一箇年にして、この男が妻と離縁した事を附け加へておかう。

＊萬有文庫の拾七號に於ける「マクベス」の說明として、アドラーはこの男が十七歳にして國王弑逆を目標として居る無政府主義者の團體に入つた事を私に告げた。だからして多分「マクベス」の內容が忘却に陷つたものであらう。その頃この人は暗號を發明したが、この暗號では文字の代りに數字が用ひられてゐた。

(4) アドラーは强迫性に現れて來る數の成立に向つて、類似の說明を與へて居る。所謂「好きな數」(Lieblingszahlen)の選擇も、その人の生活と無關係ではない、そして一定の心理學的興味を缺いては居ない。17と19を特に好きだと白白した或男は、暫く考へた後に彼が17歳にして大學に入る事によつて、永い間憧憬してゐた大學の自由に到達し、19歳にして彼の最初の大旅行をやり、その後間もなく科學上の發見をなした事を述べた。この偏好の固定は、然しながら二つの如何はしい事件があつて後に起つたのであつて、この事件の起つた時に、この二つの數が彼の愛の生活に對する意義を得たのであつた。――人々が外見上勝手に一定の關係に於て特に屢〻用ふる數も、分析の結果は意外なる意味に歸せられる事がある。例へば、私の患者の一人に、或日彼の機嫌の悪い時に特に好んで「その事

は私はあなたに16乃至36回云ひましたよ」と云ふのが常である事が思ひ付いた、そしてこれに何か原因があるであらうかと自ら訊いてみた。間もなく彼が月の27日に生れ彼の弟が26日に生れた事及び運命は彼の生活から多數の幸福を奪つて、これを弟に向けさせた事を訴ふべき理由があると云ふ事が、彼に思ひ泛んだのであつた。即ち彼は運命のこの不公平なる事を自分の生れた日附から10を減じ、これを弟の生れた日附に加へる事によつて現したのであつた。彼は云つた「私は年齢は多いけれども大いに損をして居る」と。

(5) 私は數の「思ひ付」の分析に今暫く止まらうと思ふ。何故なれば箇々の觀念の內で、これほど顯著に意識が全然知らずして而も非常に複雜なる考慮過程の存在を證明するものは外になく、又一方に於て屢〻非難される醫師の共同作業(即ち醫師の與ふる暗示)がこれ程確實に除外される分析の好例は外にはないからである。であるから私は私の一患者の數の「思ひ付」の分析を、彼の承諾を得て此處に報告しよう。この人に就ては、彼が澤山の子供の中の末子であり、彼が憬慕して居る父を幼時に於て亡したと云ふ事だけを述べて置く必要がある。特別なる上機嫌に於て、彼に426718なる數が思ひ付いた、そして自ら次の問題を課した、「さてこれに就て何が思ひ泛ぶであらうか?」と。先づ私が嘗て聞いた諧謔が思ひ付く、それは「鼻風邪は醫者に治療して貰ふと42日間續く、これを打捨

てておくと6週間かかる」と云ふのである。これは數の最初の方の數字に一致する、卽ち 42＝6×7 である。この最初の解釋の後に起つた停滯に於て、私は彼の擇んだ六桁の數は3と5を除く凡ての最初の數字（一桁の數）を含んで居ると注意した。さうすると彼は直ぐに解釋を續けた。「私共は7人同胞であつて私は末子である、3は同胞の中で姉のAに相當し5は兄のLに相當する。二人共に私の敵であつた。私は子供の時に毎晩神樣にこの二人の苛責者の命をとつて下さいと祈つた。さて私はここにこの希望を自ら滿足した樣な氣がする3と5卽ちこの惡い兄と嫌ひな姉は省かれてゐる」と彼は云つた。——若しこの數が同胞を意味するとすれば、終りにある18は何を意味するのであるか？あなた方は7人だけではないかと訊ねた。——「私は屢〻父がもつと永く生存してゐたら私は末子では終らなかつたであらうと考へた。今一人出來て居れば同胞は8人になり、私は今一人小さい子供を私のあとに持ち、その子供に對しては兄として立つて行く事が出來たであらうに」と彼は云つた。

これで以て數は明かにされた。然しながら私共は分析說明の最初の部分とその後の部分との間の關係をつくらうと望んだ。これは最終の數字のために必要とされた條件卽ち「父がもつと永く生きてゐたら」と云ふ條件から非常に容易に出來て來た。42＝6×7 は父を助ける事の出來なかつた醫師への嘲笑を意味し、從つて父の生存の希望をこの形に於て現して居る全體の數は、元來彼の家庭に關する

二つの小兒期願望の成就に相當して居る。卽ち二人の惡い同胞が死亡し、彼のあとに小さい一人の弟妹が出來ればよいと云ふ願望、或は最も短的に云ひあらはせば「愛する父の代りに二人の同胞が死んで居ればよかつた」と云ふ願望の成就に相當するのである。

＊ 簡單にするために私は患者の少なからず適切なる一二の中間「思ひ付」を削除した。

(6) 私への通信から一つの小さな例を擧げよう。Lと云ふ處の電信局長が私に手紙を寄越して、醫學を學ばうと欲して居る彼の十八歲半の息子が「日常生活の精神病理」を硏究して居り、自分の兩親に私の說の正しい事を信ぜしめようと努力して居ると云つて來た。私は彼の行つた實驗の一つを、それに關した討論はやらないでここに書かう。

「私の息子は私の妻と所謂「偶然の出來事」に就て話してゐて、彼女に向ひ一つの詩も一つの數も實際單に「偶然に」思ひつくものだと云ふ事が出來ないと說明した。ついで二人の間に次の樣な對話が行はれた。息子「どんな數でもいいから云つて御覽なさい」——母「79」——息子「何が此の場合あなたに思ひ泛びますか?」——母は「私は昨日見た美しい帽子の事を考へます」——息子「いくらでしたか、その帽子は?」——母「158 マルク」——息子「そら判りました、158 : 2 = 79 です、あなたは帽子があまり高價だと思ひ半値ならば買はうと考へられたに違ひありません」

私の息子のこの話に對して、私は先づ婦人と云ふものは一般に特に勘定をするものでない事、從つて母も確かに 79 が 158 の半分であると云ふ事を明かにしなかつたに違ひないと云ふ反對意見を述べた。即ち彼の學說は下意識が正常的の意識よりもよりよく計算すると云ふ眞實らしくない事實を前提として居ると云つた。處が私はそれに對する答として「そんな事は全然ありません、假りに母が 158:2=79の勘定をしなかつたとしても、彼等はこの等式を折々見たと云ふ事は考へられます。のみならず、彼女は夢に於て帽子を取扱ひ、その際それが半分値段であればどんなによいだらうと云ふ事を明かにしたかも知れません」を得た。

(7) 數の分析の他の例を私はジョーンズから引用しよう。彼の知合ひの或る紳士が 986 と云ふ數を思ひ付き、これを彼が考へつく事との間に關係をつけて吳れと要求した「被實驗者の第一聯想は永い間忘れて居た諧謔への追想であつた。六年前の年の最も暑い日に新聞紙が寒暖計が華氏の 986 を示したと云ふ記事を出した――明かに寒暖計の示した實際の度なる 98.6 の滑稽なる誇張であつたのでる。私共はこの對話の間非常に熱い火の前に坐つて居た、その火の處から彼は今しがた退いた。そして彼はこの熱が眠つてゐた彼の記憶を呼び起したものであらうと云つたが、多分それは正しい事と思はれた。私は然しながらさう容易く滿足はしなかつた、そしてこの記憶がどうしてかくも固く彼にこびり

ついてゐたかを知りたいと要求した。彼はこの諧謔を非常に笑ひ、これが彼思ひつく時には、いつも更にこれを面白がつたと語つた。然しながら私はこの諧謔が特に面白いものとは思はなかつたから、何か祕密なる意味が背後にあるのであらうと云ふ期待は一層強められただけであつた。彼の次の考へは、熱の觀念は彼にはいつも大なる意義を持つと云ふ事であつた。彼は熱は宇宙に於ける最も重要なるものであり、凡ての生活の源泉である等と云つた。この平生非常に無味乾燥なる若い男のこの熱中は、確かに或る說明を必要とした。それで私は彼の自由聯想を續ける様に乞うた。彼の次の考へは、彼の寢室の窓から見える工場の煙突であつた。彼は屢々夕方この煙突から出る煙を眺め、その際「エネルギー」の痛ましい消耗に就て考へるのを常として居た。熱、火、焰、凡ての生活の源泉、高いうつろなる管からの「エネルギー」の浪費——これらの聯想からして熱や火焰の觀念が象徵的考慮に於て、いつもさうである様に愛の觀念と關聯して居ると云ふ事、強い手淫凝結觀念が彼の數の「思ひ付」を引起した事を推定する事は困難ではなかつた。彼は私の推定を確かめる他なかつた。

數の材料が無意識的考慮に於て處理される有樣に就て好い印象を得ようと思ふ人には私はツェー・ゲー・ユングの論文「數の夢の知見に關する知見補遺」(精神分析學中央雜誌第一卷、一九一二年)及びジョーンズの他の論文「數の無意識的處理」(精神分析學中央雜誌第二卷、五、一九一二年)を指示し

よう。

この種の私自身の分析に於て、私に二通りの事が特に眼に立つて居る。第一に私が正に夢遊病者的の確實さを以て、私に未知の目標に向つて突進し計算する處の考慮進行に沒入し、ついでこの考へが急に求むる數に到達する事竝びに全部の復作業が非常に速かに實行される事である。第二には然しながら私が元來計算の拙なる人間であり、年數や家の番號等を意識的に記憶する事は非常なる困難を示す人物であるに拘らず、無意識的の考慮に對しては數は非常に進んで役に立つと云ふ事である。尙ほ私は數に就てのこの無意識的考慮作業に於て迷信に陷る傾向がある事を見出すのである。この傾向のよつて來る源は私には永い間知られずに居た*のであつた。

* ミユンヘンのルドルフ・シユナイデル(Rudolf Schneider)氏は、斯の如き數の分析の證明力に對して興味ある反證を擧げた(フロイドの數の「思ひ付」の分析的研究に就て」(Internat. Zeitschr. für Psychoanalyse, 1920, Heft I.)彼は與へられたる數、例へば開いた歷史書に於て最初に眼に入つた數を捉へ、或は自分の選擇した數を他人に提示し、ついでこの外から押しつけられた數に對しても外觀上限定されたる「思ひ付」が起つて來るかどうかを觀察した。處が實際さうであつた。彼が報告して居る自分自身に於ける例では――シユナイデルの實驗では數が外から與へられたものであつて限定を必要としない譯であるのに――自發的に泛んで來た數に

就ての私共の分析に於けると同樣に豐富にして意味深き限定が現れたのであつた。他人に就ての第二の實驗に於ては彼は明かに問題を餘りに容易にした、何故なれば彼はその人に2と云ふやうな數――その數の或る材料による限定が何人にも達せられねばならぬ――を課したからである。――さてシュナイデルは彼の經驗からして二通りの事を推論して居る、第一は精神（das Psychische）は數に對しても概念に對すると同樣聯想の可能性を有する事、第二は自發的の數の「思ひ付」に對してこれを限定する「思ひ付」の泛んで來ると云ふ事は、この數がそれの分析に於て見出される觀念にその源を發すると云ふ證據にはならないと云ふ事である。さて第一の推論は疑ひもなく正しいものである。私共は與へられたる數に對しては呼びかけられたる言葉に對すると同樣に適當なる事を同じやうに容易に聯想する事が出來るのである、そればかりではなく、多分一層容易である。何故なれば少ない數字の結合（聯想）能力は特に大きいからである。人々はこの場合には單純にブロイレル、ユング學派に依つて縱横に研究された所謂聯想實驗の狀態にある事になるのである。この狀態に於ては「思ひ付」（反應）は與へられたる言葉（刺戟語）によつて限定されるのである。然しながらこの反應は尙ほ非常に多樣なる種類のものであり得るのであつて、ユングの實驗はそれから先の區別もまた「偶然」に委せられるものではなく――無意識的凝結觀念が刺戟語によつて觸れられる場合には――この「凝結觀念」が限定に參與する事を示したのである。――シュナイデルの第二の推論は極端に走り過ぎて居る。與へられた數或は語に對して適當なる「思ひ付」が泛んで來ると云ふ事實よりしては自發的に泛んで來る數（或は語）の根源を究める事に向つては何物も結論として生じて來ないのであつて、この事たるやこの事實の

知見以前には考慮に入れる事は出來なかつたのである。これらの思ひ付（言葉或は數）は限定されてゐないか、或は分析によつて出て來る觀念に限定されて居るか、或は分析に於ては現れなかつた他の觀念によつて限定されて居るのであつて、この後の場合には分析は私共を邪道に導いた事になるのである。私共はこの問題が數に對しては言葉の「思ひ付」に對するとは別の有樣にあると云ふ印象からは解放されなければならないのである。この問題の批判的研究、從つて精神分析の思ひ付の方法（Psychoanalytischen Einfallstechnik）の辯護は本書の目的外の事である。精神分析の實地に於ては私共は上述の第二の可能性（卽ち「思ひ付」は分析によつて出て來る觀念に限定されて居ると云ふ事――譯者）が適切なものであり、大多數の場合に於て利用し得べきものであると云ふ假定から出發して居るのである。或る實驗心理學者の研究はこれが最も蓋然的のものなる事を敎へたのである（Poppelreuter）（ポッペルロイテル）（尙ほこの點に就ては、ブロイレルが彼の「現實無視的無規律的考慮……」（Das autistisch-undisziplinierte Denken usw. 1919）なる書に於て「心理學的認識の蓋然性に就て」述べて居る注意に値する評論と比較せよ）

數のみでなく他の種類の言葉の「思ひ付」も分析的研究の結果は、いつもよく限定されて居る事が證明されても私共は驚かないであらう。

(8) 絕えず現れて人を惱まし、或は追迫して人を苦しめる言葉の根源を究める事の好例が、ユングの診斷學的聯想研究（Diagnost. Assoziationsstudien, IV, S. 215）に出て居る「一婦人が數日來絕え

す Taganrog と云ふ言葉が口の中にあり、而もそれが何處から來るのか判らないと語つた。私は婦人に最近に起つた事で而も強い感情を帶びて居た出來事や壓迫された願望に就て訊ねた。少しく躊躇した後に、彼女は Morgenroch（朝衣） が非常に欲しかつたが彼女の夫はそれに對する興味を持たなかつたと語つた。Morgenrock : Tag-an-rock 私共は此處に部分的に存する意義及び音の類似を見るのである。この語が露西亞語の形をとつた事の限定は殆ど同時頃にこの婦人がタガンローグから來て居る人を知つた事から來て居るのであつた。

(9) ドクトル・エー・ヒッチマンのお蔭で私は此處に他の一例をあげよう。この例では詩句が一定の場所に於て繰返して腦裏に泛んで來、而もその由來や關係は判らなかつたのであつた。

『法學博士E君の話「私は六年前にビアルリッツ（Biarritz）からサン・セバスチアン（San Sebastian）へ汽車旅行をした、鐵道は佛國とスペインの境をなして居るビダッソア河をよぎるのであつた。鐵橋の上では好い眺めであつて、一方には廣い谷とピレネーエン（Pyrenaen）（地名）を見渡し、他方には廣い海を見るのであつた。それは非常に好い明るい夏の日であつた。凡てのものは陽光を浴びてゐた。私は夏期休暇の旅行の途上にあつた。そして西班牙に行く事を樂しみにしてゐた――その時私に Aberfrei ist schon die Seele, schnebet in dem Meer von Licht（然しながら靈は既に放れて光の海に漂

ふ）と云ふ詩句が思ひ泛んだ。

私はその時何處からこの詩句が來たものだらうかと考へた。而もそれを思ひ出す事が出來なかつた事を記憶して居る、「リズム」から推して、この句は私の記憶を全然脫した或る詩から來て居るに違ひなかつた。この詩句はその後繰返して思ひ出されたから、私はそれに就て尙ほ二三の人に訊ねてみた。而も何も知る事が出來なかつたと信ずる。

昨年私はスペイン旅行から歸途同じ鐵道を旅行した。それは眞暗な夜であり、雨が降つてゐた。私は窓の外を眺めた――既に國境停車場に着いたかどうかを見ようと思つて――そして私共がビタッソア鐵橋の上に來てゐたのを認めた。直ぐに私に上揭の詩句が思ひ出された。そして矢張り私はその依つて來る處を思ひ出し得なかつたのであつた。

二箇月後家に居つて私はウーランドの詩書を手にした。私はその卷を開いた、そして私の視線は、Aber frei ist schon die Seele, schwebet in dem Meer von Licht なる詩句に落ちた、この句は「巡禮者」（Der waller）と云ふ詩の終句をなして居るのであつた。私はその詩を讀んだ、そして極めて漠然と多年前に私が一度それを讀んだ事を思ひ出した。脚色の舞臺はスペインであり、この事が私から見ると今引用した詩句と鐵道の上記の場所とを結ぶ唯一の關係であるやうに思はれた。私は私のこの發見

によつて半ば滿足しただけであつた、そして機械的に書物の頁をだんだんと繰つて行つた。Aber frei ist schon usw なる詩句は頁の終りの處にあつた。頁を繰る際に私は次の頁に Die Bidassoabrücke（ビダッソア鐵橋）と云ふ標題の一詩を見出した。

尙ほ私はこの詩の內容は私には前の詩よりも一層疎いものに思はれた事及びそのはじめの方の詩句は「ビダッソア橋上に白髮の老聖者が立つて居り、右方はスペインの山々を祝福し、左方は佛蘭西の高原を祝福して居る」と云ふのであつた事を述べておかう。』

(B) 外見上隨意に擇ばれた名や數の限定へのこの認識は、他の一つの問題を明かにする事に多分貢獻するものと思はれる。絕對的の心的定命論の假定に對しては、人も知る如く多數の人々は自由意志の存在の强い確信感を楯に取つて反對して居るのである。この確信の感は實際に存在し、定命論の信念にも道を譲らないのである。これは他の凡ての正常的感情と同樣に何かによつて立證されなければならない。然しながら私が觀察し得る範圍內に於ては、この確信感は大いに重要なる意志決斷の場合には現れないのであつて斯くの如き場合には私共は却つて心的强迫の感を持ち、好んでこの感を引合に出すものである（ルーテルの云つた言葉「此處に私が立つて居る、私は他にしやうがない」と比較せよ）。一方に於て些細な、どうでもよいやうな決斷の場合には私共は他に致し方があつた事、從つて私共は

何の動機も存在せざる私共の自由なる意志によつて行動したと云ふ事を斷言しようとするのである。私共が意識界よりの限定と無意識界よりの限定とを區別するならば、確信の感は意識的動機（限定）私共の凡ての運動の決斷に行き亙るものではない事を報ずるのである。*Minima non curat praetor*（執政官は小さい事を意に介せず――大は小を顧みず）である。斯くして一方の側より取り殘されて居るものは他の側卽ち無意識界よりの動機（限定）を受け、以て精神界に於ける定命論が完然に實行されるのである。

* 外見上隨意なる心的作用の嚴しい限定に就てのこれらの見解は、旣に心理學上――多分又司法上に豐富なる成果を齎したのである。ブロイレルとユングは所謂聯想實驗の際に於ける反應をこの意味に於て說明した。この實驗に於ては被研究者は自分に呼び掛けられたる言葉に對して自分にそれに就て思ひ泛ぶ言葉を以て答へ（刺戟語――反應）倚ほその際に經過したる時間（反應時）を測定するのである。ユングは彼の「診斷學的聯想研究（一九〇六年）」に於て、かく解釋されたる聯想實驗が非常に微妙纎細に働く鑑識法を私共に與へた事を示した。刑法學者なるプラーグのハー・グロース（H. Gross）の二人の門下生なるウエルトハイメル（Wertheimer）及びクライン（Klein）はこの實驗よりして刑法上の實例に於ける「實相診斷」（Tatbestand Diagnostik）の方法を發達せしめ、それの吟味は心理學者及び法學者によつて行はれて居る。

(C) 意識的考慮は上述の失錯作業の動機に就ては全然無智であらねばならぬ。然しながらそれにし

てもそれの存在の心理學的證據を發見する事は望ましい事であらう。實際無意識界の深い知識に依つて得られたる根據よりして、斯くの如き證據が何處かに見出される蓋然性が出て來た譯である。實際二つの領域に於て、この動機の無意識的知見、及び從つてその移動されたる知見に相當する現象が證明されるのである。

(a)偏執病者(パラノイア症者)が極めて些細であつて、平生私共に忽諸に附される他人の行動の細目に絕大の意義を附し、これを解釋し、遠大なる結論の基礎にする事は、同症者の狀態に於ける顯著にして又周知の特徵である。例へば、私が最終に診た偏執症者は、彼の停車場に於ける旅立に際して、人々が手を以て一定の運動をしたからと云ふので、彼の周圍の人々の一致團結を結論した。他の一患者は人人がどう云ふ風に街路を步くか、彼等がどう云ふ風に「ステツキ」を揮ふかと云ふ樣な事を注意した。

＊他の觀點より出發して人々は他人に於ける重要ならざる又偶然的なる事がらをかく判斷する事を關係妄想、(Beziehungswahn) に加へた。

正常人が彼自身の心的作業及び失錯作業の一部に向ひ適用しようとし又實際適用する偶然の事、動機を必要としない事の範疇をば卽ち偏執症者は他人の心的表現に適用しこれを斥けるのである。彼が他人に於て認むる凡ての事は意味深いものであり、解明し得べきものであるのである。これはどうし

てさうなるのであらうか？　彼は多分この場合及び多數の他の類似の場合に自分自身に無意識的に存する事を他人の精神生活に投影するのである。「パラノイア」症に於ては、私共が正常人及び神經官能症に於て、精神分析によつて初めて無意識界に存在する事を立證し得ると同じ雜多なる事が、意識界に侵入して來るのである。だからして此の場合或る意味に於ては偏執症者は正しいのである。彼は正常人に見えない或る事を認めるのであり、又彼は正常的の考慮能力よりも銳く見るのである。然しながらかくして認識した事を他人に移動させる事が、彼の認識を無價値のものにしてしまうのである。

私は人々が私が凡ての偏執病的解釋を辯護するものと期待せざらん事を希望する。然しながら私共が偶然行爲のこの理解に際して「パラノイア」に容認するこの一部分の特權、「パラノイア」症者に於てこれら凡ての解釋に結びつく確信の心理學的理解を容易にするであらう。この解釋には確かに多少の眞理があるのである。私共の病的とは云ひ得ない判斷錯誤も、それに屬する確信の感を別の有樣に於て得るのではないのである。この確信の感は誤りたる考慮進行の或る部分、或はこの考慮進行のよつて來る源泉に向つては正當なのであつて、ついで私共によつて他の關係に押しひろめられるのである。

＊例へば精神分析によつて意識的にされる「ヒステリー」患者の性的竝びに殘酷なる虐待に關する空想は、凡ての細目に亘つて被追跡偏執病者の訴へと重り合ふ事が折々あるのである。同じ内容の事が又現實の事として

色情倒錯症者に彼等の情慾を滿足するための工夫として現れる事は注意すべき事であり、而も決して不可解な事ではないのである。

(b)迷信の現象は偶然行爲及び失錯作業に於ける動機の無意識的知見及び移動されたる知見への、今一つの「ヒント」を與へる。私は私にとつてこれらの考慮の出發點であつた小さい經驗を論ずる事によつて、私の考へを明にしようと思ふ。

休暇旅行から歸るや、間もなく私の考へは新たに始まる一年間の仕事に於て取扱ふべき患者に向ふのである。私の第一の道は、多年來、毎日二回宛同じ醫療上の手當を與へてゐた非常に老年の婦人に關係する。この單調の爲に患者の家に行く途上及び治療中、私に無意識的の考慮が非常に屢〻あらはれた。彼女は九十歳以上であつた、從つて毎年の初めに於て、彼女が何時まで生存して居るであらうかと云ふ疑問を抱く事が手近にあつた。私が今話して居るその日に、私が急いでゐて、私を彼女の家の前迄連れて行つて呉れる車を雇うた。私の家の前の駐車場に居る御者は皆老婦人の住所を知つて居る、何故なればどの人も既に度々私を其處へ案內して行つた事があつたからである。私が今日、御者が彼女の家の前ではなく、近くの實際によく似た樣に見える平行街路の同じ番號のついて居る家に止まる、と云ふ事が起つたとする。私は間違ひを認め、それに就て御者を責め、そして御者がおわびを云ふ

とする。この老婦人のゐない家の前に引張つて行かれる事に何か譯があるであらうか？　私にとつては確かにそんな事はないのである。然しながら若しも私が迷信的であるならば、私はこの出來事に於て、今年が老婦人にとつて最終の年であると云ふ運命の前兆をここに認めるであらう。歴史上に保存されて居る非常に多數の前兆なるものは、これよりも良好なる象徴には基いて居ないのである。勿論私はこの出來事をそれ以上深い意味のない偶然の事と説明するのである。

若しも私が徒歩で出かけて行き、而も或る考へに熱中してゐるか、或は茫然自失の形に於て隣町の家の前に間違つて行つた場合には事がらは全然別である。それは私は決して偶然とは云へず、無意識的の企圖を有し、解釋を必要とする行爲であると説明するであらう。この行き損ひ（Vergehen）に對して私は私がこの老婦人に間もなく最早逢はなくなる事を期待して居ると云ふ解釋を與へねばならぬであらう。

即ち私は迷信家と次の點に於て違つて居るのである。

私は、私の精神生活が無關係で成立した出來事が私に現實界の、未來の姿に就ての隱れたる或るものを、私に敎へ得るとは信じないのである。然しながら私は私自身の精神活動の思はぬ表現は、勿論矢張り私の精神生活に屬する或る隱れたるものを顯示するものである事を信ずるものである。私が外

的（現實的）偶然はこれを信ずるが、內的（心的）偶然は信じないのである。迷信家はこれと反對である。彼は自分の偶然行爲や、失錯作業の動機に就ては何も知らず、彼は心的偶然なるものがあり得るものと信じてゐるのである。その代りに、彼は外的偶然に對して將來實際の出來事に現れるであらう意義を附與し、偶然の事を外部にあつて彼には判らない何かのあらはれと見ようとする傾向があるのである。私と迷信家との差は二つあるのである、第一に、迷信家は私が內に求むる動機を、外に投影するのである、第二に、彼は私が一つの考慮に歸する偶然をば、出來事によつて說明するのである。然しながら、彼に於て隱れて居る事と云ふのは、私に於ける無意識界に相當する、そして偶然を偶然として捨ておかず、これを解釋しようとする强迫は私共兩方に共通である。*

* 私は此處に立派な一例を結び付けよう、この例に於てエヌ・オッシポフ（N. Ossipow）は迷信的、精神分析的及び神祕敎的解釋の差異を說明して居る（「精神分析と迷信」(Internat, Zeitschrift f. Psychoanalyse, VIII, 1922）彼は露西亞の小さい地方の都會に於て結婚し、その直後彼の若い妻と一緒にモスコウに向つて汽車旅行をして行つた。目的地に達する二時間前のある停車場に於て、彼に停車場の出口に行つて市に一瞥を與へたいと云ふ希望が起つて來た、列車は彼の期待によると十分永い間停車して居る筈であつた。然しながら彼が數分間の後に引返して來た時には列車は彼の若い妻を乘せたままで旣に出發してしまつてゐたのであつた。彼の年とつた Njanja が家に於てこの偶然の出來事を知つた時に彼女は頭を振りながら「この結婚には碌

な事はないであらう」と云つた。その際オッシポフはこの豫言を笑つたのであつた。然しながら彼が五箇月後彼の妻と離婚したからして、彼は後から考へて見て自分が列事を去つた事が結婚に對する「無意識的抗議」(einen, unbewussten Protest")であると解せざるを得なかつた。彼にこの失錯作業の起つた都市は多年の後に彼に向つて大なる意義を得るに至つた、何故なればこの都市に一人の人が住んで居て、後に運命はこの人と彼を密接に結びつけたからであつた。この人のみならず、この人の存在の事實は當時彼には全然未知であつた。然しながら彼の態度の神祕教的說明は次の樣になつたであらう、「彼はかの都市に於てモスコウ行の列車と彼の妻を捨てた、それはこの人に對する關係に於て、彼に準備されて居た未來が豫示されようとしたから」と。

さて私は心的偶然の動機に對する意識的の「不知」及び無意識的の「知」が迷信の心的根源の一つである事を假定する。迷信家は自己の偶然的行爲の動機を知らず、而もこの動機の事實は彼の承認を得べき場所を求むる結果、彼はこれを外界に移動せしむる事によつてこれを處理するやうに强ひられるのである。斯くの如き關係が存すとすればこの關係は、この箇々の場合に限られないのである。實際、私は遠く、最近世の宗教に迄も入り込んで居る神話的宇宙觀の大なる部分は、外界に投影されたる心理學に外ならざる事を信ずるものである。無意識界の心的要素及び關係の漠然たる認識(いはば心內知覺)——これを別の有樣に云ひあらはす事は困難である。この場合私共は「パラノイア」との類推の

助けを求めねばならない——が超感覺的(形而上の)現實の組立の際に模範として取れたのであつて、この超感覺的現實は、科學によつて再び無意識界の心理學に變化させらるべき運命を持つて居るものである。私共は樂園及び人類(アダムとヱーヴ)墜落、神、善惡、不死等の神話をば、斯くの如き有樣に說明し、形而上學(Metaphysik)を異形心理學(Metapsychologie)に轉換する事を敢てし得るであらう。「パラノイア」症者に於ける移動と迷信家のそれとの間の「ギヤツプ」(割目)は一見した時に見える程大きくないものである。人類が考へ始めた頃には、彼等は外界を人も知る如く神人同性同形說的に彼等自身の「イメージ」にかたどつた多數の人物に分解する事を餘儀なくされたのであつた。だからして彼等が迷信的に說明したる遇然の出來事は人々の行爲や表明であつたのである。從つて彼等は他人が彼等に與ふる目に立たない徵候よりして結論を引出す「パラノイア」症者の如き態度を取つたのであり、又自分の仲間の人々の遇然にして故意ならざる行爲を自分の人格を評價する土臺にする健康者の如き態度をとつたのであつた。迷信は私共の近世の自然科學的であつて、而も未だ決して完成されて居ない宇宙觀に於てのみ非常に排斥すべきものに見えるのである、科學以前の時代並に人類の宇宙觀に於ては迷信は正當とされ又矛盾なきものであつたのである。

＊勿論何等認識の特徵を持たないものである。

從つて鳥が逆に飛ぶのを見て重要なる計畫を抛棄した羅馬人は比較的正しかつたのである。彼は自分の假定に從つて矛盾なく行動したのであつた。然しながら若しも彼が閾に躓いて倒れた(羅馬人は歸るであらう(*un Romain retournerait*)からと云ふので企圖を中止したとするならば、彼は私共不信心者に比して絶對にまさつて居たものであり、私共がならうと努力して居るよりも遙かに偉い心理學者であつたものと云つてよいのである。何となれば、この躓きは彼に疑惑の存在、內心に逆流の存する事を證するものであつて、この逆流の力は實行の瞬間に於て彼の企圖より力を引き去る事になり得るからである。卽ち私共は全力を纏めて私共の望む目標に傾倒する時にのみ確實に完全なる成功を得るのである。自分の男の子の頭上から林檎を射落す事に、非常に永い間躊躇したシルレルのテルは、「何故彼が二本目の矢を用意したか」と云ふ代官の問に對して何と答へたか?

この矢で我れは——汝を射貫くのだ、若しも我れが我が愛兒を射る事あらば、而して汝ならば——確かに

——我れは射損じまい。

(D)人の隱れたる精神的傾向を精神分析の方法で硏究する機會を持つた人は、迷信に現れる無意識的動機の性質に就ても一二の新しい事を述べる事が出來る。時に非常に聰明であり、强迫考慮や强迫狀態を有する神經質者に於て、私共は迷信が壓迫された敵對的竝びに殘忍性傾向から出る事を最も明か

に認むる事が出來るのである。迷信は大部分は凶事の期待であり、他人に對し、屡〻惡い事を希望し而もよい躾の結果斯くの如き願望を無意識界に壓迫したる人が、この無意識的の「惡」に對する懲罰を外部から彼に迫つて來る、凶事の形に於て期待する傾向を特に持ち易いのである。

私共は斯く論ずる事に依つて、迷信の心理を決して盡さなかつた事は認めるか、一方に於て私共は少なくとも迷信の眞の根源が全然否定さるべきものであるかどうかの問題、實際に於て凶兆、豫言的の夢、千里眼的經驗、超感覺的の力の現れはないものであるかどうかと云ふ問題に輕く觸れなければならない。私はこれらの現象――それに就ては知的に秀でたる人々の多數の深く立入つた觀察があり、尙ほ今後の研究の最上の對象となるべき――を到る處即座に否認しようとは更々思はないのである。それのみならずこれらの觀察の一部が、私共の現在の無意識的精神過程の認識によつて、私共今日の見解の根本的變改を私共に强ふる事なくして說明に到達する事は望ましい事である。例へば、若しも降神術者によつて主張されて居る樣な他の現象が證明されるならば、私共は宇宙に於ける事物の關係に關して途方に暮れる樣な事なしに、私共の法則の變改を新しい經驗の要求に從つて企てるであらう。*

* エー・ヒッチマン「千里眼批判」(Wiener Klinische Rundschau, 1910, Nr. 6.) 及び「詩人とその父、宗教上の改宗並びに遠隔精神作用の現象の心理知見補遺」(Imago, IV 1915/16.)

これらの說明の範圍內に於て、私はここに揭げられたる問題を單に主觀的に、卽ち私の個人的經驗に據る以外には答ふる事が出來ないのである。私は殘念ながら無價値なる人間の部類に屬して居る事を自白せねばならない——この部類の人間に對しては心靈もその活動を止め、超感覺的のものは見えなくなるものである——從つて私は自ら不可思議なる事の存在の信を呼び起す樣な事を經驗し得た事はないのである。私は凡ての人々と同樣に豫感を持つた事もあり、又禍を經驗した事もあつた。然しながら兩者は互ひに避け合ひ、そのために豫感はあつても何事も起つて來ず、不幸は豫感なしに私を襲つて來た。私が青年として單獨にて外國の都市に住んで居た頃、私は非常に屢〻急に私の名を紛方なき親しい人の聲で呼ぶのを聞いた事があつた、そしてこの樣な場合には幻覺の起つた時を書きつけて置いた——注意してその時に何が起つたかと云ふ事を家に殘つて居る人々に就て訊ねる事が出來る樣に。處がそれは何でもなかつた。その代償として、私はその後靜かに又何等の豫感なしに私の患者を取扱つてゐたが、その間に私の子供は出血によつて死に瀕してゐた事があつた。又私に患者達が告げた豫感の內で、一つとして私の承認を獲得し得るものはなかつた。然しながら私はこの二三年に於て、一二の注意すべき經驗をなした事を自白せねばならぬ。これらの經驗は遠隔精神作用的の考慮轉移を假定する事によつて說明され得るかも知れない。

豫言的の夢に對する信は多數の信者を數へる。それは願望が先以て夢の中に作り上げた通りに、二三の事が將來實際になると云ふ事實に支持されるからである。然しながらこの事には、あまり不思議はないのであつて、夢と實現との間には通常廣大なる距りがあり、この距離を夢見る人の輕信が忽諸に附するのである。豫言的の夢と名づけても無理だとは云へない樣な夢の好例を、或時聰明にして眞理を好愛する一婦人患者が詳細なる分析のために私に提供した。彼女の物語る處によると、彼女は或時彼女の以前の友であり、且つ家庭のかかりつけの醫師に或る街路の一定の商店の前で逢つた夢を見た、そして彼女が翌朝市の中心（ウィーンの Muere Stadt）に行つた時に夢の中で示された場所に於て實際彼に出逢つたと云ふのであつた。私はこの不思議な合致はその意義を後に起る何等の經驗によつても證明せず、即ち將來の事からしては立證する事が出來なかつた事を認むるのである。

＊ フロイドの「夢と遠隔精神作用」(Imago, VIII, 1922. フロイド全第三卷に包含されて居る)

注意して尋問したる結果は、この婦人が夢みた夜の後、朝に早速即ち散歩に出て醫師に出逢ふ迄に、この夢を思ひ出したと云ふ事の證據は少しもない事が解つた。彼女はこの出來事から凡ての不可思議な事を取り去り、唯興味ある心理學上の問題のみを殘すやうな有樣に事情が表された時に、何等反對する事が出來なかつた。彼女は或日の午前或る街路を歩いた、そしてその店舗の前で年老いた彼女の

家のかかり付けの醫師に出逢つたのであつた。そして彼を見てから後に、彼女が前夜その場所でこの邂逅を夢みたと云ふ確信を得たのであつた。分析は如何にして彼女が一般の法則に從へば、勿論その信憑住に對する一定度迄の權利を否認する事の出來ないこの確信に到達したかと云ふ事を、大なる蓋然性を以て示す事が出來た。前からの期待に從つて、一定の場所において人に出會ふ事は、勿論會合の實相である。この老家庭醫は彼女に古い時の記憶を呼び起させたのであつた。その當時には、第三のこの醫師とも親しくしてゐた人との媾曳は彼女には大切な事であつたのである。この男とは彼女はそれ以來も交際してゐた。そして彼女が見たと云ふ夢のあつた前日、彼女は媾曳に待ち呆けを喰つたのであつた。若しも私がここに存した關係を詳細に報告する事が出來たとするならば、私には昔の友を見て起つた豫言の錯覺は、多分次の話に等しいものであると云ふ事を容易に示す事が出來たであらう。「ああ先生、あなたは今私に昔を思ひ起させます、その昔には私は N と媾曳の約束をした場合には、決して無益に N を待つ必要はなかつたのでした」と。

或人の事を丁度考へて居る時に、その人に出會ふ、かの誰も知る「不思議な邂逅」の簡單にしての易に說明し得る例を私は觀察した。これは多分同じやうな例の模範となるものである、君主國においては大なる權威を附與される大學教授の稱號が私に授けられた數日後、市の中心を步いてゐて私容

考へが急に或る兩親に向けられた子供臭い復讐の空想に向つて行つた。この兩親は一二箇月前私は彼等の小さい娘の處へ呼び迎へた、この娘には一つの夢に續發して興味ある强迫現象が起つてゐたのであつた。私は原因を見透し得るものと信じたるこの症例に、非常な興味を持つたのであつたが、私の治療は兩親から拒まれ、彼等は催眠術を以て治療する外國の或る權威者に頼まうと考へて居ると私に告げたのであつた。さて私はこの兩親はこの試みが全然不成功に終つた後に、今は私に完全に信頼して居るから、治療を始めて呉れと乞ふであらうなどと空想した。然しながら私はこの空想に答へた、『勿論私が「プロフエツソール」になつた今日、彼等は信頼を持つであらう。稱號は私の能力を變化させはしなかつたのだ、汝等は講師としての私を用ふる事が出來なかつたのだから教授としての私をも缺き得るであらう』と、——この時の私の空想は聲高い挨拶『お芽出たう「プロフエツソール」よ』によつて中斷された。そして私が見上げた時に丁度今彼等の要求を斥ける事によつて復讐したその兩親は私の傍を通り過ぎたのであつた。次の考慮は「不思議」の外觀を壞してしまつた、私は眞直な廣い殆ど人通りのない街路上をこの二人に向つて歩いて行き、一寸見上げて多分二十歩位彼等から離れてゐて彼等の威嚴ある人柄を眺め彼等を認めた。然しながらこの知覺をば——消極的幻覺（negativen Halluzination）の原型に從つて——上記の感情的動機によつて片付けてしまひ、この動機はついで外

見上自發的に泛び出た樣に見える空想として現れたのであつた。

外見上の豫感の他の分析例を私はオツトー・ランクによつて報告しよう。「つい先頃私はかの「奇なる邂逅」即ち丁度いま考へてゐた人に出逢ふ場合の珍しい一異型を經驗した。私は「クリスマス」の直ぐ前に十箇の新しい「クローネ」銀貨を贈物にする目的で兩替しようと思ひ、墺匈國銀行に行つた。私の尠ない持金と、銀行の中に積まれてある澤山な金高との對照に關聯する功名心に滿ちた空想に耽りながら私は銀行のある狹い銀行橫町に入つて行つた、玄關の前には自動車が止まつてゐて多數の人々が出入してゐた。私は銀行員が私の僅かな數の「クローネ」に對しても時が掛るであらうと思つた。兎も角も私は早く片付けたいと思ひ兩替すべき紙幣を置き、そして「私に金貨（Gold）を下さい！」と云つた。――直ぐに私は自分の「誤り」に氣付いた――私は勿論銀貨を要求すべきであつた――そして私は空想から目ざめた。私は入口からやつと數歩離れた處にゐた。そして一人の若い男が自分の方に歩いて來るのを見た。その人を私は知つて居る人の樣に思つたが、私の近視眼のために未だ確かにそれと認識する事が出來なかつた。彼が近づいた時に私は彼がGold（ゴルド）と云つて私の兄弟の學校仲間である事を認めた。この人の兄弟である有名なる著述家から、私は自分の文學者としての經歷の初めに於て大いに助成を期待したのであつた。然しながらこの助成

はなかつた。そしてそれと共に私の空想が銀行へ行く途上に於て取扱つた樣な物質上の成功も得られなかつたのであつた。だからして私は自分の空想に沈んでゐてゴルド君の近づいて來るのを無意識的に認めたに違ひない。そして彼は私の物質上の成功を夢みつつある意識に印象を與へ、私が出納係に對して價値少ない銀貨の代りに金貨を要求する樣にさせたのである。一方に於て、私の無意識界が私の眼に後になつて漸く認められる樣な對象を知覺する事が出來たと云ふ矛盾したる事實もまた、一部分は凝結觀念の用意 ,,Komplexbereitschaft"(Bleuler)と云ふ事から說明されるのであつて、この用意は勿論物質に向つて焦點を定めて居り、私の一層高尙なる知識とは反對に、私の歩みを金貨及び紙幣の交換のみの行はれるかの建物の方向に導いたのであつた。(Zentralblatt f. Psychoanalyse ,II, 5.)

不思議なる事、不氣味なる事の範疇にはかの特有なる感覺もまた屬するのである。この感覺は私共が或時又或る狀態に於て、恰も私共が丁度その事を旣に一度經驗し、或は同じ狀態に旣に一度あつたかの如く感ずるものであつて、而も骨折つて見ても斯くあらはれて來る以前の事を明かに追想する事が出來ないのである。私は斯くの如き瞬間に私共に起つて來るものを感覺(Empfindung)と名づけるならば、自分はしつかりしてゐない言語の用法に從つて居るものである事を知つて居る。多分これは判斷であり、殊に認識判斷であると思ふ、然しながらこれらの場合は、全然特有なる一つの性質を持

つて居る、そして私共がその求むるものを決して想ひ出さないと云ふ事は無視する事の出來ない事である。此（(Déjà vu)「既に見た事がある」)なる現象が、今迄眞面目に個體の以前の心的存在の證據として提供されたかどうかは私は知らないのである。然しながら、心理學者はこの現象に彼等の興味を向け、この謎を色々の思索的方法を以つて解決しようと努力した。提出されたる説明の試みは、一つとして私には正しいやうには思はれない、何となれば、何の説明にもこの現象の隨伴現象及び補助的條件だけしか考慮されてゐないからである。私の觀察によれば„déjà vu"の説明に向つて獨りその責に任じ得る、かの心的過程卽ち無意識的空想は、今日に於ても尙ほ心理學者から一般に看過されて居る。

既に一度經驗したと云ふ事の感じを錯覺（Illusion）と名づける事は正しくないと私は考へる。却つて斯くの如き瞬間に於て人が既に一度經驗したる何かが實際に觸れられるのである。唯この事が未だ嘗て意識されなかつたために、意識的に追想され得ないのである。„déjà vu"の感覺は、簡言すれば無意識的空想への追想に一致するのである。意識的の空想或は幻想(Tagträume)があると同樣に無意識的なる空想或は幻想があるのであつて、斯くの如き意識的創造物のある事は各人が彼自身の經驗から知つて居る事である。

私はこの事は最も詳細なる研究の價値ある事を知つて居る、然しながら此處には„déjàvu"の唯一

三の例の分析を掲げようと思ふ、この例に於ては感覺が特に強く又永く續く事が顯著であつた。現在つ十七歳になる一婦人は、彼女が十二歳半の年に田舍に居る彼女の女の學校友達の處に最初の訪問をなした、そして彼女が庭園に入つた時、直ちに彼女が此處に既に一度來た事があつたと云ふ感覺を持つた事を、非常に明かに記憶して居ると主張した。この感覺は彼女が屋內に入つた時に繰返された、從つて彼女はその次にどんな室があり、その室からはどんな眺望があると云ふ事を豫め知つてゐた樣な氣がした。然しながらこの知つて居ると云ふ感じはこの家及び庭園への以前の——例へば彼の女の幼時の——訪問に基くと云ふ事は全然除外されて居り、彼女が兩親に訊ねてみたがそれは否定されたのであつた。これを報告した婦人は心理學的說明を全然求めようとはせず、この感覺の起つた事は是等の女友達が、その後彼女の感情生活に向つて得たる意義の豫言的指示であると考へたのであつた。然しながらこの現象が彼女に現れた事情の考察は私共に別の解釋の道を示した。彼女がこの訪問をなした時、彼女はこの少女達が唯一人の重病に罹つて居る兄弟を持つて居る事を知つてゐた。彼女はこの訪問に際してこの兄弟の人を見た、それで彼が非常に狀態が惡るさうに見え、彼が間もなく死ぬであらうと思つた。さて彼女自身の唯一人の兄弟は、一二箇月前に「ヂフテリー」に罹り非常に重態であつた、彼が病氣してゐた間彼女は兩親の家から遠ざかり數週間親類の家に住んでゐた。彼女は自分の兄弟も

この田舍への訪問に一緒に出掛けたものと信じた。そればかりでなくこれが彼の病後に於ける最初の稍ゝ大きい遠足であつた樣に思つた。然しながらこれらの點に於ける彼女の記憶は著しく不確實であつた。而も他の凡ての細目、特に彼女がその日に着て行つた着物は彼女に非常に明かに彼女の眼前にあつたのであつた。專門家にはこの徵候よりして、彼女の兄弟が死ぬだらうと云ふ期待が當時この少女に大なる意義を持つて居り、而もこの期待は全然意識されなかつたか、或は病氣が幸福なる轉機を取つた後に强く壓迫されたものである事を推論するに難くないのである。他の場合（兄弟が死んでゐた場合）には彼女は他の着物即ち喪服を着ねばならなかつたであらう。處で彼女は彼女の友達に同じ境遇即ち唯一人の兄弟が間もなく死ぬべき危險にあると云ふ狀態を見出したのであつた。而も此事は後間もなく實際に起つたのであつた。彼女はこの狀態を數箇月前に自らも經驗したと云ふ事そのを意識的に想ひ出すべき筈であつたのでめる。壓迫作用によつて妨げられてゐたために此事を想ひ出さず、その代りに彼女は記憶の感を、場所、庭園、家に轉移し、彼女が凡ての事を丁度同じ樣に既に一度見たと云ふ„fausser reconnaissance"（誤れる認識）に陷つたのであつた。壓迫の事實よりして、私共は彼女の兄弟が死ぬであらうと云ふ當時の期待は願望空想（Wunschphantasie）の特徵と相去る事遠からざるものであつた事を推定して差支へないのであつて、さうなれば彼女は家庭の獨兒として殘る譯であつ

たのである。彼女に後に起つた神經官能症に於て、彼女は兩親を失ないはしないかと云ふ不安に强く惱んだ、分析はその不安の背後に同じ內容の無意識的願望を何もの樣に發見する事が出來たのであつた。

私自身の一寸した "déjà vu" の經驗は同じやうにその時の感情狀態から導く事が出來た。それは次の樣に云ひ表す事か出來るであらう「これは境遇をよくする爲の希書として、あの時、この時に自分に作られた無意識的にして未知なる空想を呼びさます機會となるものであらう」"déjà vu" のこの說明は今迄唯一人の觀察者によつて評價された。この書の第三版に多數の價値ある知見補遺を提供して吳れたドクトル・フェレンチーは、これに就て私に次の樣に書いて寄越した。『私は私自身に於ても他人に於ても、この說明し難い「知つて居ると云ふ感じ」は無意識的空想に歸すべきものであり、この空想を人が現實の狀態に於て無意識的に思ひ起させられるのである。私の患者の一人に於てこの事が外見上別の有樣に起り、而も實際は同じやうに起つた。この感じは彼に於ては非常に屢々起つた。然し、いつも前夜の忘れられた（壓迫された）夢の部分から來て居る事が明かにされた。從つて „déjà vu" なるものは單に幻想（Tagträume）からのみではなく、夜の夢からも來得るものであるやうに思はれる』と。

私はその後グラッセー（Grasset）が一九〇四年にこの現象に私の說明とは非常に近い說明を與へて居る事を知つた。

一九一三年に私は小論文*に於て déjà vu に非常に近似の他の現象を記載した、それは "déjà raconte"（既に物語つた」）なる現象であつて、何かを既に話したと云ふ錯覺である。これは精神分析療法の最中に起る場合には特に興味深いものである。この場合には患者は主觀的確實さの凡ての徵候を以て、一定の記憶を既に疾くに話した事を主張するのである。然しながら醫師にはその反對の事が確實であつて、通常患者に彼の「思ひ違ひ」である事を納得せしむる事が出來る。この面白い失錯作業の說明は、多分彼がそれを話さうと云ふ衝動と企圖を持ち、而もこれを實行する事を怠つたのであつて、今や彼は衝動と企圖の追想を後者即ち企圖の實行の補充とする事にあるらしい。

* 精神分析作業中の Fausse reconnaissance （déjà raconte）に就て（Internatoinale Zeitschrift für Psychoanalyse, I, 1913.）フロイド全集第六卷に包容されて居る）

フェレンチーの所謂想像的失錯行爲（vermeintlichen Fehlhandlungen*）も亦似よりの實相——多分同じ機制を示すものである。人は何か——或る物體——を忘れ、置き忘れ、或は紛失したものと信ずる。而も彼が何もその樣な事をしたのではなく、凡てがちやんとなつて居る事を確かめ得るのである。例へば或る婦人患者が置き忘れた「パラソール」を持つて行かうと云ふ口實の下に、醫師の室に引返して來る、然しながら醫師は彼女が手に「パラソール」を持つて居るのを認めるのである。即ち斯

くの如き失錯作業への衝動があり、これが實行の補充となるに十分であつた譯である。この差別を除いてはこの想像的失錯作業は眞の失錯作業と同格におくべきものである。然しながらこれは謂はば價格低廉なるものである。

＊ Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse III, 1915.

(E) 私が近頃哲學の素養ある一同僚に「名の忘却」の一二實例を分析と一緒に話した處、彼は急いで反對した。「それは非常に結構だが私に於ては『名の忘却』は別の有様に起る」と。確かに私共はこの問題をさう簡單に片づけてしまふ事は出來ないのである。私は私の同僚が未だ嘗て『名の忘却』の際の分析の事を考へた事があるとは信じない、又彼も『名の忘却』が彼にどう云ふ風に別様に起るか、と云ふ事を云ふ事が出來なかつた。然しながら彼の言は多數の人々が第一に考へたがる問題に觸れて來るのである。それは此處に述べた失錯及び偶然行爲の分析が一般に適用され得るものであるか、それともただ箇々の場合にのみ適中するものであるか？　そして後者の場合が眞であるとすればこれが別の有様に於て可能にされた現象の説明にも用ひられ得るやうになる條件は何であるか？　と云ふ事である。この問題に答ふるに當つて私の經驗は私を窮地に置き去るのである。私は唯今迄示した關係が稀なものであると考へる事を勸止する事が出來る、何故なれば私が私自身及び、私の患者に於て試

驗ずる度毎に、この關係は上述の實例に於ける如く確實に證明され、或は少なくともこの關係を察してよいやうな根據が出て來たのである。凡ての場合に於て症候行爲の隱れたる意味を見出す事が必ず成功しなくともそれは驚くに足らないのである、何となれば分析に反對する內的抵抗の大きさが決定的の要求と認められるからである。私共は自分自身に、或は患者に於て凡ての夢を一々判斷する事は出來ないのである。學說の一般的に有効なる事を確かる爲めには、私共が隱されて居る關係の中に少しでも立ち入り得ればそれでよいのである。夢を見た次の日に分析しようと試み、それが出來なかつたその夢が、時に一週間、或は一箇月の後になつて、その期間中に起つた現實の變化によつて互ひに鬪つてゐた心的要素がその價値を減じた場合に、その祕密を奪はれる樣になる事は屢〻見られる事である。同じ事は失錯竝びに症候行爲の分析にも適用されるのである。„Im Fass durch Europa“ の『讀み損ひ』の例は、最初分析し難かつた症狀が、壓迫された考へに對する實際の興味の弛緩すると共に分析し得るやうになると云ふ事を示す機會を私に與へたのである。私の弟が羨まれたる稱號を、私よりも先に獲得する可能性のあつた間は、上記の『讀み損ひ』は繰返されたる分析的努力に抵抗したのであつた。この拔擢が本當らしくない事が判つた後、急にその分析に導く道が私に明かになつたのである。だからして、分析に抵抗する場合の凡てに就て、彼等が此處に發見されたる機制以外の他の

機制によつて成立せるものと主張する事は正しくないであらう。この假定に向つては消極的の證據以外に、尙ほ他のものを必要とするであらう。健康者にも多分一般に存在し、失錯竝びに症候行爲に他の說明があるものと信じようとするこの用意は、少しも實證力を持つてゐないのである。これは勿論この祕密を作り、從つてその祕密を守る事を努力し、それの解明に對して抵抗する同じ心的『エネルギー』の表現である。

* 此處に非常に興味ある經濟的の問題——卽ち心的經過が快感を求め不快感を廢除する事を目標とすると云ふ事實を顧慮する問題——が絡んで來るのである。不快動機によつて忘れられた名が補充的聯想の道程を通つて得られる事が如何にして可能になるかと云ふ事は旣に經濟的の問題である。タゥスクの立派なる業績報償による壓迫動機の價値降下（Internatoinale Zeitschrift für Psychoanalyse, I, 1913.）は好例に於て忘れられたる名は、この名をば快感を帶びたる聯想——それは名の再生の際に起るものと期待される不快感に頡頏する——に引き入れる事が可能になる場合には思ひ出し得るやうになる事を示して居る。

他方に於て、私共は壓迫されたる觀念や感情が、症候行爲や失錯行爲への表現を自分等だけで獨立にかち得るものでないと云ふ事を看過してはならないのである。神經分布が斯く橫道に外れる事に對する技術上の可能性は、彼等とは無關係に存在せねばならない、この可能性は卽ち意識的表現を得ようとする被壓迫的材料の企圖によつて進んで利用されるのである。斯くの如き企圖に役立つものが如

何なる構造及び官能關係であるかと云ふ事をば言語の上の失錯作業の場合に向つては哲學者及び言語學者の詳細なる研究がこれを決定しようと努力したのである。斯くして私共は失錯竝びに症候行爲の條件に於て無意識的動機とこれを迎へる生理學的及び精神身體的關係とを區別するけれども、健康の領域內に於て無意識的動機の如くに、そして又これに代つてこれらの關係の道程を經て、失錯竝びに症候行爲を作り得る他の要素ありや否やの問題は未決定の儘におくべきである。この問題に答へる事は私の仕事ではないのである。

且つ又失錯作業の精神分析的解釋と、通常の解釋との間に可なり著しい差があるが、それを一層誇張する事は私の企圖には屬しないのである。却つて私はこの區別が大いにその鋭さを失ふ場合を指示したいのである。『話し損ひ』『書き損ひ』の最も簡單にして目立たない實例——これらの場合には言葉が短縮され或は言葉や文字がぬかされる——には複雜なる說明はないのである。精神分析の立場からは、私共は斯くの如き場合には企圖に何等かの障礙が現れたものと主張せねばならぬが、何處からこの障礙が來り、何を目的とするかは云ふ事が出來ないのである。この障礙はその存在を知らせる以外、何事をも仕出來さなかつたのである。斯くの如き場合に於ては私共は、音の上の價値關係及び手近にある心理學的聯想が失錯作業を起りやすくする事——この事に就ては私共は決して反駁しなかつ

た——が有効になるのを見るのである。然しながら『話し損ひ』或は『書き損ひ』の斯くの如き未成の場合を一層明かなる場合——それの研究が失錯作業の原因に就ての明かなる説明を生ずる——に倣つて判斷する事は正しい科學的要求である。

(F)『話し損ひ』に就ての說明以來、私共は失錯作業が隱れたる動機を有する事を證明する事に滿足した。そして精神分析の方法を用ひてこの動機の知識に私共の道を開いたのであつた。失錯作業に現れる心的要素の一般性狀及び特性をば私共は今迄殆ど顧慮せずに置いた。兎も角も私共は彼等を一層詳細に限定し、彼等の法則を吟味しようとは試みなかつたのであつた。私共は現在に於てもこの對象の根本的解決を試みないであらう。何故なれば第一步は間もなく私共にこの領域へは別方面から入る方が入り易い事を敎へたからである。私共は此處に二三の問題を提示する事が出來る、そして少なくともその問題をここに擧げ、その範圍を限定しようと思ふ。卽ち

(1)失錯竝びに偶然行爲によつて現れて來る觀念や感情は如何なる內容のものであり、如何なる根源より由來するものであらう？

(2)一つの觀念や感情がこれらの出來事を表現の方法として用ふる樣に强ひられ、又用ひ得る樣になる爲の條件は如何？

(3) 失錯作業の種類とこれによつて表現される性質（Qualität）との間に一定の一義的の關係が證明されるかどうか？　等である。

* 本書は全然通俗的に書かれたものであり、例を集めて無意識的にして而も有効なる精神過程の必然的假定への道を開拓しようとするだけである。從つてこの無意識界の性狀に關する凡ての理論的考慮を避けたのである。

私は最後の問に答ふるための一二の材料を提供する事から始めよう『話し損ひ』の例を説明するに際し、私共は企圖されたる話の内容を超越し、言語障礙の原因を企圖以外に求めねばならぬ必要を見出したのであつた。原因は一定數の場合に於ては手近にあり、話す人の意識に知られてゐたのであつた。外見上最も簡單にして透明なる實例に於ては、言表を妨げるものは同じ權利を以て響く同じ觀念の別の表現法（用語、文體）である。而もこの場合本人は何故に一方が屈服して他方が表面に現れたかを云ひ得ないのである。（メーリンゲル及びマイエルの汚染（Kontamination）第二群の場合では一方の表現法の屈服が、一定の顧慮に原因するのである。而もこの顧慮は完全なる阻止を要する程強くないのである。（Zum Vorschwein gekommen）抑留されたる表現法も、又明かに意識的であつたのである。第三群に就ては私共は邪魔する觀念は企圖されたる觀念とは無制限に違つて居る事を主張する事が初めて出來るのであり、又この場合は本質的の區別を立てる事が出來る樣である。妨げる考へは、妨げら

れるものとは觀念聯合によつて結びつけられて居り(內的矛盾による障礙)或は邪魔する考へは邪魔されるものとは全然本質を異にし、邪魔される言葉は邪魔する觀念——これは屢々無意識的である——とは驚くべき外的聯合によつて結ばれて居る。私が私の精神分析からして與へた實例に於ては、全體の話が同時に活動的となり、而も全然無意識的なる觀念の影響の下に立つてゐた。而してこの觀念は障礙そのものによつて裏切られ(Klapperschlange——Kleopatra)或は彼等が意識的に企圖されたる話の箇々の部分が互ひに邪魔し合ふ事を可能にする事によつて間接の影響を現すのである。(Asenatmen——この場合には Hausenauerstraße 佛蘭西婦人への追想が背後に存するのである)。言語障礙の出發點となる抑留されたる或は無意識的なる觀念は雜多なる根原のものである。從つてかく全體を見渡した處、普遍性はどの方面にも認められないのである。

『讀み損ひ』及び『書き損ひ』の例を比較研究して見ても同じ結果に達するのである。箇々の例は『話し損ひ』の場合と同樣に最早それ以上深い動機を認め得ない凝縮作樣(Verdichtungsarbeit)によつて生ずる(例へばApfe)。然しながら斯くの如き凝縮——夢の作業に於ては規則的に起るものであり、私共の覺醒時の考慮に於ては誤謬あるものと見るべき——が起る爲には、特別の條件が滿たされねばならないかどうかと云ふ事は知りたいものである。而もこれに關しては私共は實例そのものよりは何

等の說明をも得ないのである。然しながら私は意識的注意の弛緩以外には、斯くの如き條件がないと云ふ結論をこれより引出す事には反對である。何故なれば私は他の方面からして、自動的作業が正確と確實さに於て勝れて居る事を正に知つて居るからである。私は寧ろ此處にこの場合に於ては生物學に於て屢〻さうである樣に、正常的の狀態或は正常のものに近い狀態は、研究の對象としては病的の狀態ほど都合よくないものである事を强調したいのである。これらの輕度の障礙の說明の際に不明なる事は、私の期待する處では重い障礙を明かにする事によつて光明を受けるであらう。

『讀み損ひ』及び『書き損ひ』に於ても遠くに存する複雜なる動機を認めしめる樣な實例はない事はないのである。„Im Fass durch Europ" は懸け離れたる本質の違つた觀念の影響によつて說明される『讀みの障礙』であり、この觀念は嫉妬心と功名心の壓迫されたる感情に發し、Beförderung なる言葉の Wechsel（變化）を讀まれたるどうでもよい無害なる題目との連結に用ひたのであつた。Burckhard の例に於ては、名そのものがこの Wechsel であつたのである。

言語の官能障礙は他の心的作業に於けるよりも容易に起り、從つて障礙を起させる力に對しては少ない要求しか課せない事は明かな事である。

元來の意味に於ける忘却卽ち過去の經驗の忘却（第一章及び第二章に述べたる固有名及び外國語の

忘却は Entfallenとして、又企圖(Vorätye)の忘却は Unterlassen としてこの嚴密なる意味に於ける忘却から區別する事が出來るであらう」を檢する場合には私共は、別の地盤の上に立つのである。忘却の際の正常的過程の根本條件は未知*である。人々は彼等が忘れたと考へる凡ての事を忘れて居るものでない事を教へられるのである。私共の説明はここでは重要ならざる事は忘れ、重要なる事は記憶から保存されると云ふ規則を破る點に於て、私共に驚愕を呼び起す場合のみに關するのである。私共に特別の説明を要求する樣に見ゆる忘却の實例の分析は、忘却の動機として苦痛感を呼び起すかも知れない何かを思ひ起させる不快ある事を明かにするのである。私共はこの動機は精神生活に於て全般的に現れようと努力するものであるが、他の反對に作用する力によつて、規則正しく現れる事を妨げられるのである。苦しい印象に對する記憶、不快の範圍と意義とは最も愼重なる心理學的研究をなす價値あるものであらう。又如何なる特別條件がこの一般に努力されて居る忘却を箇々の場合に於て可能にするかの問題は、この廣い關係に於ては解決する事が出來ないのである。

* 本來の忘却の機制に就ては私は多分次の暗示を與ふる事が出來る。記憶の材料は一般に二つの影響――凝縮と歪み――を受けるものである。歪みは精神生活を支配してゐる傾向の仕事であり、特に――凝縮作用に對して抵抗の大なる――强い感情を帶びた記憶の痕跡に向つて作用するものである。どうでもよくなつた樣な痕

跡は無抵抗で凝縮過程に陷るのである。然しながら私共は歪みの傾向は彼等が現れようと希望する處に於て滿足されなかつた爲に、どうでもよい材料を飽食するのを認むる事が出來る。この凝縮と歪みの過程は永い間續き、その間凡ての新しい經驗が記憶の內容を變形させる樣に作用するものであるから、私共は、記憶を不確實不明瞭にするものは「時」であると考へるのである。一體忘却に際し時の直接の官能を云爲する事は多分出來ないであらう——壓迫されたる記憶の痕跡に於ては彼等が最も永い期間を通じて、少しの變化も受けなかつた事を確かめる事が出來る。概して無意識界には時間はないものである。心的固定の最も重要にして又最も不思議なる特性は、一面に於て凡ての印象が彼等が領取されたそのままの有樣に保存される事及び、尙ほその上にその後の發達の際に取つた凡ての形に於て保存される事である、この狀態は他の領域に見る現象との比較によつては說明する事の出來ない事である。だからして理論上記憶內容の各以前の狀態はこれらの要素がその元來の關係を新しい關係と疾くに取り換へた場合でも、再び記憶に回復せしむる事が出來るであらう。

企圖の忘却の際には他の要素が前景に現れるのである。想ひ出す事が苦痛なる事を壓迫する際に起るものと想像される精神軋轢は、この場合には明瞭となるのである。そして私共は實例の分析の際にいつも企圖に反抗しながら、而もこれを廢させる事の出來ない反對意志を認むるのである。前に述べた失錯作業に於ける如く、私共はこの場合にも二つの『タイプ』の心的過程を認めるのである。反對

意志は或は直接に企圖に向つて行く（多少重要なる企圖の場合）か或は企圖そのものには全然知られずして、これと外聯合によつてその關係を作る（殆どどうでもよい企圖の場合）のである。同じ精神軋轢は『摑み損ひ』の現象をも支配するものである。行爲の障礙にあらはれる衝動は屢〻反對衝動である。然しながらそれよりも尙ほ屢〻現れるものは全然未知の衝動であり、この衝動は行爲の實行に際し唯その機會を利用し、行爲の障礙によつて現れるのである。障礙が内的の矛盾によつて起る場合は、一層意義重大であつて又一層重要なる實行に關係するのである。

偶然行爲及び症候行爲の場合に於ては、内的の精神軋轢は益々目立たなくなるのである。意識界より輕視され或は全然看過されるこれらの運動性表現は、多數の無意識的なる或は抑留されたる感情を現すに役立つのである。彼等は、大部分は空想或は願望を象徴的にあらはすのである。

失錯作業にあらはれる觀念や感情が如何なる根源のものであるかと云ふ第一の問題に對しては、一定數の場合に於ては、邪魔をする觀念が精神生活の抑壓されて居る感情より由來する事が、たやすく證明し得ると云ふ事が出來る。利己的、嫉妬的、敵對的、感情や衝動――それらを道德的教育の壓力が重みでおしつけて居る――は健康者に於て彼等の否定し難い有樣に存在し、而も高尙なる心的動因の承認を受け得ない力を、一定の有様に於て表現する爲に失錯作業の道を利用する事は稀な事では

ないのである。これらの失錯行爲及び偶然行爲を放任し、引續いてその存在を許す事は、大部分不道德なる事の愉快なる默認に相當するのである。これらの壓迫されて居る感情の中、種々なる性的傾向が大なる役目を演じて居るのである。私の實例に於て分析によつて發見されたる觀念の中に、性的傾向が非常に稀にあらはれて居るが、それは材料の偶然である。私が主として私自身の精神生活からの實例を分析にかけたから、選擇は最初から偏頗であり、性的の事の除外を目的とされたのであつた。他の場合には邪魔する觀念は非常に無害なる異議及び遠慮から出た樣に見えた。

次に私共は第二の問題即ち一つの觀念が完全なる形に於ける表現を求めず、謂はば寄生蟲的の形に於て他の觀念の變化及び障礙としての表現を求めねばならぬと云ふ事實に對し、如何なる心理學的條件が有効であるかと云ふ事に答へねばならない。失錯行爲の最も顯著なる實例から見ると、これらの條件は意識され得る能力(Bewusstseinsfähigkeit)への關係、被壓迫的のVerdrängtenに於て多少明瞭に見られる特徵に求むべきである事は明らかである。然しながら實例の多數を研究して見る事の特徵は多數の不明瞭なる要素から成つて居る事が判るのである。或事が時間潰しになるといふ事で、之を看過し、或は當該觀念が實際企圖されたる問題に屬せないからと云つてこれを看過する傾向——之等の感情は觀念の抑壓の動機としては服從を拒む感情に對する道德的判決、或は絕對的に無意識的なる

觀念列から出て來るものと同じ役割を演ずるやうに見えるのである。そしてこの抑壓された觀念列、後に他の觀念の障礙による表現に賴る外道がないのである。失錯及び偶然作業の條件の一般性狀への認識は、この方法では得る事は出來ないのである。然しながらこの研究は唯一つの意義ある事實を私共に與へるのである。即ち失錯作業の動機が無害なものであればある程、又失錯作業に表現される觀念が不快である程度が少なく、從つて意識不能の程度が輕い程私共は私共の注意をそれに向ける事によつてこの現象の分析を一層容易になし得るのである。『話し損ひ』の最も輕い場合は即座に認められ、自發的に訂正されるのである。實際に壓迫されたる感情に動機づけられて居る場合には、その解決には注意深い分析を要するのであつて、この分析は時には困難に遭遇し或は失敗に終る事があるのである。

失錯行爲及び偶然行爲の心的條件の滿足なる說明は、他の方法に依り又他の方面からして得られるものであると云ふ事の指示として、この最後の研究の結果を採用する事は、多分正しい事であるであらう。寛大なる讀者はだからして、これらの論述を切斷面――この切斷面に於てこの題目が可なり人工的に一層大なる關係から切り出された――の示說と見て與れるであらう。

(G) 一二言を費してこの廣い關係への方向を指示しよう。私共が精神分析法を用ひて知り得た失錯並

びに偶然行爲の機制は、主要なる點に於て夢判斷に關する私の書中、夢の作業の章に於て說いた夢の形成の機制と一致して居る。凝縮及び妥協形成（汚染）は此處にも見出すのである。無意識的觀念が異常なる道を通り、外聯合によつて他の觀念の變形として表現される狀態は同樣である。夢の內容の不合理、荒唐無稽及び誤謬――これらによつて夢は殆ど心的作業の生產物とは認められない――は私共の日常生活に於ける普通一般の誤りと同じやうに生ずるのである。ただ夢に於ては勿論存在せる材料をより自由に用ひるのである。兩方の場合共に正しからざる官能の外觀は、二つ或はそれ以上の正しい作業の特有なる干涉によつて說明されるのである。斯くの如き符合一致からして一つの重要なる結論を引出す事が出來る。卽ち私共が夢の內容に於てその最も顯著なる作業を認むるこの特有なる作業の有樣は、精神生活の睡眠狀態と云ふ事ばかりに歸する事は出來ないのである、それは私共が失錯行爲にありては、覺醒時の生活に於てそれが有効であることを示す可く多數の證據を持つて居るのである。同じ關係は又精神活動の深刻なる崩壞、官能の病的狀態が異常なるもの、又奇異なるものの樣に私共に見えて來るこの心的過程の條件であると見做す事を私共に禁ずるのである。

* 〔夢判斷〕三六二頁（第七版四四九頁）參照。

失錯作業及び夢の像を生ぜしむる奇なる精神作業の正しい判斷は、私共が精神々經症の症狀特、に

『ヒステリー』及び強迫觀念性神經症の心的形成が、彼等の機制に於てこの作業の仕方の凡ての主なる特徴を示すものである事を知る時に、初めて可能にされるのである。從つて私共の研究の續行は、この點から始まるべきであらう。然しながら尙ほ私共に向つては失錯行爲、偶然行爲、竝びに症候行爲をこの最後の類推の光に於て眺める事が特別の興味を持つのである。私共がこれらを精神々經症の作業、神經官能症の症狀と同列に置くに當つて『神經質なる正常の狀態』と異常の狀態との間の境界は、漸進的のものであると云ふ事及び『私共が皆少しは神經質である』と云ふ事は屢々繰返される二つの主張から意味と根據とを得るのである。私共は凡ての醫療上の經驗を構はずに、斯くの如き仄めかされたる神經質の種々の『タイプ』——神經官能症の formes frustes(磨り落されたる型)——を組立てる事が出來る。卽ち僅少なる症狀の現るるのみなる場合、或ひは症狀が稀に現れるもの、或は現れても劇しからざる場合、要するに病的現象の輕減を、數、强さ及び時間的のひろがりに移して行く事が出來るのである、然しながら十分私共は健康と病症の間の移行型の最も屢々なる『タイプ』をなすものは如何なる『タイプ』であるかは云ひ當てる事は出來ないであらう。主として失錯竝びに症候行爲を病症の現れとする『タイプ』は、卽ち症狀が最も重要ならざる心的作業に移され、而も高い心的價値を要求する心的作業には、何等の障礙を示さない事を特徴とする事がある。症狀の反對の投資の場合、

即ち症狀が最も重要なる個入的竝びに社會的作業に現れ、その爲に食餌攝取及び性交、職業上の仕事竝びに社交を妨げる事は、重症神經官能症に起る事であり、この神經官能症を病症の現れの多樣なる事或は活潑なる事よりも以上に特徴づけるのである。

然しながら最も輕症竝びに重症なる症例――これには失錯竝びに偶然行爲も干與して居る――の共通の特徴は、現象が不完全に壓迫されたる心的材料に還元し得る處に存するのであつて、この心的材料は意識より遠ざけられては居るが、而も表現の凡ての能力を奪はれてはゐないものである。

〔終〕

日常生活の異常心理

定價壹圓五拾錢

昭和五年十一月三日印刷
昭和五年十二月六日發行

譯著者　丸井清泰

發行者　北原鐵雄
東京市神田區今川小路二ノ一

印刷者　赤羽正己
東京市神田區今川小路一ノ二

發行所　東京神田今川小路二ノ一
アルス
電話九段　三七五・三七六
振替東京二四八八八番

Freud

Zur Psychopathologie des Alltagslebens

日常生活の異常心理

FREUD

フロイド

精神分析大系

VOL IV